

茨城県教育財団文化財調査報告第348集

猫 松 遺 跡  
長 原 遺 跡

国道355号石岡岩間バイパス整備  
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成23年3月

茨城県土浦土木事務所  
財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第348集

ねこ  
猫  
なが  
長  
まつ  
松  
はら  
原  
遺  
跡  
遺  
跡

国道355号石岡岩間バイパス整備  
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成23年3月

茨城県土浦土木事務所  
財団法人茨城県教育財団

## 序

茨城県では、均衡ある地域発展と地域交流圏の形成を図るため、人・物・情報・技術等が活発に交流できる開発を目指しており、県内の高速交通網を早期に形成するとともに、アクセス道路や地域間を結ぶ国道などの道路整備が計画的・効率的に進められています。

国道355号は、千葉県香取市と茨城県笠間市を結ぶ幹線道路ですが、石岡市から旧岩間町の区間は、道路幅員が狭く、見通しが悪い危険な箇所などがあり、早期整備が求められていました。そのため、茨城県土浦土木事務所は、それらの問題を改善することを目的として、国道355号石岡岩間バイパス整備事業を計画しました。しかしながら、この事業予定地内には猫松遺跡・長原遺跡が所在し、記録保存の措置を講ずる必要があるため、当財団が茨城県土浦土木事務所から埋蔵文化財発掘調査の委託を受け、猫松遺跡は平成16年11月から平成17年1月、平成21年5月から6月までの5か月間、長原遺跡は平成16年11月から平成17年1月の3か月間にわたってこれを実施しました。

本書は、猫松遺跡の平成16・21年度調査の成果と、長原遺跡の平成16年度調査の成果を取録したものです。学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県土浦土木事務所から多大な御協力を賜りましたことに對し、厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、石岡市教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に對し深く感謝申し上げます。

平成23年3月

財団法人茨城県教育財団  
理事長 稲葉 節生

## 例 言

- 1 本書は、茨城県土浦土木事務所の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成16・21年度に発掘調査を実施した茨城県石岡市大字東成井字乙2826番地の14ほかに所在する猫松遺跡、平成16年度に発掘調査を実施した茨城県石岡市大字東成井字乙2833番地の4ほかに所在する長原遺跡の発掘調査報告書である。

- 2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。

### 調査

猫松遺跡 平成16年11月1日～平成17年1月31日、平成21年5月1日～6月30日

長原遺跡 平成16年11月1日～平成17年1月31日

### 整理

平成22年11月1日～平成23年3月31日

- 3 平成16年度の発掘調査は調査課長川井正一、平成21年度の発掘調査は調査課長池田晃一のもと、以下の者が担当した。

### 猫松遺跡

首席調査員兼班長 江幡良夫 平成16年11月1日～平成17年1月31日

主任調査員 青木仁昌 平成16年11月1日～平成17年1月31日

主任調査員 照山大作 平成16年11月1日～平成17年1月31日

首席調査員兼班長 白田正子 平成21年5月1日～6月30日

主任調査員 市村俊英 平成21年5月1日～6月30日

調査員 大久保隆史 平成21年5月1日～6月30日

### 長原遺跡

首席調査員兼班長 江幡良夫

主任調査員 青木仁昌

主任調査員 照山大作

- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長櫻村宣行のもと、調査員大久保隆史が担当した。
- 5 猫松遺跡から出土した炭化物の放射性炭素年代測定と土壌分析については、バリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、結果は付章1として掲載した。また、猫松遺跡から出土した石器の実測と観察表の作成、顕微鏡を用いた分析については、株式会社アルカに委託した。石器群の分析は株式会社アルカ代表取締役角張淳一氏が担当し、結果は付章2として掲載した。本書における石器の器種名及び石材名は、観察表に準拠する。

## 凡 例

- 1 両遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅹ系座標に準拠し、猫松遺跡は $X = + 29,680 \text{ m}$ 、 $Y = + 40,680 \text{ m}$ の交点、長原遺跡は $X = + 29,320 \text{ m}$ 、 $Y = + 40,560 \text{ m}$ の交点を基準点(A 1a)とした。なお、この原点は、世界測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1、2、3…とし、「A 1区」「B 2区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa、b、c…j、西から東へ1、2、3…0とし、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1a1区」「B 2b2区」のように呼称した。

- 2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 SI - 竪穴住居跡 SK - 土坑 TP - 陥し穴 (付章におけるTPは、テストピットを意味する)

FP - 炉穴跡 SE - 井戸跡 P - ビット SS - 石器集中地点

遺物 DP - 土製品 M - 金属製品 Q - 石器・石製品 TP - 拓本記録土器

土層 K - 攪乱

- 3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は600分の1、400分の1、各遺構の実測図は原則として、60分の1の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(2) 遺物実測図は、原則として3分の1の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。



- 4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。また、土層解説中の含有物については、各総量で記述した。

- 5 遺構一覧表・遺物観察表の表記については、次のとおりである。

(1) 現存値は( )を、推定値は[ ]を付して示した。計測値の単位はm、cm、kg、gで示した。

(2) 遺物観察表の備考の欄は、残存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

(3) 遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

- 6 竪穴住居跡の「主軸」は、炉・竈を通る軸線とし、主軸方向は、その他の遺構の長軸(径)方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した(例 N - 10° - E)。

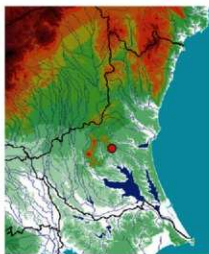
# 目 次

序	
例言	
凡例	
目次	
概要	1
第1章 調査経緯	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査経過	4
第2章 位置と環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第3章 猫松遺跡	11
第1節 調査の概要	11
第2節 基本層序	11
第3節 遺構と遺物	13
1 旧石器時代の遺構と遺物	13
石器集中地点	15
2 縄文時代の遺構と遺物	84
(1) 竪穴住居跡	84
(2) 陥し穴	87
(3) 土坑	97
3 古墳時代の遺構と遺物	98
(1) 竪穴住居跡	98
(2) 土坑	113
(3) 竪穴跡	114
4 平安時代の遺構と遺物	115
土坑	115
5 その他の遺構と遺物	116
(1) 井戸跡	116
(2) 土坑	117
(3) 遺構外出土遺物	127
第4節 まとめ	132
第4章 長原遺跡	137
第1節 調査の概要	137
第2節 基本層序	137
第3節 遺構と遺物	138
1 縄文時代の遺構と遺物	138
陥し穴	138
2 その他の遺構と遺物	139
(1) 土坑	139
(2) 遺構外出土遺物	140
第4節 まとめ	141
付章 1	143
付章 2	151
写真図版	
抄録	

ねこまつ いせき ながはらいせき がいよう  
猫松遺跡・長原遺跡の概要

### 猫松遺跡・長原遺跡の位置と調査の目的

猫松遺跡・長原遺跡は、石岡市（旧八郷町）の北東部に位置し、巴川と園部川に挟まれた標高約32mの台地上および台地から続く緩やかな斜面上に立地しています。今回の調査は、両遺跡が国道355号石岡岩間バイパスの整備予定地にあることから、遺跡の内容を図や写真に記録するために、茨城県教育財団が行ったものです。



猫松遺跡・長原遺跡の位置

### 猫松遺跡

#### 調査内容

旧石器時代後期（約2,000年前）の石器集中地点4か所と、縄文時代中期（約5,000年前）の竪穴住居跡1軒、陥し穴16基、古墳時代前期～後期（約1,700～1,500年前）の竪穴住居跡3軒、炉穴跡1基、土坑2基、平安時代（約1,000年前）の土坑2基などを確認し、長期に渡って人々が住んでいたことが分かりました。主な出土遺物は、石器（ナイフ形石器・石錐・削器・彫刻刀形石器）、縄文土器（深鉢）、土師器（<sup>つば</sup> 坏・<sup>たかづち</sup> 高坏・<sup>まがい</sup> 器台・<sup>つぼ</sup> 壺・甕）、土製品（土玉・匙形品）です。



東側から見た猫松遺跡



石器集中地点の調査の様子です。石器を作る時に飛び散った、石くずも多数出土しました。これらの破片を調べることで、当時の人々がどのような技術を用いて石器を作ったかを知ることができます。なかには1cm以下ほどの破片もあるため、慎重に作業を行いました。



瑪瑙などの茨城県内で採れる石ばかりでなく、県外で採れる流紋岩や頁岩などの石も使われており、移動や交流を活発に行っていたことが分かりました。



縄文時代中期の竪穴住居跡です。このころの住居は円形のものが多く、中央にある炉で火をたいて煮炊きを行っていました。



縄文時代の陥し穴です。より効率的に猪などの獲物を仕留めるために、獣道にそって配置されています。



古墳時代後期の竪穴住居跡です。形は、四角形のものも多く、後期頃になると、壁際にカマドが作られるようになります。

## 調査の成果

猫松遺跡から石器作りの跡が見つかったことは、巴川・園部川周辺における旧石器時代の人々の移動や交流などの様子を考える上で、重要な資料となります。また、これまで周辺遺跡の発掘調査が行われていなかったため不明確であった、縄文時代や古墳時代の人々の生活の様子についても、その一部を解明することができました。

## 長原遺跡

### 調査の内容と成果

今回の調査で、縄文時代の陥し穴2基、時期不明の土坑7基が見つかりました。

陥し穴の存在から、長原遺跡は縄文時代の人々の狩りの場であることが分かりました。また、同じ台地上に位置する猫松遺跡からも縄文時代の陥し穴が見つかっており、両遺跡は大規模な狩り場の一部なのかもしれません。



当時の人々は、獲物を得るために、集落の周辺に陥し穴を掘っていました。



# 第1章 調査経緯

## 第1節 調査に至る経緯

平成15年3月19日、茨城県土浦土木事務所長は茨城県教育委員会教育長に対し、国道355号石岡岩間バイパス整備事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及び取り扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は、平成15年4月15日に現地踏査を、平成15年10月28・29日に猫松遺跡、平成15年11月4・5日に長原遺跡の試掘調査を実施し、遺跡の所在を確認した。

平成15年11月10日、猫松遺跡と長原遺跡について、茨城県教育委員会教育長は茨城県知事あてに、事業地内に遺跡が所在すること、その取扱いについて別途協議が必要であることを回答した。

平成15年12月8日、茨城県土浦土木事務所長は茨城県教育委員会教育長に対し、猫松遺跡と長原遺跡について、文化財保護法第94条に基づき、土木工事のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は、両遺跡とも現況保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると決定し、平成15年12月17日に猫松遺跡と長原遺跡について、工事前手前に発掘調査を実施するよう茨城県土浦土木事務所長あてに通知した。

平成16年1月19日、茨城県土浦土木事務所長は茨城県教育委員会教育長あてに、国道355号石岡岩間バイパス整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書を提出した。

平成16年2月5日、茨城県教育委員会教育長は茨城県土浦土木事務所長あてに、猫松遺跡と長原遺跡の発掘調査範囲及び面積等について回答した。また、あわせて調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県土浦土木事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、猫松遺跡と長原遺跡の発掘調査を平成16年11月1日から平成17年1月31日まで実施した。

その後、茨城県教育委員会は、猫松遺跡の未調査部分について平成20年12月3・4日に猫松遺跡の試掘調査を実施し、遺跡の所在を確認した。

平成21年1月22日、猫松遺跡について、茨城県教育委員会教育長は茨城県知事あてに、事業地内に遺跡が所在すること、その取扱いについて別途協議が必要であることを回答した。

平成21年2月2日、茨城県土浦土木事務所長は茨城県教育委員会教育長に対し、猫松遺跡について、文化財保護法第94条に基づき、土木工事のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は、現況保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると決定し、平成21年2月12日に猫松遺跡について、工事前手前に発掘調査を実施するよう茨城県土浦土木事務所長あてに通知した。

平成21年2月10日、茨城県土浦土木事務所長は茨城県教育委員会教育長あてに、国道355号石岡岩間バイパス整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書を提出した。

平成21年2月10日、茨城県教育委員会教育長は茨城県土浦土木事務所長あてに、猫松遺跡の発掘調査範囲及び面積等について回答した。また、あわせて調査機関として、財団法人茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県土浦土木事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、猫松遺跡の発掘調査を平成21年5月1日から平成21年6月30日まで実施した。

## 第2節 調査経過

猫松遺跡、長原遺跡の調査の経過について、その概要を表で記載する。

猫松遺跡

平成16年度

月		11月	12月	1月
工程				
調査準備	調査準備	■		
遺構調査	遺構調査		■	■
遺物洗浄	遺物洗浄		■	■
補撤	補撤			■

平成21年度

月		5月	6月
工程			
調査準備	調査準備	■	
遺構調査	遺構調査		■
遺物洗浄	遺物洗浄	■	■
補撤	補撤		■

長原遺跡

平成16年度

月		11月	12月	1月
工程				
調査準備	調査準備	■		
遺構調査	遺構調査		■	■
遺物洗浄	遺物洗浄		■	■
補撤	補撤			■

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

猫松遺跡は茨城県石岡市（旧八郷町）大字東成井字乙2826番地の14ほか、長原遺跡は同市大字東成井字乙2833番地の4ほかの所に所在している。

石岡市は筑波山の東麓、茨城県のほぼ中央部に位置している。両遺跡の所在する旧八郷町域は、西側を筑波山や足尾山、加波山、難台山などの筑波山系の山々に囲まれ、柿岡盆地を成している。また、これらの山並みとはほぼ平行して、恋瀬川が南北に流れており、盆地は恋瀬川とその支流による開析を受け、河川周辺に樹枝状の沖積地を形成している。旧町域東部は、東茨城台地の東端にあたり、巴川や園部川が流れており、これらの河川の開析により、周辺台地には小支谷が刻まれている。地質は平行業理や斜行業理が著しく、殻が溶けた貝化石や生痕化石を含む石崎層を基盤として、内湾生の貝化石を含む見和層、茨城粘土層、赤城火山起源の鹿沼軽石層を挟んで関東ローム層が堆積し、最上部は腐植土である黒色土となっている<sup>1)</sup>。

両遺跡の所在する東成井地区は、石岡市域の北東部に位置し、猫松遺跡は、巴川と園部川に挟まれた標高約32mの台地上及び台地から続く緩斜面上に立地している。調査前の現況は、畑地と豚舎跡地である。長原遺跡は、猫松遺跡と同じ標高約32mの台地上に立地している。調査前の現況は、陸田である。

### 第2節 歴史的環境

猫松・長原遺跡の周辺には、巴川、園部川とその支流が流れており、遺跡は河川に沿った台地上を中心に分布している。ここでは、『茨城県遺跡地図』<sup>2)</sup>や周辺遺跡の調査成果をもとに、両遺跡周辺の状況を、時代ごとに概観していきたい。

旧石器時代については、恋瀬川右岸に立地する半田原遺跡<sup>3)</sup>が唯一の調査事例である。半田原遺跡からは、3か所の石器集中地点が確認されており、ナイフ形石器、礫器、ハンマー、台石、砥石などを含む1800点の石器群が、A T降灰以前の層位から出土している。石材は安山岩とホルンフェルスが主体であり、剥片の多さから石器製作跡と考えられている。この他、恋瀬川支流の南山崎地区で尖頭器<sup>4)</sup>、恋瀬川上流の小見地区で石刃<sup>5)</sup>が、宇治会地区の毛無山遺跡内で尖頭器系の石器が3点確認されている<sup>6)</sup>。さらに、恋瀬川流域に視野を広げると、石岡市宮平遺跡<sup>7)</sup>から頁岩と黒曜石製のナイフ形石器や石核などが出土している。これに対し、巴川、園部川流域には旧石器時代の資料が少なく、巴川流域では、鹿島郡鉦田町当間地区に所在する坂戸遺跡<sup>8)</sup>から瑪瑙製の搔器が1点確認されているのみである。園部川流域でも、小美玉市（旧玉里村）玉里地区に所在する権現平古墳群<sup>9)</sup>から、珪質頁岩製の尖頭器を含む石器群が出土しているに留まる。しかし、大洗海岸で産出されるガラス質黒色安山岩の運搬ルートと考え、今後、巴川や園部川流域からも旧石器時代の遺跡が発見される可能性は高いと思われる。

縄文時代の遺跡は、谷津を望む台地上に多く確認されており、草創期の野口池東遺跡を初め、早期の泉十三塚遺跡<sup>31)</sup>、宮下遺跡からは茅山式土器が採集されている。前期の台遺跡、天神台遺跡からは浮島式土器が、東平遺跡、御堂台遺跡、喜恒多遺跡、沖田丸遺跡からは横織土器が採集されている。中期になると、遺跡数は増加する。当該期の遺跡としては、大田部遺跡<sup>3)</sup>、古宿遺跡<sup>16)</sup>、市野谷東遺跡<sup>21)</sup>、小島西遺跡<sup>22)</sup>、

們山遺跡〈24〉、貫清水遺跡、們山神社南遺跡、下原遺跡、下池台遺跡などがあり、このほか、谷向們山遺跡、天神台遺跡からは阿玉台式土器が、百切遺跡、五里平遺跡などからは加曾利E式土器が採集されているが、現在のところ、当遺跡の所在する台地上では、当該期の遺跡は猫松遺跡のみである。縄文時代後期以降、遺跡数は減少傾向を示し、当遺跡の北東方向を流れる潤沼川右岸台地上に立地する下安居遺跡、下安居堀之内遺跡から後期の土器が確認されているほか、潤沼川の支流である桜川と随光寺川に挟まれた台地上に立地する随光寺遺跡から、加曾利B式期の山形土偶が採集されている程度である<sup>1)</sup>。

弥生時代の遺跡は少数で、後期の息栖神社境内遺跡〈5〉、谷原東原遺跡〈7〉から十玉台式土器が確認されている。このほか、桜川右岸の竹ノ下遺跡からは二軒屋式土器が出土している<sup>1)</sup>。

古墳時代になると遺跡数は飛躍的に増加し、福島西塚遺跡〈4〉、福島東原遺跡〈6〉、房沼遺跡〈8〉、東裏遺跡〈9〉、南田遺跡〈26〉など、猫松・長原遺跡北側の沖積地や、谷津を望む台地上に分布している。特に、潤沼川右岸の高屋敷遺跡<sup>2)</sup>では平成9年に調査が行われ、前期から後期にかけての住居跡が45軒確認されている。前期の古墳としては、猫松・長原遺跡の南東方向約3.8 kmに駒使塚古墳が、恋瀬川流域には佐目塚古墳や丸山古墳があり、県内でも最古の段階に築造された古墳である<sup>1)</sup>。また、猫松遺跡の北方3 kmには、御前塚古墳と藤塚古墳を盟主墳とする御前塚古墳群〈44〉が存在している。御前塚古墳は径約60 mの円墳で、黒斑を有する円筒埴輪が石岡市舟塚山古墳出土の円筒埴輪との類似性を指摘されており、5世紀前半ごろの築造と考えられている<sup>1)</sup>。また、藤塚古墳は径約55 mの円墳で、5世紀初頭前後の築造と考えられている<sup>1)</sup>。これらの大型円墳の出現は、当地域に有力な豪族が出現したことを示唆しており、巴川周辺の沖積地および台地の開発により、より強固な生産基盤を築いていったものと見られる。また、時期は明確でないが、山玉塚古墳〈14〉や二子塚古墳群〈19〉などの古墳群も周知されており、猫松遺跡との位置関係も注目される。現在のところ、旧八郷町域からは巴川右岸に古墳時代の遺跡が確認されていないため、猫松遺跡から確認された3軒の住居跡は、巴川流域における古墳時代集落の広がりを考える上で、貴重な資料であるといえる。

律令期に入ると、猫松・長原遺跡周辺は茨城郡山前郷に編入される。奈良・平安時代の遺跡は、東裏遺跡や福島西塚遺跡、福島東原遺跡などと同様に、古墳時代の遺跡との複合遺跡となっている場合が多く、古墳時代に開拓された土地に、断続的に集落が営まれていたものと考えられる。

中世以降、両遺跡周辺は、領主を平氏、八田氏、佐竹氏と替わりながら近世に至り、佐竹氏の転封により、成井村は志筑本堂氏の所領となる。

※文中の〈 〉内の番号は、表1、第1図の番号と同じである。

#### 註)

- 1) 日本の地質『関東地方』編集委員会『日本の地質3 関東地方』共立出版 1986年10月
- 2) 茨城県教育庁文化課編『茨城県遺跡地図(地名表編・地図編)』茨城県教育委員会 2001年3月
- 3) 仙波亨「一般県道石岡つくば線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 半田原遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第122集 1997年3月
- 4) 茨城県史編さん第一部会『茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代』茨城県 1979年3月
- 5) 註4)に同じ
- 6) 小杉山大輔・曾根俊雄・齋藤洋・大橋生『石岡市依久松山遺跡』石岡市教育委員会 2009年3月
- 7) 安藤敏孝・岩松和光・佐々木義嗣・箕輪健一・松井二郎『宮平遺跡-発掘調査概報-』石岡市教育委員会 1989年3月

- 8) 矢ノ倉正男・茂木悦男・成島一也「平成12年度国補交安第12-04-128-0-051号 主要地方道小川鉾田線当間交通安全施設工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書 坂戸遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第180集 2001年3月
- 9) 伊藤重敏「権現平古墳群調査報告」玉里村教育委員会 1994年3月
- 10) 岩間町史編さん委員会『岩間町史』岩間町 2002年1月
- 11) 註10) に同じ
- 12) 千種重樹『鳥屋敷遺跡』鳥屋敷遺跡発掘調査会 1998年6月
- 13) 註10) に同じ
- 14) 井博幸「御前塚古墳出土の埴輪」『婆良岐考古』第29号 婆良岐考古同人会 2007年5月
- 15) 三辻利一「御前塚古墳および、その周辺の高埴採集埴輪の蛍光X線分析」『婆良岐考古』第29号 婆良岐考古同人会 2007年5月

参考文献

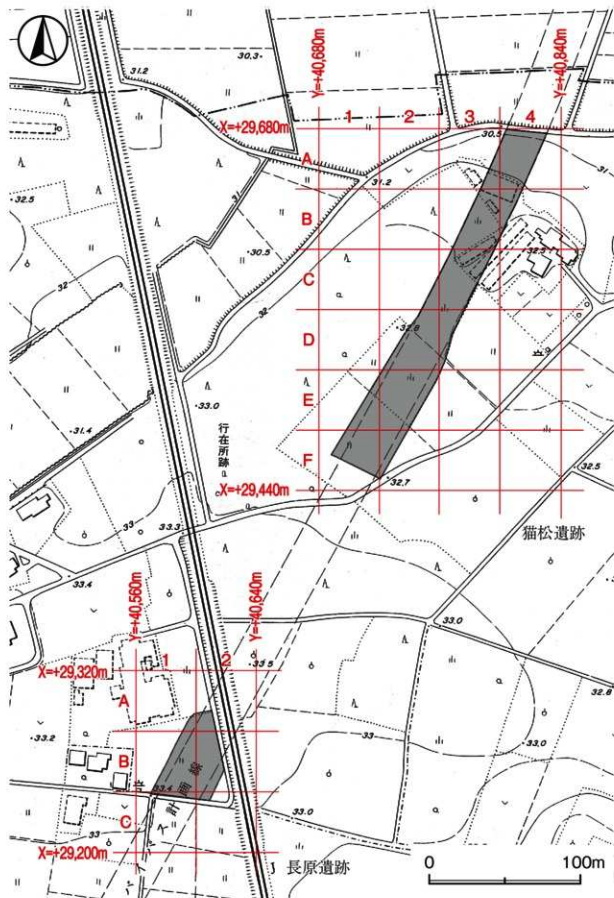
- ・日本地質学会『日本地方地質誌3 関東地方』朝倉書店 2008年10月
- ・八郷町史編さん委員会『八郷町史』八郷町 2005年3月



第1図 猫松遺跡・長原遺跡周辺遺跡分布図（国土地理院 25,000 分の 1「岩間」・「石岡」）

表1 遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世			近世	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世
①	猫松遺跡	○	○	○				23	小島南遺跡				○	○	○	
②	長原遺跡		○					24	梶山遺跡		○					○
3	大田部遺跡		○	○	○	○		25	梶山神社遺跡					○		
4	福島西峯遺跡				○	○		26	南田遺跡				○	○		○
5	息栖神社境内遺跡		○	○	○	○		27	泉仲村遺跡			○	○	○		○
6	福島東原遺跡				○	○		28	仲村南遺跡						○	○
7	谷原東原遺跡			○	○	○		29	仲村宿遺跡						○	○
8	房沼遺跡				○	○	○	30	泉山本遺跡				○	○		○
9	東裏遺跡				○	○		31	泉十三塚遺跡		○		○	○		○
10	巖馬神社北遺跡		○		○	○	○	32	山本池南遺跡				○	○		
11	神本遺跡			○	○	○	○	33	古宿池西遺跡				○	○		
12	八坂神社北遺跡				○	○	○	34	古宿池北遺跡				○	○	○	○
13	泉平遺跡			○	○	○		35	泉神本遺跡				○	○		
14	山王塚古墳				○			36	石塚神根遺跡			○	○	○		
15	泉巴川遺跡			○	○	○	○	37	北浦遺跡				○	○	○	○
16	古宿遺跡		○					38	参り坂遺跡				○	○	○	○
17	古市巴川遺跡			○	○	○	○	39	泉古市館跡						○	
18	二子塚遺跡			○	○	○		40	五万窪遺跡						○	
19	二子塚古墳群				○			41	西平遺跡		○					
20	二子塚南遺跡				○	○		42	逆瀬遺跡		○					
21	市野谷東遺跡		○		○	○		43	西裏遺跡				○	○	○	○
22	小島西遺跡		○		○	○		44	御前塚古墳群		○		○	○	○	○



第2図 調査区設定図（都市計画図2,500分の1）



## 第3章 猫松遺跡

### 第1節 調査の概要

猫松遺跡は、巴川右岸の標高約32mの台地上から緩斜面にかけて立地している。調査前の現況は陸田、畑地、豚舎跡であり、調査面積は平成16年度が4,807㎡、平成21年度が2,628㎡の計7,435㎡である。

今回の調査によって、堅穴住居跡4軒（縄文時代1、古墳時代3）、陥し穴16基、炉穴跡1基（古墳時代）、土坑97基（縄文1、古墳2、平安2、時期不明92）、井戸跡4基（時期不明）、石器集中地点4か所（旧石器時代）を確認した。

出土した遺物は、縄文土器（深鉢）、土師器（坏・高坏・碗・甕・卍・甗）、旧石器（ナイフ形石器・削器・石核・剥片）、石器（砥石）などである。

### 第2節 基本層序

調査区北部（A3d0）にテストピット1を、調査区中央部（B3g4）にテストピット2を設定し、基本土層の観察を行った。土層は、色調・構成粒子・含有物・粘性などから12層に分けられる。観察結果は以下のとおりである。

第1層は、黒褐色の表土層で、ロームブロックや粒子を少量含んでいる。粘性は弱く、締りは極めて強く、層厚は14～28cmである。

第2層は、黒褐色の旧表土層で、ロームブロックや粒子を少量含んでいる。粘性は普通で、締りは強く、層厚は11～29cmである。

第3層は、にぶい黄褐色土層である。粘性は極めて強く、締りは普通で、層厚は3～20cmである。

第4層は、暗褐色土層である。粘性は極めて強く、締りは普通で、層厚は11～27cmである。

第5層は、褐色のローム漸移層で、暗褐色土粒子を微量含んでいる。粘性は強く、締りは普通で、層厚は3～15cmである。

第6層は、褐色のソフトローム層で、赤色スコリア、黒色スコリアを微量含んでいる。粘性は極めて強く、締りは普通で、クラックが発達しており、層厚は3～47cmである。

第7層は、褐色のハードローム層で、赤色スコリアを微量、黒色スコリアを中量、ガラス粒子をごく微量含んでいる。粘性、締りともに強く、層厚は0～23cmである。始良Tn火山灰（AT）を含む層に対比される。

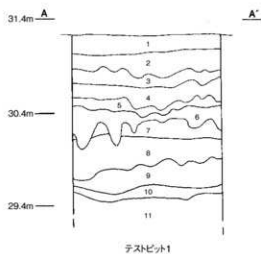
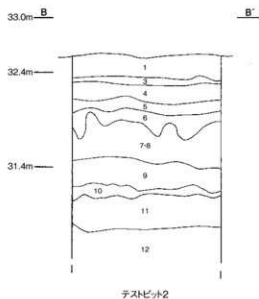
第8層は、褐色のハードローム層で、赤色スコリア、黒色スコリアを微量含んでいる。粘性、締りともに強く、層厚は20～44cmである。

第9層は、褐色のハードローム層で、黒色スコリアを多量、赤色スコリアを少量含んでいる。粘性、締りともに極めて強く、層厚は7～34cmである。ATを含む層の下位に位置することから、第2黒色帯であると思われる。

第10層は、褐色の鹿沼軽石層への漸移層で、鹿沼バミスの中量含んでいる。粘性は普通で、締りは強く、層厚は4～34cmである。

第11層は、黄褐色の鹿沼軽石層である。粘性は普通で、締りは強く、層厚は22～40cmである。

第12層は、にぶい黄褐色のハードローム層である。粘性、締りともに極めて強い。下層まで掘り抜いていないため、層厚は不明である。鹿沼軽石層の下位に位置することから、武蔵野ローム層に相当すると思われる。遺構は、第6層上面で確認された。



第3図 基本土層図

### 第3節 遺構と遺物

#### 1 旧石器時代の遺構と遺物

##### (1) 調査の方法

旧石器時代の石器が採集できた地点に、2 m四方のグリッドを設定し、掘り込みを開始した。まず四方に土層観察用ベルトを残し、掘り込みの範囲を拡張しながら、石器の分布範囲の見極めに努めた。調査面積は、第1号石器集中地点が88㎡、第2・3号石器集中地点が116㎡、第4号石器集中地点が64㎡である。

##### (2) 石器集中地点の記載方法

第2・3号石器集中地点は、分布範囲の一部が重複していた。整理作業において、出土層位、石材、器種などから分布域の区別を試みたが、明確な差異が認められなかった。そのため、B4a1～B4a3グリッドまでの北側東西ラインで、2か所の集中地点を便宜上2か所に区別した。また、第2号石器集中地点は縄文時代の第14号陥穴に、第3号石器集中地点は古墳時代の第1号炉穴にそれぞれ掘り込まれており、石器は原位置を保っていないと判断した。それぞれの石器は、各集中地点に帰属する遺物であると、特徴的な遺物を併せて掲載した。なお、表土中から出土した石器についても、特徴的なものを遺構外出土遺物として掲載した。

##### (3) 石器の記載方法

4か所の石器集中地点から出土した石器の総数は、2680点である。実測した遺物と、未実測ではあるが特徴的な遺物については観察表を掲載し、それ以外の未実測遺物については、器種、石材別に集計を行い、「まとめ」に分類表を掲載した。

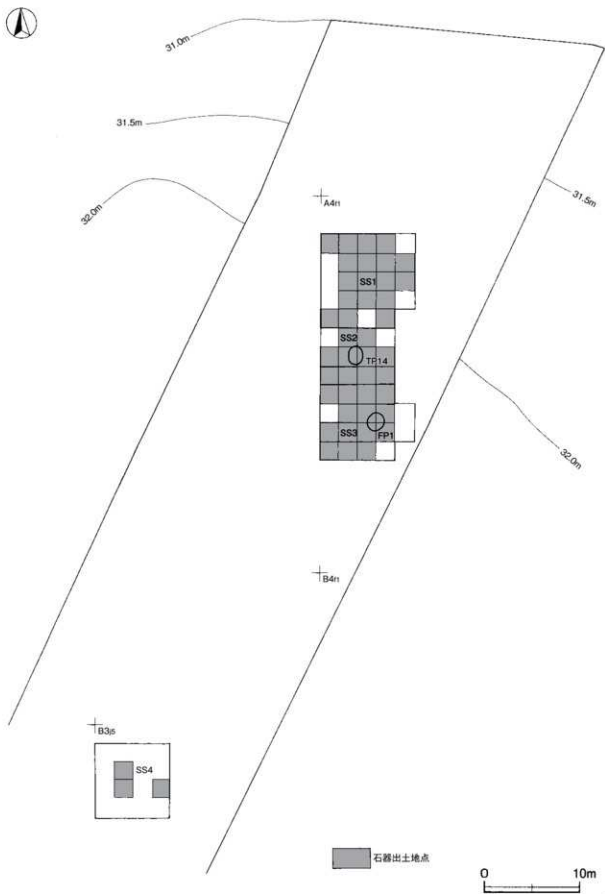
観察表の項目は、「番号」「器種」「石材」「所見」「素材属性」「加工属性」「刃部属性」「長さ」「幅」「厚み」「重量」「出土位置」である。「長さ」「幅」「厚み」はミリメートルまで計測し、小数点第1位まで表記した。「重量」についてはグラムで計測し、小数点第1位まで表記した。また、0.1 g未満の微細な遺物に関しては、「0.1 未」と記載した。「出土位置」の原点は、基準としたグリッドの北西角を表した。「X」、「Y」は、原点からの南北（X座標）、東西（Y座標）方向での遺物までの距離であり、「Z」は遺物が出土した地点の標高を示している。単位はメートルであり、X・Y座標は小数点第2位まで、Zは小数点第3位まで記載した。石材別・器種別の分布図に用いる記号については、各図版内に凡例を記載した。礫片類、礫類は図化していない。以下、石器集中地点の概要に用いる語句と、観察表に関する凡例を示す。

##### 観察表凡例

「出土位置」の原点がA4.0、Xが-3.75、Yが5.66、Zが31.191の場合は、A4.0グリッドの北西角から南へ3.75 m、東へ5.66 m、標高31.191 mの位置が、石器の出土地点である。観察結果の「素材属性」「加工属性」「刃部属性」については、付録2「猫松遺跡の石器」参照。

##### 用語凡例

剥片類→剥片、縦長剥片、横長剥片、打面調整剥片、打面再生剥片、打面形成剥片、打面作出剥片、作業面調整剥片、作業面再生剥片、作業面成形剥片、作業面形成剥片、剥片断片の総称として用いる。石刃類→石刃、稜付石刃、小形石刃、稜付小形石刃、石刃断片の総称として用いる。石核類→石核、横長剥片石核、残核、石刃残核、石核ブランク、石核未成品の総称として用いる。石刃石核類→石刃石核、小形石刃石核、石刃残核の総称として用いる。礫片類→礫片・小礫片の総称として用いる。礫類→礫・小礫の総称として用いる。



第4图 石器集中地点旧石器分布图

石器集中地点

ここでは、4か所の石器集中地点についての概要を記載する。

**第1号石器集中地点**（第4・6・11～29図）

**位置** 調査区北部のA4g1～A4i2区、標高31.4mの台地緩斜面部に位置している。

**出土状況** 基本層序の第5・6層から出土している。分布の中心はA4h2区の北部で、外縁は分布が散漫である。

**遺物** ナイフ形石器、ナイフ形石器断片、戴頂石刃、石錐、素刃削器、彫刻刀形石器、鋸歯縁石器、二次加工剥片、使用痕剥片、不明石器小断片などのほか、砕片、裂片、剥片類、石刃類、礫端片、石核類、石刃石核類、分割礫、礫片類が出土している。石材は瑪瑙が主体で、頁岩、水晶、ガラス質安山岩、流紋岩、鉄石英、凝灰岩、玉髓、黒色頁岩、珪質頁岩、チャート、砂岩、石英などが用いられている。

**所見** 1824点の石器が出土している。ナイフ形石器は、断片も含め16点が出土しており、石器製作跡と考えられる。

**第2号石器集中地点**（第4・7・8・30～33図）

**位置** 調査区北部のA4i1～A4j2区、標高31.6mの台地緩斜面部に位置している。

**重複関係** 第14号陥し穴に掘り込まれている。第3号石器集中地点と、分布範囲の南部が部分的に重複している。

**出土状況** 基本層序の第5・6層から出土している。分布の中心はA4j1区の東側およびA4j2区の西側で、外縁は分布が散漫である。

**遺物** 尖頭器未成品、ナイフ形石器、削器、鋸歯縁石器、砕片、裂片、剥片類、石刃類、石刃石核類、分割礫が出土している。石材はガラス質安山岩主体で、チャート、凝灰岩、頁岩、砂岩、瑪瑙、流紋岩、ホルンフェルス、玉髓、鉄石英、ガラス質黒色デイスイト（トロトロ石）などが用いられている。また、砂岩主体の礫片や礫類が、本集中地点とほぼ同じ範囲で分布している。

**所見** 182点の石器が出土している。第1・3号石器集中地点に比べて石器の出土数は少ないが、砕片、裂片、剥片類が出土しており、石器製作跡と考えられる。

**第3号石器集中地点**（第4・7・8・34～42図）

**位置** 調査区北部のB4a1～B4b2区、標高31.8mの台地緩斜面部に位置している。

**重複関係** 第2号石器集中地点と、分布範囲の北部が重複している。また、第1号炉穴に掘り込まれている。

**出土状況** 基本層序の第5・6層から出土している。分布の中心はB4a2区の南西部で、外縁は分布が散漫である。

**遺物** ナイフ形石器、ナイフ形石器断片、戴頂石刃、二次加工剥片、使用痕剥片、砕片、裂片、剥片類、石刃類、石核類、石刃石核類、分割礫が出土している。石材はガラス質安山岩主体で、チャート、ガラス質黒色デイスイト（トロトロ石）、頁岩、凝灰岩、流紋岩、玉髓、瑪瑙、砂岩、鉄石英、斑欄岩などが用いられている。また、砂岩主体の礫片や礫類が本集中地点とほぼ同じ範囲で分布している。

**所見** 659点の石器が出土している。出土した石器のうち143点は石刃類であり、石刃を素材としたナイフ形石器や戴頂石刃の石器製作跡と考えられる。

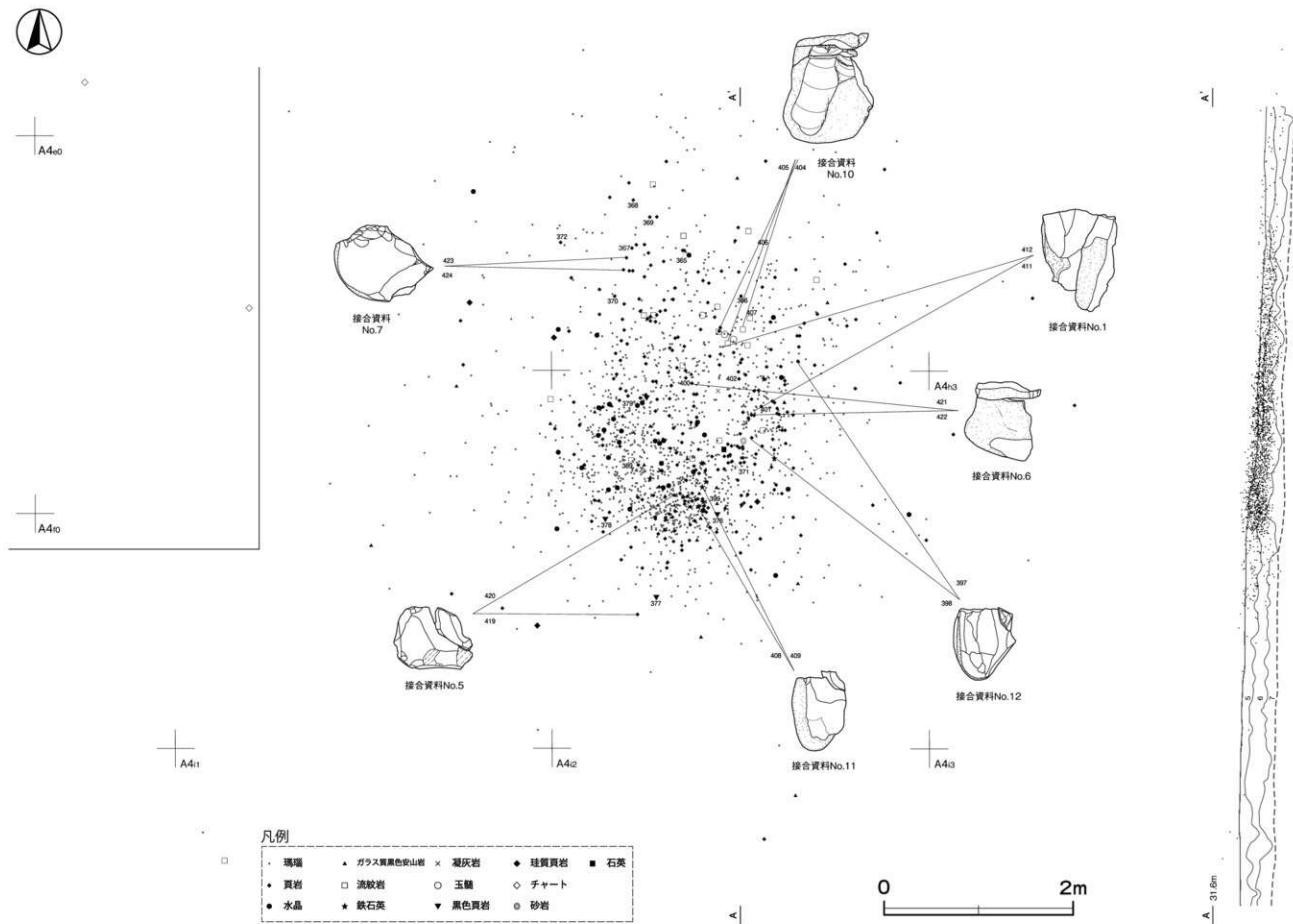
#### 第4号石器集中地点（第4・9・10・43図）

**位置** 調査区中央部のC3a5～C3a6区、標高321mの台地平坦部に位置している。第3号石器集中地点から、南方に30m程の距離である。

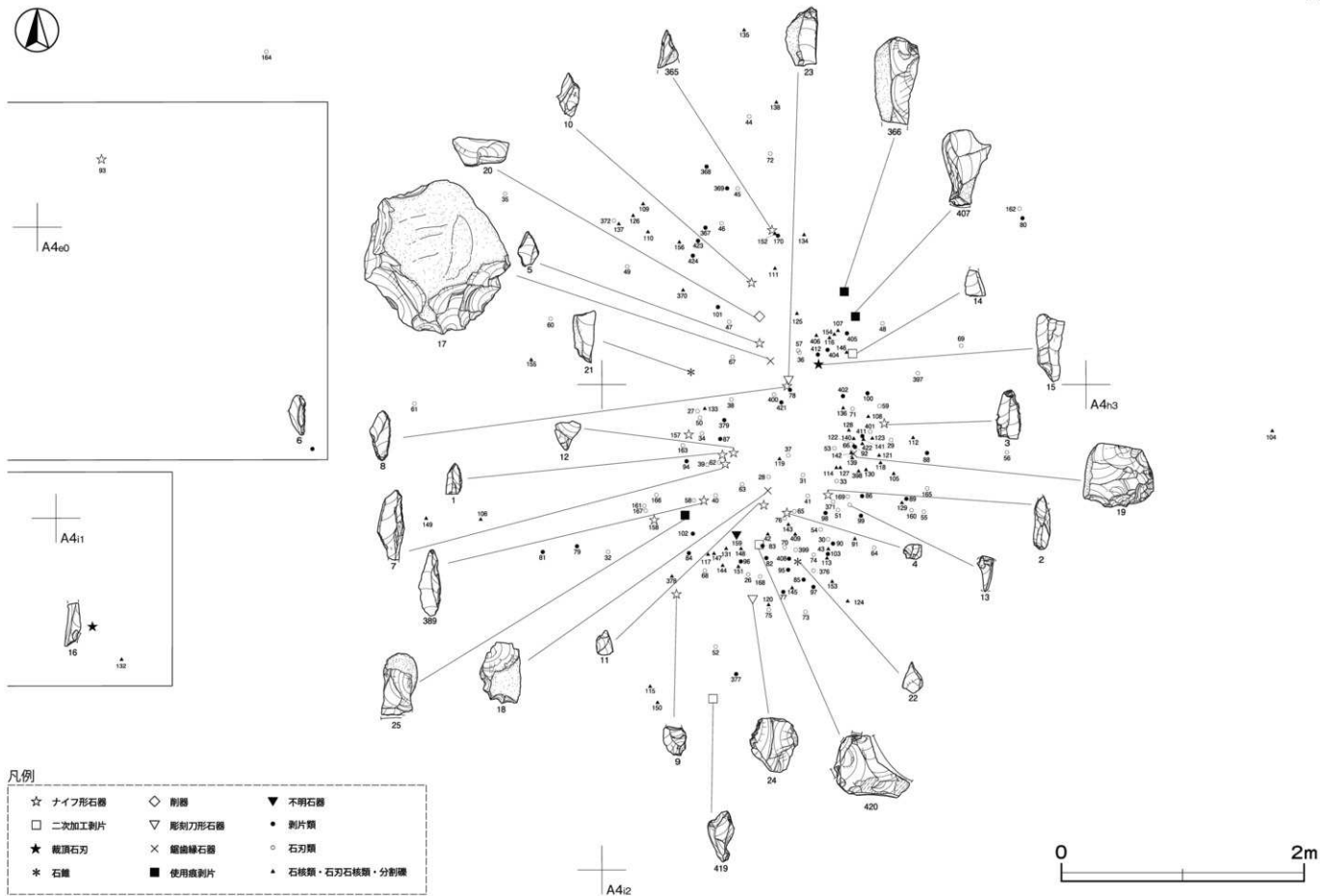
**出土状況** 基本層序の第6層から出土している。石器は、全体的に散漫に分布している。

**遺物** 尖頭器失敗品、剥片、裂片が出土している。石材は石英が主体で、ガラス質安山岩、珪質頁岩、ホルンフェルスなどが確認されている。

**所見** 15点の石器が出土している。出土点数が少ないため、詳細は不明であるが、石器の失敗品などを廃棄した地点の可能性がある。



第5図 第1号石器集中地点石材別分布図



- 凡例
- |          |          |                 |
|----------|----------|-----------------|
| ☆ ナイフ形石器 | ◇ 削器     | ▼ 不明石器          |
| □ 二次加工剥片 | ▽ 形剥刀形石器 | ● 剥片類           |
| ★ 縦溝石刃   | × 鋸齒縁石器  | ○ 石刀類           |
| * 石鏃     | ■ 使用痕剥片  | ▲ 石核類・石刃石核類・分割礫 |

第6図 第1号石器集中地点器種別分布図





A

A 32.0m

A41

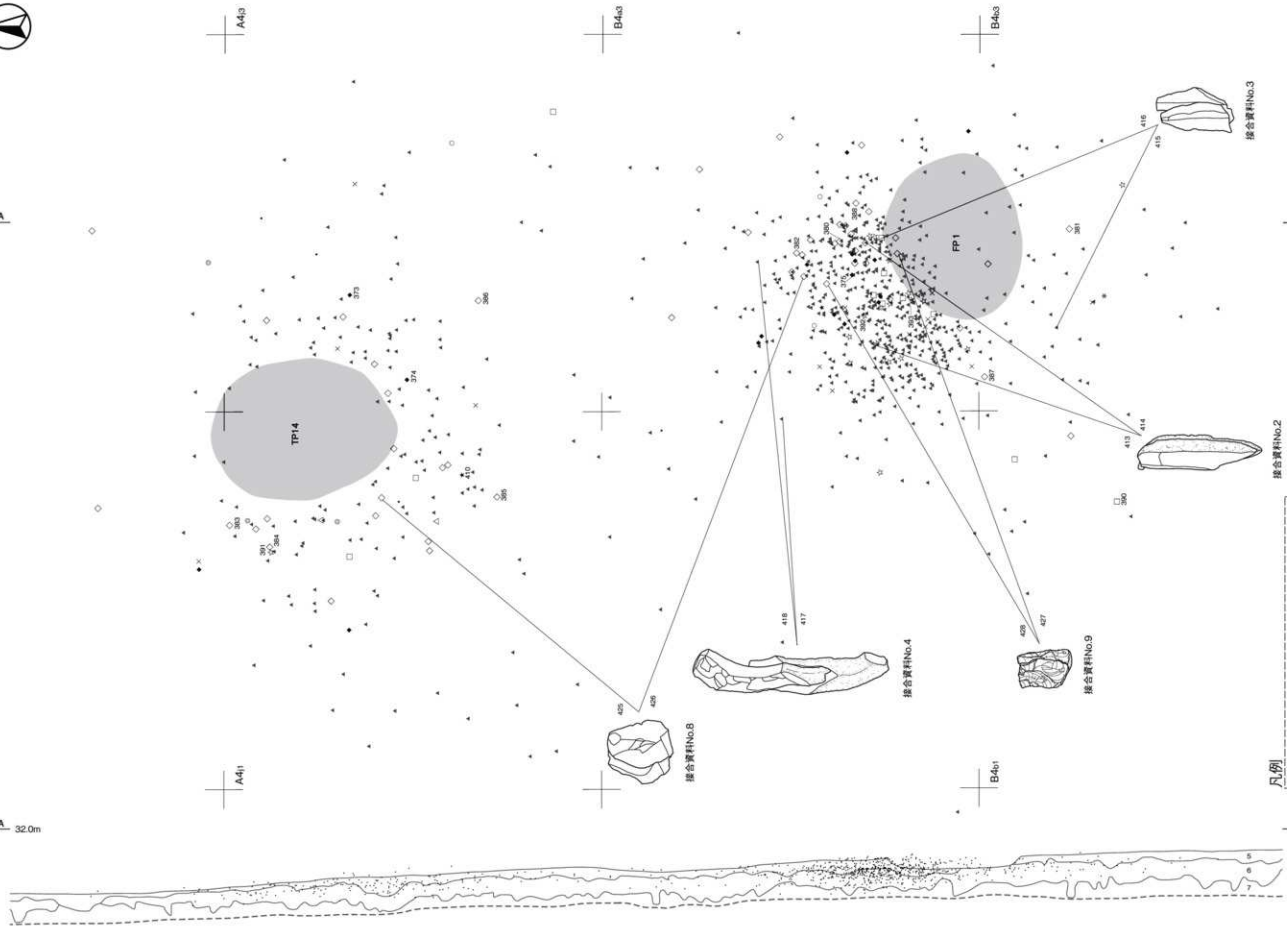
A41

B44a

B44b

B44c

B44d



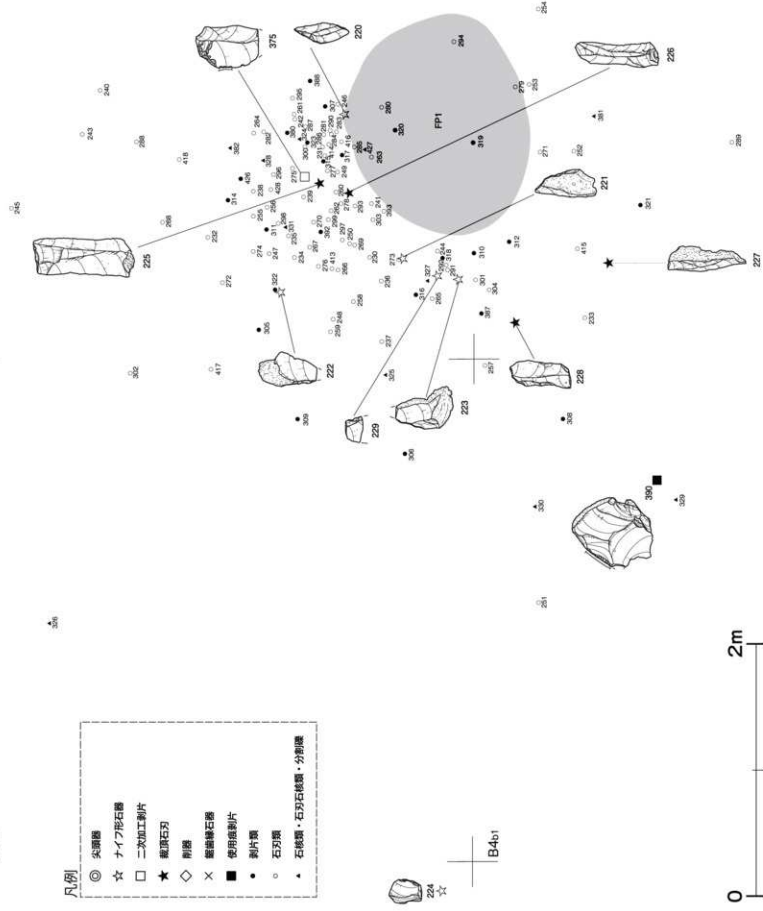
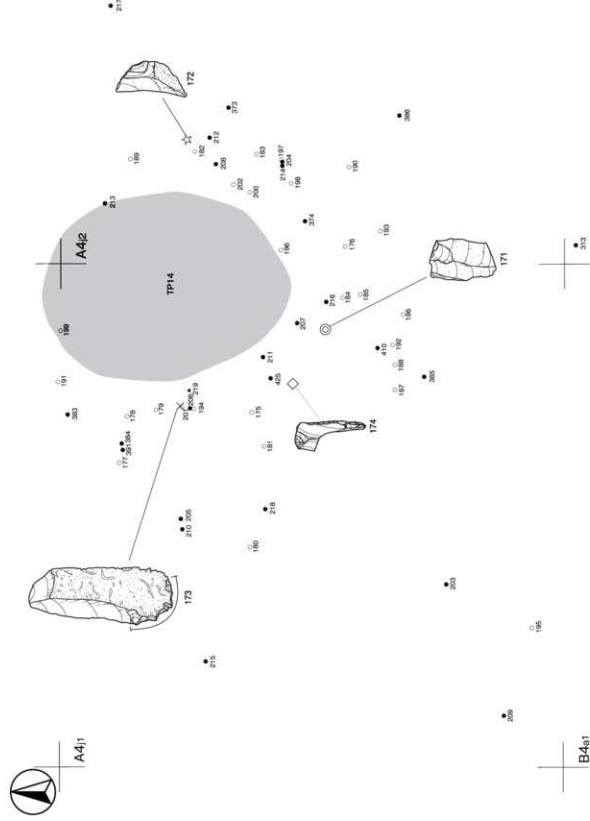
- 凡例
- ★ 緑石炭
  - △ ホルンフェリス
  - 斑鐵
  - × 運炭跡
  - ホンツフェリス
  - ◇ チャート
  - 運炭跡
  - ◇ 斑鐵
  - ガラス質黒色山崩
  - ガラス質黒色サイト
  - 砂岩
  - (トトロ石)
  - 真石
  - 玉座

標合資料No.2

標合資料No.3



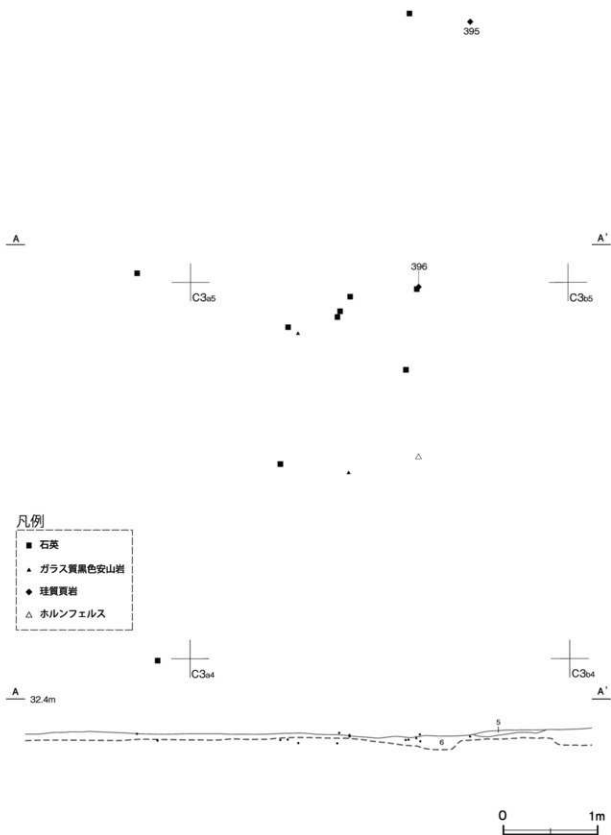
第7図 第2・3号石器集中地点石群別分布図



凡例

◎	尖頭器
☆	ナイフ形石鏟
□	二次加工剥片
★	籠原石刀
◇	削器
×	鑿錐石器
●	使用痕跡剥片
■	剥片痕
○	石刀類
▲	石鏟類・石刀石鏟類・分別遺

第 8 図 第 2・3 号石器集中地点器種別分布図



第9図 第4号石器集中地点石材別分布図



395



396



•  
335

•  
334 •  
332

凡例

◎ 尖頭器

• 剥片類

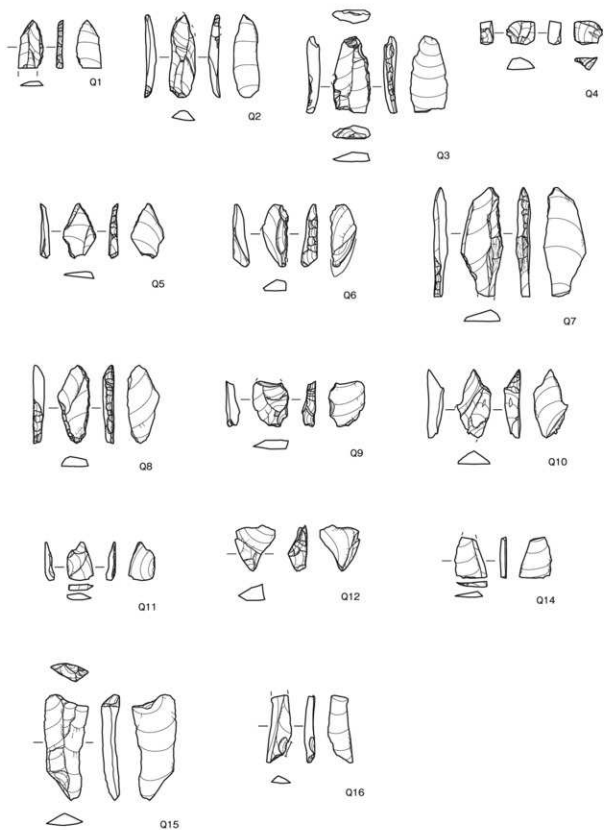
▲ 石核ブランク

•  
333

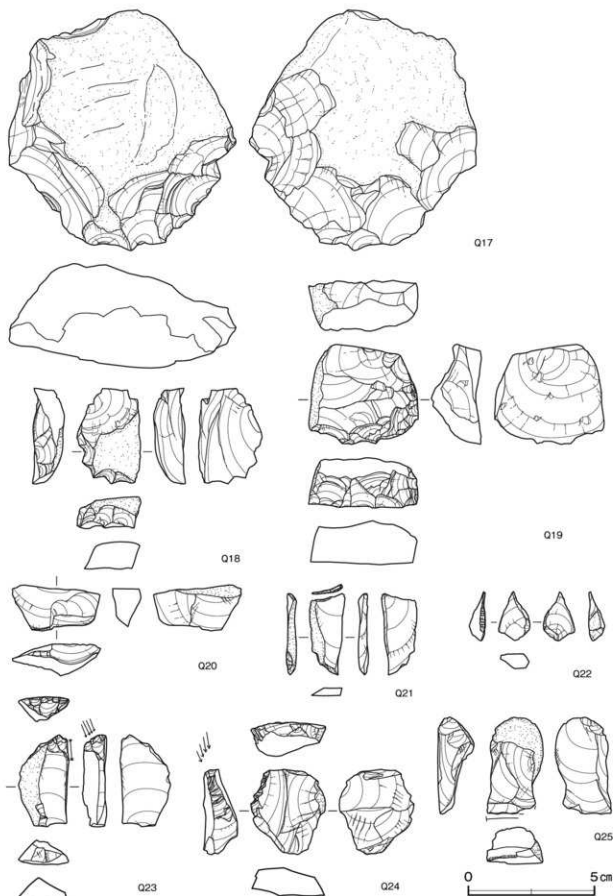
▲  
336



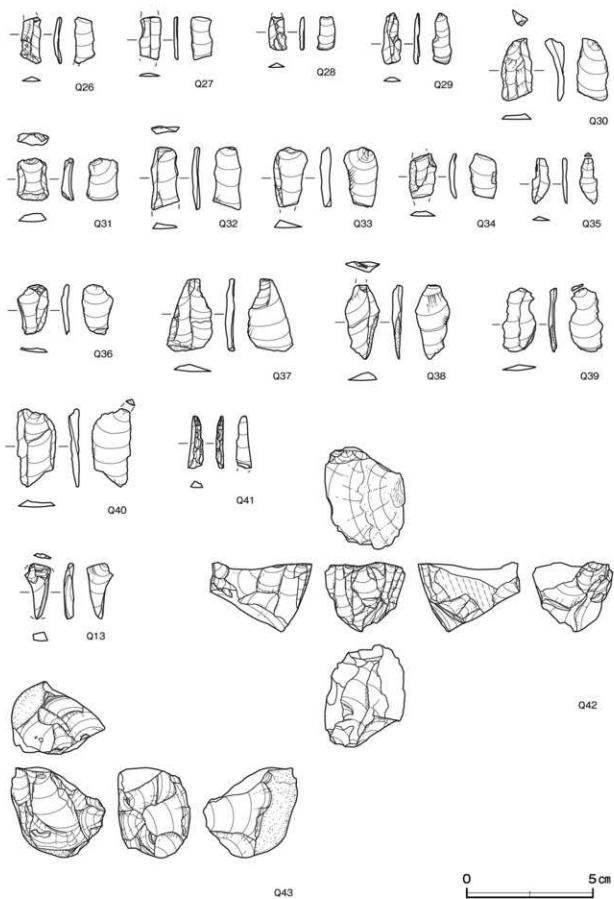
第10図 第4号石器集中地点器種別分布図



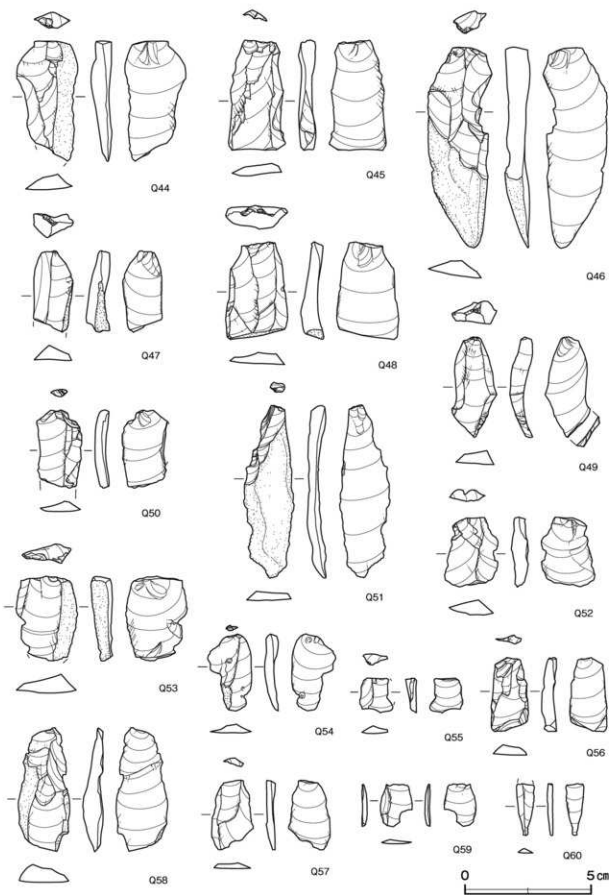
第11图 第1号石器集中地点出土遺物実測図(1)



第12图 第1号石器集中地点出土遗物实测图(2)

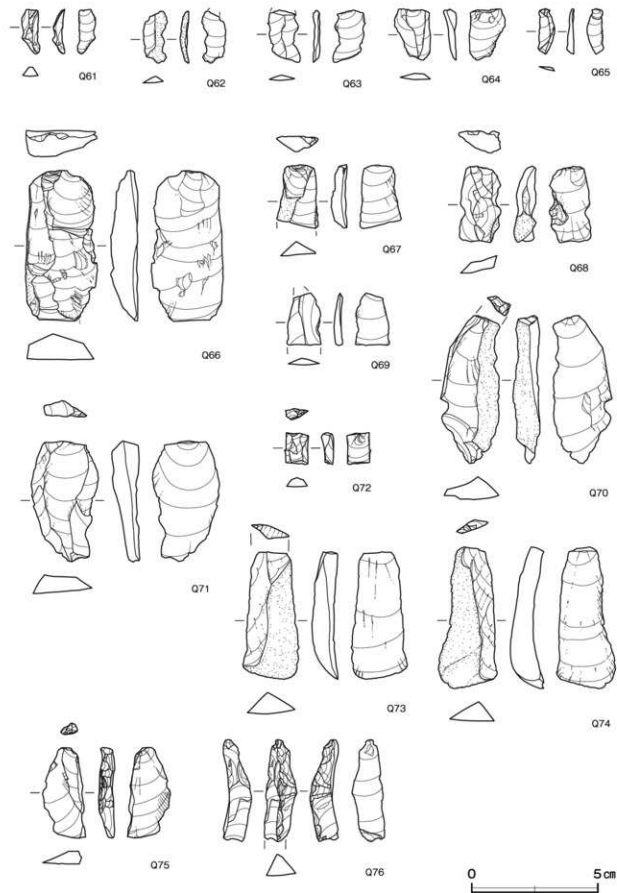


第13图 第1号石器集中地点出土遺物実測图(3)

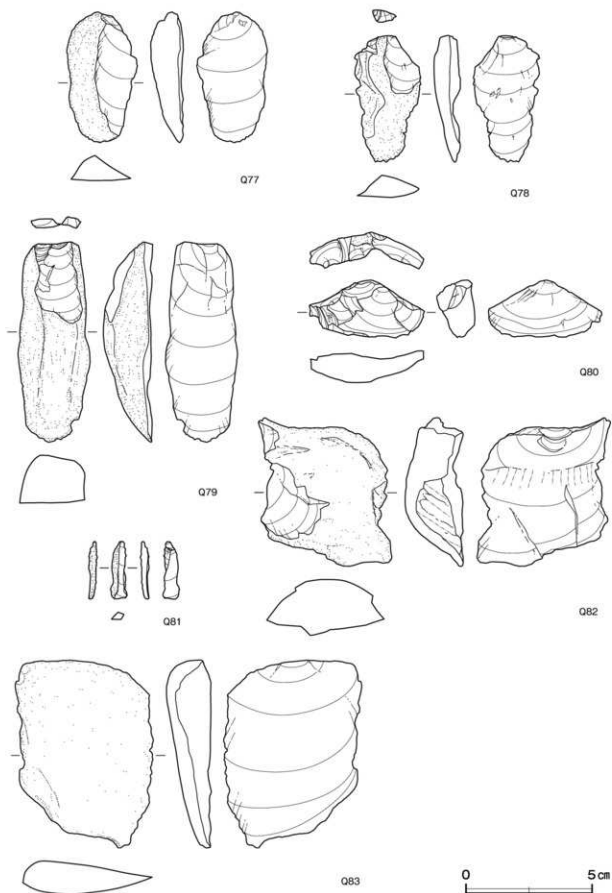


第14图 第1号石器集中地点出土遗物实测图(4)

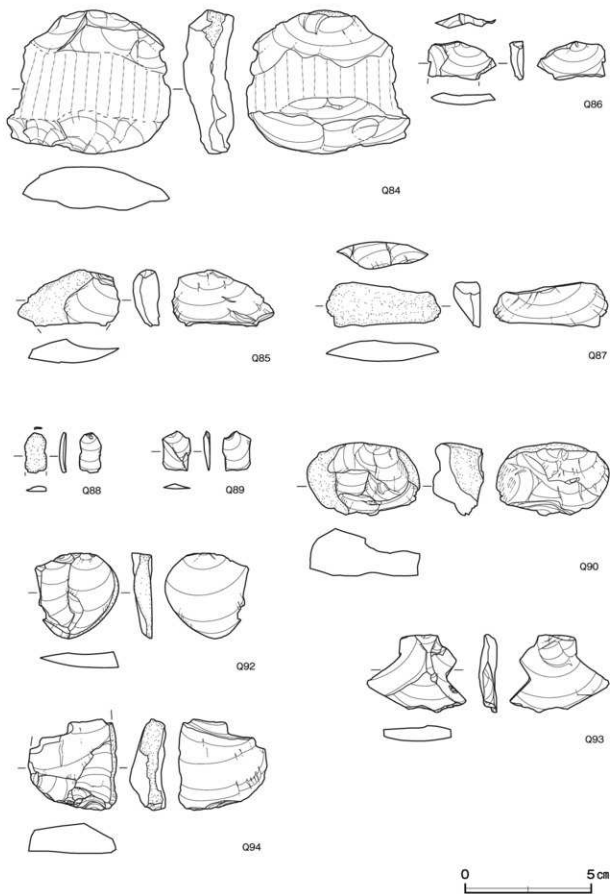




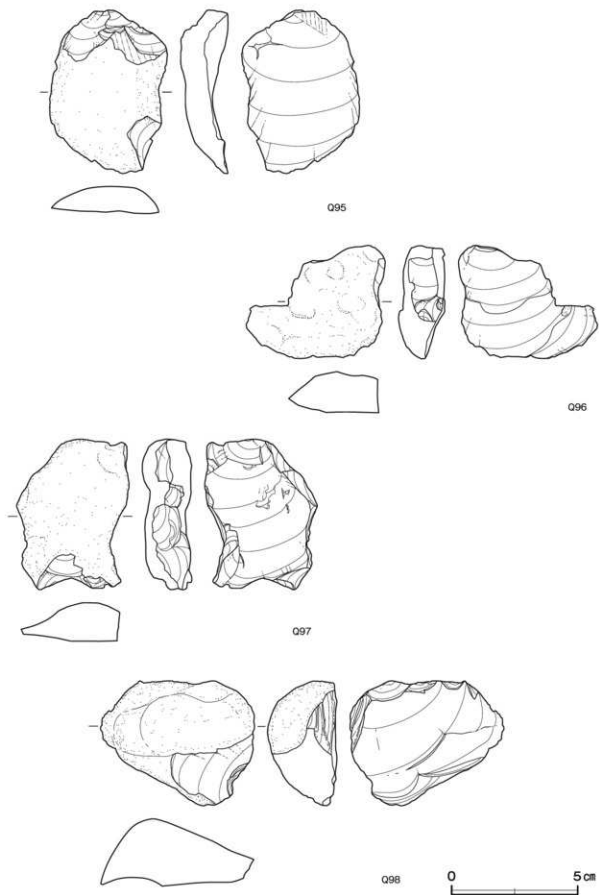
第15图 第1号石器集中地点出土遺物実測图(5)



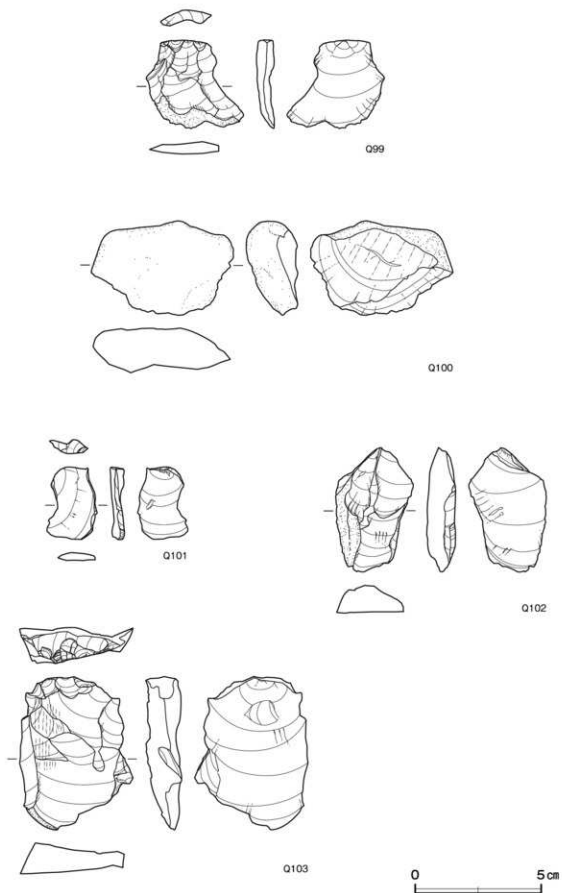
第16图 第1号石器集中地点出土遗物实测图(6)



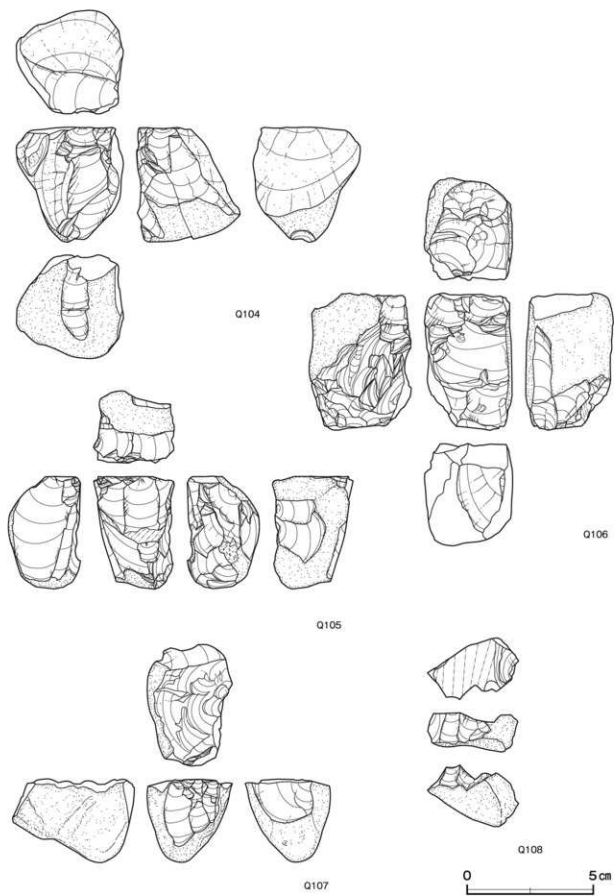
第17图 第1号石器集中地点出土遺物実測图(7)



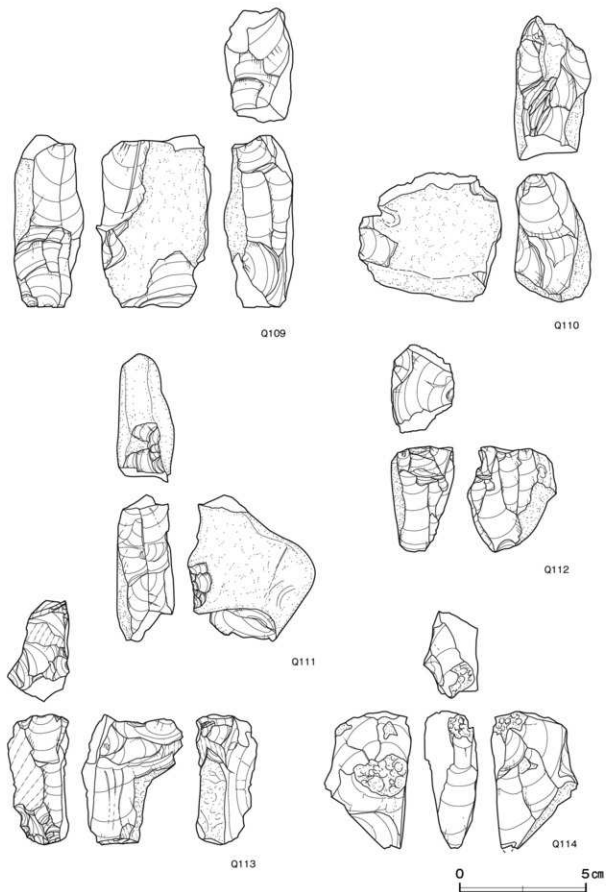
第18图 第1号石器集中地点出土遺物実測図(8)



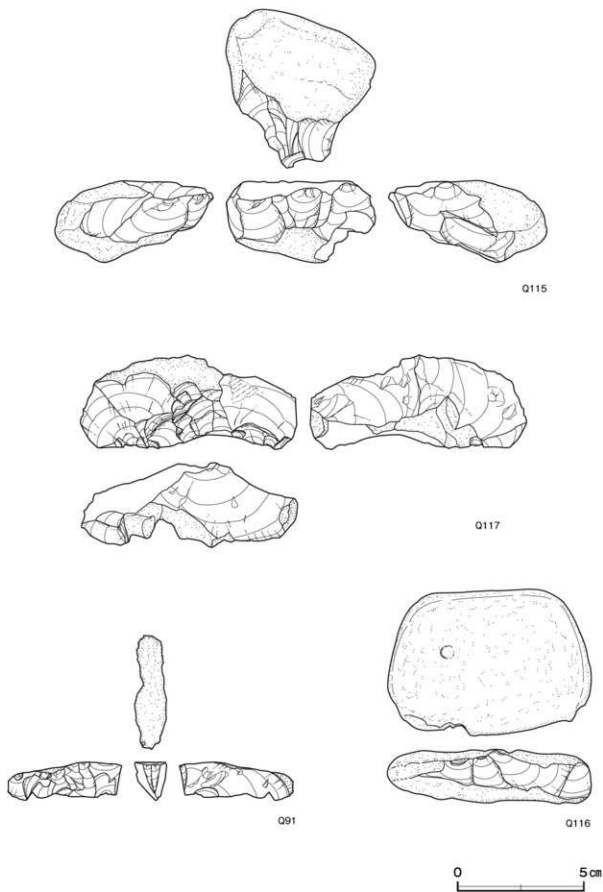
第19圖 第1号石器集中地点出土遺物実測図(9)



第20图 第1号石器集中地点出土遺物実測図(10)

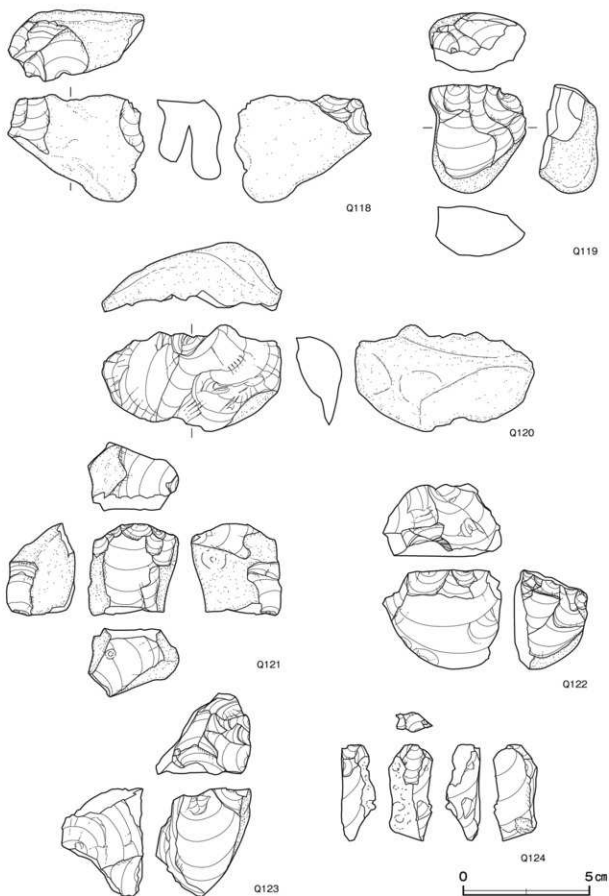


第21图 第1号石器集中地点出土遺物実測図(11)

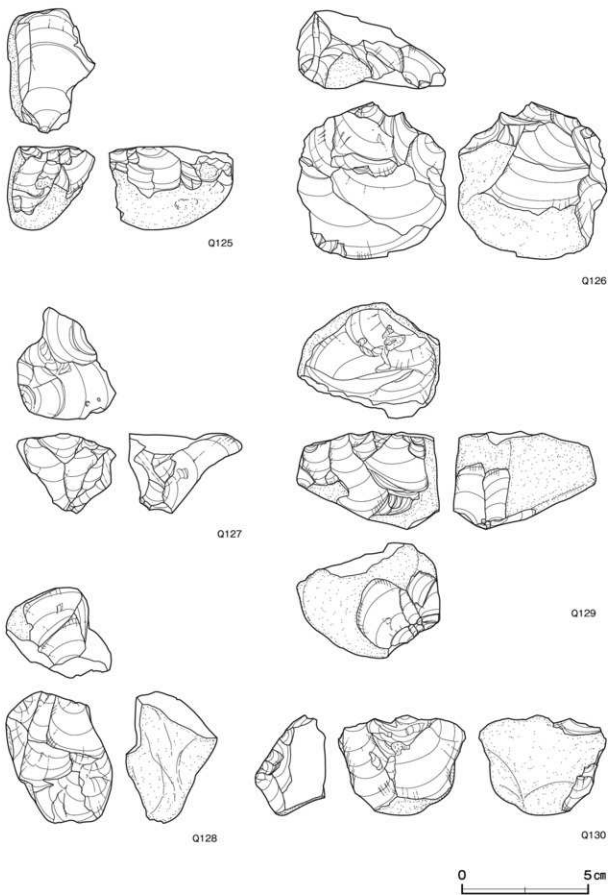


第 22 图 第 1 号石器集中地点出土遗物实测图 (12)

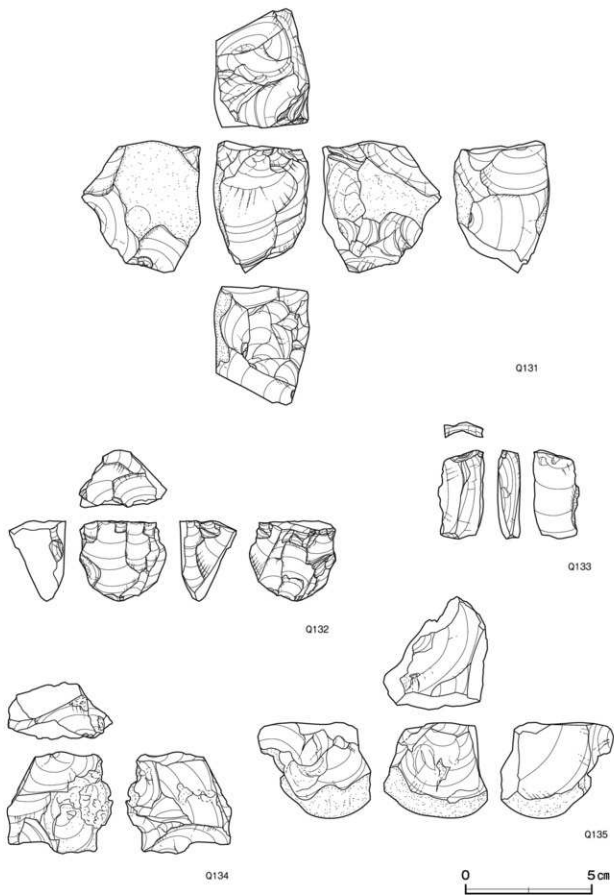




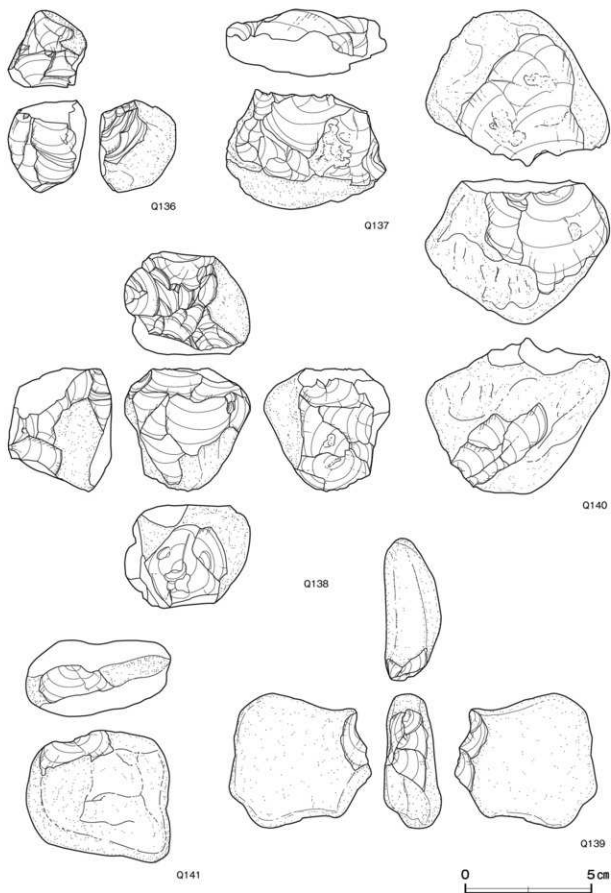
第23图 第1号石器集中地点出土遺物実測图(13)



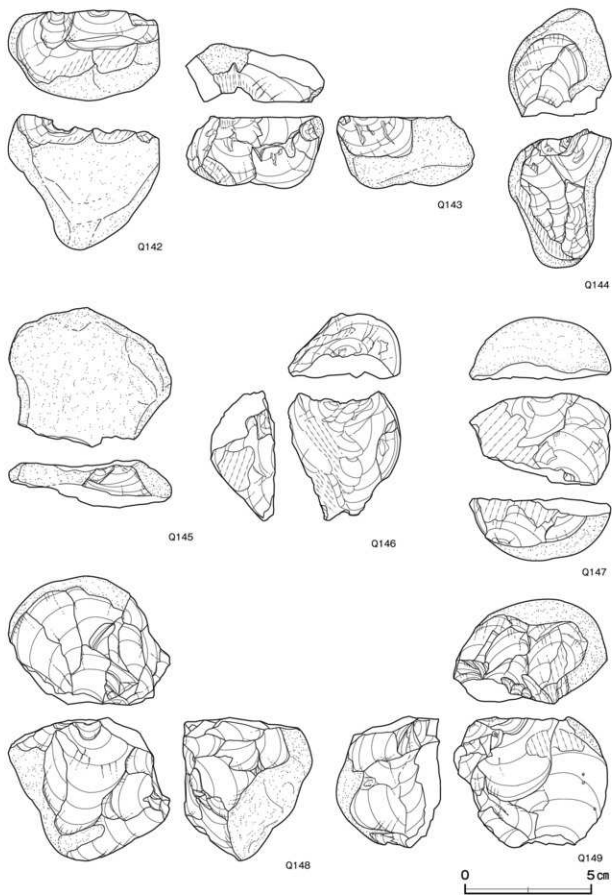
第24图 第1号石器集中地点出土遗物实测图(14)



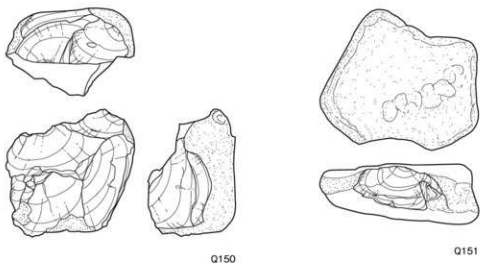
第25图 第1号石器集中地点出土遺物実測図(15)



第26图 第1号石器集中地点出土遗物实测图(16)

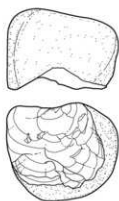


第27图 第1号石器集中地点出土遺物実測図(17)

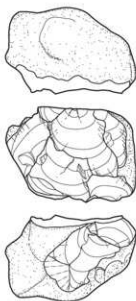


Q150

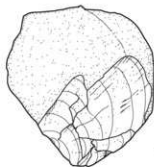
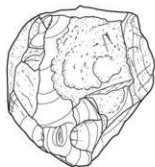
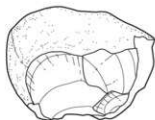
Q151



Q152



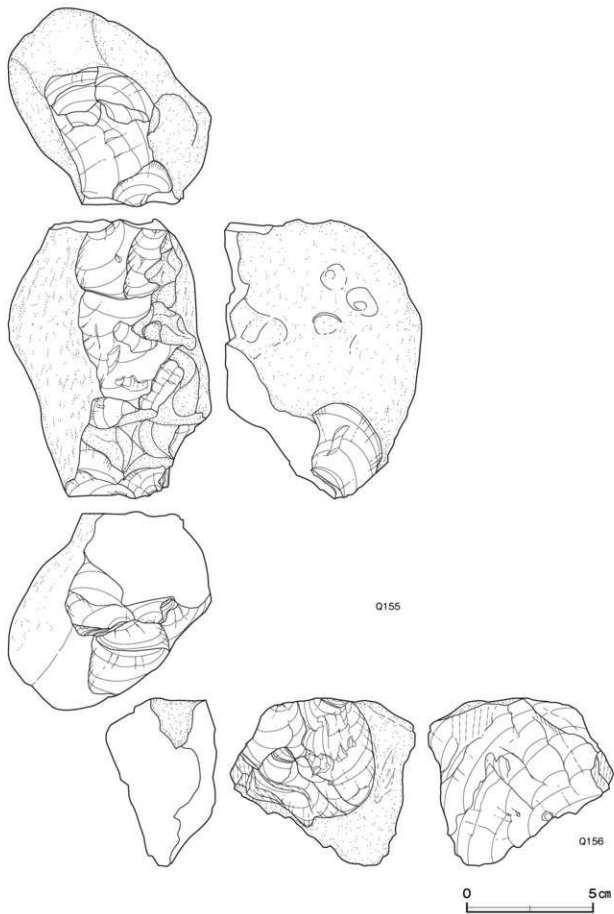
Q153



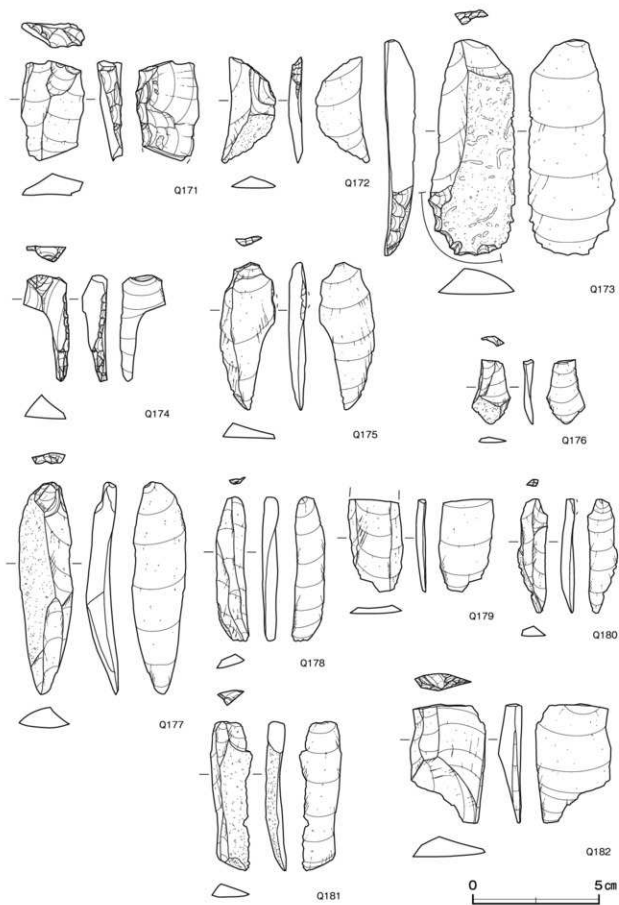
Q154



第28图 第1号石器集中地点出土遗物实测图(18)

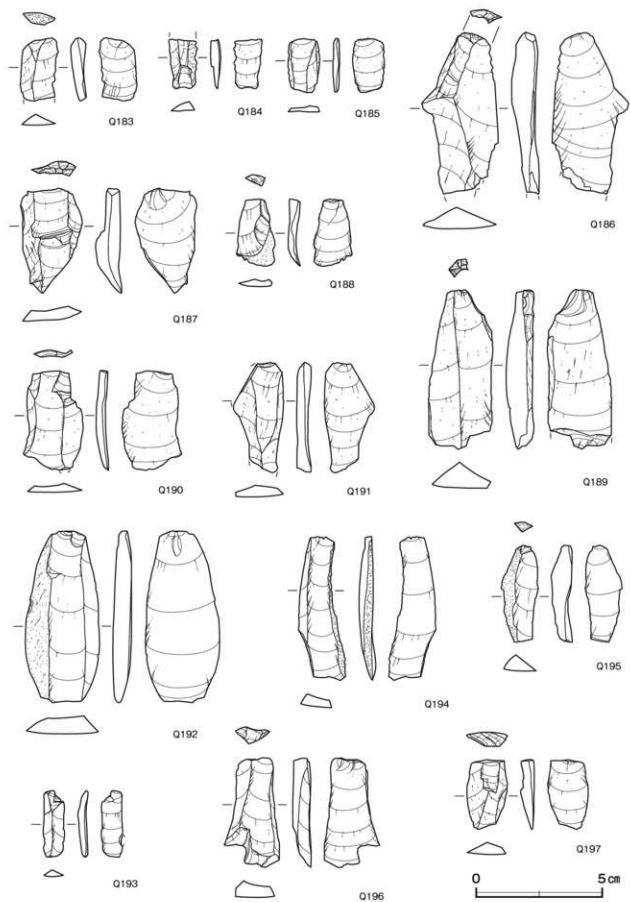


第29図 第1号石器集中地点出土遺物実測図(19)

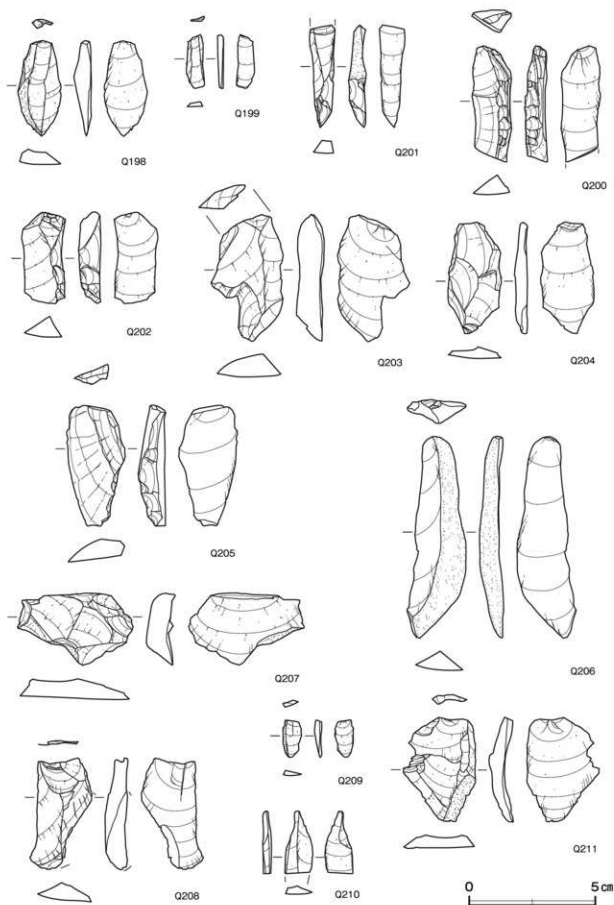


第30图 第2号石器集中地点出土遗物实测图(1)

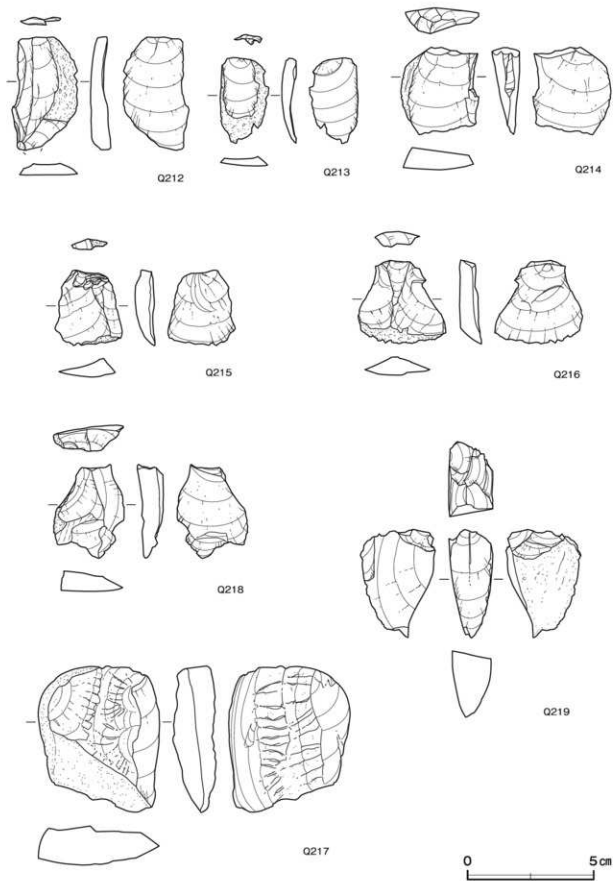




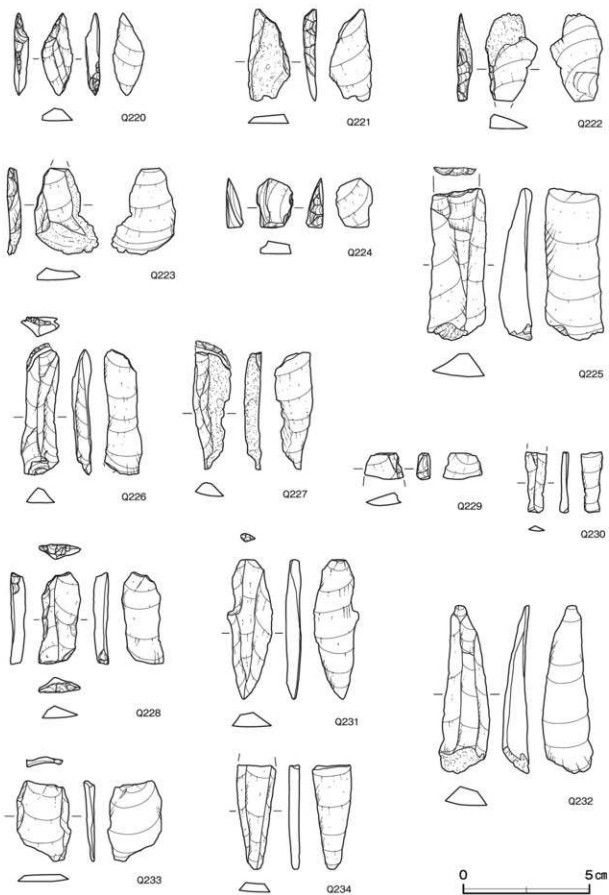
第31图 第2号石器集中地点出土遺物実測图(2)



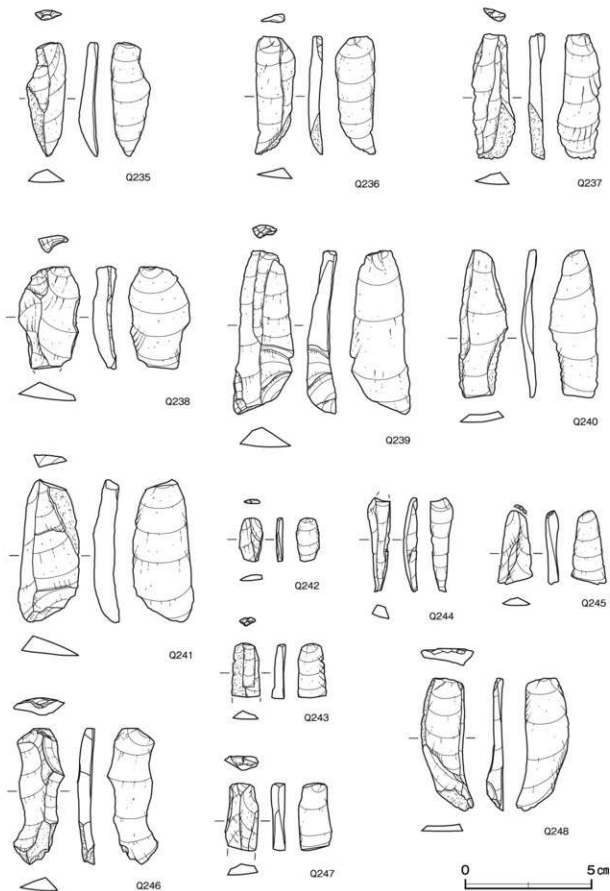
第32图 第2号石器集中地点出土遗物实测图(3)



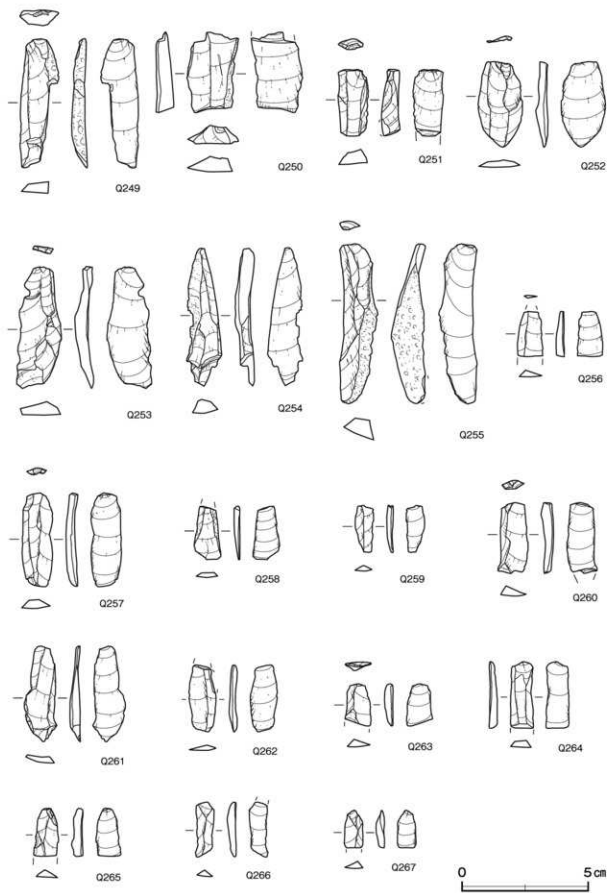
第33图 第2号石器集中地点出土遺物実測图(4)



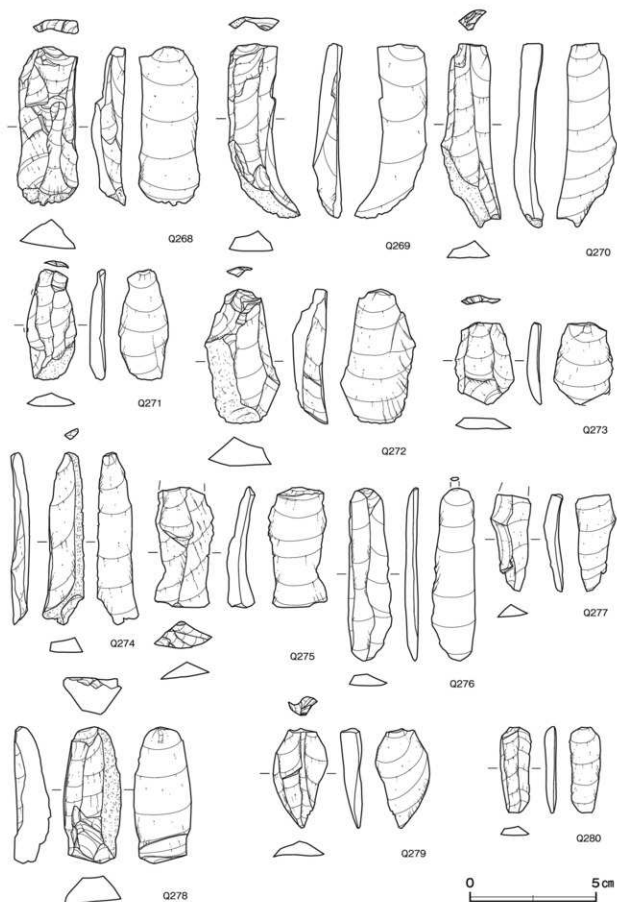
第34图 第3号石器集中地点出土遗物实测图(1)



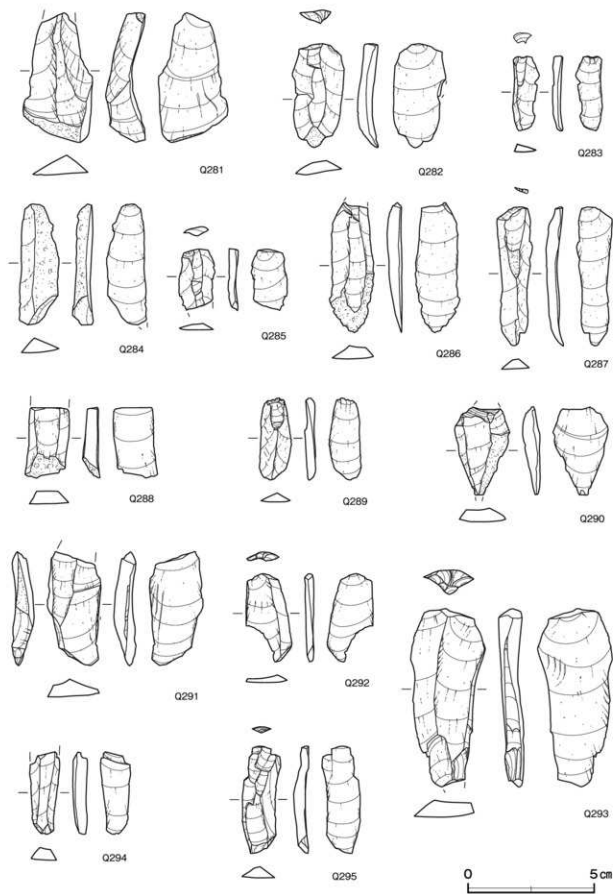
第35图 第3号石器集中地点出土遺物実測图(2)



第36图 第3号石器集中地点出土遗物实测图(3)

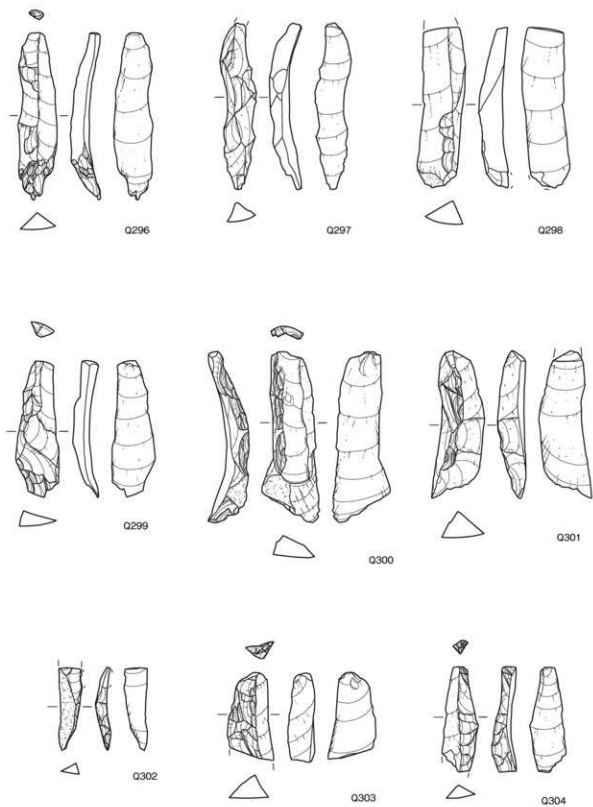


第37图 第3号石器集中地点出土物实测图(4)

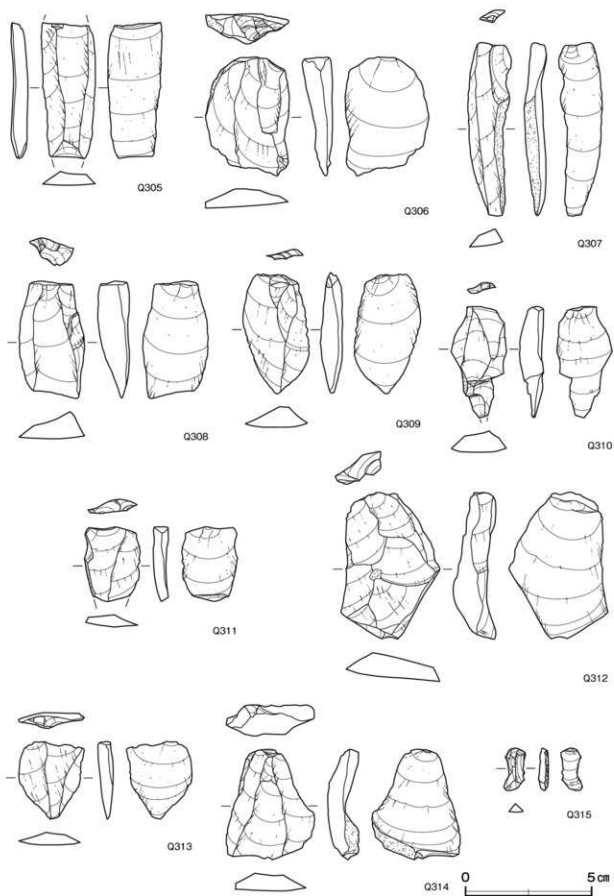


第38图 第3号石器集中地点出土遗物实测图(5)

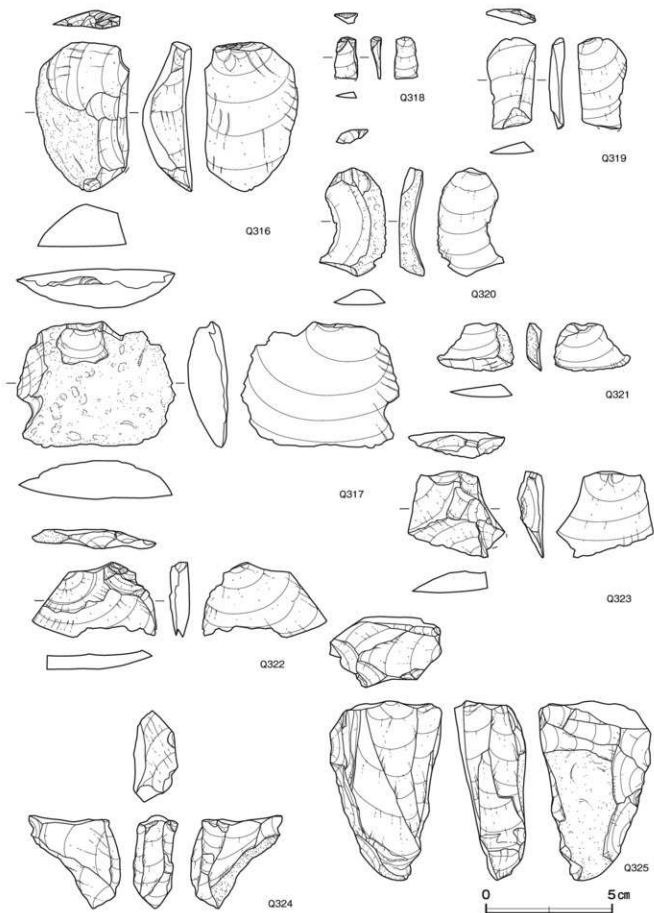




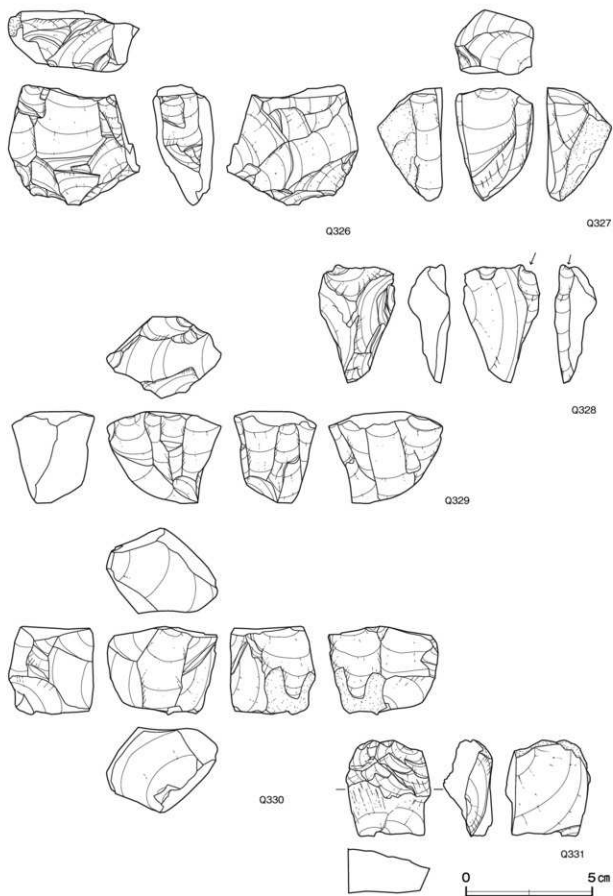
第39圖 第3号石器集中地点出土遺物実測図(6)



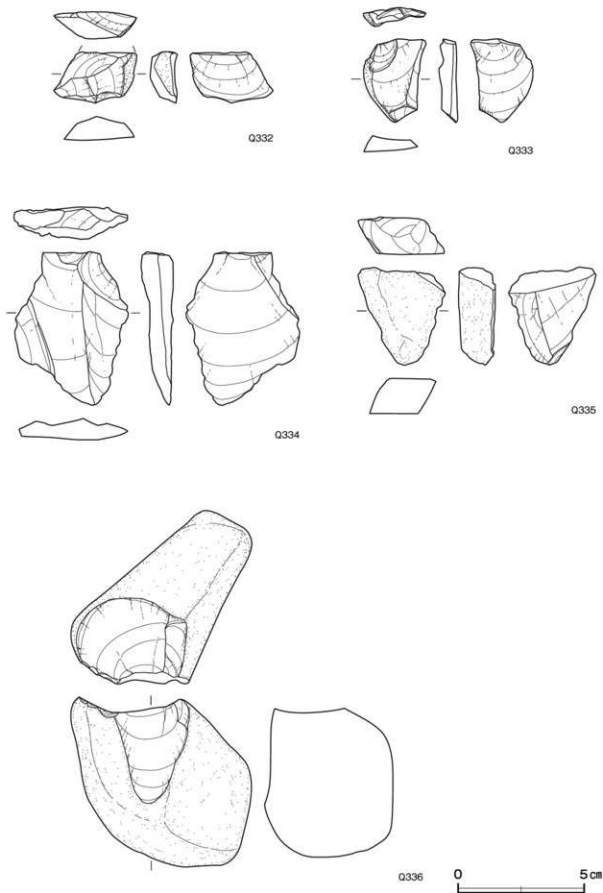
第40图 第3号石器集中地点出土遺物実測図(7)



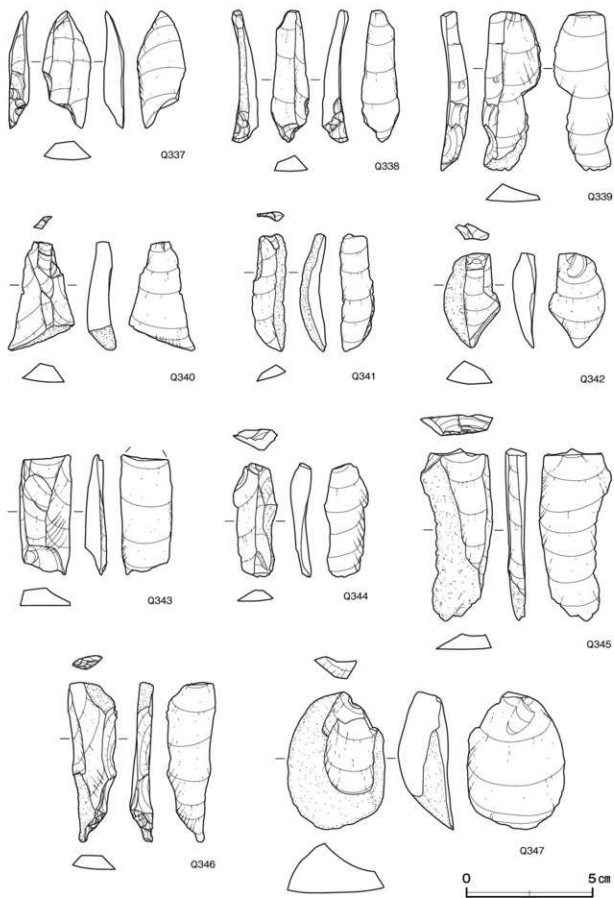
第41图 第3号石器集中地点出土遗物实测图(8)



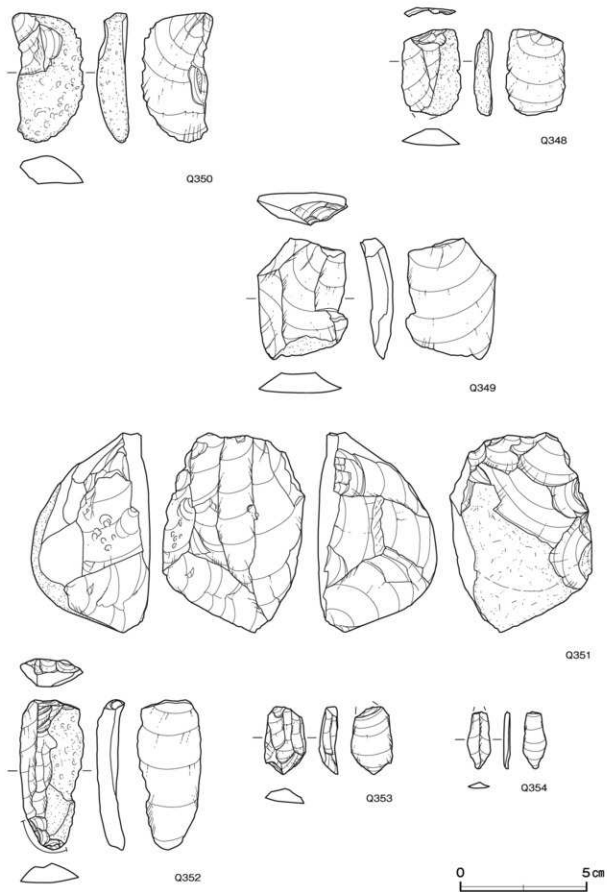
第42图 第3号石器集中地点出土遗物实测图(9)



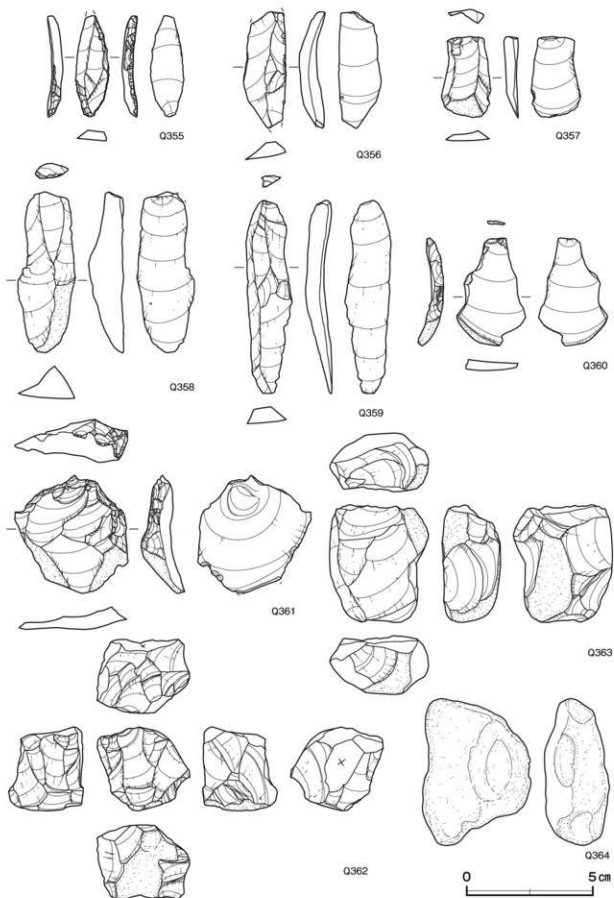
第43图 第4号石器集中地点出土遺物実測図



第 44 图 遗構外出土遺物実測図 (1)

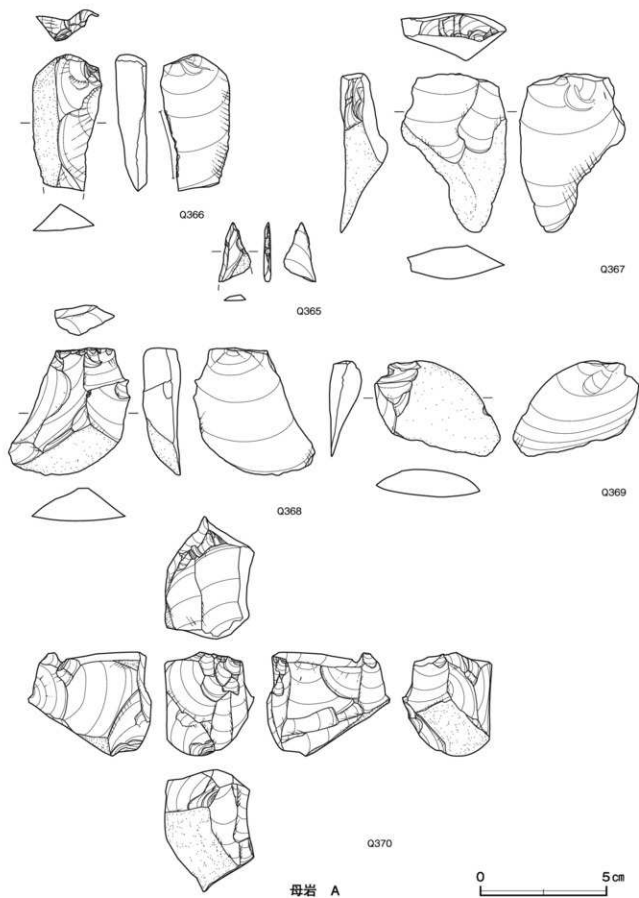


第45図 遺構外出土遺物実測図(2)

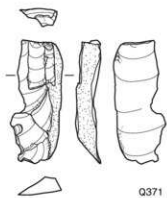


第46图 遺構外出土遺物実測図(3)

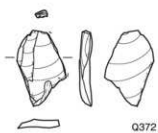




第 47 图 母岩别实测图A

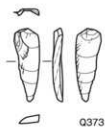


Q371

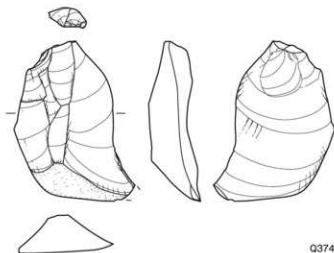


Q372

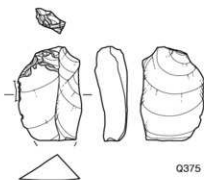
母岩 B



Q373

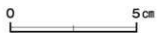


Q374

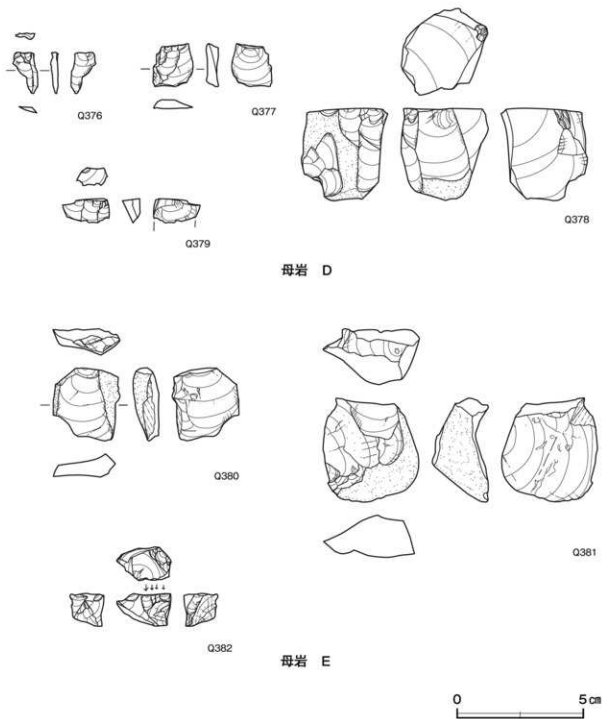


Q375

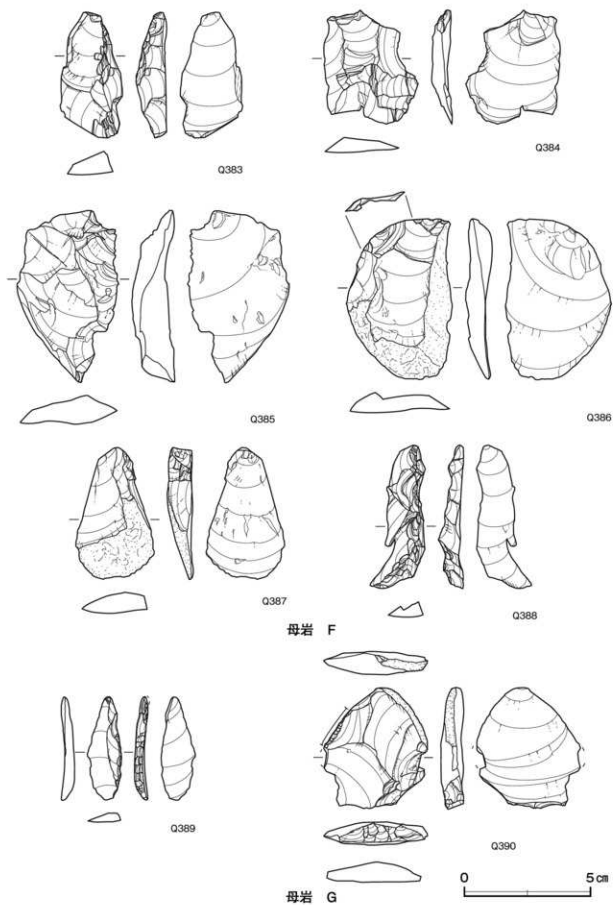
母岩 C



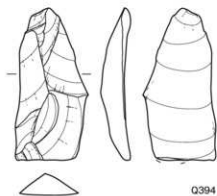
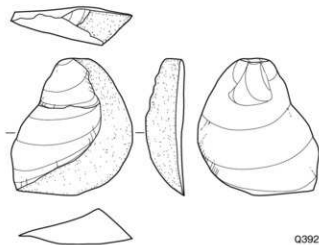
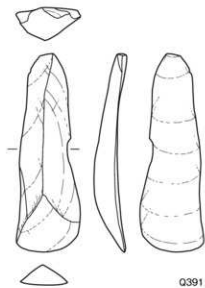
第48图 母岩别实测图B·C



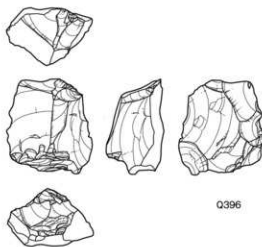
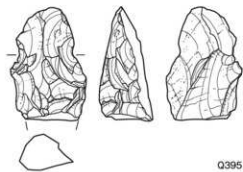
第49図 母岩別実測図D・E



第50图 母岩别实测图F·G



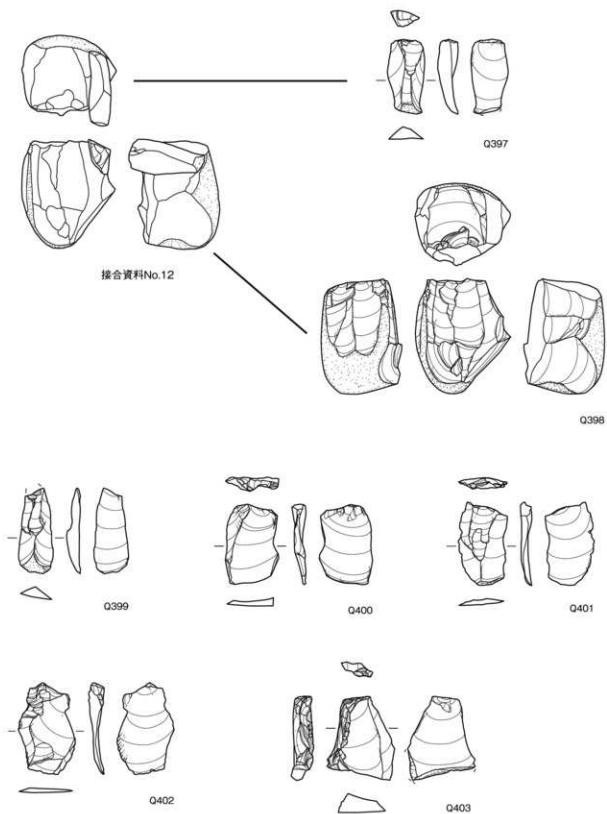
母岩 H



母岩 I



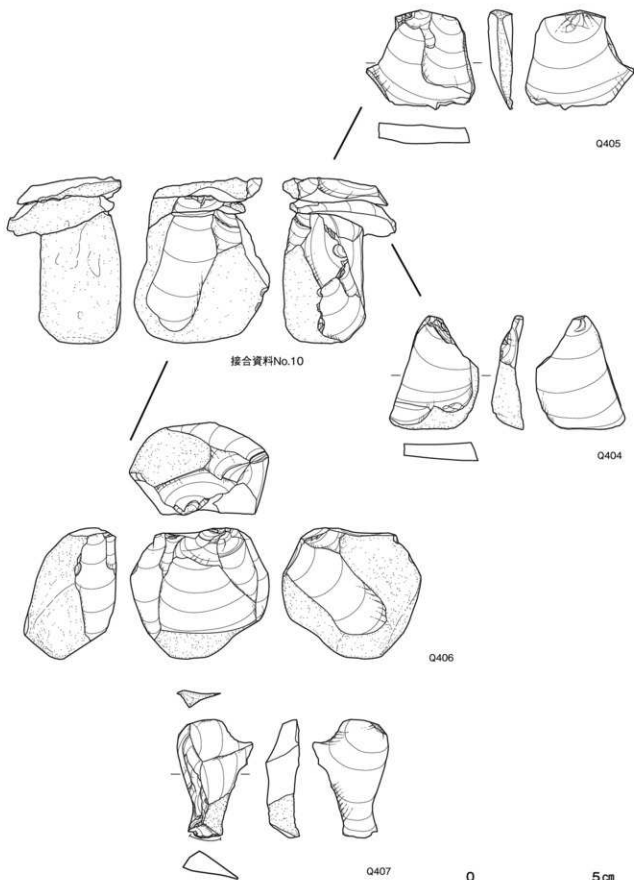
第51圖 母岩別実測図H・I



母岩 J

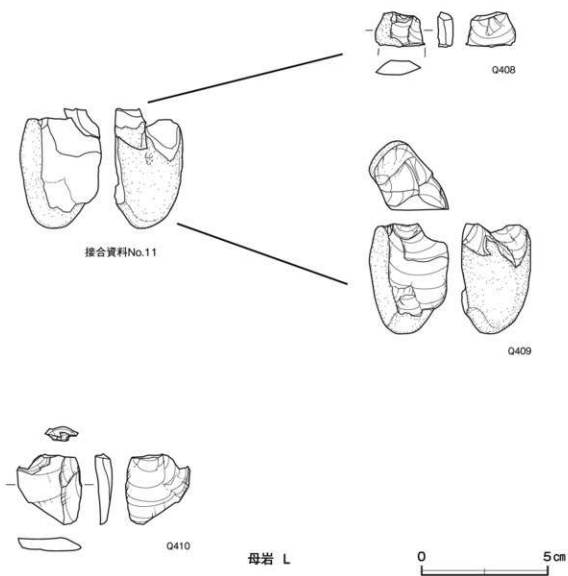
0 5 cm

第 52 圖 母岩別実測圖丁



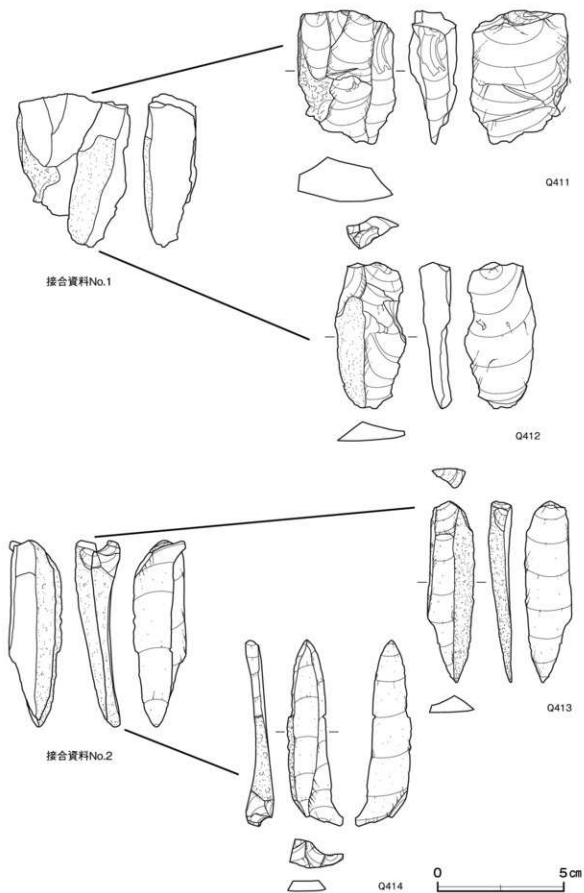
第53図 母岩別実測図K

母岩 K

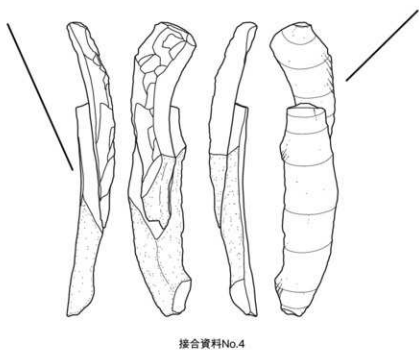
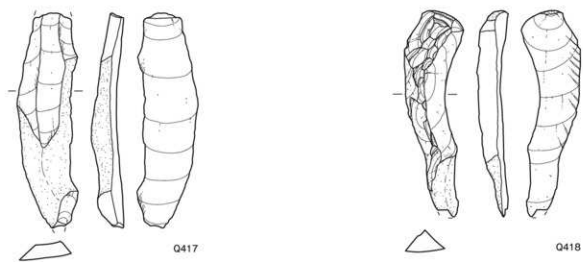


第54図 母岩別実測図L

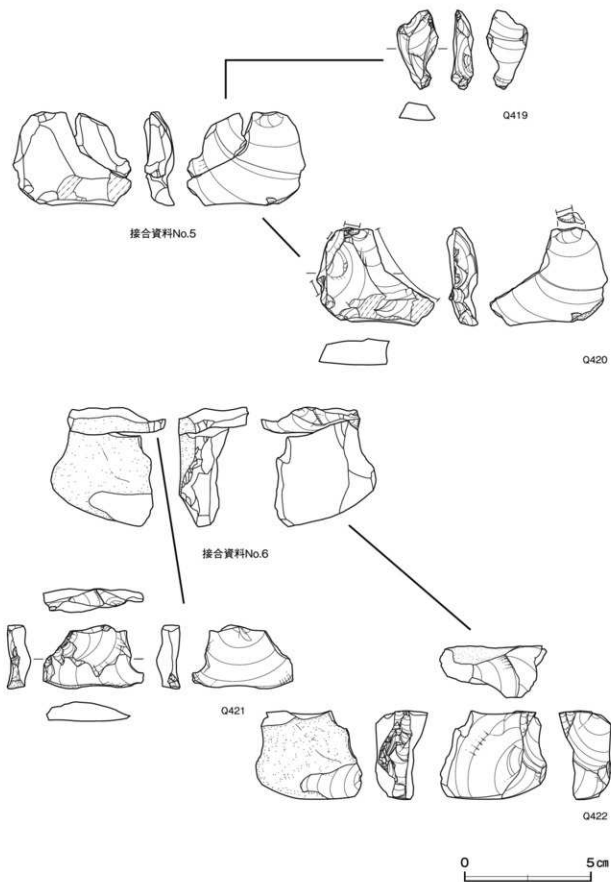




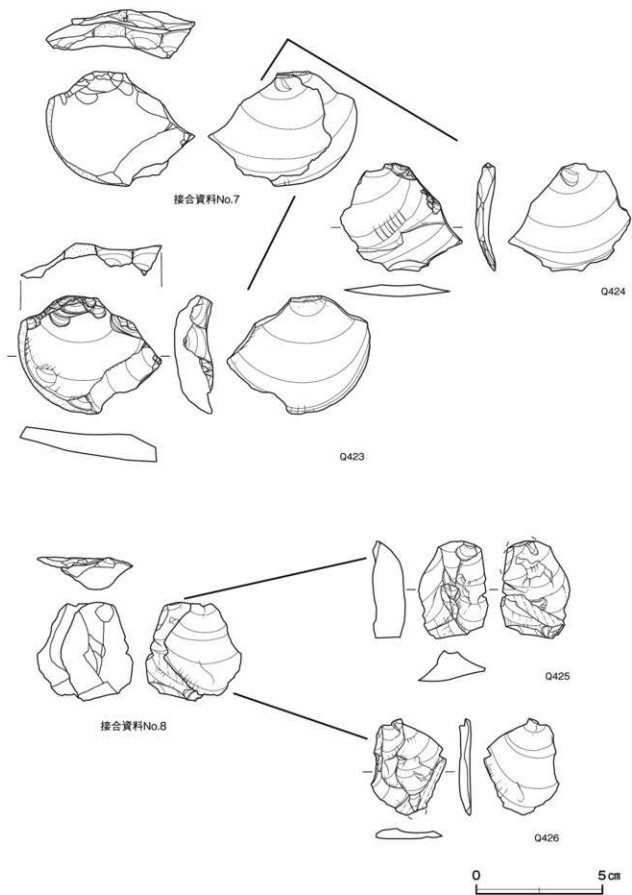
第55図 母岩別接合実測図(1)



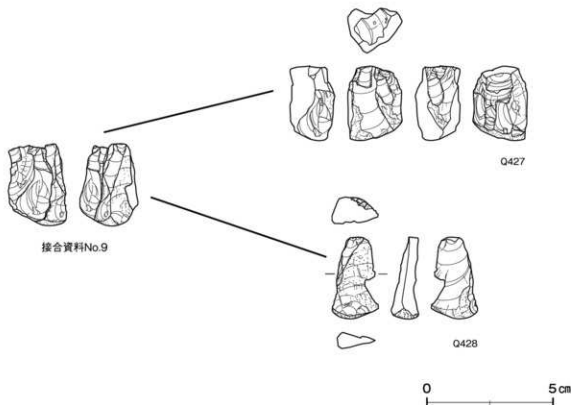
第56图 母岩別接合実測図(2)



第 57 図 母岩別接合実測図 (3)



第58図 母岩別接合実測図(4)



第59図 母岩別接合実測図(5)

第1号石器集中地点出土遺物観察表(第11~29図)

番号	器種	石材	所見	素材属性	加工属性	刃部属性	長さ	幅	厚み	重量	X	Y	Z	備考
Q1	ナイフ形石器	珧瑁	石刀素材。基部折れ。	不明	HP/刃磨し	素刃	19.1	9.9	2.8	0.5	-0.58	1.00	31.018	PL18
Q2	ナイフ形石器	頁岩	先端・基部加工。石刀素材。素材は両長打撃。	不明	HP/刃磨し	素刃	32.9	10.5	4.7	1.3	-0.90	1.87	31.009	PL18
Q3	ナイフ形石器	頁岩	一端加工のナイフ形石器。基部の行状加工。石刀素材。	SI	HP/刃磨し	素刃	30.4	15.0	5.4	2.1	-0.32	2.34	31.095	PL18
Q4	ナイフ形石器	頁岩	ナイフ形石器断片。	不明	HP/急角度	素刃	9.4	11.4	5.2	0.6	-1.05	1.53	31.199	PL18
Q5	ナイフ形石器	頁岩	一端加工のナイフ形石器。割片素材。基部は折れに付反加工。	不明	HP/刃磨し	素刃	21.7	13.1	3.8	0.7	0.34	1.31	30.910	PL18
Q6	ナイフ形石器断片	チャート	一端加工のナイフ形石器。基部は折れ。端の加工。	不明	HP/急角度	素刃	24.7	10.4	6.5	1.3	12.56	-7.47	30.676	PL18
Q7	ナイフ形石器	珧瑁	一端加工のナイフ形石器。基部折れ。石刀素材。	SI	HP/刃磨し	素刃	43.3	16.8	5.7	3.5	-0.65	1.02	31.112	PL18
Q8	ナイフ形石器	珧瑁	一端加工のナイフ形石器。右刃部素材。	不明	HP/刃磨し	素刃	31.1	13.0	4.6	1.7	-0.01	1.53	31.024	PL18
Q9	ナイフ形石器断片	珧瑁	一端加工のナイフ形石器。加工は種上女部主体。	不明	種上女部HP/刃磨し	素刃	18.1	14.4	5.5	1.3	-1.73	0.62	31.185	PL18
Q10	ナイフ形石器	珧瑁	一端加工のナイフ形石器。石刀素材。基部折れ。割片素材。	不明	HP/刃磨し	素刃	27.1	13.6	6.6	1.6	0.84	1.24	31.072	PL18
Q11	ナイフ形石器	珧瑁	一端加工のナイフ形石器。素材打面厚2ミリ。割片打面。	SI	HP/刃磨し	素刃	15.2	10.5	3.8	0.4	-0.99	1.34	31.222	PL18
Q12	ナイフ形石器	珧瑁	打面をおりとって、そこに二次加工。	不明	折取、HP	素刃	18.1	15.9	7.6	1.4	-0.56	1.09	31.178	PL18
Q14	二次加工前	流紋岩	石刀状断片。打面折れ。末端片は折れに加工有り。	HI	HP	なし	16.3	12.8	2.6	0.4	0.27	2.08	31.030	PL18
Q15	截頭石刀	頁岩	基部折れ。石刀素材。素材打面厚を加工し加工有り。	不明	HP/刃磨し	素刃	41.8	17.6	7.3	3.6	0.17	1.79	31.039	PL18
Q16	截頭石刀	珧瑁	石刀素材。背面に1枚。素材打面折れ。	SI	HP/刃磨し	素刃	26.7	9.9	4.2	0.8	-4.89	-3.71	31.416	PL18
Q17	截頭石刀	珧瑁	石刀素材。素材打面厚1.9ミリ。打面を加工し加工有り。	円礫	なし	HI/側面	95.0	89.9	41.4	31.55	0.20	1.89	31.049	PL18
Q18	截頭石刀	珧瑁	石刀素材。素材打面厚は折れ。本端が1.1ミリ。刃部は加工有り。	HD	明視	HI/急角度	37.9	25.3	12.6	12.6	-0.87	1.37	31.070	PL18
Q19	截頭石刀	珧瑁	石刀素材。素材打面厚は折れ。本端が1.1ミリ。刃部は加工有り。	HD	なし	HD/急角度	39.6	43.7	20.0	35.6	-0.56	2.07	31.003	PL18
Q20	素刃別器	珧瑁	打面を加工して除去。刃部は加工有り。	HD	叩折	素刃	18.3	34.9	12.6	6.5	0.57	1.30	31.068	PL18
Q21	石鏃	頁岩	基部折れ。折れ面と反対側の刃の加工で基部を削る。	HD	なし	折れ、HP/急角度	32.2	14.2	4.1	1.4	0.10	0.73	30.928	PL18
Q22	石鏃	水晶	基部左側面を刃磨し加工で刃部加工有り。	HD	なし	HP/刃磨し	19.4	12.7	6.5	1.1	-1.46	1.61	31.152	PL18
Q23	新製石刀	珧瑁	刃部の加工有り。端に刃面をつくり、素材打面厚1.9ミリ。打面を加工し加工有り。	SD	HD/刃磨し	HD/槌状	36.4	20.1	9.9	6.8	0.05	1.54	31.109	PL18
Q24	新製石刀	珧瑁	刃部の加工有り。端に刃面をつくり、素材打面厚1.9ミリ。打面を加工し加工有り。	SD	なし	HD/槌状	33.8	29.8	13.6	12.0	-1.76	1.25	31.066	PL18
Q25	使用痕断片	珧瑁	表面は両長打の痕で形成された凹み。基部は加工有り。	HD	なし	刃こぼれ痕	38.3	22.3	14.4	11.1	-1.07	0.68	31.180	PL18
Q13	小形石断片	頁岩	素材打面は半打打面。打面厚2.1ミリ。	SI	HP/刃磨し	欠損	22.2	10.5	4.0	0.7	-0.97	2.04	31.146	PL18

番号	器械	石材	所見	素材属性	加工属性	対部属性	長さ	幅	厚み	重量	X	Y	Z	備考
Q26	小形石刀	頁岩	小形石刀。打面折れ。間接打撃。	HI	なし	なし	18.4	8.2	3.1	0.3	-1.56	1.21	31.050	
Q27	小形石刀	頁岩	裏面が平ら。打面。未端折れ。	HI	なし	なし	17.1	8.6	1.7	0.2	-0.22	0.79	31.101	
Q28	小形石刀	頁岩	打面折れ。	HI	なし	なし	13.2	7.1	2.0	0.2	-0.76	1.38	31.162	
Q29	小形石刀	頁岩	点状打面。	HI	なし	なし	20.2	7.5	2.4	0.3	-0.45	2.39	31.048	
Q30	小形石刀	燧岩	小形石刀。平直打面。打面厚3.2ミリ。打面の傷付。直接打撃。	HI	なし	なし	24.5	12.3	7.5	0.9	-1.27	1.87	31.186	
Q31	小形石刀	燧岩	小形石刀。自然面打面。コーン径3.5ミリ。	HI	なし	なし	16.7	12.4	4.9	1.0	-0.74	1.66	31.084	
Q32	小形石刀	燧岩	小形石刀。平直打面。打面厚1.8ミリ。コーン径3.8ミリ。	HI	なし	なし	24.8	12.4	3.1	0.7	-1.38	0.05	31.045	
Q33	小形石刀	燧岩	小形石刀。切り打面。打面厚1.2ミリ。コーン径3.1ミリ。	HI	なし	なし	23.6	13.4	4.4	0.8	-0.79	1.94	31.123	
Q34	小形石刀	燧岩	小形石刀。打面。未端辺折れ。	HI	なし	なし	17.8	10.7	3.0	0.5	-0.40	0.83	31.005	
Q35	小形石刀	燧岩	平直打面。打面厚1.3ミリ。コーン径0.7ミリ。	HI	なし	なし	17.9	7.0	1.8	0.2	1.57	-0.80	31.085	
Q36	小形石刀	燧岩	平直打面。打面厚1.3ミリ。コーン径1.5ミリ。	HI	なし	なし	19.7	12.2	3.1	0.5	0.27	1.63	31.085	
Q37	小形石刀	頁岩	小形石刀。調整打面。打面厚2.1ミリ。間接打撃の石刀。	HI	なし	なし	28.6	17.9	3.8	1.2	-0.58	1.54	30.997	
Q38	小形石刀	頁岩	間接打撃の石刀。打面折れ。	HI	なし	なし	29.4	13.5	4.1	0.9	-0.12	1.07	31.105	
Q39	小形石刀	燧岩	平直打面。打面厚1.5ミリ。間接打撃。	HI	なし	なし	25.3	13.2	3.2	0.7	-0.66	0.87	31.058	
Q40	小形石刀	燧岩	平直打面。打面厚1.9ミリ。間接打撃。	HI	なし	なし	31.0	13.4	4.2	1.2	0.91	0.94	31.202	
Q41	船形石刀	頁岩	打面折れ。	HI	なし	なし	20.8	6.0	3.0	0.3	-0.91	1.70	31.017	
Q42	小形石刀	燧岩	間接打撃の石刀。石刀のコーン径1.5ミリ。打面長さ25.5ミリ。	分粒燧	HI	なし	27.6	31.6	40.4	29.2	-1.23	1.37	31.069	
Q43	小形石刀	燧岩	分粒燧。調整打面。打面厚2.5ミリ。調整打撃の石刀。コーン径1.8ミリ。打面長さあり。	分粒燧	HI	なし	35.9	37.2	28.7	38.6	-1.35	1.87	31.073	
Q44	石刀	頁岩	平直打面。打面6.3ミリ。未端折れ。	SI	なし	なし	47.5	24.2	8.4	6.3	2.21	1.22	31.027	
Q45	石刀	頁岩	切り打面。打面厚2.9ミリ。未端は磨き調整。	SI	なし	なし	43.6	22.6	7.0	4.4	1.62	1.12	31.033	
Q46	石刀	頁岩	平直打面。調整打面。打面厚6.8ミリ。天然打撃の自然面が付く。	SI	なし	なし	79.2	25.5	9.9	14.0	1.33	0.99	30.984	
Q47	石刀	頁岩	調整打面。打面厚2.3ミリ。	SI	なし	なし	32.3	15.8	9.5	3.2	0.52	1.05	30.930	
Q48	石刀	頁岩	切り打面。打面厚3.1ミリ。コーン径6.6ミリ。打面の裏面付。	SI	なし	なし	38.5	24.7	9.3	5.9	0.51	2.32	30.816	
Q49	石刀	頁岩	平直打面。打面厚2.1ミリ。	SD	なし	なし	39.8	17.9	9.1	3.5	0.97	0.21	30.865	
Q50	石刀	頁岩	調整打面。打面厚2.7ミリ。未端折れ。	SI	なし	なし	30.9	18.0	5.7	2.3	-0.27	0.81	31.000	
Q51	石刀	燧岩	調整打面。打面厚4.8ミリ。	SI	なし	なし	68.2	20.2	7.5	6.8	-1.03	1.95	31.035	
Q52	石刀	燧岩	平直打面。打面厚4.7ミリ。コーン径4.1ミリ。	SD	なし	なし	27.7	21.3	6.9	3.3	-2.16	0.94	30.967	
Q53	石刀	燧岩	切り打面。打面厚7.8ミリ。コーン径6.2ミリ。	SD	なし	なし	33.5	24.5	8.8	6.0	-0.52	1.92	31.068	
Q54	石刀	燧岩	調整打面。打面厚2.4ミリ。コーン径1.6ミリ。	HD	なし	なし	30.6	17.6	5.5	1.7	-1.19	1.81	31.133	
Q55	石刀	燧岩	切り打面。打面厚4.3ミリ。歯付の磨面。	不明	なし	なし	13.8	13.1	4.4	0.5	-1.04	2.66	31.315	
Q56	石刀	燧岩	平直打面。打面厚2.3ミリ。コーン径1.9ミリ。	HI	なし	なし	29.4	14.9	6.1	2.2	-0.55	3.35	31.060	
Q57	石刀	燧岩	平直打面。打面厚2.8ミリ。コーン径2.8ミリ。	HI	なし	なし	27.6	16.6	3.7	1.4	0.28	1.62	31.050	
Q58	石刀	燧岩	平直打面。打面厚1.3ミリ。コーン径1.9ミリ。	HI	なし	なし	48.9	20.5	8.2	5.6	-0.95	0.76	31.077	
Q59	石刀	燧岩	線状打面。	不明	なし	なし	16.8	12.6	2.2	0.3	-0.17	2.30	31.075	
Q60	石刀	燧岩	無打面。直接打撃。	不明	なし	なし	20.6	7.2	2.3	0.2	0.54	0.42	31.050	
Q61	石刀	燧岩	打面折れ。直接打撃。	不明	なし	なし	17.6	7.2	4.9	0.4	-0.16	-1.55	31.193	
Q62	石刀	燧岩	打面折れ。	不明	なし	なし	20.5	9.5	3.5	0.4	-0.64	0.97	31.171	
Q63	石刀	燧岩	打面折れ。	不明	なし	なし	20.7	12.9	2.8	0.6	0.82	1.16	31.180	
Q64	石刀	燧岩	平直打面。打面厚3.6ミリ。コーン径3.5ミリ。	SD	なし	なし	20.3	14.3	5.2	0.8	-1.34	2.25	31.179	
Q65	石刀	燧岩	線状打面。直接打撃。	不明	なし	なし	18.0	6.7	2.9	0.2	-1.04	1.59	31.163	
Q66	石刀	燧岩	平直打面。打面厚2.9ミリ。コーン径2.6ミリ。ラウルコーン。磨面調整。	HI	なし	なし	59.6	28.6	10.8	18.6	-0.56	2.07	31.144	
Q67	石刀	燧岩	切り打面。打面厚2.7ミリ。コーン径1.6ミリ。	HI	なし	なし	25.3	16.5	6.4	1.9	0.23	1.08	31.097	
Q68	石刀	燧岩	平直打面。打面厚1.9ミリ。歯付の裏面。調整角130度。	不明	なし	なし	30.3	16.6	8.9	3.5	-1.53	0.85	31.226	
Q69	石刀	燧岩	打面折れ。間接打撃。	不明	なし	なし	20.7	13.6	3.6	0.8	0.33	2.97	31.050	
Q70	石刀	燧岩	調整打面。打面厚7.1ミリ。コーン径7.8ミリ。	HD	なし	なし	58.6	23.4	10.8	11.5	-1.34	1.51	31.232	
Q71	石刀	燧岩	切り打面。打面厚1.05ミリ。コーン径8.5ミリ。	HD	なし	なし	47.8	26.7	11.2	10.2	-0.19	2.07	31.031	
Q72	石刀	燧岩	小形石刀。調整打面。打面折れ。打面厚2.9ミリ。コーン径1.5ミリ。	HI	なし	なし	12.6	9.5	5.0	0.6	1.91	1.39	31.001	
Q73	石刀	ラウルコーン調整打面	打面折れ。	不明	なし	なし	50.5	22.4	10.4	9.5	-1.87	1.68	31.044	
Q74	石刀	ラウルコーン調整打面	切り打面。打面厚4.1ミリ。	SI	なし	なし	56.0	23.5	13.4	11.0	-1.40	1.75	31.150	
Q75	横付石刀	頁岩	調整打面。打面厚4.1ミリ。	SI	なし	なし	35.8	17.1	6.5	3.0	-1.85	1.38	31.262	
Q76	横付石刀	燧岩	点状打面。コーン径1.8ミリ。	HI	なし	なし	40.3	12.9	11.2	3.9	-1.10	1.51	31.035	
Q77	縦長石片	燧岩	非直接打撃の縦長石片。打面は無打面。	HD	なし	なし	51.7	28.2	13.1	14.3	-1.71	1.50	31.093	
Q78	縦長石片	燧岩	切り打面。打面厚6.9ミリ。	HD	なし	なし	50.1	26.3	10.7	10.4	-0.04	1.56	31.134	

番号	器種	石材	所見	素材属性	加工属性	対応属性	長さ	幅	厚み	重量	X	Y	Z	備考
Q79	楕長測片	珧瑁	平坦打面。打面厚4.6ミリ。	HD	なし	なし	79.2	28.6	19.7	48.7	-1.34	-0.21	31.127	
Q80	楕長測片	珧瑁	切り打面。打面厚11.1ミリ。未端部は磨面。打面傾斜の測片。	HD	なし	なし	22.8	45.2	15.2	10.5	1.38	3.48	30.984	
Q81	測片	珧瑁	無打面。直接打撃。	不明	なし	なし	22.9	6.7	3.6	0.4	-1.29	-0.49	31.214	
Q82	測片	珧瑁	背面自然面の大形測片。平坦打面。打面厚16.8ミリ。	HD	なし	なし	58.8	52.8	23.3	60.4	-1.43	1.36	31.157	
Q83	測片	珧瑁	背面自然面の大形測片。自然面打面。打面厚12.9ミリ。	HD	なし	なし	74.2	54.5	17.9	69.6	-1.23	1.33	31.129	
Q84	測片	珧瑁	背面自然面の大形測片。自然面打面。打面厚12.9ミリ。	HD	なし	なし	56.8	64.6	20.0	67.3	-1.39	0.72	31.076	
Q85	測片	珧瑁	楕長測片。背面に自然面。平坦打面。打面厚5.8ミリ。	HD	なし	なし	22.4	40.4	10.5	7.7	-1.61	1.67	31.170	
Q86	測片	珧瑁	切り打面。打面厚4.7ミリ。	HD	なし	なし	15.4	27.2	6.0	1.7	-0.92	2.15	31.109	
Q87	測片	珧瑁	背面自然面。曲げの測片開始部。	不明	なし	なし	18.0	45.2	10.8	7.5	0.45	0.98	31.136	
Q88	測片	珧瑁	平坦打面。打面厚1.1ミリ。背面は自然面。磨面は不規則で磨面不能。	不明	なし	なし	16.0	8.9	2.7	0.4	0.56	2.69	31.061	
Q89	測片	珧瑁	平坦打面。打面厚1.6ミリ。斜めした後、コーン径18.7ミリ。	HI	なし	なし	15.7	11.2	2.6	0.3	-0.94	2.52	31.067	
Q90	測片	珧瑁	自然面打面。打面厚13.4ミリ。	HD	なし	なし	28.8	44.7	20.2	24.2	-1.31	1.91	31.179	
Q92	測片	頁岩	平坦打面。打面厚6.1ミリ。右端部に自然面。	SD	なし	なし	33.9	33.2	8.1	6.8	-0.51	2.09	31.003	
Q93	測片	チャート	平坦打面。打面厚4.6ミリ。折れ目。自然面を用。加工不詳。	SD	不明	なし	30.8	39.2	7.2	6.6	0.18	0.73	30.846	
Q94	測片	珧瑁	打面折れ。	不明	なし	なし	36.1	35.1	14.3	16.9	-0.61	0.70	31.020	
Q95	測片	珧瑁	背面に自然面がある大形測片。切り打面。打面厚12.4ミリ。	HD	なし	なし	64.5	46.7	19.0	41.6	-1.53	1.54	31.210	
Q96	測片	珧瑁	背面に自然面がある大形測片。自然面打面。打面厚4.7ミリ。	HD	なし	なし	44.8	55.0	18.7	35.6	-1.46	1.15	31.222	
Q97	測片	珧瑁	背面自然面の大形測片。自然面打面。	HD	なし	なし	59.5	44.6	19.8	56.8	-1.67	1.75	31.194	
Q98	測片	珧瑁	背面自然面の大形測片。自然面打面。	HD	なし	なし	49.4	61.0	27.6	80.3	-1.06	1.85	31.136	
Q99	測片	珧瑁	平坦打面。打面厚3.7ミリ。	HD	なし	なし	35.0	38.6	7.0	6.1	-1.08	2.14	31.096	
Q100	測片	珧瑁	背面自然面の大形測片。自然面打面。	HD	なし	なし	37.2	56.2	20.4	40.0	-0.67	2.19	31.024	
Q101	測片	珧瑁	切り打面。打面厚5.3ミリ。	HD	なし	なし	28.7	20.0	5.7	2.3	0.64	0.96	31.100	
Q102	測片	珧瑁	背面に自然面あり。打面折れ。	不明	なし	なし	49.1	30.8	11.7	14.2	-1.23	0.75	31.002	
Q103	測片	珧瑁	平坦打面。打面厚12.4ミリ。コーン径18.7ミリ。	SD	なし	なし	60.5	44.8	14.3	33.6	-1.40	1.87	31.157	
Q104	石方石核	頁岩	分層構造。平坦打面の石方石核。表面は磨面。打面厚1.1ミリ。	分層構造	SI	なし	45.5	42.4	41.1	80.9	-0.36	5.54	30.924	
Q105	石方石核	珧瑁	分層構造。平坦打面の石方石核。表面は磨面。打面厚1.1ミリ。	分層構造	HI	なし	44.7	32.1	28.6	51.8	-0.73	2.41	30.973	
Q106	石方石核	珧瑁	分層構造。平坦打面の石方石核。表面は磨面。打面厚1.1ミリ。	分層構造	HD	なし	54.2	34.9	40.6	113.2	-1.12	-1.00	31.130	
Q107	石方石核	珧瑁	分層構造。平坦打面の石方石核。表面は磨面。打面厚1.1ミリ。	分層構造	HI	なし	33.0	33.7	48.1	53.3	0.45	1.95	30.986	
Q108	石方石核	珧瑁	分層構造。平坦打面の石方石核。表面は磨面。打面厚1.1ミリ。	分層構造	SD	なし	15.8	35.9	24.6	10.9	-0.26	2.20	31.097	
Q109	石方石核	珧瑁	分層構造。平坦打面の石方石核。表面は磨面。打面厚1.1ミリ。	分層構造	HD	なし	68.2	27.8	45.4	98.9	1.49	0.34	30.978	
Q110	石方石核	珧瑁	分層構造。平坦打面の石方石核。表面は磨面。打面厚1.1ミリ。	分層構造	HD	なし	50.9	30.1	56.8	94.8	1.26	0.38	31.000	
Q111	石方石核	珧瑁	分層構造。平坦打面の石方石核。表面は磨面。打面厚1.1ミリ。	分層構造	HD	なし	58.1	22.9	50.6	68.7	0.96	1.43	30.989	
Q112	石方石核	珧瑁	分層構造。平坦打面の石方石核。表面は磨面。打面厚1.1ミリ。	分層構造	HI	なし	42.0	25.3	35.2	37.5	-0.43	2.57	31.008	
Q113	石方石核	珧瑁	分層構造。平坦打面の石方石核。表面は磨面。打面厚1.1ミリ。	HD	HD	なし	51.6	24.3	40.0	39.9	-1.43	1.86	31.249	
Q114	石方石核	珧瑁	分層構造。平坦打面の石方石核。表面は磨面。打面厚1.1ミリ。	HD	不明	なし	54.4	21.3	34.4	34.5	-0.68	1.94	31.110	
Q115	楕形測石核	珧瑁	扁平打面。打面厚1.1ミリ。表面は磨面。打面厚1.1ミリ。	扁平打面	HD	なし	32.3	59.1	62.6	91.7	-2.49	0.40	31.036	
Q116	楕形測石核	珧瑁	扁平打面。打面厚1.1ミリ。表面は磨面。打面厚1.1ミリ。	扁平打面	HD	なし	21.8	80.6	58.1	137.1	0.29	1.88	30.998	
Q117	楕形測石核	珧瑁	大形測片。平坦打面。打面厚1.1ミリ。表面は磨面。打面厚1.1ミリ。	測片	HD	なし	33.3	85.6	37.5	74.0	-1.40	0.88	31.103	
Q91	石核	珧瑁	平坦打面。打面厚1.1ミリ。表面は磨面。打面厚1.1ミリ。	不明	なし	なし	15.2	12.8	45.0	6.6	-1.27	2.09	31.203	
Q118	石核	珧瑁	平坦打面。打面厚1.1ミリ。表面は磨面。打面厚1.1ミリ。	原石	HD	なし	42.4	54.1	28.4	56.9	-0.64	2.24	31.039	
Q119	石核	珧瑁	平坦打面。打面厚1.1ミリ。表面は磨面。打面厚1.1ミリ。	原石	HD	なし	43.0	38.4	23.3	42.8	-0.61	1.47	30.992	
Q120	石方コア	珧瑁	平坦打面。打面厚1.1ミリ。表面は磨面。打面厚1.1ミリ。	原石	HD	なし	42.2	71.0	27.7	53.4	-1.81	1.38	31.210	
Q121	石核	珧瑁	平坦打面。打面厚1.1ミリ。表面は磨面。打面厚1.1ミリ。	分層構造	HI	なし	36.3	35.8	27.1	38.0	-0.58	2.29	31.044	
Q122	石核	珧瑁	平坦打面。打面厚1.1ミリ。表面は磨面。打面厚1.1ミリ。	分層構造	HI	なし	39.2	47.1	29.0	59.3	-0.50	2.08	31.033	
Q123	石核	珧瑁	平坦打面。打面厚1.1ミリ。表面は磨面。打面厚1.1ミリ。	分層構造	HD	なし	43.0	37.6	32.3	41.6	-0.44	2.23	31.028	
Q124	石核	珧瑁	平坦打面。打面厚1.1ミリ。表面は磨面。打面厚1.1ミリ。	SD	HI	なし	38.1	17.4	13.8	7.8	-1.78	2.03	31.104	
Q125	石核	玉髄	平坦打面。打面厚1.1ミリ。表面は磨面。打面厚1.1ミリ。	分層構造	HD	なし	49.1	34.6	33.2	56.5	0.59	1.61	31.096	
Q126	石核	珧瑁	平坦打面。打面厚1.1ミリ。表面は磨面。打面厚1.1ミリ。	測片	HD	なし	62.2	58.8	31.3	97.5	1.29	0.26	30.994	
Q127	石核	珧瑁	平坦打面。打面厚1.1ミリ。表面は磨面。打面厚1.1ミリ。	分層構造	HI	なし	31.6	39.1	44.8	33.5	-0.68	1.97	31.126	
Q128	石核	珧瑁	平坦打面。打面厚1.1ミリ。表面は磨面。打面厚1.1ミリ。	円盤	HI	なし	52.2	42.0	36.2	67.3	-0.37	2.04	31.060	
Q129	石核	珧瑁	平坦打面。打面厚1.1ミリ。表面は磨面。打面厚1.1ミリ。	分層構造	HD	なし	38.9	56.7	45.8	111.8	-0.97	2.48	31.029	
Q130	石核	珧瑁	平坦打面。打面厚1.1ミリ。表面は磨面。打面厚1.1ミリ。	測片	HD	なし	39.7	50.4	27.9	50.6	-0.70	2.18	31.060	
Q131	石核	珧瑁	平坦打面。打面厚1.1ミリ。表面は磨面。打面厚1.1ミリ。	分層構造	HD	なし	52.0	37.7	47.0	107.5	-1.25	1.03	31.104	

番号	器械	石材	所見	素材属性	加工属性	刃部属性	長さ	幅	厚み	重量	X	Y	Z	備考
Q132	石核	流紋岩	調整打撃の小形石刃石核。平坦	不明	HI	なし	31.9	34.5	22.6	22.9	-5.17	-3.46	31.496	
Q133	石核	珸燧	調整打撃の小形石刃石核。平坦	SD	なし	なし	35.1	18.4	9.1	7.8	-0.20	0.85	31.101	
Q134	石核断片	珸燧	調整打撃の小形石刃石核。平坦	分粒燧	HD	なし	40.3	41.7	22.5	32.3	1.24	1.67	30.959	
Q135	石核断片	珸燧	調整打撃の小形石刃石核。平坦	適用外	適用外	適用外	38.0	41.2	44.6	66.9	2.92	1.17	30.928	
Q136	石核断片	珸燧	調整打撃の小形石刃石核。平坦	円燧	HD	なし	36.4	31.1	30.6	36.9	-0.19	1.99	31.060	
Q137	石核断片	珸燧	調整打撃の小形石刃石核。平坦	分粒燧	HD	なし	47.7	63.4	26.5	80.5	1.32	0.14	31.024	
Q138	石核断片	珸燧	調整打撃の小形石刃石核。平坦	円燧	HD	なし	48.8	49.9	40.9	112.1	2.33	1.44	30.894	
Q139	石核断片	珸燧	調整打撃の小形石刃石核。平坦	偏平円燧	HD	なし	53.2	22.9	56.3	78.3	-0.60	2.07	31.046	
Q140	石核断片	珸燧	調整打撃の小形石刃石核。平坦	円燧	HD	なし	57.5	72.7	61.8	207.9	0.44	2.08	31.065	
Q141	石核断片	珸燧	調整打撃の小形石刃石核。平坦	偏平円燧	HD	なし	52.5	57.2	30.4	107.9	-0.45	2.16	31.057	
Q142	石核断片	珸燧	調整打撃の小形石刃石核。平坦	円燧	HD	なし	53.8	60.0	36.0	114.3	-0.56	2.06	31.018	
Q143	石核断片	珸燧	調整打撃の小形石刃石核。平坦	円燧	HD	なし	28.9	54.5	23.4	33.6	-1.15	1.54	31.141	
Q144	石核断片	珸燧	調整打撃の小形石刃石核。平坦	円燧	HD	なし	54.8	40.7	42.6	93.6	-1.49	1.00	31.307	
Q145	石核断片	珸燧	調整打撃の小形石刃石核。平坦	偏平円燧	HD	なし	19.1	64.4	55.0	55.6	-1.67	1.57	31.138	
Q146	石核断片	珸燧	調整打撃の小形石刃石核。平坦	円燧	HD	なし	51.0	44.5	25.6	44.6	0.27	2.02	30.986	
Q147	石核断片	珸燧	調整打撃の小形石刃石核。平坦	円燧	HD	なし	36.5	55.8	24.9	53.7	-1.39	0.93	31.097	
Q148	石核断片	珸燧	調整打撃の小形石刃石核。平坦	円燧	HD	なし	56.7	63.9	51.0	190.7	-1.35	1.15	31.100	
Q149	石核断片	珸燧	調整打撃の小形石刃石核。平坦	分粒燧	HD	なし	51.9	60.8	41.4	150.8	-1.11	-1.45	31.165	
Q150	石核断片	珸燧	調整打撃の小形石刃石核。平坦	分粒燧	HD	なし	50.4	51.0	35.0	87.6	-2.62	0.46	31.150	
Q151	石核断片	珸燧	調整打撃の小形石刃石核。平坦	偏平円燧	HD	なし	24.3	62.8	55.8	94.6	-1.50	1.13	31.033	
Q152	石核断片	珸燧	調整打撃の小形石刃石核。平坦	円燧	HD	なし	38.9	44.3	32.1	61.1	1.25	1.43	30.934	
Q153	石核断片	珸燧	調整打撃の小形石刃石核。平坦	円燧	HD	なし	37.8	51.9	34.3	75.0	-1.62	1.90	31.141	
Q154	石核断片	珸燧	調整打撃の小形石刃石核。平坦	円燧	HD	なし	63.6	58.6	45.3	198.0	0.42	1.92	31.014	
Q155	石核断片	珸燧	調整打撃の小形石刃石核。平坦	円燧	HD	なし	110.5	80.4	78.2	705.8	0.20	-0.58	30.994	
Q156	分粒燧	珸燧	調整打撃の小形石刃石核。平坦	分粒燧	なし	なし	66.5	73.3	44.0	139.7	1.17	0.64	30.990	

第1号石器集中地点出土遺物観察表(微細遺物・実測図なし)

番号	器械	石材	所見	素材属性	加工属性	刃部属性	長さ	幅	厚み	重量	X	Y	Z	備考
Q157	ナイフ形石核断片	珸燧	先端の断片。	不明	HP/刃直し	素刃	11.8	6.7	2.2	0.2	-0.41	0.72	31.185	
Q158	ナイフ形石核断片	珸燧	先端の断片。	不明	HP/刃直し	素刃	9.5	8.8	2.5	0.1	-1.11	0.43	31.230	
Q159	石核断片	不明	素材の片断に押圧痕跡で加工し残部をつくる。	不明	不明	SP	12.0	5.8	2.3	0.2	-1.24	1.12	31.199	
Q160	小形石刃	頁岩	打面欠損。2枚の細石刃。	HI	なし	なし	13.7	7.2	1.2	0.1	-1.03	2.56	31.197	
Q161	小形石刃	頁岩	平坦打面。磨けタイプ。右側面に尖った痕跡の痕跡。	HI	なし	なし	11.9	5.8	1.5	0.1	-1.00	0.35	31.178	
Q162	小形石刃	頁岩	平坦打面。打面厚0.9ミリ。背面に同一方向の2枚の調整痕。	HI	なし	なし	12.7	10.1	2.2	0.3	1.46	3.45	30.960	
Q163	小形石刃	水晶	打面欠損。背面1枚。	HI	なし	なし	7.1	3.5	0.8	0.1	-0.50	0.67	31.211	
Q164	小形石刃	珸燧	打面・下面折れ。	HI	なし	なし	9.2	7.5	1.2	0.1	2.74	2.77	31.006	
Q165	小形石刃	珸燧	切り打面。打面厚1.3ミリ。頭部折れ。	HI	なし	なし	5.2	8.0	1.7	0.1	-0.85	2.69	31.112	
Q166	小形石刃	珸燧	打面厚1.9ミリ。平坦打面。	HI	なし	なし	10.5	8.2	1.7	0.2	-0.91	0.45	31.182	
Q167	小形石刃	珸燧	平坦打面。打面厚1.2ミリ。背面2枚の痕跡。	HI	なし	なし	6.7	10.5	1.9	0.2	-1.04	0.36	31.222	
Q168	小形石刃	珸燧	平坦打面。打面厚0.2ミリ。背面に2枚の痕跡の痕跡の痕跡。	HI	なし	なし	12.7	8.6	1.1	0.2	-1.58	1.31	31.273	
Q169	小形石刃	頁岩	平坦打面。打面厚2.3ミリ。背面に2枚の痕跡の痕跡の痕跡。	HI	なし	なし	10.4	7.2	1.8	0.1	-0.92	2.03	31.111	
Q170	断片	水晶	調整打面。打面厚1.4ミリ。背面に調整痕の痕跡の痕跡。	HI	なし	なし	9.0	7.0	1.7	0.1	1.23	1.46	31.028	

第2号石器集中地点出土遺物観察表(第30～33図)

番号	器械	石材	所見	素材属性	加工属性	刃部属性	長さ	幅	厚み	重量	X	Y	Z	備考
Q171	毛細管状	珸燧	片刃素材。表面に粗面平打調整痕が認められる。	不明	SD	なし	39.6	25.1	9.9	8.7	1.90	-0.52	31.449	PL19
Q172	ナイフ形石核	珸燧	打面に自然面が付く石刃素材。断面に調整痕あり。	不明	HP/刃直し	素刃	42.0	21.5	5.4	3.3	3.00	0.99	31.372	PL19
Q173	調整打面石核	珸燧	調整打面。打面厚1.5ミリ。背面に調整痕あり。	SD	なし	HI/急角	85.2	34.4	12.4	35.5	3.05	-1.13	31.298	PL19
Q174	調整打面石核	珸燧	調整打面。打面厚1.5ミリ。背面に調整痕あり。	SI	なし	SP	42.2	18.1	10.0	4.1	2.15	-0.95	31.319	PL19
Q175	石刃	珸燧	調整打面。打面厚2.8ミリ。コーン厚3.4ミリ。	SD	なし	なし	58.3	22.0	7.2	6.9	2.48	-1.18	31.440	
Q176	石刃	珸燧	調整打面。打面厚3.5ミリ。コーン厚3.4ミリ。	SD	なし	なし	25.5	15.2	4.2	1.1	1.74	0.14	31.456	
Q177	石刃	珸燧	調整打面。打面厚4.8ミリ。	SI	なし	なし	83.9	21.5	13.1	15.6	3.53	-1.58	31.437	



番号	器種	石材	所見	素材属性	加工属性	方部属性	長さ	幅	厚み	重量	X	Y	Z	備考
Q178	石刀	ウラス系 灰岩	調整打面。打面厚2.6ミリ。コーン径4.5ミリ。ハネ長2.5センチ。	SI	なし	なし	57.0	13.1	6.7	3.3	3.47	-1.21	31.419	
Q179	石刀	ウラス系 灰岩	打面折れ。間接打撃。不明	なし	なし	なし	36.7	22.0	3.9	2.8	3.24	-1.16	31.405	
Q180	石刀	ウラス系 灰岩	調整打面。打面厚2.8ミリ。コーン径4.5ミリ。	SI	なし	なし	45.2	12.1	5.5	2.2	2.49	-2.25	31.406	
Q181	石刀	ウラス系 灰岩	調整打面。打面厚4.8ミリ。コーン径4.4ミリ。	SI	なし	なし	59.0	16.7	8.4	6.3	2.38	-1.45	31.406	
Q182	石刀	ウラス系 灰岩	調整打面。打面厚7.2ミリ。曲打の痕跡。鈍角100度。	SI	なし	なし	47.2	29.9	9.5	10.9	2.94	0.89	31.438	
Q183	石刀	ウラス系 灰岩	自然面打面。打面厚4.8ミリ。	SD	なし	なし	25.0	15.2	6.0	1.8	2.45	0.87	31.406	
Q184	石刀	ウラス系 灰岩	小形石刀。打面折れ。間接打撃。不明	なし	なし	なし	19.5	11.4	4.2	0.8	1.76	-0.27	31.467	
Q185	石刀	ウラス系 灰岩	小形石刀。打面厚1.6ミリ。コーン径4.4ミリ。	SI	なし	なし	21.5	12.7	2.8	0.8	1.62	-0.24	31.382	
Q186	石刀	ウラス系 灰岩	調整打面。打面厚6.3ミリ。コーン径4.4ミリ。	SI	なし	なし	63.9	30.5	11.1	14.3	1.28	-0.40	31.470	
Q187	石刀	ウラス系 灰岩	調整打面。打面厚5.4ミリ。コーン径3.6ミリ。	SD	なし	なし	41.5	24.5	10.6	6.0	1.34	-1.00	31.463	
Q188	石刀	ウラス系 灰岩	小形石刀。平削打面。打面厚5.4ミリ。	SI	なし	なし	26.5	15.3	5.1	1.5	1.34	-0.80	31.506	
Q189	石刀	ウラス系 灰岩	調整打面。打面厚5.6ミリ。コーン径4.4ミリ。	SI	なし	なし	63.0	25.6	11.2	15.2	3.45	0.83	31.301	
Q190	石刀	ウラス系 灰岩	切子打面。打面厚2.9ミリ。コーン径4.4ミリ。	SI	なし	なし	39.5	23.7	5.1	3.7	1.71	0.77	31.362	
Q191	石刀	ウラス系 灰岩	線状打面。コーン径3.9ミリ。ハネ長1.8センチ。	SI	なし	なし	43.5	20.0	6.0	4.5	4.02	-0.94	31.304	
Q192	石刀	ウラス系 灰岩	線状打面。コーン径5.5ミリ。ハンマーミス。	SI	なし	なし	67.8	29.5	7.6	18.6	1.36	-0.64	31.361	
Q193	石刀	ウラス系 灰岩	小形石刀。線状打面。ハンマーミス。	SI	なし	なし	26.3	8.6	4.2	0.8	1.46	0.26	31.385	
Q194	石刀	ウラス系 灰岩	線状打面。ハンマーミス。	SI	なし	なし	57.0	18.7	7.0	4.8	2.94	-1.15	31.318	
Q195	石刀	ウラス系 灰岩	自然面打面。打面厚3.4ミリ。右方刃部の相対鋭角の測り。	SD	なし	なし	38.3	14.7	8.6	3.8	0.25	-2.89	31.449	
Q196	石刀	ウラス系 灰岩	調整打面。打面厚5.8ミリ。	SI	なし	なし	43.3	22.0	7.4	7.0	2.25	0.11	31.396	
Q197	石刀	ウラス系 灰岩	切子打面。打面厚5.1ミリ。	SI	なし	なし	27.6	16.2	5.7	2.6	2.25	0.83	31.381	
Q198	石刀	ウラス系 灰岩	切子打面。打面厚3.6ミリ。	SI	なし	なし	37.7	17.3	7.0	3.5	2.17	0.64	31.397	
Q199	石刀	ウラス系 灰岩	小形石刀。平削打面。打面厚2.7ミリ。	SI	なし	なし	21.3	7.3	2.4	0.4	4.00	-0.53	31.266	
Q200	横付石刀	ウラス系 灰岩	平削打面。打面厚2.9ミリ。	SD	なし	なし	45.9	15.8	9.1	6.0	2.50	0.57	31.388	
Q201	横付石刀	ウラス系 灰岩	打面折れ。不明	なし	なし	なし	40.4	10.5	7.1	2.5	3.03	-1.14	31.405	
Q202	横付石刀	ウラス系 灰岩	線状打面。ハンマーミスで右側打面をハンマーがこすった状態。	SI	なし	なし	36.1	17.4	9.1	5.5	2.63	0.63	31.432	
Q203	縦長薄片	ウラス系 灰岩	平削打面。打面厚7.7ミリ。	SD	なし	なし	50.1	28.6	11.2	13.9	0.93	-2.55	31.510	
Q204	縦長薄片	ウラス系 灰岩	ポイントドローテック。多方向から観察した測り。打面厚1.0センチ。	SD	なし	なし	44.1	21.3	5.3	4.5	2.24	0.81	31.333	
Q205	縦長薄片	ウラス系 灰岩	垂直内面の減片を右側技法に実施した測り。打面厚1.0センチ。	不明	なし	なし	47.8	23.4	11.0	10.1	3.04	-2.03	31.342	
Q206	縦長薄片	ウラス系 灰岩	ポイントドローテック。多方向からの測り。打面は折れ。測厚は大きい。	SD	なし	なし	79.5	23.4	9.7	11.6	2.97	-1.15	31.355	
Q207	縦長薄片	ウラス系 灰岩	ポイントドローテック。多方向からの測り。打面は折れ。測厚は大きい。	不明	なし	なし	28.6	45.6	11.7	9.8	2.12	-0.47	31.415	
Q208	薄片	ウラス系 灰岩	平削打面。打面厚2.3ミリ。右側刃は微細面折れ。	SD	なし	なし	44.1	24.6	9.1	6.0	2.77	0.79	31.245	
Q209	薄片	ウラス系 灰岩	小形石刀。打面厚1.7ミリ。不明	なし	なし	なし	14.8	7.5	3.0	0.3	0.47	-3.59	31.463	
Q210	薄片	ウラス系 灰岩	小形石刀。打面は衝撃調整折れ。不明	なし	なし	なし	24.8	11.2	3.7	0.9	3.03	-2.11	31.458	
Q211	薄片	ウラス系 灰岩	平削打面。打面厚3.8ミリ。コーン径4.4ミリ。	SD	なし	なし	41.4	28.8	9.8	7.2	2.39	-0.74	31.432	
Q212	薄片	ウラス系 灰岩	平削打面。打面厚3.2ミリ。	SD	なし	なし	44.8	26.0	8.3	8.1	2.82	1.00	31.440	
Q213	薄片	ウラス系 灰岩	切子打面。打面厚2.7ミリ。右方刃部の石核痕跡有り。	SD	なし	なし	34.0	19.4	5.9	2.6	3.65	0.48	31.251	
Q214	薄片	ウラス系 灰岩	切子打面。打面厚9.5ミリ。石核痕跡有り。	SD	なし	なし	34.5	31.1	11.1	10.2	2.24	0.78	31.426	
Q215	薄片	ウラス系 灰岩	石核痕跡の薄片。平削打面。打面厚3.9ミリ。	HD	なし	なし	29.8	26.7	8.1	4.9	2.84	-3.16	31.469	
Q216	薄片	ウラス系 灰岩	石核痕跡の薄片。平削打面。打面厚3.9ミリ。	HD	なし	なし	33.1	34.9	9.1	7.4	1.89	-0.30	31.404	
Q217	薄片	地塊	大型薄片。平削打面。打面厚9.1ミリ。	HD	なし	なし	57.9	48.0	17.3	50.6	3.61	2.05	31.319	
Q218	打面内生薄片	ウラス系 灰岩	切子打面。打面と右側面に印作痕跡が残されている。	SD	なし	なし	37.0	28.0	10.7	9.2	2.37	-1.95	31.439	
Q219	石核	ウラス系 灰岩	薄片素材の石核。素材側面を打撃して、小形の石刀を調整。	HD	なし	なし	42.8	17.8	29.5	22.7	2.98	-1.00	31.290	

第3号石器集中地点出土遺物観察表 (第34～42図)

番号	器種	石材	所見	素材属性	加工属性	方部属性	長さ	幅	厚み	重量	X	Y	Z	備考
Q220	ナイフ形石刀	ウラス系 灰岩	一側面加工のナイフ形石刀。鉄末削ナイフ形石器の典型物。	石刀	HP/方磨し	素刀	32.6	12.4	5.7	1.9	-2.97	1.94	31.479	PL19
Q221	ナイフ形石刀	ウラス系 灰岩	自然面の付く縦長薄片。素材の一側面加工のナイフ形石刀。	縦長薄片	HP/方磨し	素刀	36.4	16.7	5.5	2.7	-3.43	0.80	31.451	PL19
Q222	ナイフ形石刀	ウラス系 灰岩	自然面の付く縦長薄片。素材の一側面加工のナイフ形石刀。	縦長薄片	HP/方磨し	素刀	34.8	20.7	6.0	3.2	-2.46	0.53	31.391	PL19
Q223	ナイフ形石刀	ウラス系 灰岩	自然面の付く縦長薄片。素材の一側面加工のナイフ形石刀。	縦長薄片	HP/方磨し	素刀	34.3	25.5	5.7	3.6	-3.87	0.63	31.621	PL19
Q224	ナイフ形石刀	ウラス系 灰岩	薄片。素材の一側面加工のナイフ	不明	HP/方磨し	素刀	19.7	14.5	6.8	1.8	-3.75	-4.24	31.514	PL19
Q225	裁断石刀	ウラス系 灰岩	打面を方磨し加工した裁断石刀。右方の技術は間接打撃。	石刀	HP/方磨し	素刀	60.2	23.3	13.1	15.0	-2.77	1.40	31.579	PL19
Q226	裁断石刀	ウラス系 灰岩	間接打撃の石刀。素材の裁断石刀。	SI	HP/方磨し	素刀	49.6	15.0	7.8	4.6	-3.00	1.32	31.332	PL19
Q227	裁断石刀	ウラス系 灰岩	背面に自然面が残る石刀。素材の裁断石刀。	SI	HP/方磨し	素刀	46.4	15.3	7.0	3.6	-5.07	0.76	31.750	PL19

番号	器械	石材	所見	素材属性	加工属性	刃部属性	長さ	幅	厚み	重量	X	Y	Z	備考
Q228	裁直石刀	珪素系 火山岩	この石刀と本葉の石刀は同一型で、加工した痕跡が一致している。石刀の裏面に「製作」の文字が刻印されている。	石刀	HP/刃直し	裏刃	36.4	16.7	6.0	3.3	-4.33	0.29	31.605	PL19
Q229	ナイフ形 石磨削片	珪素系 火山岩	小形ナイフ形石磨削の断片。	磨片	HP/刃直し	裏刃	10.6	15.5	5.4	0.9	-3.71	0.66	31.570	PL19
Q230	石刀	珪素系 火山岩	小形石刀。打面折れ。	不明	なし	なし	24.1	8.6	3.6	0.5	-3.17	0.81	31.509	
Q231	石刀	珪素系 火山岩	開接打撃の石刀。調整打面。打面厚 3.9 ミリ。	SI	なし	なし	55.3	18.0	6.2	5.5	-2.81	1.62	31.412	
Q232	石刀	珪素系 火山岩	点状打面。	SI	なし	なし	66.3	20.2	10.6	10.0	-1.88	0.97	31.608	
Q233	石刀	珪素系 火山岩	平削打面。打面厚 2.6 ミリ。コーン径 3.8 ミリ。	SI	なし	なし	31.9	21.3	4.4	2.3	-4.88	0.33	31.703	
Q234	石刀	珪素系 火山岩	打面折れ。開接打撃の石刀。	SI	なし	なし	41.3	15.5	4.4	2.9	-2.57	0.81	31.532	
Q235	石刀	珪素系 火山岩	調整打面。石刀裏側の初期工程の石刀。打面厚 4.9 ミリ。コーン径 3.0 ミリ。	SI	なし	なし	45.1	15.6	7.6	3.7	-2.52	0.98	31.503	
Q236	石刀	珪素系 火山岩	平削打面。打面厚 3.6 ミリ。	SI	なし	なし	46.9	15.9	5.9	3.6	-3.26	0.62	31.631	
Q237	石刀	珪素系 火山岩	HP/刃直し。打面厚 2.9 ミリ。石刀裏側の初期工程の石刀。	SD	なし	なし	49.8	17.3	6.5	4.6	-3.27	0.14	31.613	
Q238	石刀	珪素系 火山岩	平削打面。打面厚 7.1 ミリ。本葉と折れ、打面径に比べて作業面径が小さい。	SD	なし	なし	40.6	24.3	9.3	7.1	-2.24	1.34	31.589	
Q239	石刀	珪素系 火山岩	調整打面。打面厚 4.6 ミリ。コーン径 4.6 ミリ。	SI	なし	なし	64.8	24.1	12.0	13.3	-2.64	1.29	31.539	
Q240	石刀	珪素系 火山岩	調整打面。調整面に打面。石刀裏側の初期工程の石刀。打面厚 5.3 ミリ。作業面調整の断片。	SD	なし	なし	58.6	19.6	6.3	4.6	-1.02	2.14	31.495	
Q241	石刀	珪素系 火山岩	平削打面。打面厚 5.3 ミリ。作業面調整の断片。	SD	なし	なし	56.8	24.6	10.5	11.5	-3.18	1.24	31.424	
Q242	石刀	珪素系 火山岩	小形石刀。切子打面。打面厚 2 ミリ。	不明	なし	なし	17.3	9.5	2.8	0.4	-2.57	1.91	31.486	
Q243	石刀	珪素系 火山岩	調整打面。打面厚 2.7 ミリ。開接打撃。	SI	なし	なし	21.6	11.4	5.1	1.3	-0.88	1.79	31.373	
Q244	石刀	珪素系 火山岩	打面折れ。開接打撃の石刀。	SI	なし	なし	37.2	9.1	5.7	1.3	-3.71	0.86	31.663	
Q245	石刀	珪素系 火山岩	調整打面。打面厚 2.2 ミリ。	SI	なし	なし	29.2	13.9	5.2	1.5	-0.32	1.20	31.587	
Q246	石刀	珪素系 火山岩	調整打面。打面厚 3.7 ミリ。リッパが欠け、表面は平。	SI	なし	なし	53.9	20.1	6.8	5.0	-2.91	2.03	31.686	
Q247	石刀	珪素系 火山岩	調整打面。打面厚 4 ミリ。コーン径 4 ミリ。	SI	なし	なし	26.8	13.4	5.7	2.2	-2.37	0.84	31.611	
Q248	石刀	珪素系 火山岩	平削打面。打面厚 2.4 ミリ。コーン径 2.4 ミリ。	SI	なし	なし	52.5	20.8	6.7	4.9	-2.88	0.32	31.625	
Q249	石刀	珪素系 火山岩	調整打面。打面厚 1.4 ミリ。2 枚並行。	SI	なし	なし	51.1	15.5	6.2	3.8	-2.91	1.49	31.648	
Q250	石刀	珪素系 火山岩	打面折れ。開接打撃の石刀。	SI	なし	なし	31.9	20.5	7.2	4.9	-3.01	0.92	31.697	
Q251	石刀	珪素系 火山岩	平削打面。打面厚 4.6 ミリ。コーン径 4.6 ミリ。	SI	なし	なし	26.4	12.2	7.4	3.0	-4.52	-1.94	31.629	
Q252	石刀	珪素系 火山岩	平削打面。打面厚 2.2 ミリ。コーン径 3.2 ミリ。	SI	なし	なし	33.8	17.7	5.1	2.0	-4.79	1.66	31.641	
Q253	石刀	珪素系 火山岩	切子打面。打面厚 1.8 ミリ。	SD	なし	なし	48.1	17.9	7.6	3.5	-4.43	2.19	31.684	
Q254	石刀	珪素系 火山岩	平削打面。打面厚 2.2 ミリ。対向調整面あり。	SD	なし	なし	54.5	14.0	7.9	4.1	-4.50	2.79	31.629	
Q255	石刀	珪素系 火山岩	平削打面。打面厚 3.8 ミリ。コーン径 3.8 ミリ。	SD	なし	なし	63.3	15.4	13.6	7.7	-2.24	1.14	31.392	
Q256	石刀	珪素系 火山岩	打面。未磨削片。	不明	なし	なし	18.1	10.2	3.4	0.6	-2.35	1.21	31.591	
Q257	石刀	珪素系 火山岩	調整打面。打面厚 3 ミリ。コーン径 2.4 ミリ。	SI	なし	なし	37.0	12.3	4.9	2.1	-4.09	-0.05	31.391	
Q258	石刀	珪素系 火山岩	小形石刀。打面折れ。	不明	なし	なし	21.2	10.7	2.5	0.5	-3.04	0.46	31.543	
Q259	石刀	珪素系 火山岩	小形石刀。打面折れ。	不明	なし	なし	18.7	7.5	2.8	0.4	-2.86	0.22	31.548	
Q260	石刀	珪素系 火山岩	切子打面。打面厚 3.6 ミリ。コーン径 3.6 ミリ。	SI	なし	なし	28.0	12.0	5.1	1.4	-2.90	1.33	31.585	
Q261	石刀	珪素系 火山岩	織上打面。2 枚並行。	SD	なし	なし	37.8	13.0	4.2	1.3	-2.56	1.95	31.457	
Q262	石刀	珪素系 火山岩	小形石刀。打面折れ。開接打撃。	不明	なし	なし	26.5	10.9	3.4	0.7	-2.86	1.18	31.431	
Q263	石刀	珪素系 火山岩	小形石刀。平削打面。打面厚 2.3 ミリ。	SI	なし	なし	16.8	10.5	3.6	0.5	-3.18	1.61	31.422	
Q264	石刀	珪素系 火山岩	小形石刀。打面折れ。開接打撃。	不明	なし	なし	26.3	9.2	3.4	1.0	-2.24	1.80	31.555	
Q265	石刀	珪素系 火山岩	小形石刀。点状打面。打面厚 1.2 ミリ。押圧調整。	不明	なし	なし	19.1	10.0	4.6	0.7	-3.67	0.48	31.558	
Q266	石刀	珪素系 火山岩	小形石刀。打面折れ。押圧調整。	不明	なし	なし	21.7	7.5	3.7	0.4	-2.92	0.71	31.472	
Q267	石刀	珪素系 火山岩	小形石刀。点状打面。押圧調整。	不明	なし	なし	14.9	7.5	3.5	0.4	-2.69	0.89	31.416	
Q268	石刀	珪素系 火山岩	切子打面。打面厚 4.5 ミリ。コーン径 4.5 ミリ。	SI	なし	なし	63.2	24.3	13.6	18.4	-1.32	1.09	31.584	
Q269	石刀	珪素系 火山岩	切子打面。打面厚 4.7 ミリ。コーン径 4.7 ミリ。石刀裏側の初期工程の石刀。	SD	なし	なし	68.9	28.6	11.5	14.1	-3.05	0.91	31.624	
Q270	石刀	珪素系 火山岩	調整打面。石刀裏側の初期工程の石刀。打面厚 5.7 ミリ。コーン径 3.6 ミリ。	SI	なし	なし	72.9	23.7	11.7	12.5	-2.72	1.09	31.577	
Q271	石刀	珪素系 火山岩	切子打面。打面厚 2.4 ミリ。コーン径 3.6 ミリ。	SI	なし	なし	43.7	20.0	6.3	5.1	-4.52	1.65	31.503	
Q272	石刀	珪素系 火山岩	切子打面。打面厚 4.5 ミリ。コーン径 5.7 ミリ。石刀裏側の初期工程の石刀。	SD	なし	なし	53.3	29.7	13.9	18.1	-2.00	0.61	31.486	
Q273	石刀	珪素系 火山岩	切子打面。打面厚 3 ミリ。コーン径 3.4 ミリ。	SI	なし	なし	32.5	23.4	5.7	4.0	-3.40	0.79	31.579	
Q274	石刀	珪素系 火山岩	平削打面。調整面に打面。コーン径 1.1 ミリ。調整面に打面。調整面に打面。調整面に打面。	SD	なし	なし	68.0	16.5	7.5	7.5	-2.24	0.86	31.488	
Q275	石刀	珪素系 火山岩	打面折れ。本葉は切子打面の打面。開接打撃。	SI	なし	なし	47.8	23.5	11.3	7.3	-2.55	1.52	31.491	
Q276	石刀	珪素系 火山岩	点状打面。打面厚 1.1 ミリ。開接打撃。	SI	なし	なし	68.5	17.4	5.4	6.3	-2.76	0.74	31.417	
Q277	石刀	珪素系 火山岩	打面折れ。	不明	なし	なし	38.5	16.0	7.6	2.7	-2.83	1.50	31.471	
Q278	石刀	珪素系 火山岩	調整打面。打面厚 4.3 ミリ。コーン径 4.9 ミリ。石刀裏側の初期工程の石刀。	SI	なし	なし	54.0	22.9	14.5	17.3	-2.94	1.24	31.534	
Q279	石刀	珪素系 火山岩	切子打面。打面厚 6.5 ミリ。コーン径 6.5 ミリ。	SD	なし	なし	39.6	21.7	8.6	5.3	-4.32	2.17	31.588	

番号	器械	石材	所見	素材属性	加工属性	刃部属性	長さ	幅	厚み	重量	X	Y	Z	備考
Q280	石刀	ガラス系 火山岩	線状打面。間接打撃。	SI	なし	なし	34.1	12.5	4.8	2.1	-3.26	2.01	31.503	
Q281	石刀	ガラス系 火山岩	打面折れ。直接打撃。底面に内縁の自然面。	SD	なし	なし	51.2	27.6	15.6	15.4	-2.80	1.79	31.665	
Q282	石刀	ガラス系 火山岩	切子打面。打面厚5.4ミリ。コーン径4.5ミリ。	SI	なし	なし	41.1	20.7	8.3	5.2	-2.32	1.81	31.616	
Q283	石刀	ガラス系 火山岩	平頭打面。打面厚2.6ミリ。左側刃は自然面で右側自然面。	SI	なし	なし	29.7	10.7	4.3	1.1	-2.90	1.81	31.595	
Q284	石刀	ガラス系 火山岩	平頭打面。打面厚2.6ミリ。右刃側縁のブラス。内縁は多少。	SI	なし	なし	47.9	16.1	8.3	5.5	-2.86	1.79	31.578	
Q285	石刀	ガラス系 火山岩	平頭打面。打面厚3.7ミリ。	SI	なし	なし	24.3	14.3	4.3	1.3	-3.04	1.69	31.514	
Q286	石刀	ガラス系 火山岩	打面折れ。間接打撃の石刀。右刃側縁の自然面。	SI	なし	なし	51.4	17.9	6.2	5.3	-2.79	1.69	31.511	
Q287	石刀	ガラス系 火山岩	調整打面。打面厚2.1ミリ。コーン径3.5ミリ。	SI	なし	なし	55.0	14.3	7.2	4.0	-2.65	1.85	31.518	
Q288	石刀	ガラス系 火山岩	打面折れ。間接打撃の石刀。	SI	なし	なし	27.9	17.6	7.1	3.7	-1.31	1.73	31.411	
Q289	石刀	ガラス系 火山岩	線状打面。	不明	なし	なし	32.4	12.8	4.6	1.3	-6.04	1.73	31.634	
Q290	石刀	ガラス系 火山岩	打面折れ。間接打撃。	不明	なし	なし	34.8	21.8	7.1	4.4	-2.85	1.82	31.449	
Q291	石刀	ガラス系 火山岩	打面折れ。直接打撃。左側面に自然面。	SD	なし	なし	45.1	21.3	8.9	6.8	-3.79	0.71	31.491	
Q292	石刀	ガラス系 火山岩	調整打面。打面厚2.6ミリ。コーン径4.5ミリ。	SI	なし	なし	34.9	18.3	3.7	1.8	-3.78	0.75	31.474	
Q293	石刀	ガラス系 火山岩	調整打面。打面厚9.1ミリ。コーン径5.6ミリ。180度刃部形成を特徴とする。	SD	なし	なし	70.4	29.8	10.3	17.1	-3.05	1.22	31.322	
Q294	石刀	ガラス系 火山岩	打面折れ。間接打撃の石刀。	SI	なし	なし	32.7	12.0	6.0	2.3	-3.83	2.33	31.505	
Q295	石刀	ガラス系 火山岩	調整打面。打面厚2.6ミリ。表面は平頭。	SI	なし	なし	42.5	15.3	6.1	2.9	-2.35	2.08	31.577	
Q296	横付石刀	ガラス系 火山岩	平頭打面。打面厚3.5ミリ。コーン径4.5ミリ。	SD	なし	なし	66.1	15.7	12.0	7.1	-2.40	1.47	31.571	
Q297	横付石刀	ガラス系 火山岩	打面折れ。鋭い石刃を調整するための横付石刀。調整打撃の属性がある。	不明	なし	なし	65.7	14.4	12.9	6.2	-2.95	0.95	31.569	
Q298	横付石刀	ガラス系 火山岩	打面折れ。間接打撃。	SI	なし	なし	63.5	19.3	11.8	10.8	-2.44	1.08	31.528	
Q299	横付石刀	ガラス系 火山岩	切子打面。打面厚6.1ミリ。曲げの調整。	SI	なし	なし	54.1	17.3	10.5	5.6	-2.84	1.11	31.431	
Q300	横付石刀	ガラス系 火山岩	調整打面。打面厚4.9ミリ。コーン径3.5ミリ。刃部表面は自然面。右刃側縁は平頭。	SI	なし	なし	67.6	22.8	16.3	13.3	-2.65	1.69	31.599	
Q301	横付石刀	ガラス系 火山岩	打面折れ。	不明	なし	なし	58.4	20.9	11.4	11.1	-4.01	0.63	31.620	
Q302	横付石刀	ガラス系 火山岩	打面折れ。	不明	なし	なし	32.8	9.4	6.2	1.2	-1.27	-0.11	31.558	
Q303	横付石刀	ガラス系 火山岩	調整打面。打面厚6.5ミリ。末端は平頭。	SI	なし	なし	35.3	17.9	11.0	6.4	-3.19	1.11	31.671	
Q304	横付石刀	ガラス系 火山岩	切子打面。打面厚4.8ミリ。コーン径2.9ミリ。	SI	なし	なし	41.5	14.6	9.9	3.8	-4.12	0.55	31.596	
Q305	縦長薄片	ガラス系 火山岩	間接打撃の薄片。打面と末縁は自然面。	SI	なし	なし	53.8	21.7	7.0	9.3	-2.29	0.23	31.560	
Q306	薄片	ガラス系 火山岩	左側刃は自然面で右側自然面。右側面内側の薄片。調整打面。打面厚2.1ミリ。調整打撃の属性がある。	SD	なし	なし	47.0	33.2	12.1	16.2	-3.46	-0.76	31.519	
Q307	薄片	ガラス系 火山岩	調整打面。打面厚2.6ミリ。調整打撃の属性がある。右側面に自然面。右側面に自然面。	SD	なし	なし	68.4	17.3	8.9	8.1	-2.81	2.01	31.697	
Q308	薄片	ガラス系 火山岩	切子打面。打面厚9.5ミリ。コーン径6.3ミリ。右側刃は自然面。右側面に自然面。	SD	なし	なし	46.3	26.0	12.8	14.3	-4.71	-0.48	31.655	
Q309	薄片	ガラス系 火山岩	調整打面。打面厚2.6ミリ。調整打撃の属性がある。右側面に自然面。右側面に自然面。	SD	なし	なし	48.0	25.0	9.3	10.2	-2.60	-0.48	31.608	
Q310	薄片	ガラス系 火山岩	切子打面。打面厚3.1ミリ。コーン径3.7ミリ。	SD	なし	なし	44.2	21.9	9.7	7.7	-4.00	0.84	31.596	
Q311	薄片	ガラス系 火山岩	切子打面。打面厚5.1ミリ。コーン径6.3ミリ。右側刃は自然面。右側面に自然面。	SD	なし	なし	29.7	22.1	6.2	4.0	-2.35	1.03	31.486	
Q312	薄片	ガラス系 火山岩	切子打面。打面厚9.6ミリ。コーン径6.3ミリ。右側面に自然面。右側面に自然面。	SD	なし	なし	58.0	39.3	17.0	26.5	-4.28	-0.93	31.538	
Q313	薄片	ガラス系 火山岩	調整打面。打面厚4.8ミリ。	SI	なし	なし	30.8	26.1	6.4	4.0	-0.09	0.15	31.535	
Q314	薄片	ガラス系 火山岩	鋭い石刀。平頭打面。打面厚2.6ミリ。	SD	なし	なし	43.8	35.0	12.5	13.3	-2.04	1.26	31.580	
Q315	薄片	ガラス系 火山岩	調整打面。打面厚2.6ミリ。調整打撃の属性がある。右側面に自然面。右側面に自然面。	不明	なし	なし	16.8	8.6	4.1	0.5	-2.80	1.57	31.540	
Q316	薄片	ガラス系 火山岩	調整打面。打面厚9.1ミリ。コーン径8.5ミリ。右側面に自然面。右側面に自然面。	SD	なし	なし	59.1	36.9	20.0	43.3	-3.54	0.51	31.642	
Q317	薄片	ガラス系 火山岩	右側面に自然面。切子打面。打面厚2.6ミリ。	SD	なし	なし	49.9	62.6	15.9	52.1	-2.95	1.62	31.514	
Q318	薄片	ガラス系 火山岩	調整打面。打面厚3.9ミリ。	不明	なし	なし	16.8	9.4	4.3	0.5	-3.75	0.80	31.571	
Q319	薄片	ガラス系 火山岩	切子打面。打面厚2.3ミリ。作業用。	SD	なし	なし	36.1	19.5	6.3	3.5	-3.99	1.72	31.542	
Q320	薄片	ガラス系 火山岩	切子打面。打面厚5.4ミリ。右側面に自然面。	SD	なし	なし	42.9	26.3	10.1	8.5	-3.37	1.82	31.387	
Q321	薄片	ガラス系 火山岩	調整打面。調整打撃の属性がある。右側面に自然面。右側面に自然面。	SD	なし	なし	19.1	30.0	6.0	2.9	-5.32	1.22	31.643	
Q322	打面再生薄片	ガラス系 火山岩	調整打面。打面厚6.5ミリ。	SD	なし	なし	29.7	49.2	8.1	9.3	-2.42	0.55	31.515	
Q323	打面再生薄片	ガラス系 火山岩	切子打面。打面厚6.7ミリ。打面厚2.6ミリ。調整打撃の属性がある。	SD	なし	なし	34.2	38.2	10.4	11.1	-2.67	1.72	31.385	
Q324	石刀石杖	ガラス系 火山岩	2類の石刀技法の残骸。薄片素材。	薄片	SI	なし	36.9	17.5	36.4	19.3	-2.61	1.75	31.431	
Q325	石刀石杖	ガラス系 火山岩	調整打撃の石刀石杖。打面は切子打面。調整打撃の属性がある。	分粒層	SD, SI	なし	70.9	44.3	28.3	94.8	-3.30	0.13	31.548	
Q326	石刀石杖	ガラス系 火山岩	調整打撃の石刀石杖。調整打撃の属性がある。右側面に自然面。右側面に自然面。	不明	SD, SI	なし	47.5	52.0	24.4	64.9	-0.63	-0.20	31.449	
Q327	石刀石杖	ガラス系 火山岩	調整打撃の石刀石杖。調整打撃の属性がある。右側面に自然面。右側面に自然面。	不明	SD	なし	44.7	31.1	25.6	37.1	-3.63	0.62	31.562	
Q328	石刀石杖	ガラス系 火山岩	薄片素材の2類石刀石杖。表面石杖。調整打撃の属性がある。	縦長薄片	SD	なし	46.9	30.5	16.6	16.8	-2.32	1.58	31.466	
Q329	石刀石杖	ガラス系 火山岩	調整打撃の石刀石杖。よく消費されている。	不明	SD, SI	なし	36.5	45.1	32.5	48.4	-5.61	-1.13	31.628	
Q330	石刀石杖	ガラス系 火山岩	調整打撃の石刀石杖。よく消費されている。	不明	SD, SI	なし	35.0	43.7	33.7	64.5	-4.49	-1.18	31.566	
Q331	石刀石杖	ガラス系 火山岩	調整打撃の石刀石杖。調整打撃の属性がある。右側面に自然面。右側面に自然面。	SD	不明	なし	19.4	38.2	33.5	24.7	-2.50	1.05	31.601	

第4号石器集中地点出土遺物観察表 (第43図)

番号	器種	石材	所見	素材属性	加工属性	刃部属性	長さ	幅	厚み	重量	X	Y	Z	備考
Q332	割片	玄武岩 山部石	打面折れ。背面は多方向の刮削面 で構成される。	不明	なし	なし	20.5	32.9	10.8	7.3	-1.4	-0.54	32.073	
Q333	割片	玄武岩 山部石	切子打面。打面厚5.7ミリ。	SD	なし	なし	33.1	24.9	7.5	5.6	-1.68	-2.02	31.902	
Q334	割片	石英	ハドハンマーの直撃打撃の大型 割片。平坦打面。打面厚12.7ミリ。	HD	なし	なし	60.7	45	12.7	26.5	-1.03	-0.48	32.037	
Q335	割片	石英	打面が折れた石英の割片。	HD	なし	なし	38.7	34.6	14.9	17.6	-1.68	-0.15	32.008	
Q336	石所ツラツ	かんらん 石	大きな凹面を形成している自然面を 有する。右側面は平坦面を有する。 断面は厚さ約1.5センチメートル。	SD	なし	なし	67.1	71.6	68.7	314.3	-2.42	-1.85	32.058	

遺構外出土遺物観察表 (第44～46図)

番号	器種	石材	所見	素材属性	加工属性	刃部属性	長さ	幅	厚み	重量	出土位置	備考
Q337	ナイフ形石	玄武岩 山部石	石刃素材。打面部分を美型に切り取っ ている。加工は反り。	SI	反り/刮削	素刃	46.4	19.3	8.1	6.6	SK115	PL22
Q338	ナイフ形石	玄武岩 山部石	石刃素材の基部加工のナイフ形石器。	SI	HD/刮削	素刃	52.3	15.2	10.4	6.2	SK115	PL22
Q339	抉入石器	玄武岩 山部石	左側面に大きなフツツが入る石器。刃部 は不明。	SI	SD	不明	62.8	23.4	11.1	11.8	SK115	PL22
Q340	石刃	玄武岩 山部石	打面折れ。打面厚29.7ミリ。自然面の底 面が平ら。	SD	なし	なし	42.9	26.1	11.5	7.5	SK115	
Q341	石刃	玄武岩 山部石	素刃打面。打面厚42.7ミリ。右側面に自然 面が平ら。	SI	なし	なし	46.5	13.9	10.6	4.7	SK115	
Q342	石刃	玄武岩 山部石	切子打面。打面厚5.9ミリ。左側面に自然 面が平ら。	SD	なし	なし	37.4	22.3	9.3	5.9	SK115	
Q343	石刃	玄武岩 山部石	打面折れの石刃。おそらく間接打撃。	SI	なし	なし	47.5	20.8	8.7	9.5	SK115	
Q344	石刃	玄武岩 山部石	平坦打面。打面厚3.7ミリ。コーン径3.9 ミリ。	SI	なし	なし	45	17.6	8.3	4.5	SK115	
Q345	石刃	玄武岩 山部石	切子打面。打面厚8.2ミリ。打面傾斜の 石刃の可能性が大きい。	SD	なし	なし	68.1	28.5	8.3	16.5	SK115	
Q346	検付石	玄武岩 山部石	素刃打面。打面厚5.7ミリ。右側面に石核 形成が大きい。	SI	なし	なし	63.1	19.5	9.4	8.5	SK115	
Q347	割片	玄武岩 山部石	平坦打面。凹面から割がされた作業面成 形割片。打面厚10.4ミリ。	SD	なし	なし	54.5	38.8	22	42	SK115	
Q348	割片	玄武岩 山部石	切子打面。打面厚2.4ミリ。	SD	なし	なし	34.3	23.6	7.6	6.1	SK115	
Q349	割片	玄武岩 山部石	調整打面。打面厚84.4ミリ。作業面成形 の割片。	SI	なし	なし	48	35.6	13	18.1	SK115	
Q350	割片	玄武岩 山部石	細折の割片。石核成形の初期段階の割片。	HD	なし	なし	51.4	28.2	12.8	16.7	SK115	
Q351	石刃石核	チャート	大きな石刃。打面は調整打面。この 石刃は、右側面に自然面が平らである。 右側面に自然面が平らである。	HD	SI	なし	78.8	56.3	47	230.7	SK115	
Q352	砥石	玄武岩 山部石	打面を大きく削り加している砥石。 右側面に自然面が平らである。右側面に 自然面が平らである。	HD	HP/刮削	素刃	59.4	25.3	11.1	14.3	FPI	PL22
Q353	石刃	玄武岩 山部石	打面折れ。背面は4本で。素刃打撃の 打撃痕が大きい。	SI	なし	なし	27.0	16.5	7.6	2.9	FPI	
Q354	石刃	玄武岩 山部石	打面折れ。断面は平ら。パルプなし。細 折の割片。	不明	なし	なし	22.6	9.3	2.6	0.5	FPI	
Q355	ナイフ形石	燧石	切子加工のナイフ形石器。間接打撃の 石刃素材。	不明	HP/刮削	素刃	40.1	13.5	6.1	2.7	表土中	PL22
Q356	使用痕石	珪質頁岩	素刃。右側面に自然面が平ら。おそらく間 接打撃の打撃痕が大きい。	不明	なし	刃こぼれ痕	46.1	17.1	10.3	4.8	表土中	PL22
Q357	石刃	頁岩	平坦打面。打面厚4.6ミリ。	SD	なし	なし	32.1	19.7	5.8	3	表土中	
Q358	石刃	玄武岩 山部石	平坦打面。打面厚6.4ミリ。コーン径4.5 ミリ。	SI	なし	なし	63.7	23	14.1	14.7	表土中	
Q359	石刃	玄武岩 山部石	平坦打面。打面厚4.9ミリ。コーン径4.3 ミリ。	SI	なし	なし	76.4	18.5	10.6	10.5	表土中	
Q360	打面折れ割片	頁岩	打面折れ。	SD	なし	なし	42.8	27.3	10.3	4.8	表土中	
Q361	打面折れ割片	頁岩	切子打面。打面厚7.9ミリ。	SD	なし	なし	46.8	45	17.3	15.6	表土中	
Q362	小形石核	玄武岩 山部石	小形石刃の残核。よく消費されている。	分核種	SI	なし	33.3	36.9	29.7	38.8	表土中	
Q363	石所ツラツ	かんらん 石	凹面を手面して。石核成形を施した石核 ツラツ。	分核種	SD	なし	46.7	39.5	23.3	56.4	表土中	
Q364	原石	珪岩	珪岩の原石。	円礫	なし	なし	58.1	43	26.1	66.2	表土中	

母岩別資料観察表 (第47～59図)

番号	遺構	器種	石材	所見	素材属性	加工属性	刃部属性	長さ	幅	厚み	重量	原点	X	Y	Z	備考	
Q365	SS 1	A	ナイフ形 石器	頁岩	先端の割片。石刃素材。	不明	HP/刮削	素刃	23.5	12.7	2.9	0.7	A 412	1.27	1.41	31.024	PL18
Q366	SS 1	A	検付石	頁岩	切子打面。打面厚6.7ミリ。右側面に 自然面が平らである。右側面に自然面が 平らである。	SD	なし	刃こぼれ痕	54.2	27.6	12.7	14.5	A 412	0.78	2.01	30.980	PL18
Q367	SS 1	A	割片	頁岩	調整打面。打面厚11.7ミリ。右側面に 自然面が平らである。右側面に自然面が 平らである。	HD	なし	なし	62.8	41.9	18.8	27.6	A 412	1.29	0.86	30.975	
Q368	SS 1	A	割片	頁岩	切子打面。打面厚5.7ミリ。右側面に 自然面が平らである。右側面に自然面が 平らである。	SD	なし	なし	50.3	47.9	15.2	24.5	A 412	1.8	0.87	30.950	
Q369	SS 1	A	割片	頁岩	調整打面。打面厚11.7ミリ。右側面に 自然面が平らである。右側面に自然面が 平らである。	SD	なし	なし	37.9	49.7	12.8	13.1	A 412	1.62	1.04	30.919	
Q370	SS 1	A	石核	頁岩	調整打面。打面厚11.7ミリ。右側面に 自然面が平らである。右側面に自然面が 平らである。	円礫	SI	なし	41.2	35.5	48.5	66.7	A 412	0.78	0.67	31.033	
Q371	SS 1	B	石刃	頁岩	切子打面。打面厚5.7ミリ。右側面に 自然面が平らである。右側面に自然面が 平らである。	SD	なし	なし	48.9	20.8	10.0	7.6	A 412	0.96	1.91	31.081	
Q372	SS 1	B	石刃	頁岩	調整打面。打面厚22.2ミリ。	SI	なし	なし	30.0	19.4	5.2	2.4	A 412	1.35	0.1	31.114	
Q373	SS 2	C	割片	頁岩	小形石刃。切子打面。打面厚5.7ミリ。 右側面に自然面が平らである。右側面に 自然面が平らである。	SD	なし	なし	29.2	10.2	4.1	0.8	B 442	2.67	1.24	31.377	
Q374	SS 2	C	割片	頁岩	切子打面。打面厚7.9ミリ。右側面に 自然面が平らである。右側面に自然面が 平らである。	SD	なし	なし	63.5	47.9	20.7	40.5	B 442	2.06	0.34	31.420	
Q375	SS 3	C	一次加工 割片	頁岩	調整打面。打面厚11.7ミリ。右側面に 自然面が平らである。右側面に自然面が 平らである。	SI	なし	なし	37.5	25.9	12.9	10.2	B 442	-2.65	1.45	31.538	PL19
Q376	SS 1	D	小形石刃	黒色頁岩	小形石刃。平坦打面。打面厚2.2 ミリ。	H1	なし	なし	16.4	9.9	3.0	0.3	A 412	-1.33	1.75	31.162	

番号	遺構名	種別	母岩	器種	石材	所見	素材属性	加工属性	形部属性	長さ	幅	厚み	重量	原点	X	Y	Z	備考
Q377	SS 1	D	洞片	黒色頁岩	平田打面、打面厚 4.8 ミリ、小石あり		SD	なし	なし	17.1	16.0	5.0	1.2	A 412	-2.39	1.11	31.155	
Q378	SS 1	D	石瓦	黒色頁岩	調書裏の石瓦片、平田打面、調書裏は長さを測れないのみ、平田打面は平田打面と同調書裏の瓦が貼られた石瓦片	円礫	SD	なし	なし	9.7	18.8	7.2	0.9	A 412	-2.59	1.01	31.000	
Q380	SS 3	E	洞片	チャート	平田打面、打面厚 6.7 ミリ		SD	なし	なし	28.8	26.5	10.5	7.3	B 442	0.251	1.80	31.500	
Q381	SS 3	E	石枕	チャート	断面はネグロ面、分礫砂としてもよい		SD	なし	なし	41.2	38.1	22.3	29.1	B 442	-4.95	1.93	31.509	
Q382	SS 3	E	石枕	チャート	小断面を測っている	洞片	III	なし	なし	13.0	21.6	13.5	3.5	B 442	-2.06	1.68	31.520	
Q383	SS 2	F	洞片	チャート	側面に旧打面が残る洞片、切り打面、打面厚 4.5 ミリ		HD	なし	なし	49.8	24.9	12.3	13.2	B 442	3.94	-1.20	31.374	
Q384	SS 2	F	洞片	チャート	側面打面の洞片		HD	なし	なし	45.1	37.4	8.5	9.9	B 442	3.51	-1.43	31.407	
Q385	SS 2	F	洞片	チャート	点状打面の大型洞片		HD	なし	なし	67.9	40.3	17.3	22.3	B 442	1.11	0.90	31.486	
Q386	SS 2	F	洞片	チャート	平田打面、打面厚 2.5 ミリ、大石あり		HD	なし	なし	63.6	42.0	10.8	21.7	B 442	1.31	1.18	31.440	
Q387	SS 3	F	縦長洞片	チャート	断面に自然面より覆く縦長洞片、平田打面、打面厚 7.9 ミリ		HD	なし	なし	52.2	31.1	10.5	13.6	B 442	-4.06	0.36	31.528	
Q388	SS 3	F	洞片	チャート	自然面から露出、点状打面		HD	なし	なし	56.8	21.8	10.2	5.8	B 442	-2.69	2.21	31.577	
Q389	SS 1	G	ナイフ形石	流紋岩	一般追加したナイフ形石、断面は平田打面	不明	III	砂利	素岩	40.9	13.6	5.4	2.0	A 412	-0.95	0.85	31.162	PL18
Q390	SS 3	G	横長洞片	流紋岩	断面は平田打面、断面は平田打面、打面厚 7.9 ミリ	SD	なし	平田打面	なし	47.8	41.1	9.3	17.7	B 442	-5.46	-0.97	31.610	PL19
Q391	SS 2	H	縦長洞片	トロロ石	点状打面の大型洞片	不明	なし	なし	なし	78.4	25.5	13.2	15.2	B 442	3.50	-1.48	31.414	
Q392	SS 3	H	洞片	トロロ石	円礫の表面がついた洞片、平田打面、打面厚 7.3 ミリ	SD	なし	なし	なし	54.4	48.2	15.4	31.2	B 442	-2.78	1.01	31.549	
Q393	SS 3	H	石瓦	トロロ石	小石瓦カ、調書裏不明	不明	なし	なし	なし	23.8	9.7	4.1	0.8	B 442	-3.28	1.18	31.725	
Q394	SS13	H	縦長洞片	トロロ石	縦長打面の縦長洞片	不明	なし	なし	なし	60.2	28.8	11.8	13.6	-	-	-	-	
Q395	SS 4	I	矢頭礫	柱斑頁岩	ハート型、断面は平田打面、打面厚 6.5 ミリ、断面は平田打面、打面厚 6.5 ミリ	横長洞片	HD	HD	HD	45.1	30.1	20.3	20.7	C 346	-2.95	2.77	32.010	PL19
Q396	SS 4	I	矢頭礫	柱斑頁岩	ハート型、断面は平田打面、打面厚 6.5 ミリ、断面は平田打面、打面厚 6.5 ミリ	横長洞片	HD	HD	HD	22.9	34.0	37.7	24.5	C 346	2.42	4.05	31.988	PL19
Q397	SS 1	12	J	石瓦	頁岩	調書裏の石瓦片、打面厚 3.8 ミリ	SD	なし	なし	29.7	14.8	8.2	2.8	A 412	0.10	2.61	31.111	PL22
Q398	SS 1	12	J	石枕	頁岩	円礫素材の石瓦片、打面厚 6.5 ミリ、断面は平田打面、打面厚 6.5 ミリ	円礫	ST	なし	45.4	37.7	32.2	20.5	A 412	-0.71	2.12	31.079	PL22
Q399	SS 1	J	石瓦	頁岩	打面割れ	不明	なし	なし	なし	34.0	14.0	5.7	1.8	A 412	-1.36	1.60	31.009	
Q400	SS 1	J	石瓦	頁岩	切り打面、打面厚 5.3 ミリ、コーナー 5.3 ミリ、平田打面	ST	なし	なし	なし	31.8	21.3	5.7	2.3	A 412	-0.08	1.42	31.109	
Q401	SS 1	J	石瓦	頁岩	切り打面、打面厚 3 ミリ、コーナー 5.3 ミリ、リップあり	ST	なし	なし	なし	33.0	19.5	4.6	2.2	A 412	-3.28	2.22	31.069	
Q402	SS 1	J	洞片	頁岩	切り打面、打面厚 5.3 ミリ	ST	なし	なし	なし	36.3	22.8	6.3	2.9	A 412	-0.09	1.99	30.957	
Q403	SS13	J	洞片	頁岩	左側面に旧作業面が残されている	HD	なし	なし	なし	33.4	26.9	9.1	6.9	-	-	-	-	
Q404	SS 1	10	K	柱斑頁岩洞片	流紋岩	平田打面、打面厚 3.3 ミリ、断面は平田打面、打面厚 3.3 ミリ	SD	なし	なし	44.8	35.3	12.7	14.0	A 412	0.29	1.87	30.971	PL22
Q405	SS 1	10	K	柱斑頁岩洞片	流紋岩	切り打面、打面厚 8.3 ミリ	SD	なし	なし	39.4	42.8	10.0	13.1	A 412	0.43	2.03	31.040	PL22
Q406	SS 1	10	K	石瓦石枕	流紋岩	調書裏、断面の調書裏と断面の調書裏は長さを測れない	円礫	SD	なし	51.8	65.2	36.6	116.9	A 412	0.41	1.77	30.998	PL22
Q407	SS 1	K	横長洞片	流紋岩	断面は平田打面、打面厚 6.4 ミリの断面は平田打面、断面は平田打面、打面厚 6.4 ミリ、断面は平田打面、打面厚 6.4 ミリ	SD	なし	平田打面	なし	46.9	30.1	13.4	9.4	A 412	0.55	2.11	30.892	PL18
Q408	SS 1	11	L	洞片	鉄石英	平田打面、平田打面、打面厚 5.1 ミリ	SD	なし	なし	14.0	19.7	6.1	1.8	A 412	-1.44	1.55	31.156	PL21
Q409	SS 1	11	L	石枕	鉄石英	小形の円礫を素材にした石瓦石枕	円礫	SD	なし	43.8	31.6	27.6	38.9	A 412	-1.23	1.6	31.153	PL21
Q410	SS 2	L	洞片	鉄石英	調整打面、打面厚 5.9 ミリ	SD	なし	なし	なし	27.9	25.5	7.0	3.8	B 442	1.48	-0.67	31.472	
Q411	SS 1	1	縦長洞片	黒礫	切り打面、打面厚 14 ミリ	HD	なし	なし	なし	52.9	28.9	19.1	37.6	A 412	-0.42	2.15	30.982	PL20
Q412	SS 1	1	縦長洞片	黒礫	切り打面、打面厚 10 ミリ	HD	なし	なし	なし	57.9	28.5	13.0	15.3	A 412	0.25	1.79	31.037	PL20
Q413	SS 3	2	石瓦	ザウス頁岩	調整打面、打面厚 8.6 ミリ	ST	なし	なし	なし	71.8	18.9	9.6	10.6	B 442	-2.87	0.72	31.596	PL20
Q414	SS 3	2	石瓦	ザウス頁岩	調整打面、左側面に自然面あり	ST	なし	なし	なし	73.4	22.4	11.4	9.9	B 442	-2.84	1.71	31.497	PL20
Q415	SS 3	3	石瓦	ザウス頁岩	調整打面、打面厚 5.3 ミリ	ST	なし	なし	なし	42.2	18.7	7.9	5.3	B 442	-4.82	0.88	31.553	PL20
Q416	SS 3	3	石瓦	ザウス頁岩	調整打面、打面厚 3.7 ミリ	ST	なし	なし	なし	46.2	21.3	9.0	4.2	B 442	-2.94	1.73	31.500	PL20
Q417	SS 3	4	石瓦	ザウス頁岩	自然面、断面に大きく自然面が残り、断面は平田打面、打面厚 6.1 ミリ	SD	なし	なし	なし	84.9	24.2	13.1	19.5	B 442	-1.91	-0.08	31.524	PL20
Q418	SS 3	4	横長石瓦	ザウス頁岩	自然面、断面に大きく自然面が残り、断面は平田打面、打面厚 6.1 ミリ	SD	なし	なし	なし	81.5	23.6	12.6	14.4	B 442	-1.65	1.59	31.500	PL20
Q419	SS 1	5	二次加工石瓦	頁岩	断面に自然面が残り、断面は平田打面、打面厚 6.1 ミリ	HD	III	流紋岩	砂利	31.6	16.5	8.9	3.4	A 412	-2.58	0.91	31.308	PL21
Q420	SS 1	5	二次加工石瓦	頁岩	断面に自然面が残り、断面は平田打面、打面厚 6.1 ミリ	HD	III	流紋岩	砂利	38.9	46.4	12.2	16.7	A 412	-1.32	1.3	31.140	PL21
Q421	SS 1	6	断面石瓦	頁岩	断面に自然面が残り、断面は平田打面、打面厚 2.1 ミリ	SD	なし	なし	なし	25.3	30.7	9.3	7.1	A 412	-0.14	1.89	31.159	PL21
Q422	SS 1	6	石枕	頁岩	断面に自然面が残り、断面は平田打面、打面厚 2.1 ミリ	洞片	ST	なし	なし	35.2	41.9	20.7	29.1	A 412	-4.08	2.15	31.071	PL21
Q423	SS 1	7	断面石瓦	頁岩	断面に自然面が残り、断面は平田打面、打面厚 6.2 ミリ	SD	なし	なし	なし	46.7	56.6	15.5	19.6	A 412	-1.19	0.8	30.983	PL21
Q424	SS 1	7	断面石瓦	頁岩	切り打面、打面厚 5.4 ミリ	SD	なし	なし	なし	42.7	48.5	7.9	8.3	A 412	1.06	0.76	30.995	PL21
Q425	SS 2	8	洞片	チャート	平田打面、打面厚 4 ミリ	SD	なし	なし	なし	38.5	27.6	13.1	10.3	B 442	2.33	4.91	31.428	PL21
Q426	SS 3	8	洞片	チャート	切り打面、打面厚 3.9 ミリ	SD	なし	なし	なし	38.2	29.8	4.8	4.3	B 442	-1.14	1.43	31.610	PL21
Q427	SS 3	9	小形石瓦	チャート	調整打面の石瓦片、打面は平田打面、打面厚 3.1 ミリ	分礫砂	III	なし	なし	29.6	21.6	17.9	12.5	A 412	-3.13	1.67	31.526	PL21
Q428	SS 3	9	小形石瓦	チャート	調整打面の石瓦片、打面は平田打面、打面厚 3.1 ミリ	III	なし	なし	なし	32.4	18.4	10.8	4.2	B 442	-2.38	1.35	31.520	PL21

## 2 縄文時代の遺構と遺物

今回の調査で確認した当時代の遺構は、住居跡1軒、陥し穴16基、土坑1基である。以下、遺構の特徴と出土した遺物について記述する。

### (1) 竪穴住居跡

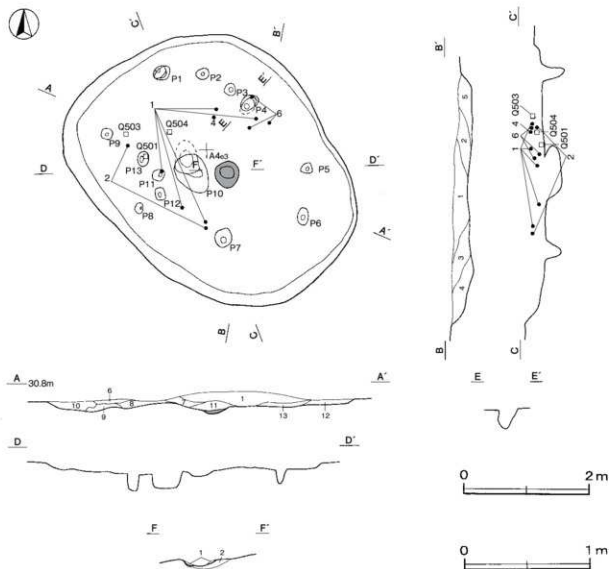
#### 第4号住居跡（第60～62図）

**位置** 調査区北部のA 4 e3区、標高30.7mの台地緩斜面部に位置している。

**規模と形状** 長径4.92m、短径3.98mの楕円形で、長径方向は $N-70^{\circ}-W$ である。壁高は4～22cmで、緩やかに傾斜して立ち上がっている。

**床** ほほ平坦で、踏み固められていない。

**炉** 中央部に付設されている。規模は長径40cm、短径37cmの円形である。炉床部は床面から8cmくぼんでおり、炉床面は赤変硬化している。なお、第2層は掘方への埋土である。



第60図 第4号住居跡実測図

伊土層解説

- 1 赤 褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化粒子 2 黒 色 焼土ブロック・ローム粒子少量  
微量

ピット 13か所。P 1～P 9は深さ19～34cmで、炉を中心に環状に巡る配置から支柱穴である。P 10は深さ28cmで、遺物は出土していないが、位置や形状から埋設炉の掘方の可能性がある。P 11・12は深さ30cm、P 13は深さ34cmで、性格不明である。

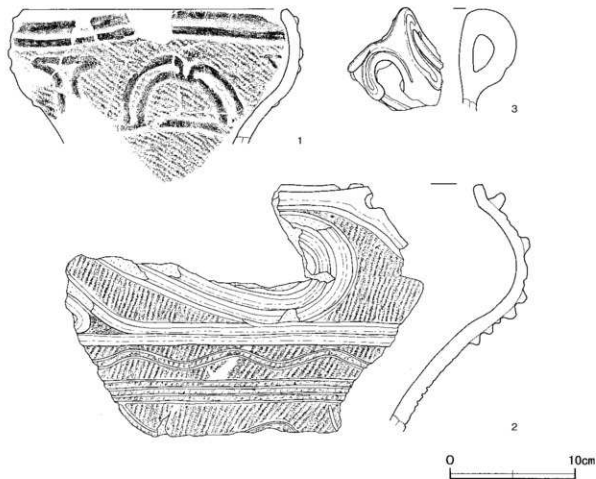
覆土 13層に分層できる。ロームブロック、焼土粒子、炭化物を含んでいることから埋め戻されている。

土層解説

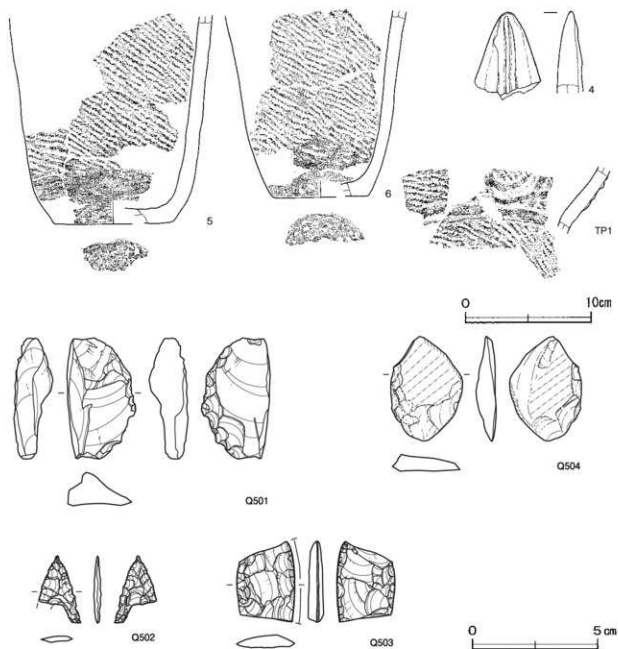
- |        |                       |          |                     |
|--------|-----------------------|----------|---------------------|
| 1 黒 色  | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量   | 8 暗 褐色   | ローム粒子少量             |
| 2 黒 褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量   | 9 黒 褐色   | ローム粒子少量             |
| 3 黒 褐色 | ローム粒子中量、炭化物微量         | 10 に近い褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量      |
| 4 暗 褐色 | ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量 | 11 黒 褐色  | 焼土粒子・炭化粒子中量、ローム粒子少量 |
| 5 暗 褐色 | ロームブロック少量、粘土ブロック微量    | 12 に近い褐色 | ローム粒子中量             |
| 6 黒 褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量        | 13 黒 褐色  | ローム粒子・炭化粒子少量        |
| 7 黒 褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量          |          |                     |

遺物出土状況 縄文土器134点（深鉢）、石器4点（削器1、石鏃1、土器研磨石器2）が、炉を中心に覆土上層から下層にかけて、散在して出土している。1は炉の西部と南部、北部の覆土上層から中層の破片が接合したものである。2は西部の覆土中層と、南部の覆土上層の破片が接合したものである。Q 501・503・504は西部の覆土上層から下層にかけて、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から中期後葉（加曾利E1式期）に比定できる。



第61図 第4号住居跡出土遺物実測図(1)



第62図 第4号住居跡出土遺物実測図(2)

第4号住居跡出土遺物観察表(第61・62図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	(21.0)	(10.6)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐色	普通	縄文L R施文→陸帯貼付	覆土 上層・中層	30% PL.12
2	縄文土器	深鉢	-	(19.4)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子・赤色粒子	灰褐色	普通	縄文R L施文→陸帯貼付→陸帯線沈線	覆土 上層・中層	10% PL.12
3	縄文土器	深鉢	-	(8.2)	-	長石・石英・雲母・小礫	にぶい褐色	普通	口縁部正面・右側面にC字文	覆土中	5% PL.12
4	縄文土器	深鉢	-	(6.6)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	明褐色	普通	陸帯貼付→沈線	覆土上層	5% PL.12
5	縄文土器	深鉢	-	(16.5)	(9.3)	長石・石英・雲母・赤色粒子・小礫	赤褐色	普通	縄文L R施文	覆土中	20%
6	縄文土器	深鉢	-	(14.7)	(7.6)	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐色	普通	縄文L R施文	覆土 上層・中層	20%

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP1	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐色	縄文L R施文→陸帯貼付	覆土中	PL.13



番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 501	削器	4.8	2.7	1.6	16.3	チャート	刃部押圧剥離	覆土下層	PL16
Q 502	石錐	2.7	(1.7)	0.3	(0.7)	チャート	両面押圧剥離 凹溝無茎式	覆土中	PL16
Q 503	研磨石器	3.2	2.3	0.6	5.3	頁岩	尖頭部再利用 研磨痕	覆土上層	PL16
Q 504	研磨石器	4.2	2.9	0.8	8.4	チャート	研片素材 全体に著しい研磨痕	覆土中層	PL16

(2) 陥し穴

第1号陥し穴 (第63図)

**位置** 調査区南部のD 2 f6区、標高32.0mの台地平坦部に位置している。

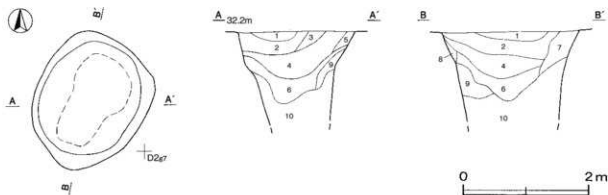
**規模と形状** 長径2.20m、短径1.78mの楕円形で、長径方向はN-23°-Eである。深さ140cmで、湧水による危険と崩落の危険から調査を断念した。短径方向の断面は、逆台形と推定される。壁は、外傾して立ち上がっている。

**覆土** 10層に分層できる。第1～9層は、周囲から流れ込んだ堆積状況から自然堆積である。第10層は、ロームブロックを含んでいることから埋め戻されている。

**土層解説**

- |       |                |       |                |
|-------|----------------|-------|----------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量   | 6 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 7 灰褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 3 灰褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量   | 8 褐色  | 炭化粒子微量         |
| 4 黒褐色 | 炭化粒子少量、ローム粒子微量 | 9 灰褐色 | ローム粒子微量        |
| 5 灰褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 10 褐色 | ロームブロック少量      |

**所見** 遺物は出土していないが、遺構の形状から縄文時代と考えられる。



第63図 第1号陥し穴実測図

第2号陥し穴 (第64図)

**位置** 調査区南部のE 2 e6区、標高32.0mの台地平坦部に位置している。

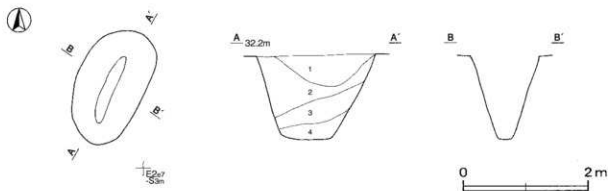
**規模と形状** 長径1.91m、短径1.11mの楕円形で、長径方向はN-22°-Eである。深さは133cmで、短径方向の断面はV字状である。壁は、外傾して立ち上がっている。

**覆土** 4層に分層できる。第1層は、周囲から流れ込んだ堆積状況から自然堆積である。第2～4層は、ロームブロックや鹿沼バミスを含んでいることから埋め戻されている。

**土層解説**

- |       |                   |        |                        |
|-------|-------------------|--------|------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子微量、炭化粒子極めて微量 | 3 極暗褐色 | ロームブロック・鹿沼バミス微量        |
| 2 褐色  | 黒色粒子少量、ロームブロック微量  | 4 褐色   | ロームブロック少量、鹿沼バミス・黒色粒子微量 |

所見 遺物は出土していないが、遺構の形状から縄文時代と考えられる。



第64図 第2号陥し穴実測図

### 第3号陥し穴 (第65図)

位置 調査区南部のE 2d4区、標高31.9mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第78号土坑に、西側の一部を掘り込まれている。

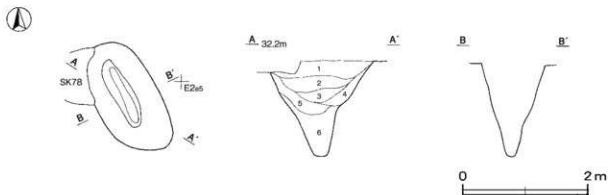
規模と形状 長径1.97m、短径1.11mの楕円形で、長径方向はN-34°-Wである。深さは146cmで、短径方向の断面はV字状である。壁は、外傾して立ち上がっている。

覆土 6層に分層できる。第1～5層は、周囲から流れ込んだ堆積状況から自然堆積である。第6層は、ロームブロックを含んでいることから埋め戻されている。

#### 土層解説

- |                     |                   |
|---------------------|-------------------|
| 1 灰 褐色 ローム粒子微量      | 4 褐 色 ローム粒子微量     |
| 2 黒 褐色 ローム粒子・炭化粒子微量 | 5 灰 褐色 ローム粒子少量    |
| 3 灰 褐色 ローム粒子・炭化粒子微量 | 6 にぶい褐色 ロームブロック微量 |

所見 遺物は出土していないが、遺構の形状から縄文時代と考えられる。



第65図 第3号陥し穴実測図

### 第4号陥し穴 (第66図)

位置 調査区南部のE 1f8区、標高31.7mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径1.74m、短径1.24mの楕円形で、長径方向はN-9°-Wである。深さは106cmで、短径方

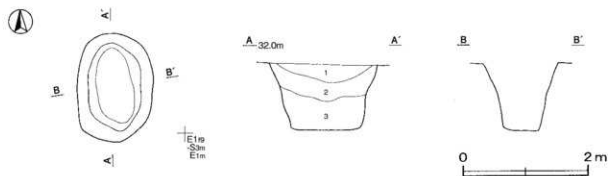
向の断面は逆台形である。壁は、外傾して立ち上がっている。

**覆土** 3層に分層できる。第1層は、周囲から流れ込んだ堆積状況から自然堆積である。第2・3層はレンズ状の堆積状況を示しているが、色調やロームブロックを含んでいることから埋め戻されている。

**土層解説**

- |        |              |      |           |
|--------|--------------|------|-----------|
| 1 灰 褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 3 褐色 | ロームブロック微量 |
| 2 褐色   | ローム粒子・炭化粒子微量 |      |           |

**所見** 遺物は出土していないが、遺構の形状から縄文時代と考えられる。



第66図 第4号陥し穴実測図

**第5号陥し穴 (第67図)**

**位置** 調査区南部のE1h8区、標高31.8mの台地平坦部に位置している。

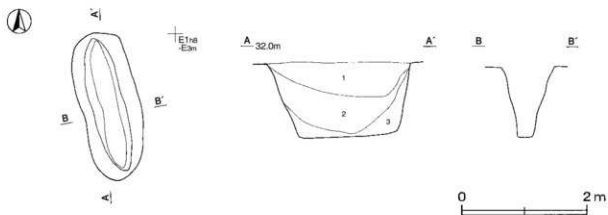
**規模と形状** 長径2.40m、短径0.96mの楕円形で、長径方向はN-10°-Wである。深さは112cmで、短径方向の断面はV字状である。壁は、外傾して立ち上がっている。

**覆土** 3層に分層できる。周囲から流れ込んだ堆積状況から自然堆積である。

**土層解説**

- |        |                |        |        |
|--------|----------------|--------|--------|
| 1 灰 褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量   | 3 灰 褐色 | 炭化粒子微量 |
| 2 褐色   | ローム粒子少量、炭化粒子微量 |        |        |

**所見** 遺物は出土していないが、遺構の形状から縄文時代と考えられる。



第67図 第5号陥し穴実測図

### 第6号陥し穴 (第68図)

**位置** 調査区南部のE 1 f0区、標高31.7mの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第3号住居に掘り込まれている。

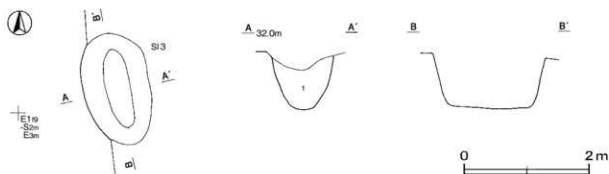
**規模と形状** 長径1.82m、短径1.07mの楕円形で、長径方向はN-12°-Wである。深さは86cmで、短径方向の断面はU字状である。壁は、外傾して立ち上がっている。

**覆土** 単一層である。周囲から流れ込んだ自然堆積である。

#### 土層解説

1 褐色、ローム粒子少量、炭化粒子微量

**所見** 遺物は出土していないが、遺構の形状から縄文時代と考えられる。



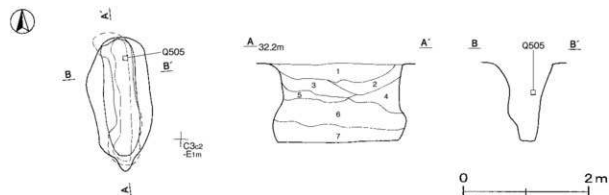
第68図 第6号陥し穴実測図

### 第7号陥し穴 (第69・70図)

**位置** 調査区中央部のC 3 b1区、標高31.9mの台地平坦部に位置している。

**規模と形状** 長径2.16m、短径0.98mの不整楕円形で、長径方向はN-4°-Wである。深さは125cmで、短径方向の断面はV字状である。南北の壁は、下半が内傾して立ち上がっている。

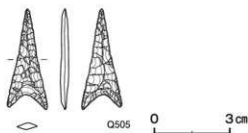
**覆土** 7層に分層できる。第1～5層は、周囲から流れ込んだ堆積状況から自然堆積である。第6・7層は、ロームブロックや鹿沼バミスを含んでいることや不自然な堆積状況であることから埋め戻されている。



第69図 第7号陥し穴実測図

土層解説

- 1 黒 褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 2 暗 褐色 ロームブロック少量・炭化粒子微量
- 3 暗 褐色 ロームブロック少量
- 4 黒 褐色 ロームブロック中量
- 5 黒 褐色 ロームブロック少量
- 6 褐 褐色 ロームブロック多量
- 7 黒 褐色 ロームブロック・鹿沼バミス中量



第70図 第7号陥し穴出土遺物実測図

遺物出土状況 石器1点(石鏃)が、覆土中層から出土している。

所見 出土遺物と遺構の形状から、縄文時代と考えられる。

第7号陥し穴出土遺物観察表(第70図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q505	石鏃	4.0	1.6	0.4	1.3	珪質頁岩	両面押圧割離 凹基無茎式	覆土中層	PL16

第8号陥し穴(第71図)

位置 調査区中央部のE3a3区、標高32.0mの台地平坦部に位置している。

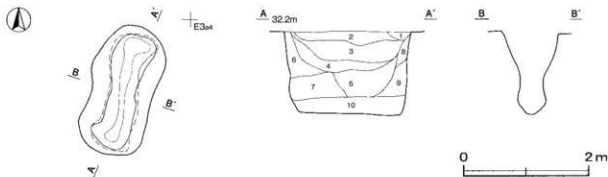
規模と形状 長径2.10m、短径1.08mの不整形円形で、長径方向は $N-18^{\circ}-E$ である。深さは131cmで、短径方向の断面はV字状である。南北の壁は、下半が内増して立ち上がっている。

覆土 10層に分層できる。第1～3層は、周囲から流れ込んだ堆積状況から自然堆積である。第4～10層は、ロームブロックが目立つことから埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗 褐色 ロームブロック少量
- 2 黒 褐色 ローム粒子微量
- 3 暗 褐色 ローム粒子少量
- 4 にふい黄褐色 ロームブロック中量
- 5 にふい黄褐色 ロームブロック多量
- 6 褐 褐色 ロームブロック中量
- 7 黒 褐色 ロームブロック中量
- 8 褐 褐色 ロームブロック多量
- 9 にふい黄褐色 ロームブロック中量、鹿沼バミス微量
- 10 黄 褐色 鹿沼バミス中量、ローム粒子少量

所見 遺物は出土していないが、遺構の形状から縄文時代と考えられる。



第71図 第8号陥し穴実測図

第9号陥し穴(第72図)

位置 調査区中央部のB3g5区、標高31.9mの台地緩斜面部に位置している。

規模と形状 長径1.64m、短径1.36mの楕円形で、長径方向は $N-25^{\circ}-E$ である。深さ158cmで、湧水に

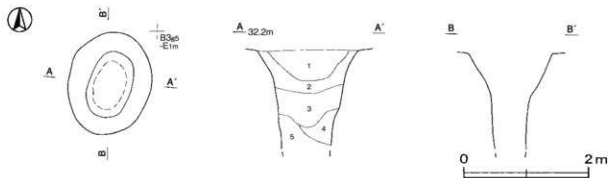
よる危険と崩落の危険から調査を断念した。短径方向の断面は、漏斗形と推定される。壁の下部は、ほぼ直立し、上部はラッパ状に開いている。

**覆土** 5層に分層できる。第1・2層は、周囲から流れ込んだ堆積状況から、自然堆積である。第3～5層は、ロームブロックが目立つことから埋め戻されている。

**土層解説**

- |         |                |         |                   |
|---------|----------------|---------|-------------------|
| 1 黒 褐 色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 4 黒 褐 色 | ロームブロック中量、鹿沼バミス微量 |
| 2 黒 褐 色 | ロームブロック少量      | 5 黒 褐 色 | ロームブロック中量、鹿沼バミス少量 |
| 3 褐 色   | ロームブロック中量      |         |                   |

**所見** 遺物は出土していないが、遺構の形状から縄文時代と考えられる。



第72図 第9号陥し穴実測図

**第10号陥し穴（第73図）**

**位置** 調査区北部のB3b7区、標高317mの台地緩斜面部に位置している。

**規模と形状** 長径1.94m、短径1.81mの円形である。深さ135cmで、湧水による危険と崩落の危険から調査を断念した。断面は、V字状と推定される。壁は、外傾して立ち上がっている。

**覆土** 6層に分層できる。第1～4層は、周囲から流れ込んだ堆積状況から自然堆積である。第5・6層は、ロームブロックが目立つことから埋め戻されている。

**土層解説**

- |         |               |         |                  |
|---------|---------------|---------|------------------|
| 1 黒 褐 色 | ローム粒子少量、炭化物微量 | 4 暗 褐 色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 2 黒 褐 色 | 炭化物少量、ローム粒子微量 | 5 褐 色   | ロームブロック多量        |
| 3 黒 褐 色 | ロームブロック・炭化物少量 | 6 褐 色   | ロームブロック中量        |

**所見** 遺物は出土していないが、遺構の形状から縄文時代と考えられる。

**第11号陥し穴（第73図）**

**位置** 調査区北部のB3a8区、標高317mの台地緩斜面部に位置している。

**規模と形状** 長径2.23m、短径1.68mの楕円形で、長径方向はN-34°-Wである。深さ142cmで、湧水による危険と崩落の危険から調査を断念した。短径方向の断面は、V字状と推定される。壁は、外傾して立ち上がっている。

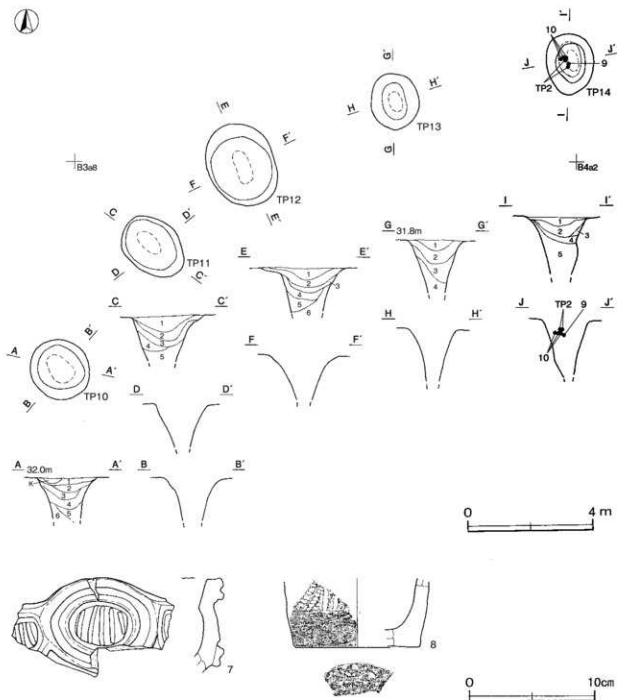
**覆土** 5層に分層できる。第1～3層は、周囲から流れ込んだ堆積状況から自然堆積である。第4・5層は、ロームブロックが目立つことから埋め戻されている。

**土層解説**

- |         |                |       |                   |
|---------|----------------|-------|-------------------|
| 1 暗 褐 色 | ローム粒子中量、炭化粒子少量 | 4 褐 色 | ロームブロック中量、鹿沼バミス微量 |
| 2 黒 褐 色 | ロームブロック・炭化物少量  | 5 褐 色 | ロームブロック中量         |
| 3 暗 褐 色 | ローム粒子中量、炭化粒子微量 |       |                   |

遺物出土状況 縄文土器片7点(深鉢)が、覆土上層から出土している。

所見 出土土器から縄文時代中期後葉(加曾利E1式期)以前と考えられる。



第73図 第10～14号陥し穴・第11号陥し穴出土遺物実測図

第11号陥し穴出土遺物観察表(第73図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
7	縄文土器	深鉢	-	(7.6)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	赤褐色	普通	縦位沈線→隆帯貼付→隆帯上・隆帯輪沈線	覆土上層	5% PL12
8	縄文土器	深鉢	-	(5.5)	(10.0)	長石・石英・雲母	褐色	普通	縄文R.L.施文→沈線	覆土上層	5%

### 第12号陥し穴（第73図）

**位置** 調査区北部のB3a9区、標高31.7mの台地緩斜面部に位置している。

**規模と形状** 長径2.71m、短径2.14mの楕円形で、長径方向はN-20°-Wである。深さ138cmで、湧水による危険と崩落の危険から調査を断念した。短径方向の断面は、V字状と推定される。壁は、外傾して立ち上がっている。

**覆土** 6層に分層できる。第1～4層は、周囲から流れ込んだ堆積状況から自然堆積である。第5・6層は、ロームブロックが目立つことから埋め戻されている。

#### 土層解説

- |       |                 |       |                |
|-------|-----------------|-------|----------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子中量、炭化物少量   | 4 暗褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | 炭化物・ローム粒子少量     | 5 褐色  | ロームブロック中量      |
| 3 黒褐色 | 炭化物少量、ロームブロック微量 | 6 褐色  | ロームブロック多量      |

**遺物出土状況** 縄文土器片2点（深鉢）が覆土上層から出土しているが、細片のため図示できない。

**所見** 出土土器から縄文時代中期後葉以前と考えられる。

### 第13号陥し穴（第73図）

**位置** 調査区北部のA3j0区、標高31.5mの台地緩斜面部に位置している。

**規模と形状** 長径1.79m、短径1.51mの楕円形で、長径方向はN-18°-Wである。深さ167cmで、湧水による危険と崩落の危険から調査を断念した。短径方向の断面は、V字状と推定される。壁は、外傾して立ち上がっている。

**覆土** 4層に分層できる。第1～3層は、周囲から流れ込んだ堆積状況から自然堆積である。第4層は、ロームブロックが目立つことから埋め戻されている。

#### 土層解説

- |       |                |       |                  |
|-------|----------------|-------|------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子少量 | 3 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | 炭化物・ローム粒子少量    | 4 黄褐色 | ロームブロック中量        |

**所見** 遺物は出土していないが、遺構の形状から縄文時代と考えられる。

### 第14号陥し穴（第73・74図）

**位置** 調査区北部のA4j1区、標高31.5mの台地緩斜面部に位置している。

**重複関係** 第2号石器集中地点を掘り込んでいる。

**規模と形状** 長径1.96m、短径1.49mの楕円形で、長径方向はN-4°-Wである。深さ183cmで、湧水による危険と崩落の危険から調査を断念した。短径方向の断面は、V字状と推定される。壁は、外傾して立ち上がっている。

**覆土** 5層に分層できる。第1～4層は、周囲から流れ込んだ堆積状況から自然堆積である。第5層は、ロームブロックが目立つことから埋め戻されている。

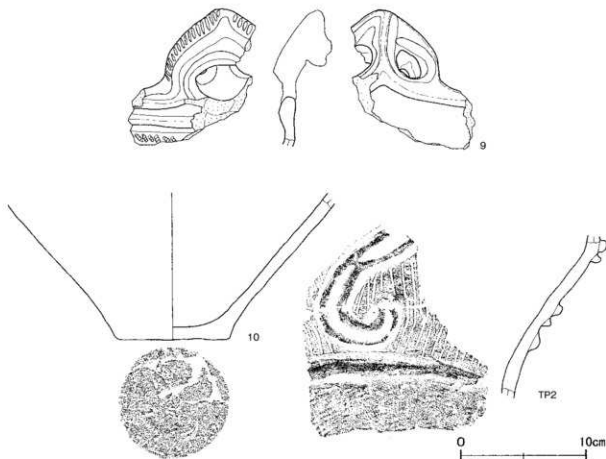
#### 土層解説

- |       |               |       |                  |
|-------|---------------|-------|------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量  | 4 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・炭化物少量 | 5 褐色  | ロームブロック多量        |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量     |       |                  |

**遺物出土状況** 縄文土器片10点（深鉢）が、覆土上層から中層にかけて出土している。

**所見** 出土土器から縄文時代中期後葉（加曾利E1式期）以前と考えられる。第10～14号陥し穴については、調査区北部のA4j1～B3b7、標高31.5～31.7mの台地緩斜面部に弧状に配置されている。位置関係と遺構の形状が類似していることから、5基の陥し穴は縄文時代中期後葉以前に機能していたものと考えられる。





第74図 第14号陥し穴出土遺物実測図

第14号陥し穴出土遺物観察表(第74図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
9	縄文土器	深鉢	-	(10.9)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子・小礫	にひい黄褐色	普通	縄文R.L.施文→隆帯貼付→隆帯隠沈線	覆土中層	10% PL12
10	縄文土器	浅鉢	-	(11.7)	82	長石・石英・雲母・赤色粒子・小礫	明赤褐色	普通	底部・胴部無文	覆土上層	20%

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP2	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子・小礫	赤褐色	隠位沈線→隆帯貼付→隆帯土・隆帯隠沈線	覆土上層	PL13

### 第15号陥し穴(第75図)

**位置** 調査区北部のA4h5区、標高31.2mの台地緩斜面部に位置している。

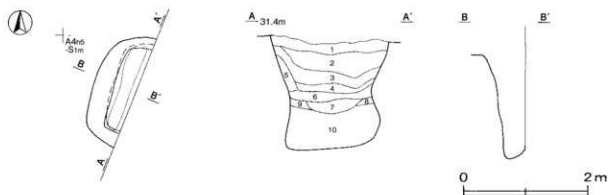
**規模と形状** 東部が調査区域外のため、確認できた部分での長径が1.86m、短径が0.66mの不整楕円形と推定され、長径方向はN-20°-Eである。深さは168cmで、南北の壁は下半が内嚙して立ち上がっている。

**覆土** 10層に分層できる。第1～3層は、周囲から流れ込んだ堆積状況から自然堆積である。第4～10層は、ロームブロックやローム粒子が目立つことから埋め戻されている。

#### 覆土層解説

- |   |        |               |    |        |                   |
|---|--------|---------------|----|--------|-------------------|
| 1 | 暗褐色    | ローム粒子少量、炭化物微量 | 6  | にひい黄褐色 | ロームブロック少量         |
| 2 | 暗褐色    | ロームブロック微量     | 7  | 褐色     | ロームブロック多量         |
| 3 | 暗褐色    | ロームブロック少量     | 8  | 暗褐色    | ローム粒子多量           |
| 4 | にひい黄褐色 | ロームブロック中量     | 9  | 暗褐色    | ロームブロック中量         |
| 5 | にひい黄褐色 | ロームブロック多量     | 10 | にひい黄褐色 | ロームブロック多量、鹿沼パミス微量 |

**遺物出土状況** 縄文土器片3点（深鉢）が覆土上層から出土しているが、細片のため図示できない。  
**所見** 出土土器から縄文時代中期後葉以前と考えられる。



第75図 第15号陥し穴実測図

#### 第16号陥し穴（第76・77図）

**位置** 調査区中央部のB3i9区、標高320mの台地緩斜面部に位置している。

**規模と形状** 長径2.10m、短径1.58mの楕円形で、長径方向はN-10°-Eである。深さ105cmで、湧水による危険と崩落の危険から調査を断念した。短径方向の断面は、漏斗形と推定される。壁はほぼ直立し、上部はラック状に開いている。

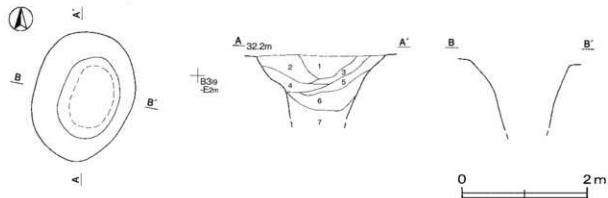
**覆土** 7層に分層できる。第1・2層は、周囲から流れ込んだ堆積状況から自然堆積である。第3～7層は、ロームブロックやローム粒子が目立つことから埋め戻されている。

##### 土層解説

- |       |                  |       |                      |
|-------|------------------|-------|----------------------|
| 1 黒褐色 | 炭化粒子少量、ロームブロック微量 | 5 黒褐色 | ロームブロック多量、炭化粒子微量     |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量     | 6 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子・鹿沼パミス少量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化物微量  | 7 暗褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子・鹿沼パミス微量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子中量   |       |                      |

**遺物出土状況** 縄文土器9点が、覆土上層から出土している。

**所見** 出土土器から縄文時代中期後葉以前と考えられる。



第76図 第16号陥し穴実測図



第77図 第16号陥し穴出土遺物実測図

第16号陥し穴出土遺物観察表(第77図)

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP3	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	暗黒	縄文R.L.施文→沈線・隆帯貼付→隆帯編沈線	覆土上層	PL13
TP4	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	灰黒	縄文R.L.施文→沈線	覆土上層	

表2 縄文時代陥し穴一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		覆土	断面	主な出土遺物	備考 (新旧関係(古→新))
				長径×短径(m)	深さ(cm)				
1	D 2 i6	N-23°-E	楕円形	2.20 × 1.78	(140)	人為→自然	(逆台形)	-	
2	E 2 e6	N-22°-E	楕円形	1.91 × 1.11	133	人為→自然	V字	-	
3	E 2 o4	N-34°-W	楕円形	1.97 × 1.11	146	人為→自然	V字	-	本跡→SK78
4	E 1 i8	N-9°-W	楕円形	1.74 × 1.24	106	人為→自然	逆台形	-	
5	E 1 i8	N-10°-W	楕円形	2.40 × 0.96	112	自然	V字	-	
6	E 1 i0	N-12°-W	楕円形	1.82 × 1.07	86	自然	U字	-	本跡→S 1 3
7	C 3 b1	N-4°-W	不整楕円形	2.16 × 0.98	125	人為→自然	V字	石器	
8	E 3 a3	N-18°-E	不整楕円形	2.10 × 1.08	131	人為→自然	V字	-	
9	B 3 g5	N-25°-E	楕円形	1.64 × 1.36	(158)	人為→自然	(漏斗)	-	
10	B 3 b7	-	円形	1.94 × 1.81	(135)	人為→自然	(V字)	-	
11	B 3 a8	N-34°-W	楕円形	2.23 × 1.68	(142)	人為→自然	(V字)	縄文土器	
12	B 3 a9	N-20°-W	楕円形	2.71 × 2.14	(138)	人為→自然	(V字)	縄文土器	
13	A 3 j0	N-18°-W	楕円形	1.79 × 1.51	(167)	人為→自然	(V字)	-	
14	A 4 j1	N-4°-W	楕円形	1.96 × 1.49	(183)	人為→自然	(V字)	縄文土器	S S 2→本跡
15	A 4 i5	N-20°-E	[不整楕円形]	(1.86) × (0.66)	(168)	人為→自然	-	縄文土器	
16	B 3 i9	N-10°-E	楕円形	2.10 × 1.58	(105)	人為→自然	(漏斗)	縄文土器	

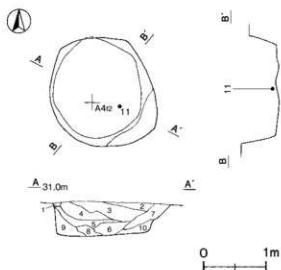
## (3) 土坑

## 第103号土坑(第78・79図)

**位置** 調査区南部のA 4 e2区、標高30.8mの台地緩斜面部に位置している。北東約2.7mに第4号住居路が位置している。

**規模と形状** 長径1.97m、短径1.69mの楕円形で、長径方向はN-51°-Wである。深さは56cmで、底面は平坦である。壁はほぼ直立しており、南東壁の上部は緩やかに立ち上がっている。

**覆土** 10層に分層できる。ロームブロック、ローム粒子、焼土粒子、炭化物、炭化粒子を含んでいることや不自然な堆積状況から埋め戻されている。底面付近の第6層は、締りが弱い。



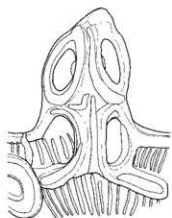
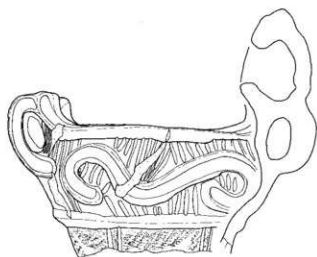
第78図 第103号土坑実測図

土層解説

- |    |        |                       |
|----|--------|-----------------------|
| 1  | にがい黄褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量        |
| 2  | 黒褐色    | ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量   |
| 3  | 黒褐色    | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量   |
| 4  | 黒褐色    | ロームブロック多量、炭化粒子微量      |
| 5  | 黒褐色    | ロームブロック中量、炭化粒子微量      |
| 6  | 黒褐色    | ロームブロック少量、炭化物微量（締り弱い） |
| 7  | 暗褐色    | ロームブロック・炭化物少量         |
| 8  | 暗褐色    | ロームブロック少量、炭化粒子微量      |
| 9  | 暗褐色    | ロームブロック中量、炭化粒子微量      |
| 10 | 暗褐色    | ロームブロック中量、炭化粒子少量      |

遺物出土状況 縄文土器片 26 点（深鉢）が、覆土上層から下層にかけて出土している。11 は、南東部の覆土下層から逆位で出土している。

所見 底面付近の覆土の締りが弱く、腐食性の自然遺物が埋められていた可能性がある。時期は、出土土器から縄文時代中期後葉（加曾利 E 1 時期）に比定できる。



第79図 第103号土坑出土遺物実測図

第103号土坑出土遺物観察表（第79図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
11	縄文土器	深鉢	16.5	(199)	-	長石・石英・雲母	にがい黄褐色	普通	縦位沈降→横帯粘付→縦位沈降・横帯上沈降 縦帯粘付子向横面C字文	覆土下層	60% PL12

3 古墳時代の遺構と遺物

今回の調査で確認した当時代の遺構は、住居跡3軒、土坑2基、炉穴跡1基である。以下、遺構の特徴と出土した遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

第1号住居跡（第80図）

位置 調査区南部のD 2 c0区、標高32.0mの台地平坦部に位置している。

**規模と形状** 長軸5.47 m、短軸5.18 mの方形で、主軸方向はN-72°-Wである。壁高は13～32cmで、ほぼ直立している。

**床** 平坦な貼床で、踏み固められていない。貼床は、ローム粒子を含む褐色土を2～15cm埋土して構築されている。

また、出入り口の右脇には、高まりが設けられている。一部掘り残した地山に、粘土粒を混ぜた褐色土や灰褐色土、黒色土を盛り、床面から高さ15cm、壁から幅約30cmの平坦面が築かれている。

**竈** 西壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで114cmで、燃焼部幅は40cmである。袖部は、粘土ブロック、粘土粒子を主体とした第9～13層を積み上げて構築されている。火床部は床面を3cmほど皿状に掘り込み、ローム粒子を含んだ第14層を埋土して構築されており、火床面は赤変硬化している。煙道部は壁を掘り込んでおらず、火床部から外傾して壁の内側に立ち上がっている。

**竈土層解説**

1 灰 褐色 粘土粒子少量	11 暗 褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
2 灰 褐色 粘土粒子中量、焼土粒子微量	12 灰 褐色 粘土ブロック多量、焼土粒子少量、ローム粒子微量
3 灰 褐色 粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	13 灰 褐色 ローム粒子・粘土粒子少量、焼土粒子微量
4 にいれ褐色 焼土粒子・粘土粒子少量	14 灰 褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
5 暗赤褐色 粘土粒子・粘土粒子少量	15 にいれ褐色 焼土粒子少量
6 にいれ褐色 焼土粒子微量	16 灰 褐色 ロームブロック・焼土粒子微量
7 灰 褐色 焼土粒子少量、ロームブロック微量	17 灰 褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
8 灰 褐色 粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	18 褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
9 灰黄褐色 粘土ブロック多量、焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量	19 褐 灰色 粘土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子微量
10 灰黄褐色 粘土ブロック多量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	20 灰 褐色 ローム粒子微量
	21 黒 色 ローム粒子微量

**ピット** 18か所。P1～P4は深さ45～60cmで、配置から主柱穴である。P5は深さ50cmで、位置から出入口施設に伴うピットと考えられる。P6～P18は、深さもまちまちであり、性格不明である。

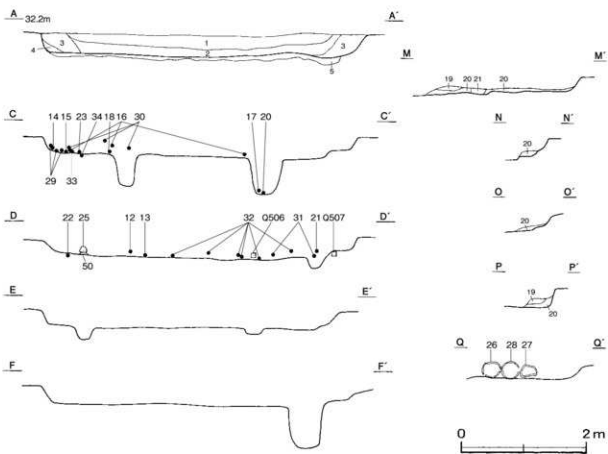
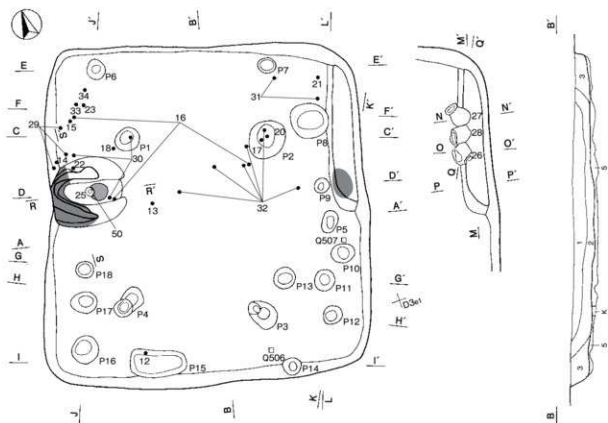
**覆土** 4層に分層できる。第1層は、周囲から流れ込んだ堆積状況から自然堆積である。第2～4層はレンズ状の堆積状況を示しているが、ローム粒子や焼土ブロックを含んでいることから、埋め戻されている。第5層は、貼床の構築土である。

**土層解説**

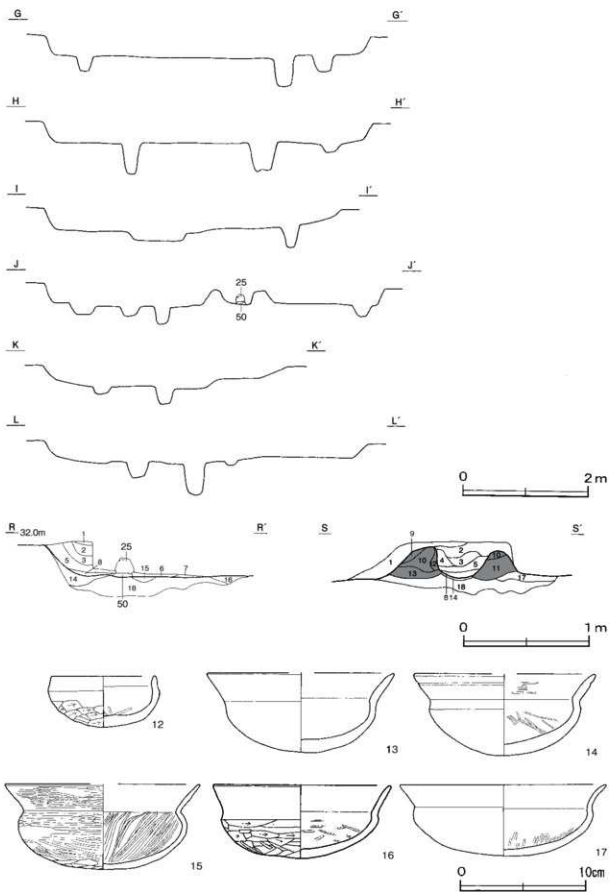
1 黒 色 ローム粒子・焼土粒子微量	4 褐 色 ローム粒子少量
2 灰 褐色 焼土ブロック・ローム粒子微量	5 褐 色 ロームブロック微量
3 褐色 ローム粒子微量	

**遺物出土状況** 土師器片622点(坏147、椀1、埴3、高坏7、甕1、鉢1、甕459、瓶3)、須恵器片1点、石器2点(敲石、砥石)、鉄製品(不明鉄製品)が出土している。13～16・18・21・23・29～32・34は、北部の覆土中層から床面にかけて出土している。12はP15上部の覆土下層から、17はP2の覆土下層から、20はP2の底面からそれぞれ出土している。19・24は、覆土中から出土している。26～28は床面の高まりから3個体並んだ状態で出土しており、遺棄されたものと考えられる。33は竈北部の床面から逆位で出土している。25は竈の火床部から逆位で出土しており、支脚として利用されていたと考えられる。また、25は50の上に重なって逆位で出土しており、支脚の高さを調節したものと考えられる。22は竈の袖部から出土しており、竈を付設する際に構築材として利用したものとみられる。Q506はP3付近の覆土下層、Q507は出入口ピット付近の覆土下層から、それぞれ出土している。

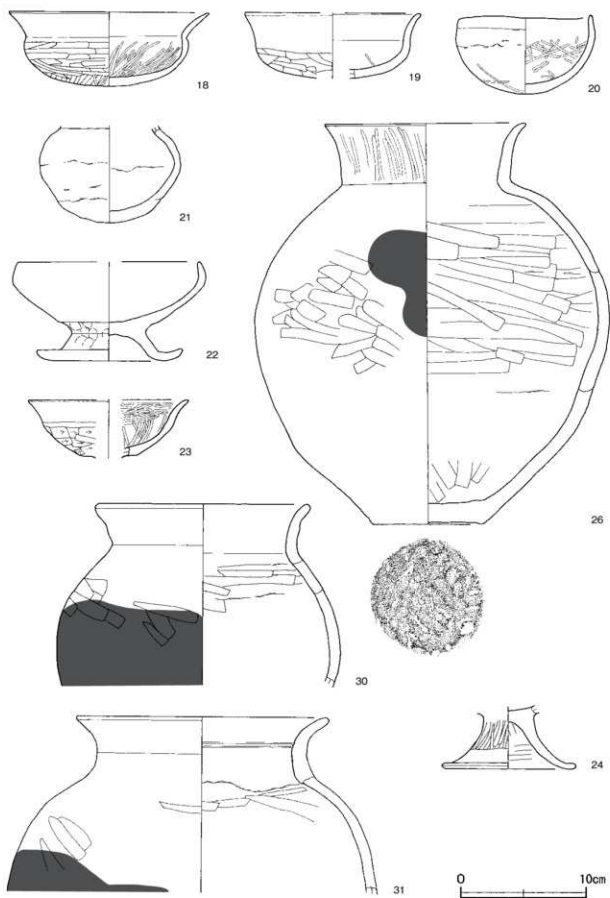
**所見** 出入口の脇床面に高まりを有する住居跡である。時期は、出土土器から6世紀初頭に比定できる。



第80图 第1号住居跡実測図

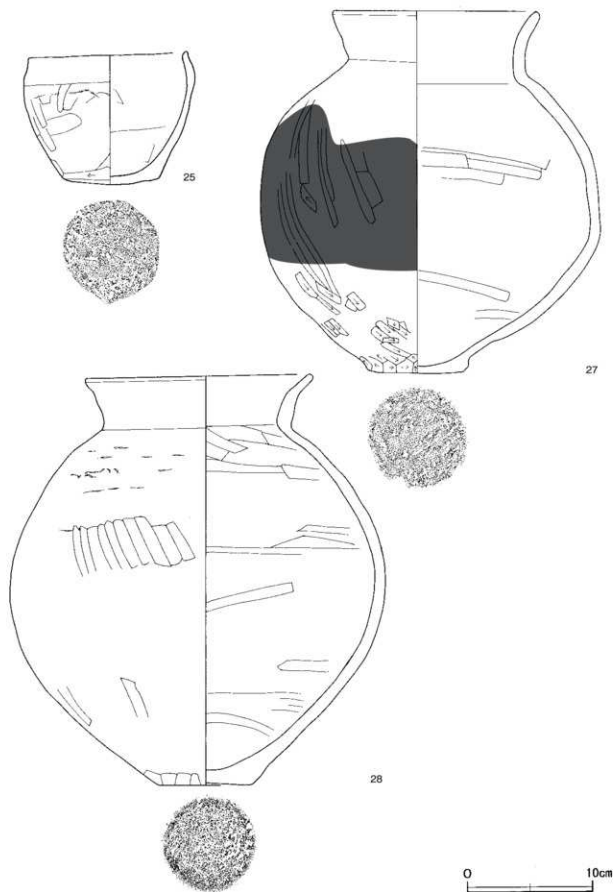


第81図 第1号住居跡・出土遺物実測図

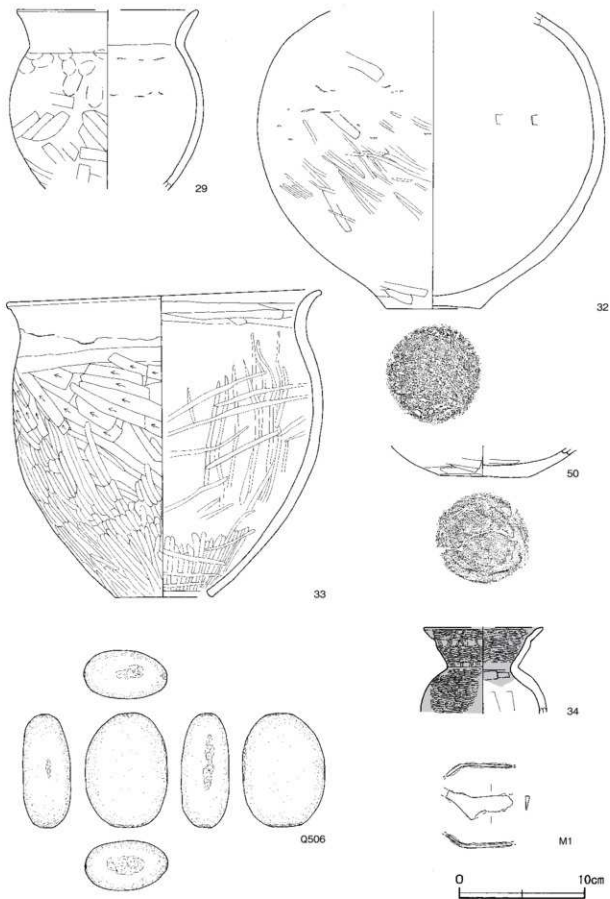


第82图 第1号住居跡出土遺物実測図(1)

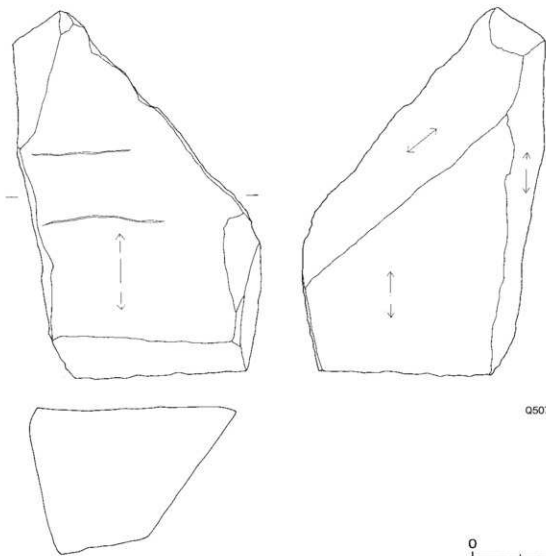




第83図 第1号住居跡出土遺物実測図(2)



第84图 第1号住居跡出土遺物実測図(3)



第85図 第1号住居跡出土遺物実測図(4)

第1号住居跡出土遺物観察表(第81~85図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
12	土師器	坏	8.1	4.1	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面へう削り 内面へう磨き	覆土下層	95% PL13
13	土師器	坏	(14.8)	6.3	-	長石・石英・雲母	にじみ赤	普通	口縁部横ナデ 体部外・内面摩耗により調整不明	床面	60%
14	土師器	坏	(14.4)	6.5	-	長石・石英・雲母	明赤	普通	口縁部横ナデ後、沈線 内面へう磨き	覆土下層	60%
15	土師器	坏	(15.3)	6.8	-	長石・石英・赤色粒子	明赤	普通	外面横位へう磨き後、底部へう削り 内面放射状へう磨き	覆土下層	60%
16	土師器	坏	13.9	5.8	-	長石・石英・雲母	明赤	普通	外面下半へう削り後、上半横ナデ 内面へう磨き	覆土中層、下層	80% PL13
17	土師器	坏	36.4	5.7	-	長石・石英・雲母	明赤	普通	体部外面摩耗により調整不明 内面放射状へう磨き	P2 覆土下層	95% PL13
18	土師器	坏	15.7	6.0	-	長石・石英・雲母	明赤	普通	体部上半へう削り後、へう磨き 内面放射状へう磨き	覆土下層	90% PL13
19	土師器	坏	(14.0)	5.2	-	長石・石英・雲母	明赤	普通	外面下半へう削り後、口縁部外・内面横ナデ 内面へう磨き	覆土中	20%
20	土師器	坏	10.5	6.3	-	長石・石英・雲母	明赤	普通	口縁部横ナデ 体部外・内面へう磨き 輪積痕	P2底面	100% PL13
21	土師器	埴	-	(7.8)	-	長石・石英・霰	にじみ赤	普通	外・内面摩耗により調整不明 輪積痕	覆土中層	60% PL14
22	土師器	高坏	(14.4)	7.9	(11.5)	長石・石英・雲母	明赤	普通	口縁部横ナデ 脚部外面ナデ	壺軸部	30% PL14
23	土師器	高坏	(12.5)	(4.5)	-	長石・石英・雲母	赤	普通	口縁部横ナデ 外面下半へう削り 内面へう磨き	覆土下層	10%
24	土師器	高坏	-	(5.1)	(10.2)	長石・石英・雲母	赤	普通	外面へう磨き後、横ナデ 内面へう削り	覆土中	40%
25	土師器	鉢	12.5	10.6	7.6	長石・石英・霰	明赤	普通	体部外面へう削り後、底部へう削り 内面へう削り	壺火床部	95% PL14

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
26	土師器	甕	15.8	32.0	8.8	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部外面へラナゲ 体部外・内面へラナゲ	床面の高まり直上	80% PL15
27	土師器	甕	16.0	28.9	6.0	長石・石英	にぶい赤褐	普通	口縁部横ナゲ 体部外面へラナゲ後 へラ削り 内面へラナゲ	床面の高まり直上	80% PL15
28	土師器	甕	17.8	32.8	7.4	長石・石英・雲母・小砂	にぶい赤褐	普通	口縁部横ナゲ 体部外・内面へラナゲ 輪積直	床面の高まり直上	90% PL15
29	土師器	甕 (14.1)	(14.3)	-	長石・石英・雲母	暗赤褐色	普通	口縁部横ナゲ 体部外面へラナゲ後 ナゲ 輪積直	覆土 中層・下層	30% PL15	
30	土師器	甕	16.6	(14.5)	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部横ナゲ 体部外・内面へラナゲ 輪積直	覆土 中層・下層	40%
31	土師器	甕	19.8	(14.0)	-	長石・石英・雲母	にぶい赤	普通	口縁部横ナゲ 体部外・内面へラナゲ 輪積直	覆土 中層・下層	30%
32	土師器	甕	-	(23.7)	7.6	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	体部外面へラナゲ後 へラ削き 内面へラナゲ 輪積直	覆土 中層・下層	50%
33	土師器	瓶	24.6	24.5	7.7	長石・石英	にぶい赤褐	普通	口縁部外面横ナゲ 体部外面へラミダキ後 へラ削り 口縁部内面へラナゲ 体部内面へラ削き	床面	95% PL14
34	土師器	罎	(9.2)	(6.7)	-	長石・石英・雲母	赤褐	普通	外面及び内面口縁部へラ削き 外・内面口縁部から頸部赤影	覆土下層	30% PL14
50	土師器	甕	-	(2.5)	7.0	長石・石英・雲母	褐	普通	外・内面へラナゲ	25直下	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 506	磁石	9.1	6.6	3.9	363.8	石灰質岩	4か所に敲打痕	覆土下層	PL17
Q 507	磁石	(39.4)	26.4	15.2	(17.2)	凝灰岩	4面使用	覆土下層	PL17

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M1	不明 焼製品	(5.3)	2.4	0.3	(5.3)	鉄	頸部が彎曲	覆土中	PL16

## 第2号住居跡 (第86～88図)

**位置** 調査区南部のE 2 b2区、標高32.0mの台地平坦部に位置している。

**規模と形状** 長軸4.07m、短軸3.93mの方形で、主軸方向はN-4'-Wである。壁高は16～28cmで、ほぼ直立している。

**床** 平坦な貼床で、踏み固められていない。貼床は、ローム粒子・ロームブロックを含む褐色土を2～16cm埋土して構築されている。

**炉** 中央部に付設されている。規模は長径93cm、短径74cmである。炉床部は床面から8cmくぼんでおり、炉床面は赤変硬化している。

### 炉土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子少量、炭化物微量      2 灰褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

**ピット** 6か所。P1～P4は深さ10～31cmで、配置から主柱穴である。P5は深さ8cm、P6は深さ46cmで、性格不明である。

**覆土** 2層に分層できる。レンズ状の堆積状況を示しているが、ロームブロックや焼土粒子、炭化粒子などを含んでいることから、埋め戻されている。第3・4層は、貼床の構築土である。

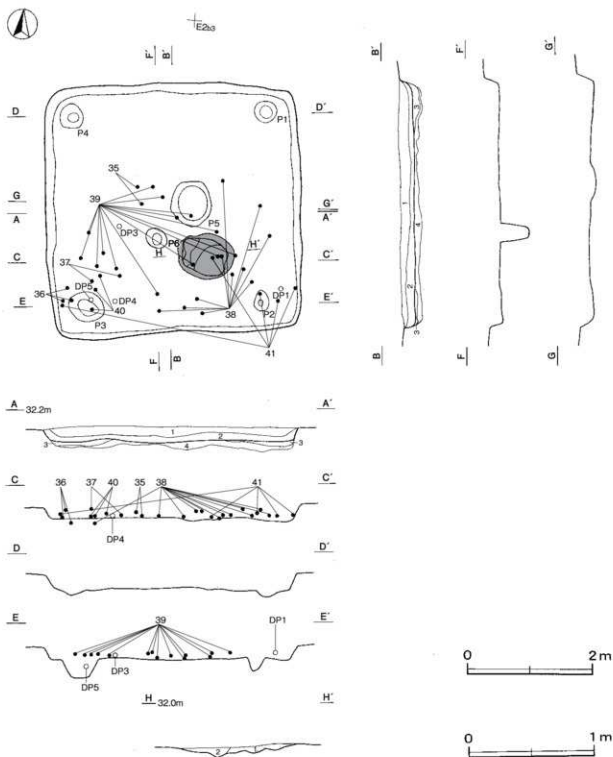
### 土層解説

- 1 灰褐色 ローム粒子・焼土粒子微量      3 褐色 ロームブロック微量  
2 灰褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量      4 褐色 ローム粒子微量

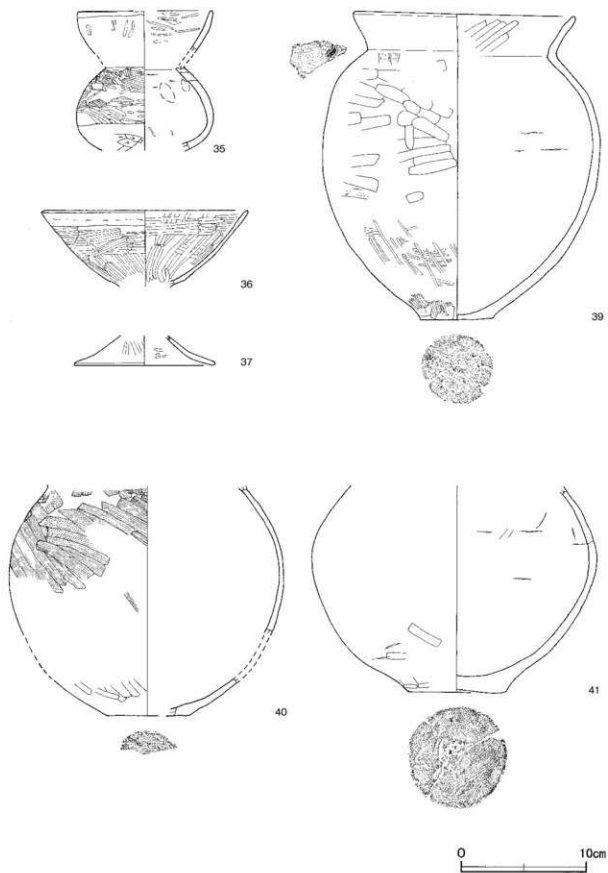
**遺物出土状況** 土師器片192点(椀13, 増1, 高坏11, 壺1, 甕166), 土製品6点(土玉4, 彫形土製品1, 不明土製品1)が、南部を中心に覆土中層から下層にかけて出土している。35は中央部の覆土中層から下層にかけて出土した破片が接合したものである。36・37・40は南西部, 38は東部から南部の覆土上層から床面にかけて散在して出土した破片が接合したものである。39は中央部から南部の覆土中層から床面にかけて散在して出土した破片が接合したものである。41は、炉および南東コーナー部と南西コーナー部覆土上層から

下層にかけて出土した破片が接合したものである。DP 1 は南東コーナー部の覆土中層、DP 2 は覆土中、DP 3 は中央部西寄りの床面、DP 4 は P 3 東部の床面から、それぞれ出土している。DP 5 は、P 3 の覆土中層から出土している。遺物は破片が多く、住居廃絶の際に投棄されたものと考えられる。

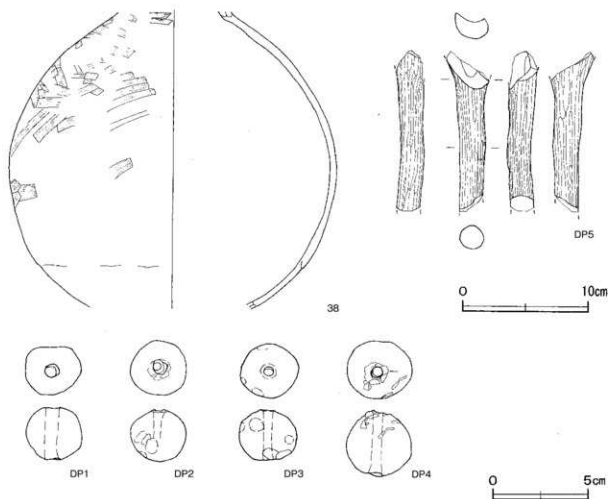
所見 時期は、出土土器から5世紀初頭に比定できる。



第86図 第2号住居跡実測図



第87图 第2号住居跡出土遺物実測図(1)



第88図 第2号住居跡出土物実測図(2)

第2号住居跡出土物観察表(第87・88図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
35	土師器	埴	(10.8)	(11.1)	-	長石・石英・雲母	明黄褐色	普通	口縁部外面横ナデ 体部外面へラ磨き後 ナデ 裏部へラ磨き 口縁部内面へラ磨き 体部内面指節部 輪積痕	覆土 中層・下層	40%
36	土師器	高坏	16.3	(6.1)	-	長石・石英・雲母	にんい黄褐色	普通	外面へラ磨き後、口縁部横ナデ 内面へラ磨き 輪積痕	覆土 中層	40%
37	土師器	高坏	-	(2.4)	(11.0)	長石・石英・雲母	にんい黄褐色	普通	外面へラ磨き後、横ナデ 内面へラ磨き	覆土 中層・下層	10%
38	土師器	壺	-	(23.9)	-	長石・石英・雲母	にんい黄褐色	普通	外面へラ調整後、ナデ 内面ナデ 輪積痕	覆土 上層・下層	30%
39	土師器	甕	17.5	24.7	5.7	長石・石英・雲母	黒褐色	普通	口縁部外面横ナデ 体部外面上半へラナデ 下手へラ磨き 口縁部内面へラナデ 輪積痕 体部外面木葉痕 成器紐状圧痕	覆土 中層	60% PL15
40	土師器	甕	-	(18.4)	(6.0)	長石・石英	橙	普通	体部上半へラ調整 底部へラナデ 内面ナデ	覆土 床面	20%
41	土師器	甕	-	(16.5)	8.0	長石・石英・雲母	橙	普通	外・内面へラナデ 輪積痕	覆土 上層・下層	30% PL15

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP1	土玉	3.0	0.7	2.8	21.1	土(長石・石英)	ナデ調整 一方向からの穿孔	覆土中層	PL16
DP2	土玉	3.0	0.7	2.8	24.0	土(長石・石英)	ナデ調整 一方向からの穿孔。貫通せず	覆土中	PL16
DP3	土玉	3.1	0.5	2.7	20.6	土(長石・石英)	ナデ調整 一方向からの穿孔	床面	PL16
DP4	土玉	3.5	0.8	3.5	34.8	土(長石・石英)	ナデ調整 一方向からの穿孔	床面	PL16

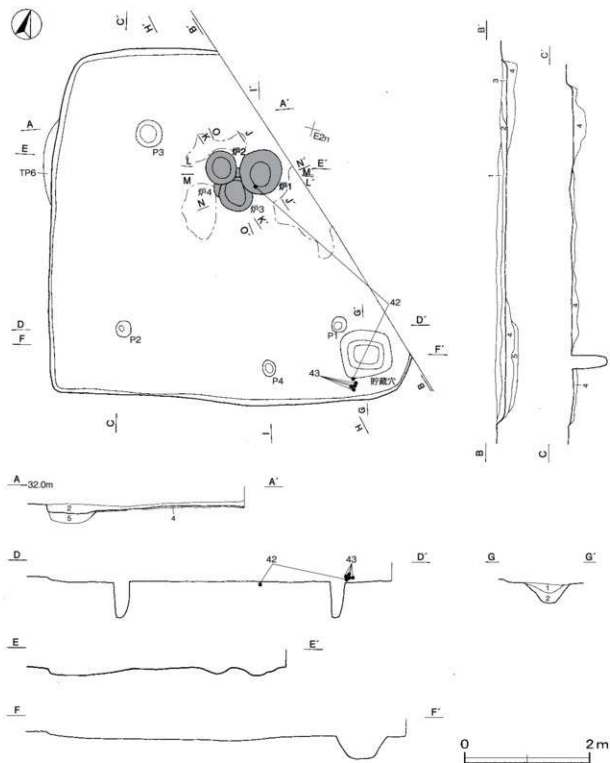
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP5	瓦形土製品	(12.8)	3.4	2.3	(66.1)	粘土	柄部へラ磨き	P3覆土 中層	PL16

第3号住居跡 (第89～91図)

位置 調査区南部のE10区、標高31.8mの台地平坦部に位置している。

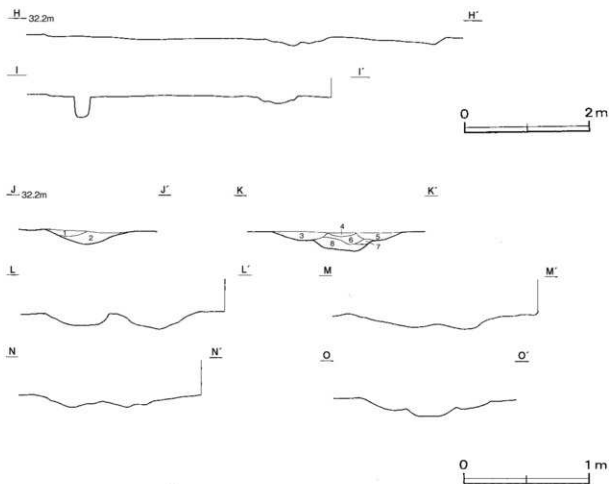
重複関係 第6号陥し穴を掘り込んでいる。

規模と形状 北東部が調査区域外のため、長軸は5.76m、短軸は5.55mしか確認できなかった。平面形は方形と推定される。主軸方向は $N-18^{\circ}-W$ である。壁高は2～12cmで、ほぼ直立している。



第89図 第3号住居跡実測図(1)





第90図 第3号住居跡実測図(2)

**床** 平坦な貼床で、炉の周辺のみ踏み固められている。貼床は、ロームブロック、ローム粒子、炭化粒子を含む褐色土を2～20cm埋土して構築されている。

**炉** 4か所。中央部の北寄りに付設されている。炉1の覆土に比べて、炉2・3・4の覆土にローム粒子が目立ち、埋め戻されたと考えられることと、炉同士の重複関係から炉4、炉3、炉2、炉1の順に構築されたものと考えられる。炉1は長径71cm、短径67cmの円形である。炉2は長径53cm、短径49cmの円形である。炉3は長径55cm、短径51cmの円形である。炉4は上部を炉1・2・3に掘り込まれているが、残存部の推定長径58cm、短径は46cmの楕円形である。炉4の第7・8層は、掘方への埋土である。

**炉1土層解説**

1 灰 褐色 焼土ブロック、炭化物・ローム粒子微量

2 黒 褐色 焼土ブロック少量、炭化粒子微量

**炉2土層解説**

3 黒 褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量

**炉3土層解説**

4 灰 褐色 ローム粒子少量、炭化物微量

6 黒 褐色 炭化物・ローム粒子少量、焼土ブロック微量

**炉4土層解説**

5 灰 褐色 ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化物微量

**炉4土層解説**

7 に近い赤褐 ローム粒子少量、焼土粒子微量

8 黒 色 焼土ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量

**ピット** 4か所。P1～P3は深さ27～57cmで、配置から支柱穴である。P4は深さ32cmで、位置から出入口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 南東コーナー付近に付設されている。平面形は隅丸方形で、壁は緩やかに立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

1 褐色 ロームブロック・炭化物微量

2 灰褐色 炭化物・ローム粒子・焼土粒子微量

覆土 3層に分層できる。ローム粒子や焼土粒子、炭化粒子などを含んでいることから埋め戻されている。

第4・5層は、貼床の構築土である。

土層解説

1 褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

4 褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

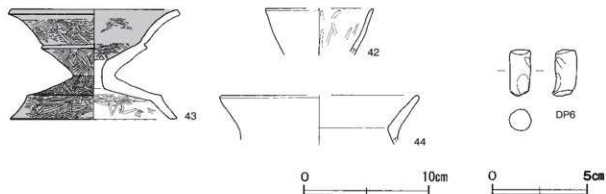
2 灰褐色 炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量

5 褐色 ロームブロック微量

3 褐色 炭化物・ローム粒子・焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片42点(埴1, 器台1, 高坏8, 甕32), 土製品1点(不明土製品)が、貯蔵穴と炉および北部を中心に出土している。42は、炉1の覆土中と貯蔵穴南部の覆土中から出土した破片が接合したものである。43は貯蔵穴南部の覆土中、44・DP6は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から古墳時代前期に比定できる。



第91図 第3号住居跡出土遺物実測図

第3号住居跡出土遺物観察表 (第91図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
42	土師器	埴	(8.4)	(3.7)	-	長石・石英・雲母	黄褐色	普通	外面摩耗により調整不明 内面へう磨き	炉1覆土中 貯蔵穴南部	10%
43	土師器	器台	13.2	8.8	13.3	長石・石英・雲母	赤褐色	普通	口縁部横子ナデ外・内面ハテ調整後、へう磨き外・内面去彫	貯蔵穴南部	50% PL14
44	土師器	甕	(15.6)	(3.9)	-	長石・石英・雲母	赤褐色	普通	外・内面摩耗により調整不明	覆土中	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP6	不明土製品	2.5	1.2	1.3	3.8	土(長石・石英・雲母)	ナデ調整	覆土中	

表3 古墳時代住居跡一覧表

番号	位置	平面形	主軸方向	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	内部施設				覆土	主な出土遺物	時期	備考 重複関係 (古→新)	
							主貯穴	出入口	ゼット	炉・竈					
1	D 2 c d	方形	N-72°-W	5.47×5.18	13-32	平埴	4	1	13	竈1	-	人為→自然	土師器、磁器、石製、鉄製品	6世紀初頭	
2	E 2 b 2	方形	N-4°-W	4.07×3.93	16-28	平埴	4	-	2	炉1	-	人為	土師器、土製品	5世紀初頭	
3	E 1 f 0	[方形]	N-18°-W	(5.76)×(5.55)	2-12	平埴	3	1	-	炉4	1	人為	土師器、土製品	4世紀	TP 6→本跡

(2) 土坑

第1号土坑 (第92図)

**位置** 調査区南部のD2j4区、標高31.9mの台地平坦部に位置している。

**規模と形状** 長軸2.50m、短軸1.99mの長方形で、長軸方向はN-5°-Wである。深さは28cmで、底面は平坦であり、壁は緩やかに傾斜して立ち上がっている。

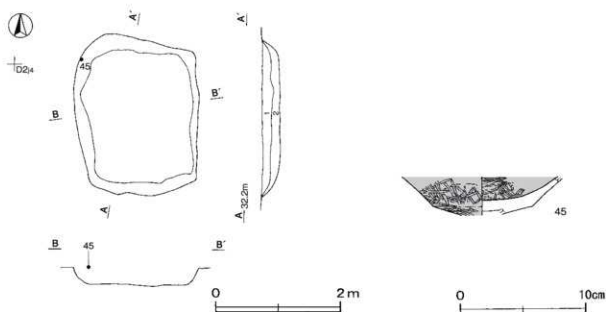
**覆土** 2層に分層できる。ロームブロックを含んでいることから、埋め戻されている。

**土層解説**

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量                      2 黒褐色 ローム粒子少量、黒色粒子微量

**遺物出土状況** 土師器片37点(碗3、甕30、高坏4)が、覆土上層から下層にかけて出土している。45は、北東コーナー部の覆土上層から出土している。

**所見** 土器片が多いことから、廃棄土坑の可能性がある。時期は、出土土器から4世紀後半に比定できる。



第92図 第1号土坑・出土遺物実測図

第1号土坑出土遺物観察表 (第92図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
45	土師器	高坏	-	(3.1)	-	灰石・石英・雲母	明赤褐	普通	外・内面へう磨き 外・内面赤彩	覆土上層	20% PL13

第69号土坑 (第93図)

**位置** 調査区南部のD2i2区、標高31.9mの台地平坦部に位置している。

**規模と形状** 長径0.48m、短径0.44mの円形である。深さは22cmで、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

**覆土** 単一層である。不自然な堆積状況から、埋め戻されている。

**土層解説**

- 1 灰褐色 ローム粒子微量

**遺物出土状況** 土師器1点(小形甕)が出土している。46は、覆土上層から横位で出土している。  
**所見** 時期は、出土土器から古墳時代前期に比定できる。



第93図 第69号土坑・出土遺物実測図

第69号土坑出土遺物観察表(第93図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
46	土師器	小形甕	10.4	9.4	4.4	長石・石英・雲母	靑	普通	口縁部外面指環状 体部外面ハケ調整 口縁部内面ハケ調整 体部内面ヘラ磨き	覆土上層	95% PL14

表4 古墳時代土坑一覽表

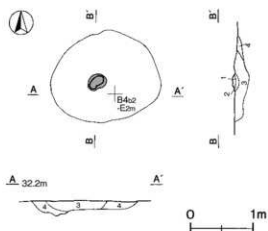
番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係(旧→新)
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
1	D 2 j 4	N - 5° - W	長方形	250 × 199	28	緩斜	平坦	人為	土師器	
69	D 2 i 2	-	円形	0.48 × 0.44	22	外傾	平坦	人為	土師器	

### (3) 炉穴跡

#### 第1号炉穴跡(第94図)

**位置** 調査区北部のB 4 a2区、標高31.8mの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第3号石器集中地点を掘り込んでいる。



第94図 第1号炉穴跡実測図

**規模と形状** 確認面において、火床部が露出していたため、明確な規模は不明であるが、残存部は長径30cm、短径21cmの楕円形である。掘方の長径は1.74m、短径は1.48mで、長径方向はN - 88° - Wである。掘方の深さは、確認面から10 - 25cmで、壁は緩やかに傾斜して立ち上がっている。

**覆土** 第1層上面が炉床部であり、第1 - 4層は掘方への埋土である。

#### 土層解説

- 1 暗褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 濃い黄褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量

**所見** 伴う遺物は出土していないが、第3・4層に含まれていた炭化粒子は、放射性炭素年代測定により4世紀後半～6世紀前半の年代観が与えられている。

#### 4 平安時代の遺構と遺物

今回の調査で確認した当時代の遺構は、土坑2基である。以下、遺構の特徴と出土した遺物について記述する。

##### 土坑

##### 第29号土坑（第95図）

**位置** 調査区南部のD 2 b9区、標高32.0mの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第28号土坑に東部を掘り込まれている。

**規模と形状** 長径0.70m、短径0.65mの円形である。深さは25cmで、底面は皿状であり、壁は外傾して立ち上がっている。

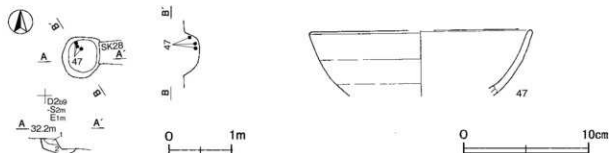
**覆土** 2層に分層できる。不自然な堆積状況から、埋め戻されている。

##### 土層解説

1 黒 褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量      2 黒 色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

**遺物出土状況** 土師器1点（碗）が出土している。47は、覆土中層から下層にかけて出土した破片が接合したものである。

**所見** 時期は、出土土器から10世紀後半に比定できるが、性格は不明である。



第95図 第29号土坑・出土遺物実測図

第29号土坑出土遺物観察表（第95図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
47	土師器	碗	(17.6)	(5.2)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	濃い黄褐色	普通	ロクロ成形	覆土中層・下層	20% PL13

##### 第31号土坑（第96図）

**位置** 調査区南部のD 2 b9区、標高32.0mの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第30号土坑に南東部、第32号土坑に北端部を掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸0.57m、短軸0.55mの方形と推定される。長径方向はN-40°-Wである。深さは10cmで、

底面は平坦であり、壁は外傾して立ち上がっている。

**覆土** 2層に分層できる。不自然な堆積状況から埋め戻されている。

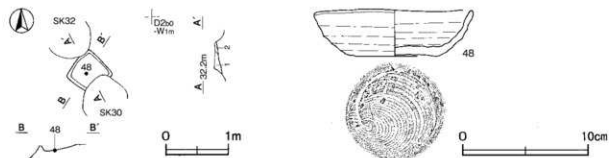
**土層解説**

1 黒 褐 色 ローム粒子・焼土粒子微量

2 灰 褐色 色 ローム粒子・焼土粒子微量

**遺物出土状況** 土師器片3点(坏1, 甕2)が出土している。48は、中央部の底面から正位で出土している。

**所見** 時期は、出土土器から10世紀後半に比定できるが、性格は不明である。



第96図 第31号土坑・出土遺物実測図

第31号土坑出土遺物観察表(第96図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
48	土師器	坏	12.5	3.7	7.0	長石・石英・雲母・ 黒色粒子・赤色粒子	にぶい	普通	口テラ成形 底部回転糸切り	底面	95% PL13

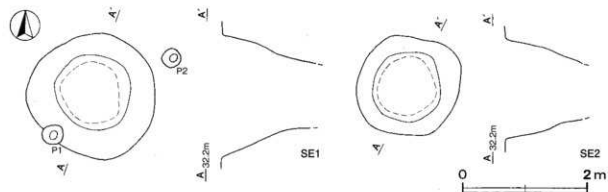
表5 平安時代土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係(旧→新)
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
29	D 216	-	円形	0.70 × 0.65	25	外傾	皿状	人為	土師器	本跡→SK 28
31	D 216	N-40°-W	[方形]	0.57 × (0.55)	10	外傾	平坦	人為	土師器	本跡→SK 30-32

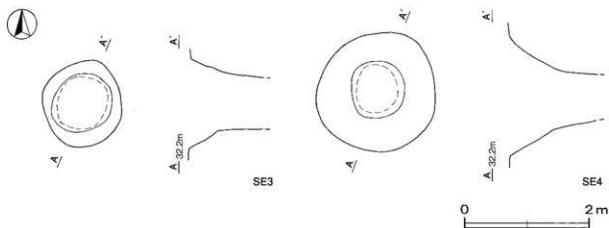
5 その他の遺構と遺物

時期を特定できない井戸跡4基と土坑92基については、実測図と一覧表に掲載する。

(1) 井戸跡



第97図 時期不明井戸跡実測図(1)

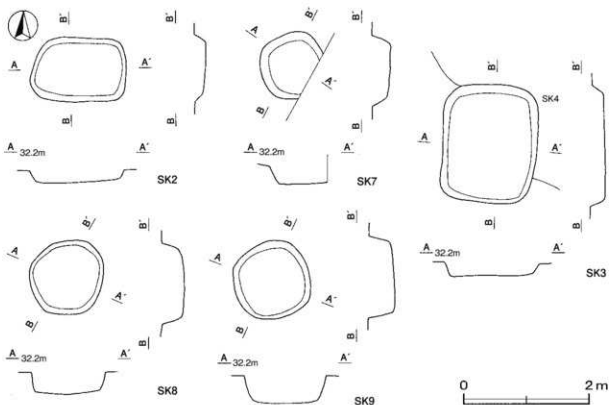


第98図 時期不明井戸跡実測図(2)

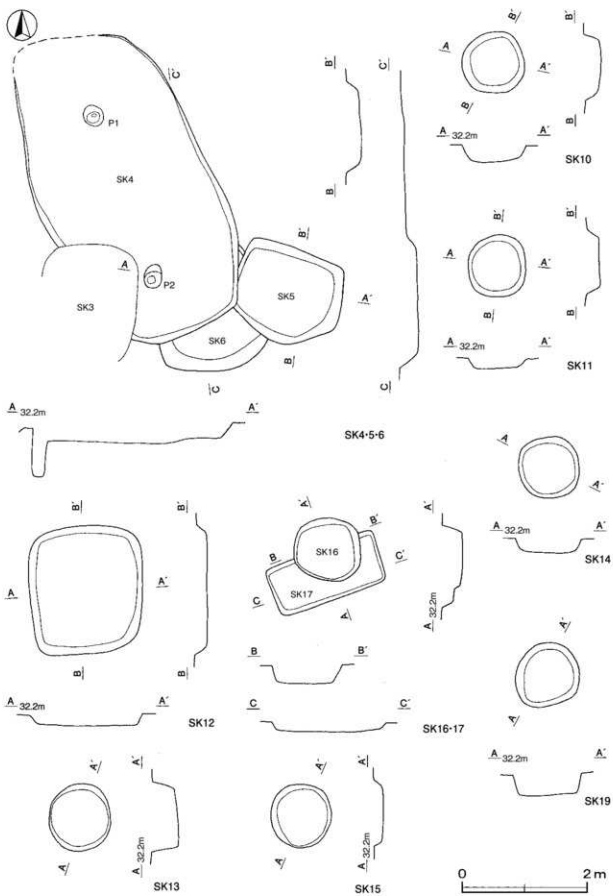
表6 時期不明井戸跡一覽表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		覆土	底面	形状	主な出土遺物	備考 新旧関係(古→新)
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
1	D 2b0	-	円形	2.04 × 1.96	(150)	人為	-	漏斗	石器	
2	D 2g5	N - 51° - E	楕円形	1.78 × 1.64	(121)	人為	-	漏斗	-	
3	E 2e8	-	円形	1.42 × 1.32	(116)	人為	-	漏斗	-	
4	E 2b4	N - 43° - E	楕円形	2.02 × 1.86	(138)	人為	-	漏斗	石器	

(2) 土坑

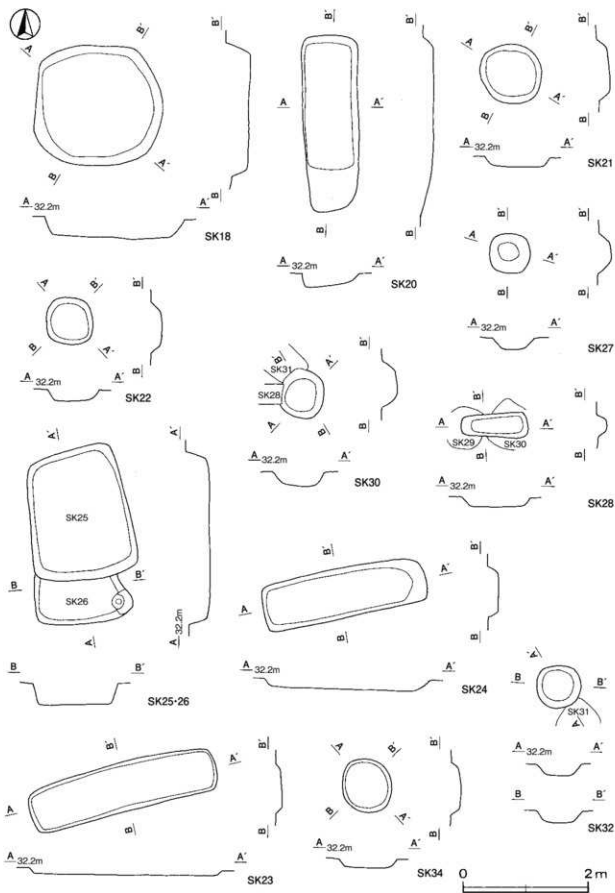


第99図 時期不明土坑実測図(1)

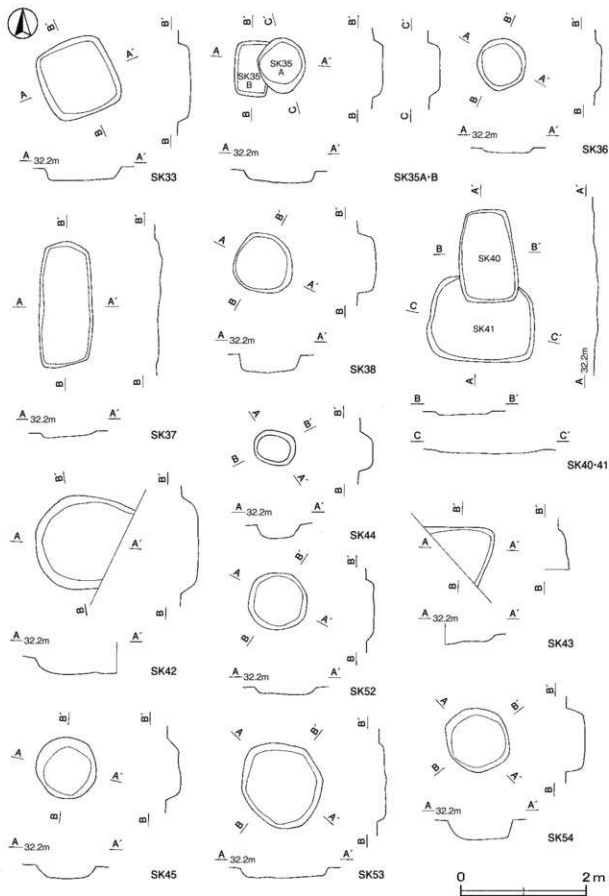


第100图 时期不明土坑实测图(2)

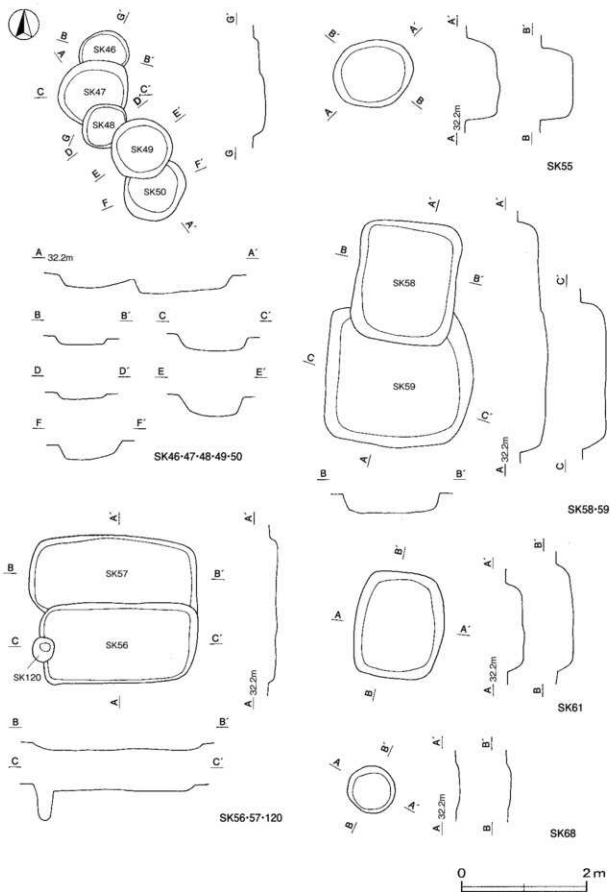




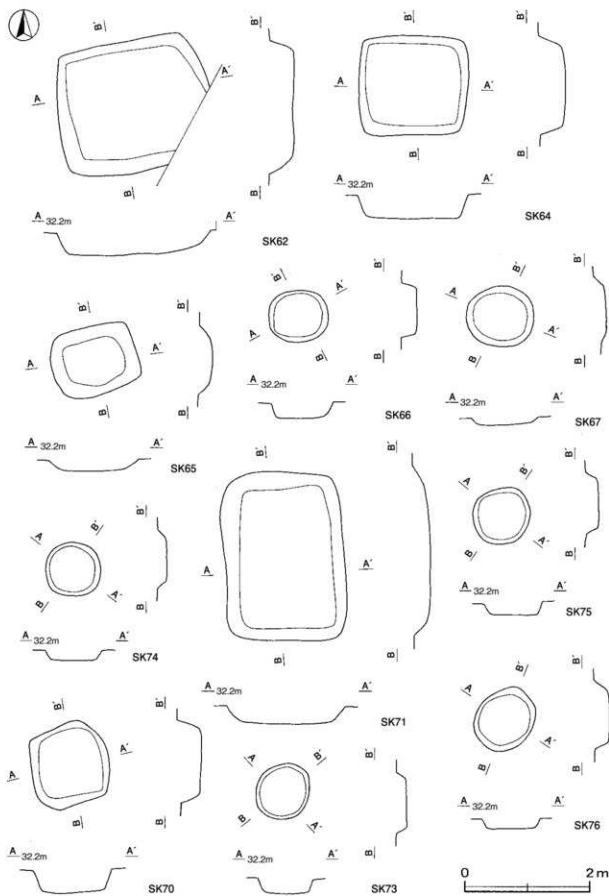
第101図 時期不明土坑実測図(3)



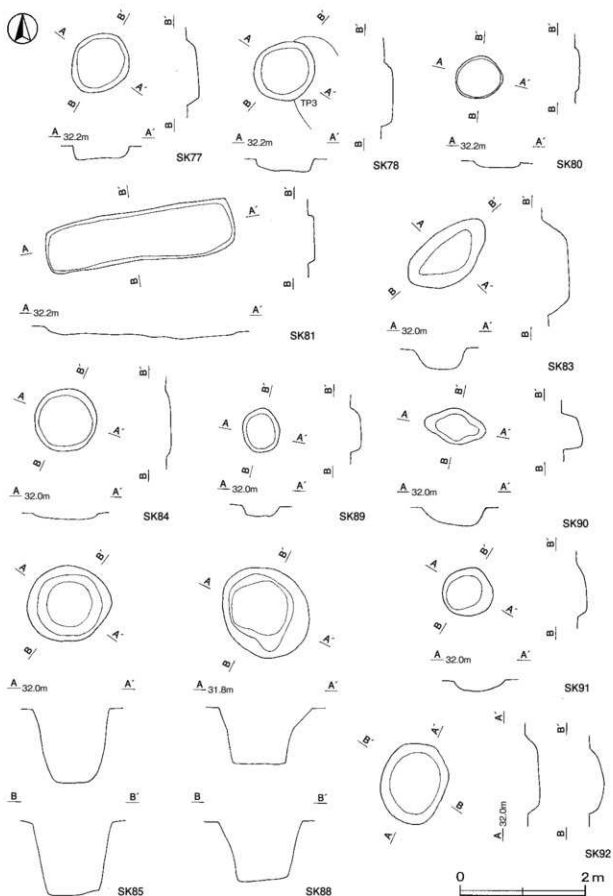
第102图 时期不明土坑实测图(4)



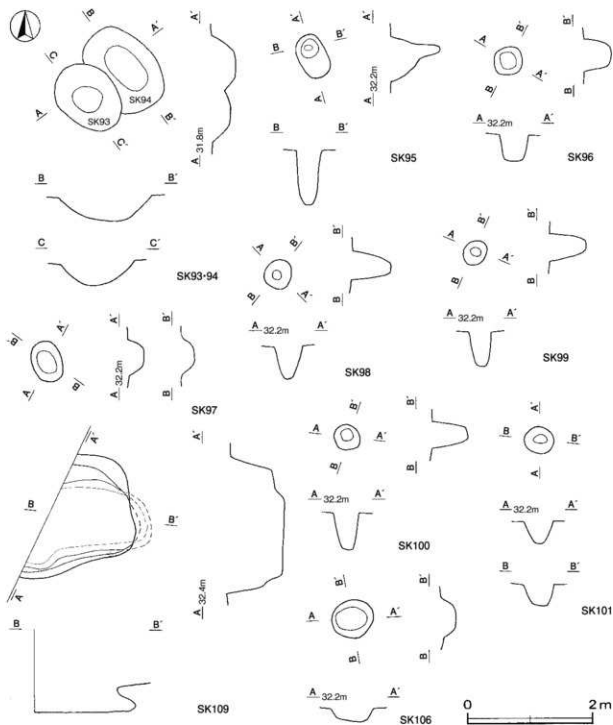
第103図 時期不明土坑実測図(5)



第 104 图 时期不明土坑实测图 (6)



第105図 時期不明土坑実測図(7)



第 106 図 時期不明土坑実測図 (8)

表 7 時期不明土坑一覽表

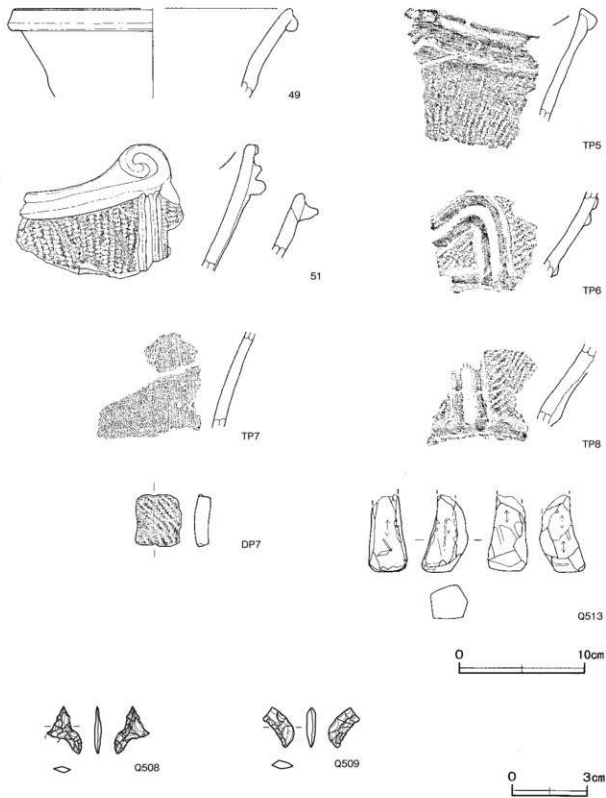
番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係 (旧→新)
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
2	D 2 j 4	N - 78° - W	長方形	1.56 × 1.02	12	緩斜	平坦	自然	-	
3	C 3 f 2	N - 1° - E	隅丸長方形	1.90 × 1.50	22	緩斜	平坦	人為	-	SK 4 → 本跡
4	C 3 f 2	N - 28° - W	(不整形長方形)	[5.17] × 2.71	12	緩斜	平坦	人為	-	SK 5・6 → 本跡 → SK 3
5	C 3 f 3	N - 65° - W	隅丸長方形	[1.80] × 1.52	25	緩斜	平坦	人為	-	SK 6 → 本跡 → SK 4

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係(旧→新)
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
6	C 3 f3	N-21°-W	隅丸長方形	212 × 182	30	外傾	平坦	人為	-	本跡→SK 4・5
7	C 3 g5	N-25°-E	[楕円形]	112 × [0.90]	30	外傾	平坦	人為	-	
8	C 3 g4	-	円形	126 × 118	36	外傾	平坦	人為	-	
9	C 3 g4	-	円形	129 × 121	42	外傾	平坦	人為	-	
10	C 3 g3	-	円形	103 × 099	27	外傾	平坦	人為	土師器	
11	C 3 g3	-	円形	101 × 092	30	外傾	平坦	自然	-	
12	C 3 g2	N-2°-W	長方形	205 × 181	19	外傾	平坦	人為	-	
13	C 3 g1	N-19°-E	楕円形	112 × 100	42	外傾	平坦	人為	土師器	
14	C 3 g1	-	円形	106 × 106	22	緩斜	平坦	人為	-	
15	C 3 i2	-	円形	106 × 098	15	緩斜	平坦	人為	-	
16	C 3 h3	-	円形	112 × 102	35	外傾	平坦	人為	-	SK17→本跡
17	C 3 h3	N-70°-E	長方形	182 × 086	18	外傾	平坦	人為	-	本跡→SK16
18	C 3 h3	-	円形	204 × 191	32	外傾	平坦	人為	-	
19	D 3 c2	-	円形	111 × 101	34	外傾	平坦	人為	-	
20	C 2 j8	N-2°-E	長方形	283 × 089	30	直立 緩斜	平坦	人為	土師器	
21	D 2 a0	-	円形	101 × 095	18	緩斜	平坦	自然	-	
22	D 2 b8	-	円形	083 × 083	18	緩斜	皿状	自然	-	
23	D 2 b8	N-77°-E	長方形	305 × 078	9	緩斜	平坦	人為	-	
24	D 2 a8	N-79°-E	隅丸長方形	262 × 078	18	緩斜	平坦	人為	-	
25	C 3 j2	N-14°-W	隅丸長方形	210 × 158	35	外傾	平坦	人為	土師器、焼粘土塊	SK26→本跡
26	C 3 j2	N-88°-E	隅丸長方形	155 × [0.70]	35	外傾	平坦	人為	-	本跡→SK25
27	D 2 b9	-	円形	064 × 064	30	緩斜	皿状	自然	土師器	
28	D 2 b9	N-86°-E	隅丸長方形	106 × 041	15	外傾	平坦	人為	縄文土器、土師器、 須恵器	SK29・30→本跡
30	D 2 b9	-	円形	074 × 072	27	緩斜	皿状	人為	-	SK31→本跡→SK28
32	D 2 b9	-	円形	073 × 071	22	緩斜	皿状	人為	土師器	SK31→本跡
33	D 2 d7	N-23°-W	方形	125 × 120	21	外傾	平坦	人為	-	
34	D 2 e8	N-42°-W	楕円形	090 × 080	14	外傾	平坦	自然	土師器	
35A	D 3 e1	N-1°-W	楕円形	088 × 078	18	緩斜	平坦	人為	-	SK35B→本跡
35B	D 3 e1	N-1°-E	隅丸長方形	090 × [0.36]	15	緩斜	平坦	人為	-	本跡→SK35A
36	D 2 d9	-	円形	084 × 078	8	緩斜	平坦	人為	-	
37	D 2 c9	N-6°-E	隅丸長方形	204 × 086	8	緩斜	平坦	人為	-	
38	D 2 c9	-	円形	102 × 096	30	緩斜	平坦	人為	土師器	
40	C 3 i1	N-6°-W	長方形	150 × 085	8	緩斜	平坦	自然	-	SK41→本跡
41	C 3 i1	N-85°-W	長方形	172 × 133	9	緩斜	平坦	人為	土師器	本跡→SK40
42	C 3 h5	-	[円形 楕円形]	150 × [1.42]	28	外傾	平坦	人為	-	
43	C 3 h4	-	-	(115) × (0.94)	18	緩斜	平坦	人為	-	
44	D 2 b9	N-74°-W	楕円形	068 × 055	22	外傾	平坦	人為	-	
45	D 3 d1	-	円形	100 × 098	21	緩斜	平坦	人為	土師器、須恵器	
46	D 3 d1	-	[円形]	074 × [0.70]	13	外傾	平坦	自然	土師器	本跡→SK47
47	D 3 e1	N-52°-E	楕円形	118 × 104	22	外傾	平坦	人為	土師器	SK46→本跡→SK48
48	D 3 e1	-	円形	071 × 069	9	外傾	平坦	自然	土師器	SK47→本跡→SK49
49	D 3 e1	-	円形	099 × 097	30	外傾	平坦	人為	土師器	SK48・50→本跡
50	D 3 e1	-	円形	101 × 094	26	外傾	平坦	人為	土師器	本跡→SK49
52	D 2 e6	-	円形	098 × 098	10	緩斜	平坦	人為	-	
53	D 2 f8	N-40°-W	楕円形	146 × 126	12	緩斜	平坦	人為	土師器	
54	D 2 b8	-	円形	110 × 100	30	外傾	平坦	人為	土師器	

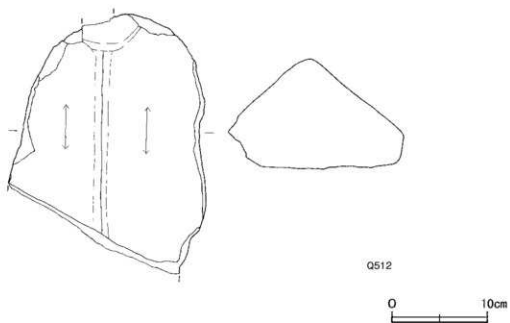
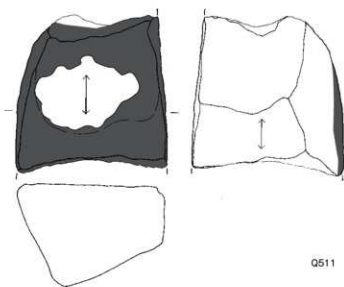
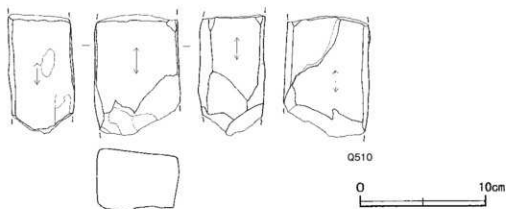
番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係(旧→新)
				長径×短径(m)	深さ (cm)					
55	D 2 19	N - 47° - E	楕円形	130 × 110	52	外傾	平坦	人為	土師器	
56	D 2 16	N - 90° - W	長方形	262 × 125	12	外傾 縦割	平坦	人為	土師器	SK57 → 本跡 → SK120
57	D 2 16	N - 88° - W [長方形]		270 × [110]	15	外傾 縦割	平坦	人為	-	本跡 → SK56
58	D 2 17	N - 7° - E	長方形	193 × 160	32	外傾	平坦	人為	土師器	SK59 → 本跡
59	D 2 17	N - 86° - W [方形]		236 × [236]	45	外傾	平坦	人為	土師器	本跡 → SK58
61	D 2 10	N - 7° - E	長方形	172 × 143	26	縦割	平坦	人為	土師器	
62	E 2 a9	N - 80° - E	長方形	246 × 210	39	縦割	平坦	人為	土師器	
64	D 2 14	N - 89° - E	長方形	174 × 156	38	外傾	平坦	人為	土師器	
65	D 2 16	N - 78° - E	長方形	140 × 110	22	縦割	皿状	人為	土師器	
66	D 2 12	N - 58° - E	楕円形	098 × 084	22	外傾	平坦	人為	-	
67	E 2 b5	N - 66° - E	楕円形	110 × 098	16	縦割	平坦	人為	-	
68	E 2 b6	-	円形	076 × 074	8	縦割	平坦	人為	-	
70	D 2 14	N - 17° - W	不整形長方形	148 × 129	36	外傾	平坦	人為	土師器	
71	E 2 a4	N - 7° - W	長方形	271 × 192	30	縦割	皿状	人為	土師器	
73	E 2 d3	N - 48° - E	楕円形	096 × 085	16	外傾	平坦	人為	土師器	
74	E 2 16	-	円形	092 × 092	14	縦割	平坦	人為	-	
75	E 2 15	-	円形	098 × 090	18	縦割	平坦	人為	-	
76	E 2 e5	N - 20° - E	楕円形	110 × 090	22	外傾	平坦	人為	土師器	
77	E 2 15	N - 30° - E	楕円形	104 × 090	18	縦割	平坦	人為	-	
78	E 2 04	N - 43° - E	楕円形	103 × 091	18	外傾	平坦	自然	-	T P 3 → 本跡
80	D 3 e1	-	円形	074 × 068	7	外傾	平坦	自然	-	
81	D 2 60	N - 80° - E	長方形	304 × 089	9	外傾	平坦	自然	-	
83	E 1 b0	N - 50° - E	楕円形	154 × 084	34	縦割	平坦	自然	-	
84	E 2 14	-	円形	106 × 101	9	縦割	皿状	人為	-	
85	E 1 10	N - 82° - E	楕円形	137 × 121	116	逆台形	平坦	人為	-	
88	F 1 e7	N - 28° - W	楕円形	154 × 132	95	逆台形	平坦	人為	須恵器	
89	F 1 a6	N - 7° - E	楕円形	070 × 058	18	外傾	平坦	自然	-	
90	F 1 a6	N - 79° - W	不整形楕円形	100 × 056	30	外傾	平坦	自然	-	
91	F 1 a5	-	円形	082 × 080	14	縦割	平坦	自然	-	
92	F 1 c5	N - 21° - E	楕円形	128 × 104	20	縦割	平坦	人為	-	
93	F 1 c7	N - 39° - W	楕円形	120 × 092	35	縦割	皿状	人為	-	SK94 → 本跡
94	F 1 c7	N - 50° - W [楕円形]		146 × [096]	38	縦割	皿状	人為	-	本跡 → SK93
95	E 1 b8	N - 26° - W	楕円形	072 × 046	86	外傾	平坦	人為	-	
96	E 2 08	N - 35° - E	楕円形	052 × 045	44	外傾	平坦	人為	-	
97	D 2 g8	N - 19° - W	楕円形	067 × 048	24	外傾	平坦	人為	-	
98	D 2 18	-	円形	046 × 042	62	外傾	平坦	自然	-	
99	D 3 f1	N - 38° - E	楕円形	043 × 036	56	外傾	皿状	人為	-	
100	D 3 f1	N - 43° - W	楕円形	046 × 040	56	外傾	皿状	人為	-	
101	D 3 a1	-	円形	048 × 045	35	外傾	平坦	人為	-	
106	B 3 b4	N - 60° - E	楕円形	068 × 060	24	縦割	平坦	人為	-	
109	B 3 a6	N - 78° - E [方形]		(171) × 170	90	外傾 縦割	平坦	人為	-	
120	D 2 16	N - 7° - E	楕円形	040 × 032	58	直立	皿状	人為	-	SK56 → 本跡



(3) 遺構外出土遺物



第107図 遺構外出土遺物実測図(1)



第108図 遺構外出土遺物実測図(2)

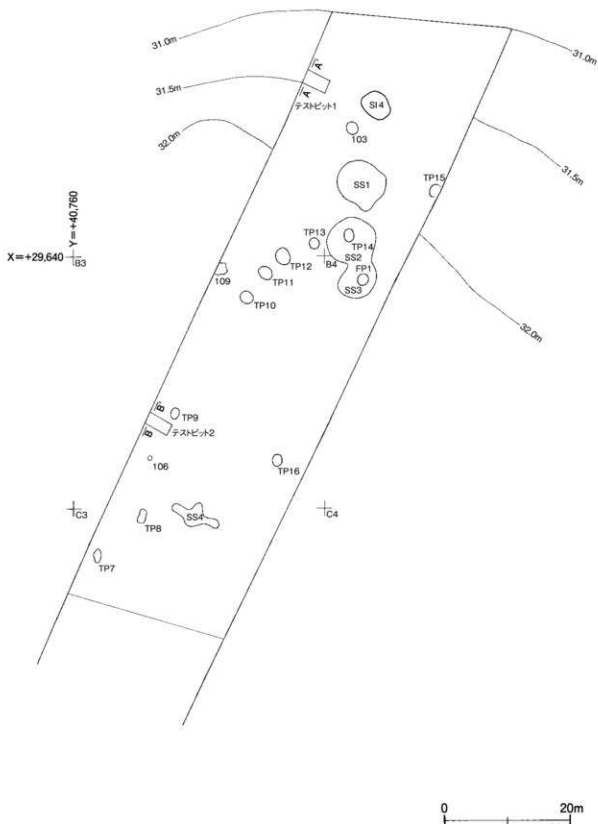
遺構外出土遺物観察表 (第 107・108 図)

番号	種別	器種	L径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
49	縄文土器	深鉢	(22.0)	(7.2)	-	長石・石英・雲母	にぶい相	普通	無文	表土中	20% PL12
51	縄文土器	深鉢	-	(10.1)	-	長石・石英・雲母	にぶい相	普通	縄文施文→陸帯貼付	表土中	10% PL12

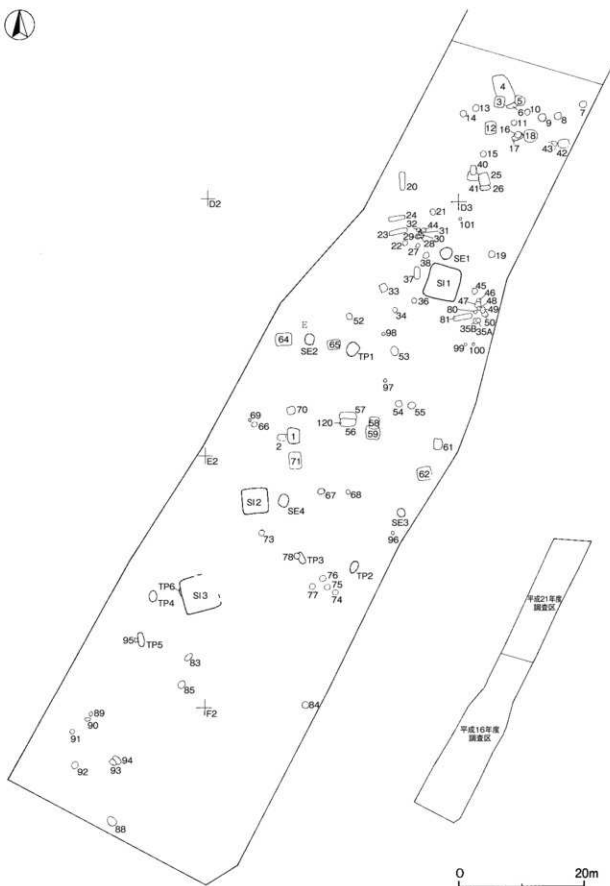
番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
DP7	土器片断	4.1	3.7	1.3	25.7	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい相	縄文 R L 施文	表土中	PL16

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP5	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい相	縄文施文→L1線部陸帯貼付	縄文時代中期後葉	表土中 PL13
TP6	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	灰相	縄文施文→陸帯貼付→陸帯脇沈線	縄文時代中期後葉	表土中 PL13
TP7	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい相	櫛歯状工具による条線文	縄文時代後期	表土中 PL13
TP8	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	灰相	縄文 R L 施文→陸帯貼付	縄文時代中期後葉	表土中 PL13

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 508	石鏡	1.9	(1.4)	0.3	(0.4)	チャート	両面押圧剥離	表土	PL16
Q 509	石鏡	1.6	1.3	0.4	0.3	凝灰岩	両面押圧剥離	SS 3	PL16
Q 510	砥石	(9.7)	6.9	5.3	(50.7)	凝灰岩	4面使用	SE 4	PL17
Q 511	砥石	(17.0)	16.2	11.0	(36)kg	凝灰岩	2面使用 煤付着	SE 4	PL17
Q 512	砥石	(27.6)	(20.1)	(11.7)	(72)kg	凝灰岩	2面使用	SE 4	PL17
Q 513	砥石	(6.1)	3.7	(3.2)	(73.9)	凝灰岩	4面5ヶ所使用	SK39	PL17



第109図 猫松遺跡遺構全体図1 (平成21年度調査区)



第110図 猫松遺跡遺構全体図2 (平成16年度調査区)

## 第4節 ま と め

### 1 はじめに

猫松遺跡は石岡市の北東部に位置し、巴川と園部川に挟まれた標高約32mの台地上および緩斜面上に立地している。調査は2回に渡って実施した。調査区は台地の等高線にはほぼ直交しており、南北250m、東西24～36mである。調査の結果、旧石器時代の石器集中地点4か所、縄文時代の住居跡1軒、隔し穴16基、土坑1基、古墳時代の住居跡3軒、土坑2基、炉穴跡1基、平安時代の土坑2基などを確認した。特に旧石器時代の石器集中地点については、巴川、園部川流域における数少ない調査事例である。ここでは、当遺跡の遺構と遺物について時期ごとに概観し、まとめたい。

### 2 旧石器時代

第1号石器集中地点から出土した石器の総重量（石器の重量には、0.1g未満の遺物、礫片類、礫類の重量は含めていない）は10,151.1gで、その内訳は瑪瑙8,772.4g、頁岩790.6g、玉髓221.5g、流紋岩205.6g、黒色頁岩52.1g、鉄石英45.9g、ガラス質黒色安山岩37.2g、水晶14.2g、チャート7.9g、凝灰岩1.9g、珪質頁岩1.4g、石英0.4g、砂岩0.1g未満である。他の集中地点に比べ、瑪瑙や水晶など、硬質な石材が目立っている。なお、集中地点から離れた場所から出土したナイフ形石器と剥片の2点については、第1号石器集中地点では用いられていないチャート製であり、チャートが多く用いられている第2・3号石器集中地点内の所産である可能性が高い。石材別、器種別の分類は表8のとおりである。

第2号石器集中地点から出土した石器の総重量は1,543.4gで、その内訳はガラス質黒色安山岩687.8g、チャート460.7g、頁岩138.9g、ガラス質黒色デイサイト（トトロ石）93.6g、瑪瑙54.9g、流紋岩33.8g、鉄石英31.7g、ホルンフェルス2.9g、凝灰岩8.9g、砂岩2.3g、玉髓1.8gである。石材別、器種別の分類は表9のとおりである。

第3号石器集中地点から出土した石器の総重量は2,973.2gで、その内訳はガラス質黒色安山岩2,603.5g、チャート103.8g、ガラス質黒色デイサイト100.2g、頁岩58.3g、凝灰岩48.8g、流紋岩47.1g、砂岩6g、斑礫岩2.9g、玉髓1.3g、瑪瑙1.1g、鉄石英0.2gである。石材別、器種別の分類は表10のとおりである。

第4号石器集中地点から出土した石器の総重量は597.7gで、その内訳はホルンフェルス314.3g、石英225.3g、珪質頁岩45.2g、ガラス質黒色安山岩12.9gである。石材別、器種別の分類は表11のとおりである。

石材については、第1号石器集中地点で瑪瑙の数量が突出し、次いで頁岩が、第2号石器集中地点ではガラス質黒色安山岩が多く、次いでチャートが目立っている。3号石器集中地点は、ガラス質黒色安山岩の数量が突出している。第4号石器集中地点では石英の数量が多い。このように、集中地点ごとに主体となる石材が異なる点が本跡の特徴である。また、水戸市以南では出土量が少ない瑪瑙や、その他にもガラス質黒色デイサイト、珪質頁岩など、県北部で多く用いられる石材が出土しており、石材の運搬ルートを考える上で、良好な資料である。特に瑪瑙は、原石も出土しており、全てが採取地で精選されたものではなく、本遺跡内において石器製作に不向きな石材の廃棄も行われていたものと思われる。このことから、瑪瑙が採取し易い石材として扱われていたという印象を受ける。瑪瑙の産地については、久慈川や那珂川流域、ガラス質黒色安山岩については、大洗海岸周辺で採取されたものと推定される。瑪瑙の運搬ルートとしては、「那珂川の谷に沿った海岸方面への移動」と、「鬼怒川に沿った移動」が、これまでの研究において指摘されている<sup>11</sup>。仮に、本遺跡出土の瑪瑙とガラス質黒色安山岩が同一の行程で採取されたものとするならば、久慈

川、那河川流域で瑪瑙を採取し、川沿いを下り、大洗海岸周辺でガラス質黒色安山岩を採取した後、巴川に沿って運搬されたと捉えることもできる。また、下総方面への石材供給も考えると、園部川沿いも石材運搬経路として用いられた可能性がある。その他の石材に関しては、流紋岩などの遠隔地石材も含め、今後の検討課題としたい。また、器種の組成も集中地点ごとに偏りがあり、第1号石器集中地点ではナイフ形石器が断片も含め16点出土しており、石器製作の中心がナイフ形石器であったことが窺える。これに対し、第2・3号石器集中地点では石刃の数量が突出しており、石刃を素材とした石器製作の場であったことが考えられる。第4号石器集中地点については、尖頭器の失敗品が2点出土している点が注目される。これら4か所の石器集中地点から出土した石器は、母岩を同じくする石器が各集中地点間に存在する点や、出土層位がATを含む層の上位に集中している点などから、同時期のものと判断される。時期的には、黒曜石が一切使用されず、瑪瑙やガラス質黒色安山岩などが多く用いられており、製品が小形化したナイフ形石器中心である点などから、約20,000年前のもので、福年上では常陸地域Ⅱc期（武蔵野地域Ⅱb期，下総地域Ⅱc期）に該当するものと考えられる<sup>21</sup>。

このほか、石器集中地点から出土した礫片類・礫類の中には、被熱したものが含まれていた。礫片については、被熱の後破砕したものと破砕の後被熱したものが存在している。これらの遺物に関しては、分布状況や出土層位から、石器集中地点と同時期のものと判断すべきであろう。用途は、被熱痕から食物の調理用施設としての使用が推定され、遺跡内に明確な焼土痕は認められなかったことから、極めて短い期間使用されたものと判断される。

表8 第1号石器集中地点出土石器分類表

器種	瑪瑙	頁岩	水晶	ガラス質安山岩	流紋岩	鉄石美	凝灰岩	玉髓	黒色頁岩	珪質頁岩	チャート	砂岩	石英	総計
ナイフ形石器	9	5			1						1			16
截頭石刃	1	1												2
石鎌		1	1											2
削器	1													1
彫刻刀形石器	2													2
鋸歯縁石器	3													3
二次加工剥片		2			1									3
使用痕剥片	1	1			1									3
不明石器	1													1
剥片	367	93	9	4	5	2	1		2	1	1			486
縦長剥片	7	3												10
横長剥片	1													1
石刃	54	40	1	4	1				1					101
石核	49	2			1			2						54
横長剥片石核	3													3
石刃石核	11	2			1	1			1					16
分割礫	7													7
礫端片	2													2
製片	150	11					1	1						163
砕片	771	115	26	15	8	5	3	1		2		1	1	948
総計	1440	276	37	23	19	8	5	4	4	4	2	1	1	1824

表9 第2号石器集中地点出土石器分類表

器種	石材	ガラス質 燧石類	チャート	凝灰岩	頁岩	砂岩	瑪瑙	流紋岩	ホルン フェルス	玉髄	鉄石英	トトリ石	総計
尖頭器		1											1
ナイフ形石器		1											1
削器							1						1
鋸歯状石器		1											1
剥片		70	12	2	2	1	1	2	1		1	1	93
縦長剥片		3							1				4
横長剥片		1											1
石片		32			1								33
石核		1											1
分節礫		1	1										2
裂片		13	3	1				1		1			19
砕片		16	4	1	1	2	1						25
総計		140	20	4	4	3	3	3	2	1	1	1	182

表10 第3号石器集中地点出土石器分類表

器種	石材	ガラス質 燧石類	チャート	トトリ石	頁岩	凝灰岩	流紋岩	玉髄	瑪瑙	砂岩	鉄石英	糜爛岩	総計
ナイフ形石器		6											6
裁直石片		4											4
二次加工剥片					1								1
使用痕剥片							1						1
剥片		192	11	10	5		3	1	1		1		224
縦長剥片		1											1
石片		137	1	4	1								143
石核		7	3										10
石片石核		7	1										8
分節礫		1				1							2
裂片		53	4		1	7	1	1					67
砕片		165	10	3	5	2	3		1	1	1		191
器種不明		1											1
総計		574	30	17	13	10	8	2	2	1	1	1	659

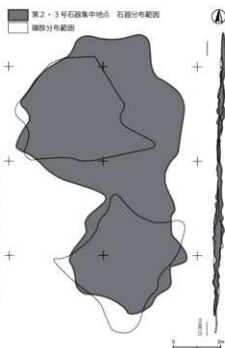
表11 第4号石器集中地点出土石器分類表

器種	石材	石英	ガラス質燧 石類	凝灰岩	ホルン フェルス	総計
尖頭器				2		2
剥片		7	2			9
石核プランク					1	1
裂片		3				3
総計		10	2	2	1	15

表12 礫類・礫片類分類表

SS1	器種	数量	SS1	石英英	チャート	凝灰岩	頁岩	ホルン フェルス	不明	総計	
										数量	割合
SS2	礫類	1(1)	1(1)							1(1)	1(1)
	礫片類	24(19)	23(13)	4(4)	2(2)	2(1)	1(1)	1(1)	2(1)	43(41)	43(41)
	総計	24(19)	23(13)	4(4)	2(2)	2(1)	1(1)	1(1)	2(1)	47(42)	44(42)
SS3	礫類	1(1)	1(1)							1(1)	1(1)
	礫片類	96(82)	43(27)	13(10)	3(1)	2(2)	1(1)	1(1)	1(1)	130(100)	130(100)
	総計	97(83)	44(28)	13(10)	3(1)	2(2)	1(1)	1(1)	1(1)	141(100)	140(100)

注: 礫片には、小礫や小礫片も含む。「不明」は、石材が不明な遺物の総称として用いた。  
 ( ) 内の数値は、種類により変化した遺物の数量の比率である。





### 3 縄文時代

第103号土坑は、加曾野E1式期の第4号住居跡から南西方向に27mの地点に位置している。当跡は、調査時の観察では底面付近の覆土の締りが弱く、墓坑の可能性を考えた。整理にあたり、住居の廃絶と土坑の埋め戻し時期が同時であった可能性を視野に、土器の遺構間接合を行ったが、接合する資料は皆無であった。しかし、胎土や色調が似通ったものもあり、それらの破片については、同一個体であった可能性が残る。現段階での性格付けは難しく、今後の検討材料としたい。また、第4号住居跡からは、尖頭器を再利用した石器と、剥片素材の石器が出土している。いずれも刃部に対して横位の研磨痕が見られることから、何らかの研磨に使用したものと思われる<sup>3)</sup>。

また、本遺跡では16基の陥し穴が確認されている。これらの陥し穴は、平面や断面の形状から以下のように4つのタイプに大別できる。

A類…平面が円形に近い楕円形や円形で、断面が逆台形、漏斗状、V字状のタイプ

B類…平面が楕円形で、短軸断面がV字もしくは幅狭の逆台形、長軸断面が逆台形を呈するタイプ

C類…平面が不整楕円形もしくは楕円形で、短軸断面がV字、長軸断面は括れ部を有し、下部がオーバーハングするタイプ

D類…平面が楕円形で、短軸断面がU字、長軸断面が逆台形を呈するタイプ

第1・9～14・16号陥し穴がA類、第2～5号陥し穴がB類、第7・8・15号陥し穴がC類、第6号陥し穴がD類にそれぞれ属する。これらの陥し穴は、出土遺物が少ないため時期判断が困難であるが、第7号陥し穴出土の石鏃は、後期から晩期のものと推定され、中期後葉の土器が出土しているA類と時期差がある。A類に属する陥し穴は、弧を描いて配置された5基と、並列に配置された2基の位置関係から、同時期の陥し穴群として機能していた可能性がある。

### 4 古墳時代

当時代の住居跡は、3軒確認した。前期の第3号住居跡からは、受部と脚部に稜を持ち、外面および受部内面が赤彩された器台が出土している。南関東の弥生時代から古墳時代前期において、製作途上の土器を他の器種に作り替えた高坏が存在することが指摘されており<sup>4)</sup>、ここで挙げた器台も、同様に二重口縁壺など、他器種からの作り替えにより製作された可能性がある。類例の増加を待って検討したい。5世紀代の第2号住居跡からは、匙形土製品や土玉が出土している。土玉は孔が未完通のものもあり、漁撈具としての用途は想定できないことから、これらの土製品は住居廃絶の際に祭祀具として用いられた可能性がある。6世紀代の第1号住居跡は、出入り口脇の床面に高まりを持ち、そこから3個体の甕が出土している。煮沸具置き場としての用途であれば、竈近くに作り付けた方が利便性は高いと思われるが、あえて出入り口部に付設してある点に疑問が持たれる。貯蔵穴を出入り口脇に付設する例もあることから、貯蔵用の施設と捉えることもできるが、甕にはいずれも被熱痕があり、用途を明確にすることができない。今後の調査による資料の増加を待って検討したい。また、炉穴跡は放射性炭素年代測定により古墳時代のものであることが明らかになったが、今回の調査で確認された3軒の住居跡との関連性を明確にすることは出来なかった。

## 5 平安時代

平安時代の土坑2基のみを確認した。台地南側の畑地から律令期の須恵器細片が採集できることから、集落の本体は、その周辺に存在する可能性が高い。

## 6 おわりに

当遺跡は、旧石器時代、縄文時代、古墳時代、平安時代の複合遺跡であることが明らかになった。旧石器時代の石器集中地点については、巴川、園部川流域において層位に伴う一括資料が得られたことが大きな成果であり、小形化したナイフ形石器と、石刃・細石刃が共存しているという点で、本格的な細石刃文化への過渡期の石器群であることが考えられる。また、遺跡の立地から、石材の運搬に巴川や園部川に沿ったルートが採られていた可能性も窺えるため、今後、両河川流域における当該期の遺跡数が増加する可能性が高いものと思われる。

縄文時代には、居住の場として、また、狩りの場として、本遺跡の所在する台地が利用されていたことが判明した。一部の陥し穴については、群として捉えることができたが、その他の陥し穴については、セツト関係も不明確であった。今後、集落域と狩り場との位置関係なども視野に検討していきたい。

古墳時代の住居跡と平安時代の土坑は、いずれも台地平坦部に立地しており、南北に長い調査区での線的な調査ではあるが、古墳時代に周辺の遺跡数が増加するという傾向は、当遺跡の立地する台地においても例外ではないことが判明した。今回の調査で確認された住居跡は、いずれも単独で存在することから、各時期に形成された集落の外縁部にあたると思われる。現段階では、人々の生活と巴川、園部川などの河川周辺台地の開発が古墳時代前期に始まったことが指摘できるが、今後の調査で、周辺遺跡ならびに本遺跡の集落の様相が明らかになったとき、人々の移動の様子も解明されるものと思われる。

### 註)

- 1) 柴田 徹「茨城県内において剥片石器に使用された石材について」『茨城県における旧石器時代研究の到達点-その現状と課題-』発表要旨・資料集 茨城県考古学協会 2002年12月
- 2) 橋本勝雄「茨城県における旧石器時代の編年」『茨城県における旧石器時代研究の到達点-その現状と課題-』発表要旨・資料集 茨城県考古学協会 2002年12月
- 3) 付章2「鍋松遺跡の石器」顕微鏡写真図版7参照
- 4) 西川修一「甕のような高坏」『考古論叢 神奈川』第1集 神奈川県考古学会 1992年5月
- 5) 桐生直彦「甕をもつ壑穴建物跡の研究」八木環一 2005年10月

## 第4章 長原遺跡

### 第1節 調査の概要

長原遺跡は、巴川右岸の標高約32mの台地上に立地している。調査面積は1,738㎡である。調査前の現況は、陸田である。

今回の調査によって、陥し穴2基（縄文時代）土坑7基（時期不明）を確認した。

出土した遺物は、土師器、石器（敲石）などである。

### 第2節 基本層序

調査区北部（A1i9）にテストピットを設定し、基本土層の観察を行った。土層は、色調・構成粒子・含有物・粘性などから10層に分けられる。観察結果は以下のとおりである。

第1層は、黒褐色の表土層で、ローム粒子を微量含み、鉄分が微量沈着している。粘性は普通で、締りは強く、層厚は10～15cmである。

第2層は、暗褐色の陸田の床土層で、ローム粒子を微量含み、鉄分が少量沈着している。粘性は普通で、締りは強く、層厚は2～6cmである。

第3層は、暗褐色の旧表土層で、黒色土粒子を少量含んでいる。粘性、締りともに普通で、層厚は3～15cmである。

第4層は、褐色のローム漸移層で、黒色土粒子を微量含んでいる。粘性、締りともに普通で、層厚は0～16cmである。

第5層は、褐色のソフトローム層である。粘性は普通で、締りは弱く、クラックが発達している。層厚は3～37cmである。

第6層は、褐色のハードローム層である。粘性、締りともに極めて強く、層厚は29～62cmである。

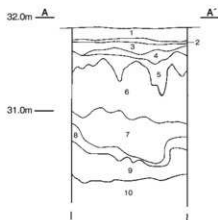
第7層は、褐色のハードローム層で、鹿沼バミス、粘土ブロックを微量含んでいる。粘性、締りともに極めて強く、層厚は13～47cmである。

第8層は、にぶい褐色の鹿沼軽石への漸移層で、鹿沼バミスを少量含んでいる。粘性は普通で、締りは強く、層厚は2～20cmである。

第9層は、黄褐色の鹿沼軽石純層である。粘性は普通で、締りは強く、層厚は13～39cmである。

第10層は、にぶい黄褐色のハードローム層である。粘性、締りともに極めて強い。下層まで掘り抜いていないため、層厚は不明である。

遺構は、第5層上面で確認された。



第112図 基本土層図

### 第3節 遺構と遺物

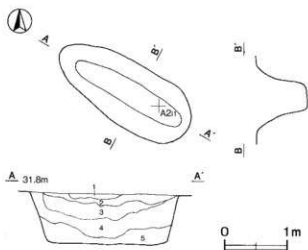
#### 1 縄文時代の遺構と遺物

今回の調査で確認した当時代の遺構は、陥し穴2基である。以下、遺構の特徴について記述する。

陥し穴

##### 第1号陥し穴（第113図）

位置 調査区北部のA1h0区、標高31.6mの台地平坦部に位置している。



第113図 第1号陥し穴実測図

**規模と形状** 長径2.36m、短径1.00mの楕円形で、長径方向は $N-61^{\circ}-W$ である。深さは80cmで、短径方向の断面は逆台形である。壁は外傾して立ち上がっている。

**覆土** 5層に分層できる。周囲から流れ込んだ堆積状況から、自然堆積である。

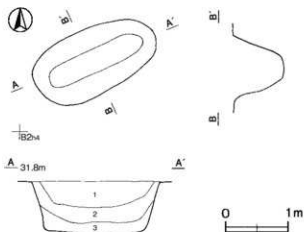
##### 土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量
- 4 褐色 ローム粒子中量
- 5 黒褐色 ローム粒子少量

**所見** 遺物は出土していないが、遺構の形状から縄文時代と考えられる。

##### 第2号陥し穴（第114図）

位置 調査区北部のB2g4区、標高31.6mの台地平坦部に位置している。



第114図 第2号陥し穴実測図

**規模と形状** 長径2.02m、短径1.00mの楕円形で、長径方向は $N-65^{\circ}-E$ である。深さは83cmで、短径方向の断面はU字状である。壁は外傾して立ち上がっている。

**覆土** 3層に分層できる。周囲から流れ込んだ堆積状況から、自然堆積である。

##### 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量

**所見** 遺物は出土していないが、遺構の形状から縄文時代と考えられる。

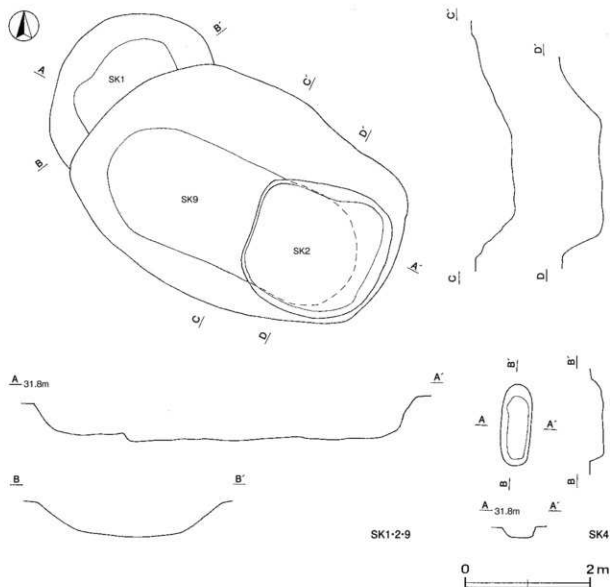
表13 縄文時代陥し穴一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		覆土	断面	主な出土遺物	備 考 新旧関係(古→新)
				長径×短径(m)	深さ(m)				
1	A 1h0	N-61°-W	楕円形	2.36×1.00	80	自然	逆台形	-	
2	B 2g4	N-65°-E	楕円形	2.02×1.00	83	自然	U字	-	

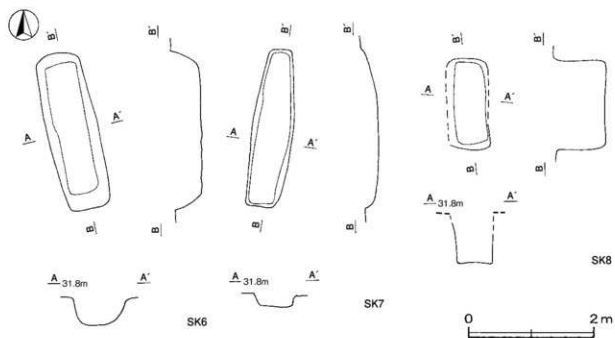
## 2 その他の遺構と遺物

今回の調査で、時期不明の土坑7基を確認した。ここでは、それらの遺構の実測図と一覧表を掲載する。また、遺構に伴わない遺物については、実測図を掲載する。

## (1) 土坑



第115図 時期不明土坑実測図(1)

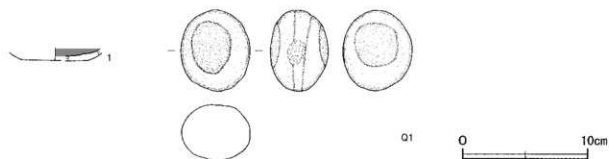


第116図 時期不明土坑実測図(2)

表14 時期不明土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 新旧関係(旧→新)
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
1	B 2 c1	N-50°-E	[楕円形]	300 × [2.52]	50	緩斜	凹状	人為	-	本跡→SK 9
2	B 2 c2	N-67°-W	方形	220 × 215	70	緩斜	平坦	人為	-	本跡→SK 9
4	B 2 i2	N-3°-E	楕円形	129 × 0.49	16	外傾 緩斜	平坦	人為	-	
6	B 1 i7	N-13°-W	長方形	255 × 0.82	44	緩斜	平坦	人為	-	
7	B 2 g1	N-8°-E	長方形	254 × 0.64	21	外傾	平坦	人為	-	
8	B 2 f2	N-1°-W	[長方形]	145 × [0.66]	80	直立	平坦	人為	-	
9	B 2 c1	N-80°-W	楕円形	5.44 × 3.68	70	緩斜	平坦	人為	-	SK 1・2→本跡

(2) 遺構外出土遺物



第117図 遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表（第117図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	坏	-	(1.0)	(5.0)	長石・石英・雲母	にがい黄褐色	普通	内面へう磨き 内面黒色処理	表土	5%

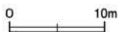
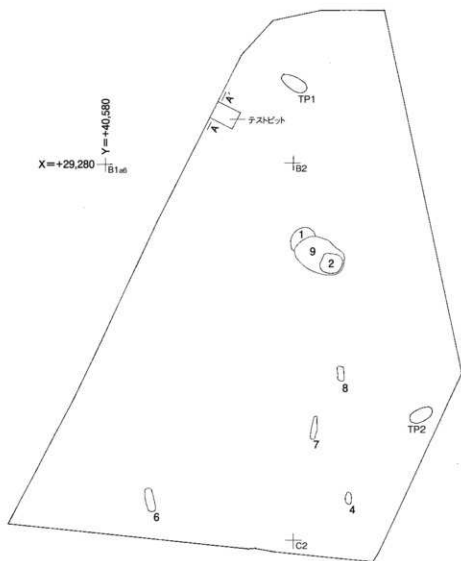
  

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	表層位置	備考
Q1	磨石	6.5	5.5	4.6	219.8	安山岩	1か所に敲打痕 磨石転用	B212	

#### 第4節 ま と め

縄文時代の陥し穴が、調査区の北部と南部に2基確認された。当遺跡と同じ台地上に立地する猫松遺跡からも縄文時代の陥し穴が確認されていることから、両遺跡の立地する台地が、縄文時代における狩猟の場であったことが考えられる。

また、遺構外の遺物ではあるが、縄文時代の磨石も出土しており、遺跡の南側に遺物の散布が認められることから、当該期の集落が存在する可能性がある。



第118図 長原遺跡遺構全体図



# 付 章 1

猫松遺跡出土炭化物の放射性炭素年代測定および調査区内基本土層の層序対比

パリア・サーヴェイ株式会社

はじめに

石岡市東成井猫松遺跡は、茨城県東部に分布する東茨城台地の西端部に近い台地平坦面上に立地する。国土地理院発行の2万5千分の1土地条件図「石岡」では、本遺跡の位置する台地は上位面に区分されている。この上位面は、その分布と高度から、貝塚ほか編(2000)でいうところの常陸台地における上位台地 A に相当する。上位台地 A は、下末吉海進により形成された海成面を地形面とする台地、すなわち下末吉面に対比されている。また、猫松遺跡のすぐ北側には台地を刻む谷が概ね東西方向に伸びているが、この谷は北浦に注ぐ巴川の最上流部に相当する。

今回の発掘調査では、旧石器時代とされる石器や縄文時代とされる住居跡および土坑、それらに伴う縄文土器をはじめとする遺物が確認されている。今回の分析調査では、遺構から出土した炭化物の放射性炭素年代を測定することにより遺構に関する年代資料を得る。また、調査区内で確認された台地表層を構成する土壌を対象として、上部のいわゆる黒ボク土層に相当する層位については、包含されるテフラの産状を確認する(テフラの検出同定)ことにより、下部のいわゆるローム層については、重鉱物組成および火山ガラスの産状を確認することにより、対比の指標を見出すことで層序対比を行う。

## 1 試料

### (1) 炭化物

試料が採取された遺構は、猫松遺跡平成21年度調査区(YNE-21)第3号石器集中地点(SS3)とYNE-21第1号炉穴跡(FP-1)の2遺構である。試料は、YNE-21 SS3より採取された「No.349 090609 B」という微細な炭化物1点とYNE-21 FP-1より採取された「No.3 3層 090617 C」, 「4層(炭) 090617 D」, 「4層下部(炭) 090617 E」および「4層(炭) 090618」という炭化物4点の合計5点である。なお、これらのうち、「No.3 3層 090617 C」, 「4層(炭) 090617 D」, 「4層(炭) 090618」の3点については、サクラ属の炭化材であることが確認された。

### (2) 土壌

土壌試料は、2箇所の土層断面から採取されている。そのうち、1箇所は黒ボク土の層位が確認されている断面であり、5層に分層され、各層からそれぞれ1点ずつ、上位より試料名ア、イ、ウ、エ、オの5点が採取されている。これらのうち、試料ウとエの採取された層位は、発掘調査所見により、調査区内で作成された土層断面テストピット1(TP-1)における3層と4層にそれぞれ対比されている。TP-1では、3層の上位の2層は旧表土、その上位の1層は耕作土とされ、4層の下部の5層はローム層への漸移層とされている。なお、試料オの採取された層位については、TP-1の層位には対比されていない。今回は、試料ウ、エ、オの3点を選択して、テフラの検出同定を行う。

試料が採取されたもう1箇所の断面は、ローム層が試料採取の対象とされている。土層断面は、4層に分層されており、各層は発掘調査所見により、調査区内で作成された土層断面テストピット(TP-2)における5層、6層、7・8層、9層の各層位に対比されている。TP-2各層の発掘調査所見では、5層はロー

ム層への漸移層、6層はソフトローム層、7・8層はハードローム層、9層は第2黒色帯とされている。なお、TP-2では、12層までの分層がなされており、10層は鹿沼軽石層への漸移層、11層は鹿沼軽石層（Ag-KP）、12層は武蔵野ローム層とされている。試料は、断面最上部から最下部まで厚さ約5cmで連続に、上位より試料番号1～14までの14点が採取されている。試料番号1、2はTP-2の5層、試料番号3～6はTP-2の6層、試料番号7はTP-2の6層下部から7・8層上部にかけて、試料番号8～11はTP-2の7・8層、試料番号12～14はTP-2の9層にそれぞれ対比される層位から採取されている。今回は、試料番号1～13までの奇数番号の試料7点について火山ガラス比分析を行い、これらのうち試料番号3、9、13の3点については重鉱物分析も行う。

## 2 分析方法

### (1) 放射性炭素年代測定

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HC 1により炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HC 1によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理）。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30分）850℃（2時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO<sub>2</sub>を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO<sub>2</sub>と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした<sup>14</sup>C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>Cの測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}\text{C}$ を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma:68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。暦年較正とは、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動、及び半減期の違い（<sup>14</sup>Cの半減期5730±40年）を較正することである。暦年較正は、CALIB 5.02のマニュアルにしたがい、1年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値を用いて行う。また、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用い、測定誤差 $\sigma$ 、 $2\sigma$ 双方の値を計算する。 $\sigma$ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 $2\sigma$ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。表中の相対比とは、 $\sigma$ 、 $2\sigma$ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

### (2) テフラの検出同定

試料約20gを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄み

を流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

### (3) 重鉱物・火山ガラス比分析

試料約40gに水を加え超音波洗浄装置により分散、250メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径1/4mm-1/8mmの砂分をポリタングステン酸ナトリウム（比重約2.96に調整）により重液分離、重鉱物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。重鉱物同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とする。火山ガラス比は、重液分離した軽鉱物分における砂粒を250粒数え、その中の火山ガラスの量比を求める。火山ガラスの形態分類は、上述のテフラ分析におけるそれと同様である。また、火山ガラスにおける「その他」とは、軽鉱物分における火山ガラス以外の粒子（石英や長石類などの鉱物粒子および風化変質粒など）である。

## 3 結果

### (1) 放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果を表1に示す。YNE-21 SS-3より採取された「No.349 090609 B」は $4.170 \pm 30$ BPを示す。YNE-21 FP-1より採取された試料では、「No.3 3層 090617 C」および「4層（炭）090618」はともに $1.640 \pm 30$ BP、「4層（炭）090617 D」は $1.650 \pm 30$ BP、「4層下部（炭）090617 E」は $1.620 \pm 30$ BPといういずれも非常に近接した年代を示す。

各試料の校正暦年代を表2に示す。測定誤差を $\sigma$ の年代でみると、YNE-21 SS-3より採取された「No.349 090609 B」は $4.826-4.646$ calBP、YNE-21 FP-1より採取された試料では、4世紀後半から6世紀前半までの年代を示す。

表1. 放射性炭素年代測定結果

試料名	種類	補正年代 BP	$\delta^{13}C$ (‰)	測定年代 BP	Code No.
YNE-21 SS-3 No.349 090609 B	炭化物	$4.170 \pm 30$	$-24.21 \pm 0.67$	$4.160 \pm 30$	IAAA-92112
YNE-21 FP-1 No.3 3層 090617 C	炭化材 (サクラ属)	$1.640 \pm 30$	$-24.52 \pm 0.67$	$1.630 \pm 20$	IAAA-92113
YNE-21 FP-1 4層(炭) 090617 D	炭化材 (サクラ属)	$1.650 \pm 30$	$-25.89 \pm 0.83$	$1.660 \pm 30$	IAAA-92114
YNE-21 FP-1 4層下部(炭) 090617 E	炭化物	$1.620 \pm 30$	$-22.16 \pm 0.75$	$1.570 \pm 20$	IAAA-92115
YNE-21 FP-1 4層(炭) 090618	炭化材 (サクラ属)	$1.640 \pm 30$	$-24.44 \pm 0.73$	$1.630 \pm 30$	IAAA-92111

1)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。

2)BP年代値は、1950年を基点として何年前であることを示す。

3)付記した誤差は、測定誤差 $\sigma$ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

表2 暦年較正結果

試料名	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)						相対比	Code No.
		$\sigma$	cal BC	cal BC	cal BP	cal BP	cal BP		
SS-3 No.349	4,169 ± 29	$\sigma$	cal BC 2,876	cal BC 2,852	cal BP 4,826	4,802	0.188	IAAA-92112	
			cal BC 2,812	cal BC 2,744	cal BP 4,762	4,694	0.561		
			cal BC 2,726	cal BC 2,696	cal BP 4,676	4,646	0.251		
		2 $\sigma$	cal BC 2,881	cal BC 2,834	cal BP 4,831	4,784	0.207		
			cal BC 2,818	cal BC 2,662	cal BP 4,768	4,612	0.768		
			cal BC 2,649	cal BC 2,635	cal BP 4,599	4,585	0.025		
FP-1 No.3 3層	1,637 ± 26	$\sigma$	cal AD 363	cal AD 434	cal BP 1,567	1,516	0.906	IAAA-92113	
			cal AD 494	cal AD 505	cal BP 1,456	1,445	0.081		
			cal AD 523	cal AD 526	cal BP 1,427	1,424	0.012		
		2 $\sigma$	cal AD 343	cal AD 464	cal BP 1,607	1,496	0.822		
			cal AD 482	cal AD 532	cal BP 1,468	1,418	0.178		
			cal AD 353	cal AD 366	cal BP 1,597	1,584	0.121		
FP-1 4層(炭)	1,647 ± 28	$\sigma$	cal AD 381	cal AD 429	cal BP 1,569	1,521	0.879	IAAA-92114	
			cal AD 264	cal AD 275	cal BP 1,686	1,675	0.014		
			cal AD 332	cal AD 442	cal BP 1,618	1,508	0.872		
		2 $\sigma$	cal AD 450	cal AD 461	cal BP 1,500	1,489	0.012		
			cal AD 464	cal AD 532	cal BP 1,466	1,418	0.102		
			cal AD 494	cal AD 505	cal BP 1,456	1,445	0.081		
FP-1 4層下部 (炭)	1,616 ± 26	$\sigma$	cal AD 497	cal AD 531	cal BP 1,463	1,419	0.498	IAAA-92115	
			cal AD 394	cal AD 535	cal BP 1,556	1,415	1.006		
			cal AD 352	cal AD 366	cal BP 1,598	1,584	0.091		
		2 $\sigma$	cal AD 381	cal AD 434	cal BP 1,569	1,516	0.825		
			cal AD 494	cal AD 505	cal BP 1,456	1,445	0.071		
			cal AD 523	cal AD 525	cal BP 1,427	1,425	0.012		
FP-1 4層(炭)	1,640 ± 30	$\sigma$	cal AD 337	cal AD 468	cal BP 1,613	1,482	0.817	IAAA-92111	
			cal AD 478	cal AD 534	cal BP 1,472	1,416	0.183		
			cal AD 352	cal AD 366	cal BP 1,598	1,584	0.091		
		2 $\sigma$	cal AD 381	cal AD 434	cal BP 1,569	1,516	0.825		
			cal AD 494	cal AD 505	cal BP 1,456	1,445	0.071		
			cal AD 523	cal AD 525	cal BP 1,427	1,425	0.012		

1)計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer)を使用

2)計算には表に示した丸める前の値を使用している。

3)桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。

4)統計的に真の値が入る確率は $\sigma$ は68%、2 $\sigma$ は95%である

5)相対比は、 $\sigma$ 、2 $\sigma$ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

## (2) テフラの検出同定

結果を表3に示す。試料ウには極めて微量のスコーリアと火山ガラスおよび少量の軽石が認められた。スコーリアは最大径約0.5mm、暗褐色を呈し、発泡はやや不良である。火山ガラスは無色透明のバブル型である。軽石は、最大径約1.0mm、灰褐色を呈し、発泡はやや不良である。斜方輝石の斑晶の包有も認められた。また、試料ウには、主に斜長石と斜方輝石からなる新鮮な遊離結晶と暗灰～黒色を呈する安山岩片が多量に認められた。

表3 テフラ分析結果

試料名	対比される層位	スコーリア			火山ガラス			軽石			備考
		量	色調・発泡度	最大径	量	色調・形	量	色調・発泡度	最大径		
ウ	TP-1:3層	(+)	DBr-sb	0.5	(+)	cl-bw	++	GBr-sb(opx)	1.0	安山岩片および斜長石と斜方輝石の遊離結晶多量	
エ	TP-1:4層	-			(+)	cl-bw	++	GW-b(ho) W~PGBr-sg(opx)	1.7 1.0	2種類の軽石が混在	
オ	TP-1:3~4層の 下位	-			+	cl-bw	+	GW-b(ho) W~PGBr-sg(opx)	1.0 0.8		

凡例 一含まれない (+)きわめて微量、+微量、++少量、+++中量、++++多量。

Br:褐色 DBr:暗褐色 GBr:灰褐色 PGBr:淡灰褐色 W:白色 GW:灰白色

g:良好 sg:やや良好 sb:やや不良 b:不良 最大径はmm. (opx):斜方輝石斑晶包有 (ho):角閃石斑晶包有。

cl:無色透明 br:褐色 bw:バブル型 md:中間型 pm:軽石型

試料エには極めて微量の火山ガラスと少量の軽石が認められた。火山ガラスは、試料ウと同様の無色透明バブル型であるが、軽石は、試料ウとは異なる特徴を有する2種類のものが認められた。1つは、最大径約1.7mm、灰白色を呈し、発泡は不良、角閃石の斑晶を包有する軽石であり、もう1つは、最大径約1.0mm、白色～淡灰褐色を呈し、発泡はやや良好、斜方輝石の斑晶を包有する軽石である。両者の量比は同程度である。

試料中には微量の火山ガラスと微量の軽石が認められた。火山ガラスは上記試料と同様の無色透明バブル型であり、軽石は上述した試料エと同様の2種類の軽石が混在する。

### (3) 重鉱物・火山ガラス比分析

結果を表4、図1に示す。試料番号3の重鉱物組成は、斜方輝石が最も多く、約60%を占め、次いで不透明鉱物が約20%、他に少量のカンラン石と単斜輝石が含まれる。試料番号9の重鉱物組成は、カンラン石が最も多く、約45%を占め、次いで斜方輝石が約30%、角閃石と不透明鉱物が10%前後であり、他に微量の単斜輝石が含まれる。試料番号13では斜方輝石が最も多く、

約35%を占め、次いでカンラン石と角閃石が同量程度(30%弱)に多く、他に少量の不透明鉱物と微量の単斜輝石を伴う。

火山ガラス比では、試料番号7にバブル型火山ガラスの明瞭な濃集層が認められ、それより上位に向かって減少する傾向と下位では急激に減少している状況が把握できる。試料番号13では、バブル型火山ガラスは検出されず、微量の中間型と軽石型が含まれる。

## 4 考察

### (1) 年代測定

YNE21 SS3より採取された炭化物から得られた年代は、例えば小林(2008)による放射性炭素年代から設定された東日本の縄文土器型式の年代観によれば、縄文時代中期の後半頃に相当する。調査区内では、縄文時代中期とされる遺物が出土していることから、今回得られた年代値は、遺構の年代を推定する上で有意なものとなる可能性が高い。今後さらに遺物の出土状況などとも合わせて検討することがのぞまれる。

YNE21 FP1より採取された炭化物・炭化材は、較正された暦年では4世紀後半から6世紀前半までの年代を示した。調査区内および周辺域における古墳時代とされる遺物や遺構の検出状況を確認検討した上で、YNE21 FP1の年代資料として評価することがのぞまれる。

### (2) 層序対比

#### ア 黒ボク土層

黒ボク土層の試料からは、少量の軽石が検出された。この軽石は、その色調や発泡度および斜方輝石を包有すること、さらには微量のスコリアと多量の安山岩片や斜長石、斜方輝石の遊離結晶を伴うことなどから、平安時代の天仁元年(1108年)に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ(As-B:新井,1979)に由来すると考えられる。

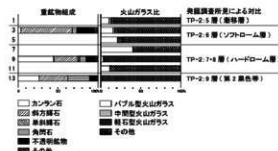


図1 重鉱物組成および火山ガラス比

表4 重鉱物・火山ガラス比分析結果

試料番号	対比調査所見による	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	合計
1	TP-2.5層	—	—	—	—	—	—	26	7	9	208	250	
3	TP-2.6層	9	161	14	1	55	10	250	38	6	9	197	250
5	—	—	—	—	—	—	—	—	51	3	13	183	250
7	—	—	—	—	—	—	—	—	99	2	4	145	250
9	TP-2.7-8層	112	75	5	20	28	10	250	7	3	4	236	250
11	—	—	—	—	—	—	—	—	28	1	3	218	250
13	TP-2.9層	65	91	1	68	20	5	250	0	3	1	246	250

また、試料工からも少量の軽石が検出されているが、そのうち、灰白色で発泡不良、角閃石の斑晶を包有する軽石は、それらの特徴と上述した As-B よりも下位の層位から産出していることなどから、古墳時代に榛名火山より噴出した榛名二ツ岳洪川テフラ (Hr-FA: 新井, 1979; 早田, 1989) または榛名二ツ岳伊香保テフラ (Hr-FP: 新井, 1979; 早田, 1989) に由来する可能性がある。Hr-FA は 6 世紀初頭に噴出したとされ、細粒の火山灰と火砕流の噴出を主体としたテフラであり、その分布軸は榛名火山から東方へ向き、南北方向にも幅広い分布が示されている (町田・新井, 2003)。一方、Hr-FP は 6 世紀中葉に噴出したとされ、多量の軽石を噴出したテフラであり、その分布軸は北東方向を向いており、分布幅は比較的狭い (町田・新井, 2003)。本遺跡の所在する岩間町付近は、町田・新井 (2003) の Hr-FP の分布範囲からは大きくはずれている。しかし、今回の分析試料から検出された砕屑物は、径は小さいが斑晶を包有する軽石であり、火山ガラスではない。また早田 (1989) のいう、遠隔地における Hr-FA を構成するスポンジ状に発泡した細粒の火山ガラスは、まったく認められなかった。これらのことから、今回検出された灰白色軽石は、Hr-FP に由来する可能性があると判断した。

試料工から検出されたもう一方の軽石は、その色調や発泡度および斜方輝石の斑晶を包有し、さらに上述した Hr-FP と混在する産出層位などから、4 世紀中葉に浅間火山から噴出した浅間 C 軽石 (As-C: 新井, 1979) に由来すると考えられる。

試料オにも Hr-FP と As-C の軽石が含まれているが、試料エよりも少ないことから、上位からの拡散により含まれている状況であると考えられる。したがって、各層位で検出されたテフラの噴出年代を考慮すると、試料オ採取層位は、古墳時代以前の年代が推定され、試料エ採取層位はおよそ古墳時代頃の層位、試料ウ採取層位は古代頃の層位にそれぞれ対比されると考えられる。

#### イ ローム層

火山ガラス比分析により検出された濃集するバブル型火山ガラスは、その色調と形態および Ag-KP よりも上位の層位に対比されることから、鹿児島湾北部の始良カルデラより噴出した始良 Tn 火山灰 (AT: 町田・新井, 1976) に由来すると考えられる。本地点における AT の産状は、AT が降灰後に攪乱と再堆積を繰り返したことを示唆しているが、このように土壌中に特定テフラが混交して産出する場合はテフラ最濃集部の下限がそのテフラの降灰層率にはほぼ一致すると言われている (早津, 1988)。したがって、本地点における AT の降灰層率は、試料番号 7 ~ 8 付近、すなわち TP-2 の 7・8 層上部に推定される。

AT の噴出年代については、80 年代後半から 90 年代にかけて行われた放射性炭素年代測定 (例えば松本ほか (1987)、村山ほか (1993)、池田ほか (1995)、宮入ほか (2001) など) から、放射性炭素年代ではおよそ 2.5 万年前頃にまとまる傾向にある。一方、最近の海底コアにおける AT の発見から、その酸素同位体ステージ上における層率は、酸素同位体ステージ 2 と 3 との境界付近またはその直前にあるとされ、その年代観は 2.5 ~ 3.2 万年前におよぶとされている (町田・新井, 2003)。町田・新井 (2003) は、AT の放射性炭素年代を暦年に換算することがまだ困難であると述べているが、上述の海底コアの年代観も考慮すれば、暦年ではおそらく 2.6 ~ 2.9 万年前頃になるであろうとしている。

東茨城台地も含めた常陸台地上のローム層では、上部に Ag-KP 層が堆積し、その上位に大抵 1 枚の黒色帯が記載されていることが多い。今回分析対象とした土層断面で TP-2 の 9 層に対比された層位も、この黒色帯に相当すると考えられる。常陸台地各地における、これまでの当社によるローム層の分析事例では、黒色帯の最上部または直上付近に AT の降灰層率が推定されており、また重鉱物組成では、

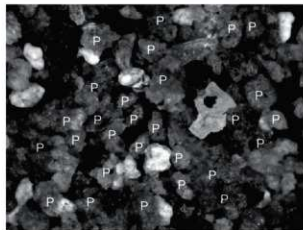
黒色帯の上部でカンラン石の量比が最も高くなる傾向が得られている。今回の分析結果では、ATの降灰層もカンラン石の量比が多い層も、黒色帯より上位のTP2の7・8層に認められている。したがって、今回の分析土層断面における黒色帯は、他の常陸台地上で確認されたローム層上部の黒色帯に比べると、相対的にやや下位に位置していると言える。

今後とも、東茨城台地も含めた常陸台地上のローム層について、多くの地点で分析事例を蓄積することができれば、黒色帯と重鉱物組成やATとのより詳細な層位関係を検討することが可能と考えられる。

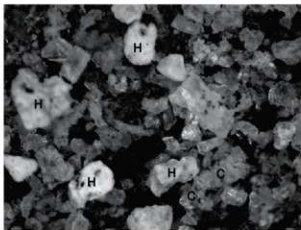
#### 引用文献

- 新井房夫 「関東地方北西部の縄文時代以降の指標テフラ層」『考古学ジャーナル』157:41-52 1979年
- 早津賢治 「テフラおよびテフラ性土壌の堆積機構とテフラクロノロジー-ATにまつわる議論に關係して」『考古学研究』34:18-32 1988年
- 池田見子・奥野 亮・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫 「南九州、始良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器質量分析法による14C年代」『第四紀研究』34:377-379 1995年
- 貝塚爽平・小池一之・遠藤邦彦・山崎晴雄・鈴木毅彦編『日本の地形4 関東・伊豆小笠原』東京大学出版会、349p. 2000年
- 小林謙一「縄文土器の年代(東日本)」『小林達雄先生古希記念企画 総覧 縄文土器』株式会社アム・プロモーション、896-903 2008年。
- 町田 洋・新井房夫「広域に分布する火山灰-始良 Tn 火山灰の発見とその意義-」『科学』46:339-347 1976年
- 町田 洋・新井房夫『新編 火山灰アトラス』東京大学出版会、336p. 2003年
- 松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗「始良 T n 火山灰の14C年代」『第四紀研究』26:79-83 1987年
- 宮入陽介・吉田邦夫・宮崎ゆみ子・小原圭一・兼岡一郎「始良 T n 火山灰の C-14 年代のクロスチェック(演習)」『地球惑星科学関連学会合同大会予稿集 (CD-ROM)』2001.Qm-010 2001年
- 村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村 真・安田高登・平 朝彦「四国沖ビストンコア試料を用いた A T 火山灰噴出年代の再検討-タンダトロン加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の14C年代-」『地質学雑誌』99:787-798 1993年
- 早田 勉 「六世紀における権名火山の二回の噴火とその災害」『第四紀研究』27:297-312 1989年

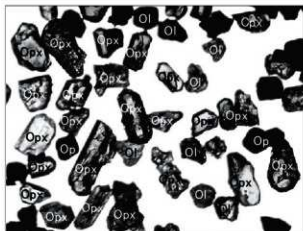
図版1 テフラ・重鉱物・火山ガラス



1.As-Bの軽石(TP-1:3層;ウ)



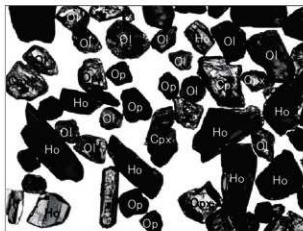
2.Hr・As-Cの軽石(TP-1:4層;エ)



3.重鉱物(TP-2:6層;3)



4.重鉱物(TP-2:7・8層;9)



5.重鉱物(TP-2:9層;13)

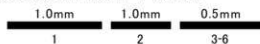


6.ATの火山ガラス(TP-2:6層下- 7・8層上;7)

P:軽石, H:Hr軽石, C:As-C軽石, Ol:カンラン石.

Opx:斜方輝石, Cpx:単斜輝石, Ho:角閃石, Op:不透明鉱物.

Vg:火山ガラス, Pl:斜長石.





## 付 章 2

### 1 整理の方法

彌松遺跡の整理は最初に全点属性表を作成した。全点属性表では、器種・石材・法量（砕片・裂片は未計測）と必要な所見を記述した。次にそれをもとにして、図を作成する石器を選択し、その後には作図及び詳細属性表を作成した。図と詳細属性表の資料体が彌松遺跡の資料体である。

実測図を描いた石器は、加工のある石器、剥片剥離技法に特徴的な剥片と石核、稀少石材の剥片及び石核などである。また特徴的な石器については、低倍率の顕微鏡写真をもちいた図版を作成した。

詳細属性表については、法量の他に、素材属性、加工属性、刃部属性の記号で記述した。このうち素材属性は、剥片の場合は剥離技術を、石核の場合は礫か剥片、もしくは石核の成形加工を記した。加工属性は形態形成の二次加工の技術を主に記述したが、石核の場合は剥片剥離技術を記述した。刃部属性は、剥片石器の刃部加工もしくは素刃（素材剥片そのままを刃部に用いること）、刃こぼれ痕などを記した。さらにこれらと併せて個別に石器の所見を作成した。

### 2 石器群の概要

#### (1) 概要

石器ブロックは4ブロックあり、それぞれ出土量と石材構成に特徴をもつ。

出土量の多いのが第1号石器集中地点（SS1）と第3号石器集中地点（SS3）で、少量が第2号石器集中地点（SS2）と第4号石器集中地点（SS4）である。出土量の多いSS1には瑪瑙が多く、SS3はガラス質安山岩が多い。

石器の内容は、小形石刃を含む石刃石器群と一側刃加工及び二側刃加工のナイフ形石器、截頂石刃（部分加工のナイフ形石器）を特徴とする石器群である。尖頭器の未製品がSS2及び同一母岩の尖頭器失敗品2点がSS4から出土している。

小形石刃は細石刃様の石刃で、稜付石刃もSS1から出土している。また接合資料もSS3から出土している。これらは当初は押圧剥離の所産と推定していたが、接合資料の検討により径の小さなハードハンマーの間接打撃と判定した。

こうした特徴をもつ石器群は、ナイフ形石器の最終末と把握できよう。南関東では黒曜石の尖頭器石器群が卓越する時期であるが、本遺跡では尖頭器石器群ではないことが注目される。同時期の地域ごとに複数の石器文化が存在する可能性を示すものである。

さらに、若干であるが鋸歯縁加工のある削器、ナイフ形石器、打面調整のある横長剥片石核などの石器が残されている。おそらく、瀬戸内系の石器群の最終末期の影響のもとにある石器で、ナイフ形石器群と瀬戸内石器群の終末はほぼ同時期である可能性も示唆している。そして、次の段階で本格的な細石刃石器群の登場をみるのであろう。

#### (2) 集中地点の石材様相

##### 第1号石器集中地点

SS1の主体石材の瑪瑙は、大形の円礫が持ち込まれているが、極小の円礫も発掘されており、これは人為的に持ち込まれたものではなく、土層中に予め含まれているものと考えられる。従って、瑪瑙は遺跡の極近傍にその原産地があったと考えられる。

瑪瑙の石核は剥片剥離の頻度が少なく、表皮を剥いだのみのものが多い。また石核ブランクも多く残されている。整った剥片、石刃も少ない。

#### 第2号石器集中地点

SS2は少量の資料体で構成される。

#### 第3号石器集中地点

SS3の主体石材はガラス質安山岩である。これらは大洗海岸近傍にその原石地があると推定される。

ガラス質安山岩は、石刃が多く、石核もよく消費されている。瑪瑙、ガラス質安山岩ともに遺跡内で剥片剥離作業が行われている。

その他

その他の石材ではチャート、流紋岩、頁岩、鉄石英などの稀少石材がある。接合資料も若干あるので、遺跡内で剥片剥離がなされているものもあるが、単品のナイフ形石器などもある。これらは遺跡から離れた場所で採取された石材である。

### 3 母岩別資料と接合資料

#### (1) 概要

母岩別作業と接合作業は石材の識別から始まったが、瑪瑙とガラス質安山岩は石材識別が非常に難しく、数個体の接合のみにとどまった。稀少石材である頁岩、鉄石英、チャートは数母岩が確認されたが、接合個体の点数も限られた。

全体の石材様相から剥片剥離作業と石器製作作業の概要を述べると、瑪瑙とガラス質安山岩は、主にこの遺跡内で剥片剥離作業が行われ、若干の石器も製作されたようである。この遺跡の生業圏内の石材であろうか。それぞれの石器集中区に石材の偏りがみられることも特徴である。

稀少石材は、鉄石英のような遠隔地の石材もみられるが、頁岩やチャートは別の遺跡内から持ちこされた石材であろうか。

#### (2) 接合資料

接合資料 No.1 は瑪瑙の石刃と剥片の接合資料である。背面に自然面が残ることから、剥離作業の初期段階であることがわかる。接合資料 No.2 はガラス質安山岩の石刃の接合資料で、自然面が残されていることから、剥離作業の初期段階の所産である。接合資料 No.3 は剥離作業が進んだ工程の石刃接合資料である。接合資料 No.4 は大形母岩の石刃剥離初期工程の接合資料で、長い稜付石刃と自然面の付いた長い石刃が接合している。接合資料 No.5 は二次加工剥片が接合した例である。素材剥片の縁辺から剥離された小剥片は、そのまま急角度剥離で加工される二次加工剥片となっている。これは剥片素材の石核から剥がされた剥片に急角度の加工を加える瀬戸内系の資料であろうか。

接合資料 NO.6 は小形石刃の石核と剥片の接合資料である。石核は剥片素材で小形石刃の剥離の後に、作業面に加工を施している。稜付石刃の剥離を意図したものであろうか。

接合資料 No.7 は打面作出剥片と打面再生剥片の接合資料である。接合資料 No.8 はチャートの剥片の接合資料である。接合資料 No.9 は小形石刃の石核と小形石刃の接合資料である。この資料は顕微鏡観察でも記述した。

#### (3) 母岩別資料と接合資料

主に頁岩や鉄石英などの稀少石材の母岩別資料と接合資料である。特に注意されるのは母岩別資料1の尖頭器未製品資料である。折れ面の部分で接合の可能性があるが、接合はしていない。石質は酷似している。

#### 4 特徴的な石器の顕微鏡観察

特徴的な石器については、低倍率の顕微鏡写真で、その詳細を示すことにした。以下に図版の説明を行う。

##### (1) 顕微鏡写真図版 1, 2

小形石刃の資料である。図版1の写真1と3で小形石刃の打面部分を、写真2と4で剥離の開始部を撮影した。打面は平坦打面が残されており、剥離の開始部はコーンタイプである。

もっともよく特徴を示すのが接合資料No.9であり、写真5に調整打面が示されている。写真6では、石核にも調整打面が残されており、またコーンクラックも残されていた。

これらの小形石刃はハードハンマーの間接打撃によって剥離された細石刃様の石器である。

図版2では単体の石核の打面と作業面を撮影した。写真1と2で、裂片素材の小口から2枚の小形石刃が剥離されているのがわかる。コーンが明瞭に残されている。写真3から6も小形石刃石核で、小口から小形石刃が連続的に剥離され、さらにハードハンマーによる剥離の開始部が明瞭である。

これらの資料は、細石刃（押圧剥離による石刃）が出現する以前に、既に細石刃様の小形石刃が針のような工具の間接打撃によって剥離されていることを示している。

##### (2) 顕微鏡写真図版 3

石刃剥離の資料である。図版3の写真1と2は瑪瑙の石刃石核である。写真2のようにコーンが変形していることから、硬い（圧入力の高い）が変形するソフトハンマーによることを推定させる。写真3はガラス質安山岩の剥離の開始部であるが、写真1, 2と同様の特徴をもつ。

これらの石刃は剥離軸が真直ぐで、両側辺が並行な真正な石刃である。こうした石刃を連続的に剥ぎ取るには直接打撃で難しく、間接打撃が推定される。

##### (3) 顕微鏡写真図版 4, 5

図版4は二側辺加工のナイフ形石器の加工部位の低倍率写真である。石材が瑪瑙とガラス質安山岩で見えにくいのが、いずれもハードハンマーによる押圧剥離の刃漬し加工である。こうした加工は列島の二側辺加工ナイフ形石器（茂呂系ナイフ形石器）に一般的にみられるものである。

図版5の上図は石刃の打面を折り、そこに直接打撃で整形加工を施した裁頂石刃（部分加工のナイフ形石器）の加工部位の写真である。こうした裁頂石刃は、斜裁断加工の石刃も含めて、猫松遺跡の石器群に一般的に伴う。

図版5の下図は、瀬戸内系のナイフ形石器及び剥片の資料である。ナイフ形石器は折れており、断片的な資料であるものの、背面構成は横長剥片の連続剥離、加工は間接打撃の鋸歯状加工となっており、瀬戸内系ナイフ形石器の特徴をよく示している。

剥片は縦長剥片であるものの、その前段階の剥片剥離は底面を持つ石核から横長剥片を連続的に剥離しており、さらに剥片側には前段階の鋸歯状の打面調整痕が明瞭に残されている。瀬戸内系石器群には瀬戸内技法・類瀬戸内技法の他に、石刃が伴う。これらの石刃は石核の側面から刃先角の厚い断面三角形の石刃が剥離されることが特徴であり、さらに翼状剥片石核から石刃石核に再利用されることもある。これらの石刃技法は2類として猫松遺跡に多く残されている。

##### (4) 顕微鏡写真図版 6

稀少器種を掲載した。上図は彫刻刀形石器であり、石刃の末端辺に打面を作り、側面に向かって彫刀面を作出している。打面の加工はナイフ形石器の加工である。刃部は短い刃が刃こぼれ痕がみられる（図のバーの部分）。刃部が右側辺にあるのは、彫刀面作りの打面が正方向（裏面から背面の方向）にあるため、

神山型彫刻刀形石器や荒屋型彫刻刀形石器とは打面、彫刀面ともに違っている。小形石刃を伴う石刃石器群の彫刻刀形石器としては新出の器種であり、今後の類例をまちたい。

下図は鋸歯縁石器である。鋸歯縁石器もしくは鋸歯縁削器は、瀬戸内系石器群に特徴的に伴う削器で、その鋸歯縁の加工は瀬戸内系ナイフ形石器の加工、及び打面調整とともに特徴的である。猫松遺跡にも写真3から6のような間接打撃の鋸歯縁加工と、大形の直接打撃による鋸歯縁加工の石器がある。

## 5 剥片剥離技術

剥片剥離技術は、HD（ハードハンマーの直接打撃）、HI（ハードハンマーの間接打撃）、S'D（圧縮力のあるソフトハンマーの直接打撃）、S'I（圧縮力のあるソフトハンマーの間接打撃）、の4種類ある。それぞれの技術に石器の個性が反映されているので、以下に本遺跡の剥片剥離技術の「癖」の概要を示す。

### (1) HD

HDの剥離開始部はコーンタイプやクサビタイプになる場合がほとんどである。クサビタイプの開始部の場合、コーンもバルブも発達しない。打面は5ミリを超えるもの、もしくは折れているものが多い。主に瑪瑙などの硬い石材のファーストフレイク、もしくは粗い石核調整の剥片を剥離する場合に特徴的である。剥片背面に自然面の付くものも多い。

### (2) HI

HIの剥離開始部はコーンタイプがほとんどである。コーンは発達せず、コーン径も小さい。平坦打面や打面調整を伴いながら、瑪瑙及びチャートの小形石刃が剥離される場合に用いられる。小形石刃の場合、押圧剥離と見間違ふ可能性があったが、接合資料No.9の石核と打面調整のある小形石刃との理解から、間接打撃と判断した。

### (3) S'D

S'Dはコーンが発達するものの、コーンの形態は歪んでいる。楔タイプの開始部や曲げタイプなど、すべての剥離の開始部タイプがみられる。また多くの剥片はリップが発達する場合が多く、打面厚は5ミリを超える場合も多く、打面幅の短く打面厚も薄い場合は、コーン径が打面幅に示される場合が多い。

瑪瑙の表皮を剥いだ石核や、頁岩などのやや柔らかい石材の石核成形、打面形成剥片、打面再生剥片などに用いられる。

また打面厚が2ミリ前後の石刃状剥片もあるが、これは石核の打面を立てて、打面を擦るようにハンマーを振り下ろしている例である。

### (4) S'I

S'Iは剥離軸が打撃方向と垂直となり、剥離軸に歪みが少ない。歪んだコーンがやや発達するが、バルブの発達は少ない。また打面厚が5ミリ程度である。コーン径は3ミリ程度が多い。主に石刃、縦長剥片（石刃状剥片）にもちいられる。

工具の当て方で、作業面に非常に近く工具を当てると、線状打面となる場合がある。これらはハンマーミスとして記載してある。

## 6 剥片剥離技法

### (1) 石刃技法1類

石核の表面から薄い石刃を剥離する石刃技法。主に平坦打面、調整打面から剥離される。石刃の初期段階はソフトハンマーの直接打撃で剥離作業を行い、その後調整打面からソフトハンマーの間接打撃で長い石刃を剥離する。石核はよく消費され、小形の石刃まで剥離されつづける。打面再生、90度、180度の

打面転位も行われる。これらの石刃はナイフ形石器の素材剥片にもなる。

## (2) 石刃技法 2類

石核の側面から刃先角の鈍い（60度前後）の石刃を剥離する石刃技法。平坦打面、調整打面から剥離される。石核の消費はあまり進まず、ほとんどが同一打面で消費が完了する。

剥離技術はハードハンマー、ソフトハンマーともにある。小形石刃にもこの技術があり、また瀬戸内系の石刃としても特徴的である。

## (3) 矩形剥片剥離技法

主に馬環の矩形剥片を間接打撃で剥離する技法。目的剥片は不定形であるが、縁辺は鋭い。その打面は自然面、平坦打面であり、打面厚は3ミリ前後である。ここから極小石錐、極小ナイフ形石器などの器種が製作されている。打面転位を頻繁に行う石刃技法1類の変形した技法であろうか。

## (4) 横長剥片剥離技法（類瀬戸内技法）

資料がわずか3点にとどまる。ナイフ形石器1点、剥片1点、類翼状剥片石核1点である。ナイフ形石器については顕微鏡写真図版5を参照されたい。

## (5) 小形石刃剥離技法

細石刃と見間違え程度の小形石刃の資料体が一定量存在する。これらは通常の細石刃核にみられるような石核成形はなく、小分精確を素材にした小形石刃核である。これらが小形石刃であるとした理由は、剥離技術が間接打撃であり、押圧剥離ではないと推定されるからである。石核の特徴は、石刃技法2類のように、石核の側面から小形石刃を剥離するものもあり、船底型の細石刃石核を連想させる。

## 7 器種の定義

裂片：剥離作業に伴うはじけ飛びの剥片。意図的な剥離ではなく、偶発的に剥落したもの。主に直接打撃で形成される。技術属性の意味はない。本遺跡では中形の剥片規模の裂片もある。

碎片：剥離作業に伴う小さな剥片。剥離技術の推定が不明瞭で、あらゆる剥離技術で形成される石片。技術属性の意味はない。

剥片：石核から剥離された石片で、主に剥離技術の推定ができるもの。剥離技術の推定は打面形態と剥離の開始部で行う。打面が折れている剥片は、剥離技術の推定幅が大きいため、不明と表記してある。調整打面や平坦打面で、両側が並行の剥片を剥ぎ取る石刃技法から剥がされた石刃も広義の剥片に入る。また本遺跡の剥片には10ミリ前後の非常に小さな小形石刃も含まれる。

ナイフ形石器：石刃もしくは縦長剥片、剥片をもちいて、ハードハンマーの押圧剥離の刃潰し加工で器体を整形し、刃先は素刃である石器。通常は尖頭部をもつ。石刃の打面、もしくは末端辺に直接打撃や押圧剥離で刃潰し加工をした尖頭部をもたない石器を部分加工のナイフ形石器と呼称する場合もあるが、猫松遺跡では裁頂石刃として記述してある。

彫刻刀形石器：剥片の一端に打面を作り出し、そこから直接打撃もしくは間接打撃や押圧剥離で桶状剥離によって刃部を形成する石器。猫松遺跡では石刃の末端に押圧剥離の刃潰し加工で打面をつくり、そこから桶状の短い刃部を形成している石器。

鋸歯縁石器：剥片もしくは石刃の一端に、間接打撃や直接打撃で急角度の連続剥離で鋸歯状の刃部を作出する石器。

石核：剥片を剥がす母岩。礫素材と剥片素材がある。本遺跡の石核は、一発石核（打撃が一回もしくは数回で、石質をみるため、もしくはこれから石核成形をなす石核）、石刃を剥離するための準備石核（SS1-

Q 128), 複数の種類の技術で剥片を剥がす石核 (SS1-Q 127), 剥離過程で放棄されたもしくは置き去られた石核, 残核 (剥片を取り尽くした石核) などの種類がある。

石核ブランク: 石核を成形し, 目的剥片を剥離するまでにしたものを。

尖頭器: 両面加工もしくは片面加工, 周縁加工の加工様相で, 直接打撃もしくは間接打撃で形態を形成する尖頭部をもつ石器。猫松遺跡では真正の尖頭器そのものは出土していない。SS2のガラス質安山岩の剥片に尖頭器未製品の断片が残されている (Q171)。また SS4に同一母岩の珪質頁岩の尖頭器未製品もしくは失敗品が出土している (Q395・Q396)。この尖頭器は二次加工が上手になされず, いずれも途中で折れが発生して放棄されている。

瀬戸内系石器群: 横長剥片連続剥片剥離技法と, 猫松遺跡の石刃技法2類, そして鋸歯縁の刃部や背部形成のナイフ形石器をもつ石器群である。猫松遺跡にわずかに出土している。

## 8 石器群のまとめ

主要器種は, 石刃素材の小形茂呂系ナイフ形石器, 截頂石刃と, 石刃である。これらの組合せは, これまで学史的に検討されてきた武蔵野編年 (小田他 1980), 相模野編年 (鈴木, 矢島 1978) のナイフ形石器終末期の石器群である。一方, 従来の石器組成の中で取り上げられることが少なかった貴重な資料 (間接打撃の小形石刃や瀬戸内系の資料) もある。以下に本遺跡の石器群のまとめを記述する。

本遺跡の編年の位置は, 従来の茂呂系終末期ナイフ形石器群に相当する。典型的な尖頭器石器群が伴わない, もしくはきわめて変形した尖頭器石器群の断片が存在する。

小形石刃が伴い, それは細石刃剥離技法 (押圧剥離を用いた特徴的な石核形態) ではなく, 本遺跡にある石刃技法の延長を間接打撃で実現したものである。

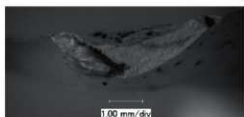
少量であるが, 瀬戸内系の石器群が存在する。それらは鋸歯縁石器と一側刃加工に変形した茂呂系ナイフ形石器, 1点の類異状剥片の背面をもつ剥片, 及び1点の直接打撃の打面調整をもつ横長剥片石核に示される。

SS2の土坑内 (縄文時代の陥し穴) から直接打撃の刃漬し加工による基部加工ナイフ形石器が2点と挟入石器が検出されている (遺構外出土の図) が, これらの石器が本来的にこの終末期ナイフ形石器に伴うものかは判断できなかった。

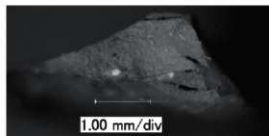
関東地方の茂呂系終末期ナイフ形石器群に, より西方からの終末期瀬戸内系石器群がともない, 相当に変形した尖頭器石器群がともない, さらに細石刃技術を模倣した間接打撃の小形石刃技法がともなう状態が, 本遺跡の姿である。ナイフ形石器の終末期の様相を解く上で貴重な資料といえよう。

## 引用・参考文献

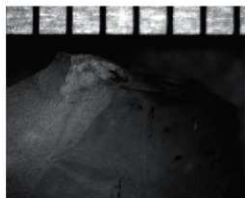
- 赤沢威・小田静夫・山中一郎 「日本の旧石器」立風書房 1980年
- 小野昭 「ナイフ形石器の地域性とその評価」『考古学研究』第16巻第2号 1970年
- 角張淳一 「石器の製作」『小林達雄編 考古学ハンドブック』新書館 2007年
- 角張淳一 「剥片剥離技術の検討及び石器実測図の評価」『平成14年度愛知県埋蔵文化財センター 年報』愛知県埋蔵文化財センター 2003年
- 鈴木次郎・矢島国雄 「先土器時代の石器群とその編年」『日本考古学を学ぶ(1)』有斐閣選書 1978年
- 竹岡俊樹 「石器研究法」言叢社 1989年
- 竹岡俊樹 「図説日本列島旧石器時代史」勉誠出版 2002年
- 竹岡俊樹 「石器の見方」勉誠出版 2003年
- 竹岡俊樹 「旧石器時代の型式学」学生社 2004年
- 中島庄一 「使用痕」『縄文文化の研究石器』10 雄山閣 1980年



1 写真2の打面側



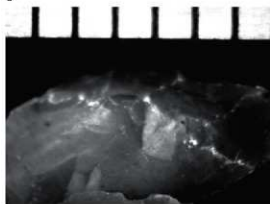
3 写真4の打面側



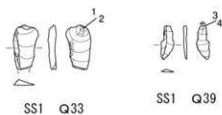
2



4

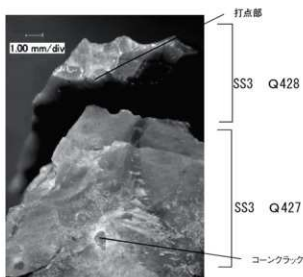


5

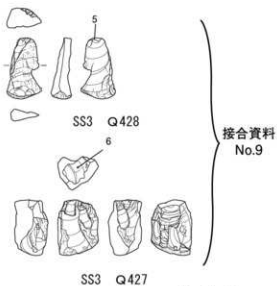


SS1 Q33

SS1 Q39



6 打面側(SS3-Q427とSS3-Q428接合状態で撮影)

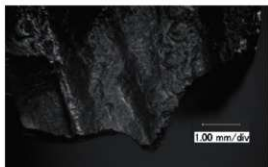


接合資料  
No.9

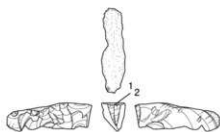
SS3 Q427

S=1:2

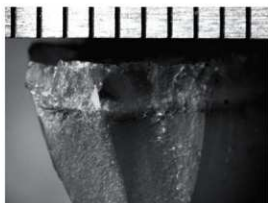
猫松遺跡 顕微鏡写真図版-1



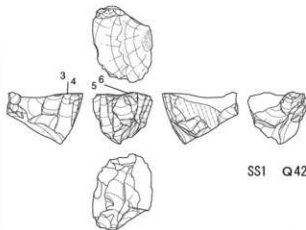
1 写真2の打面側



SS1 Q90



2

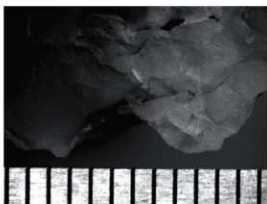


SS1 Q42

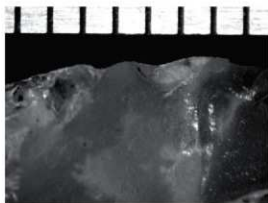
S=1:2



3 写真4の打面側



5 写真6の打面側

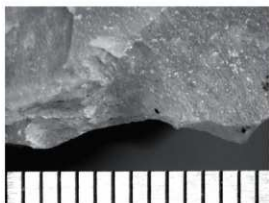


4



6

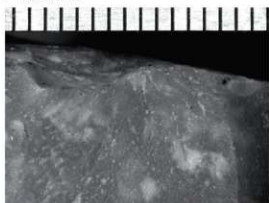




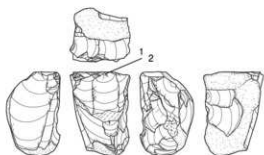
1 写真2の打面側



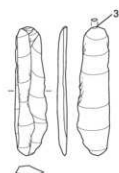
3



2



SS1 Q105



SS3 Q276

S=1:2

猫松遺跡 顕微鏡写真図版-3



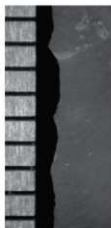
1 写真2の打面側



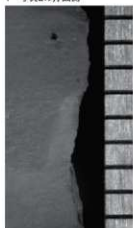
2



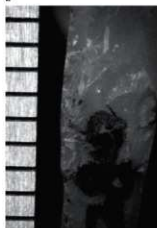
3



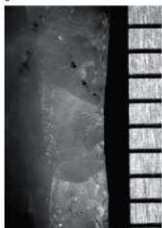
4 写真3の打面側



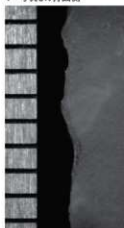
5 写真6の打面側



6



7



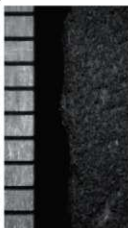
8 写真7の打面側



9



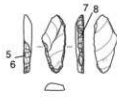
10



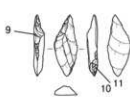
11 写真10の打面側



SS1 Q7



SS1 Q8



SS3 Q220

S=1:2

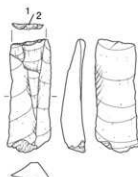
猫松遺跡 顕微鏡写真図版-4



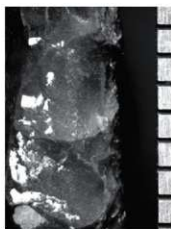
1 写真2の打面側



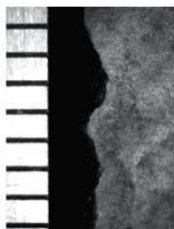
2



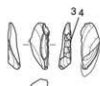
SS3 Q225



3



4 写真3の打面側



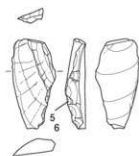
SS1 Q6



5 写真6の打面側



6



SS2 Q205

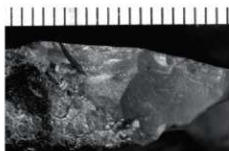
S=1:2

### 瀬戸内系資料

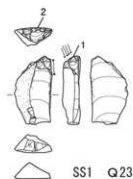
### 猫松遺跡 顕微鏡写真図版-5



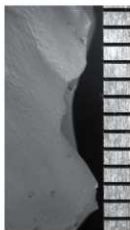
1 写真2の打面側



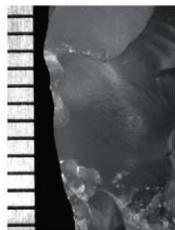
2



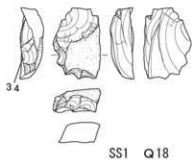
彫刻刀形石器



3 写真4の打面側



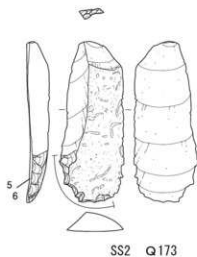
4



5 写真6の打面側



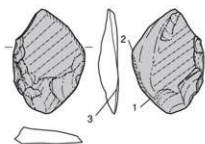
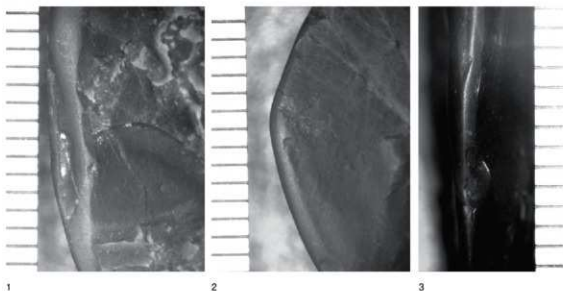
6



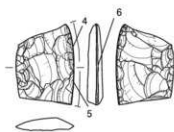
S=1:2

鋸齒縁石器

猫松遺跡 顕微鏡写真図版-6

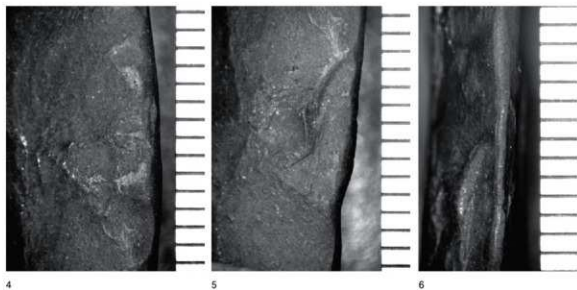


縄文時代 Q504



縄文時代 Q503

S=2:3



猫松遺跡 顕微鏡写真図版-7

写 真 凶 版

猫 松 遺 跡  
長 原 遺 跡



猫松遺跡 平成16年度調査区遠景



猫松遺跡 平成21年度調査区遠景

PL2



第1号石器集中地点  
遺物出土状況



第1号石器集中地点  
遺物出土状況



第2号石器集中地点  
遺物出土状況



第3号石器集中地点  
遺物出土状況



第1～3号石器集中地点  
遺物出土状況



第4号石器集中地点  
遺物出土状況



PL4



第4号住居跡  
遺物出土状況



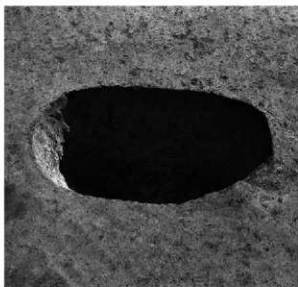
第4号住居跡  
完掘状況



第103号土坑  
遺物出土状況



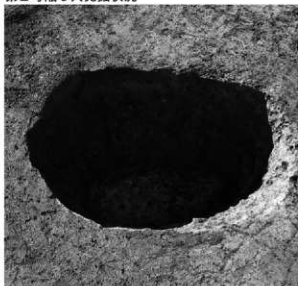
第1号陥し穴完掘状況



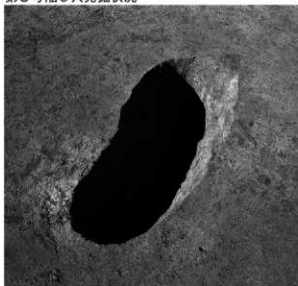
第2号陥し穴完掘状況



第3号陥し穴完掘状況



第4号陥し穴完掘状況



第5号陥し穴完掘状況



第7号陥し穴完掘状況



第8号陥し穴完掘状況



第9号陥し穴完掘状況



第15号陥し穴完掘状況



第16号陥し穴完掘状況



第14号陥し穴遺物出土状況



第10～14号陥し穴完掘状況

第1号住居跡  
遺物出土状況



第1号住居跡  
竈遺物出土状況



第1号住居跡  
完掘状況





第2号住居跡  
遺物出土状況



第2号住居跡  
遺物出土状況



第2号住居跡  
完掘状況

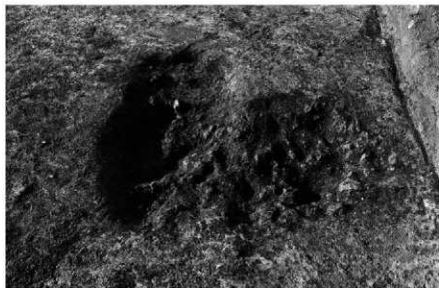
第3号住居跡  
遺物出土状況



第3号住居跡  
完掘状況



第3号住居跡  
炉完掘状況





第 69 号 土 坑  
遺 物 出 土 状 況



第 31 号 土 坑  
遺 物 出 土 状 況



第 1 号 井 戸 跡  
完 掘 状 況



第 2 号 井 戸 跡  
完 掘 状 況



第 3 号 井 戸 跡  
完 掘 状 況



第 4 号 井 戸 跡  
完 掘 状 況



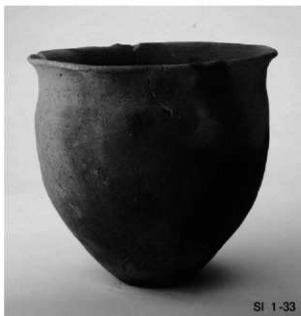


第4号住居跡，第11・14号陥し穴，第103号土坑，遺構外出土土器



第1・4号住居跡，第14・16号陥し穴，第1・29・31号土坑，遺構外出土土器

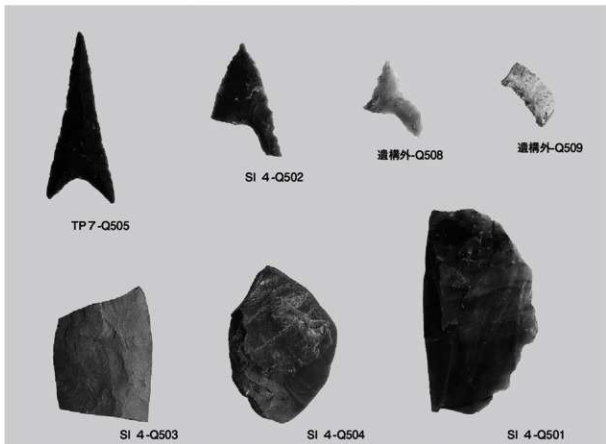
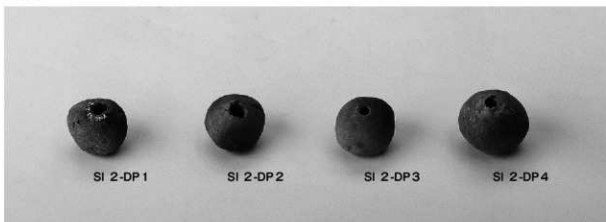
PL14

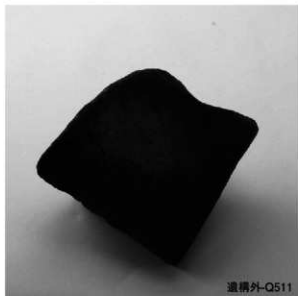


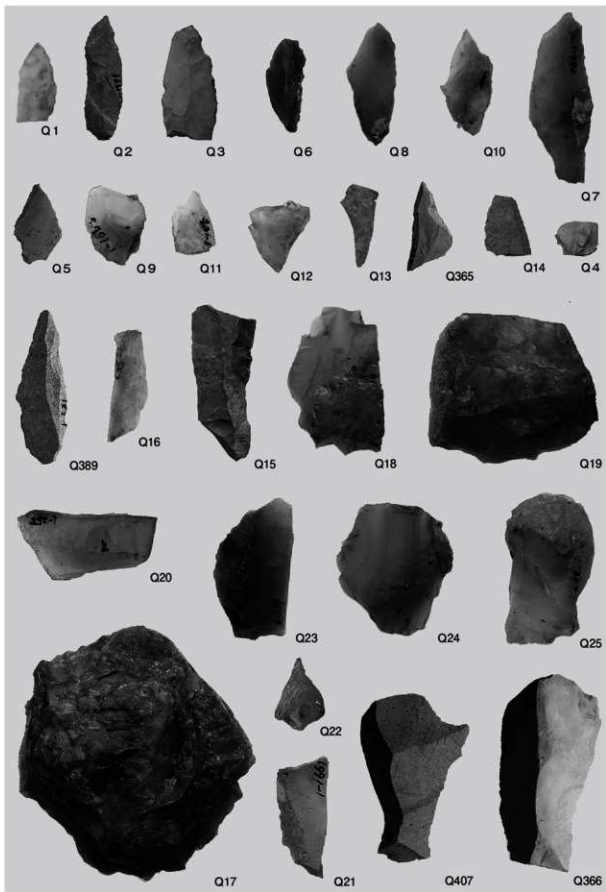
第1·3号住居跡，第69号土坑出土土器



第1・2号住居跡出土土器

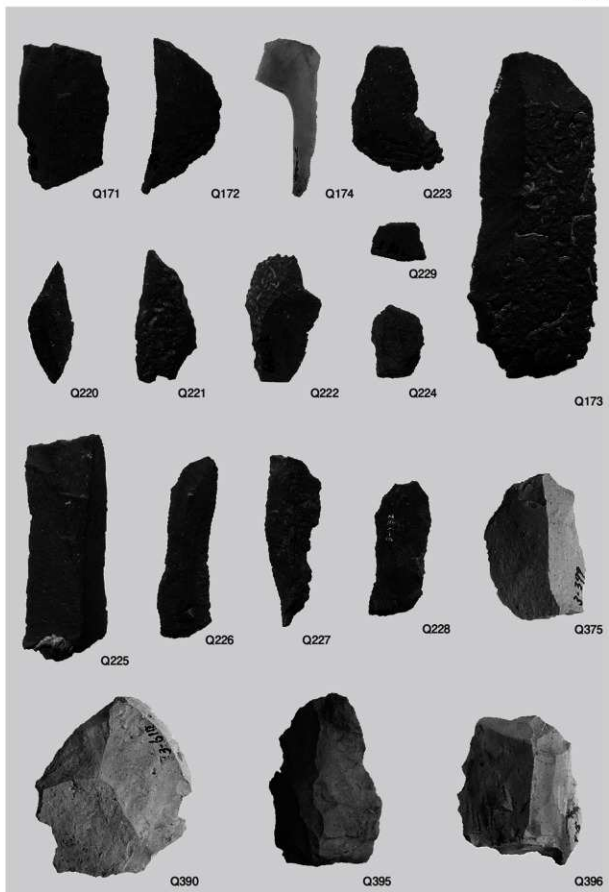




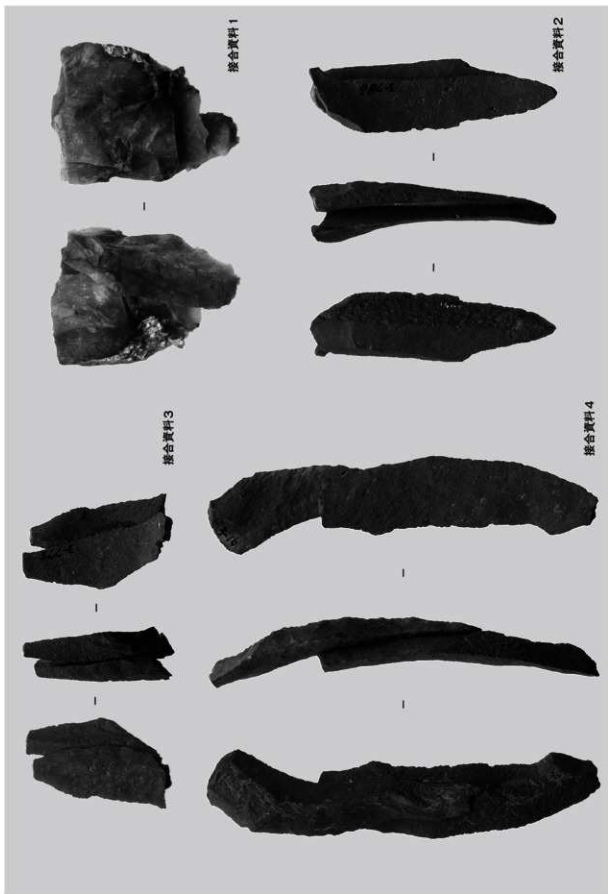


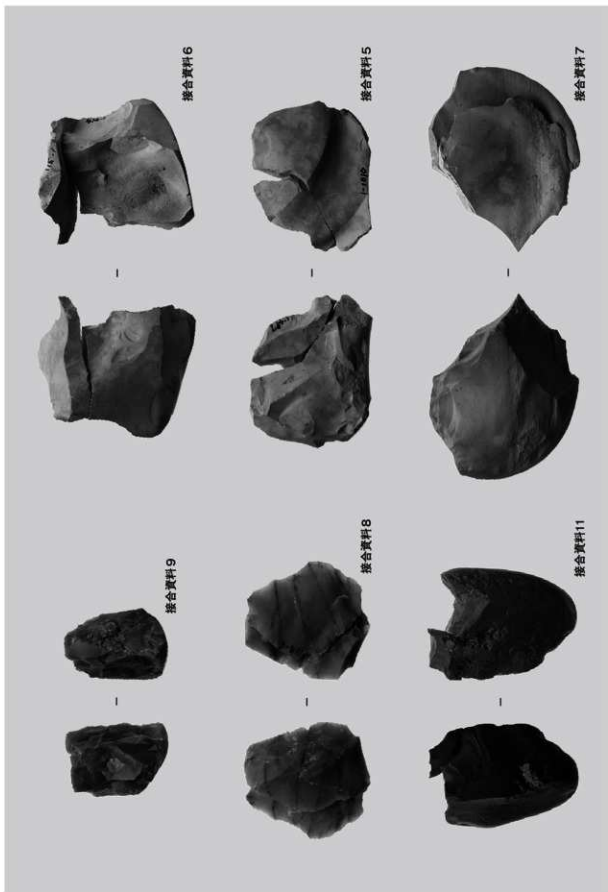
第1号石器集中地点出土石器

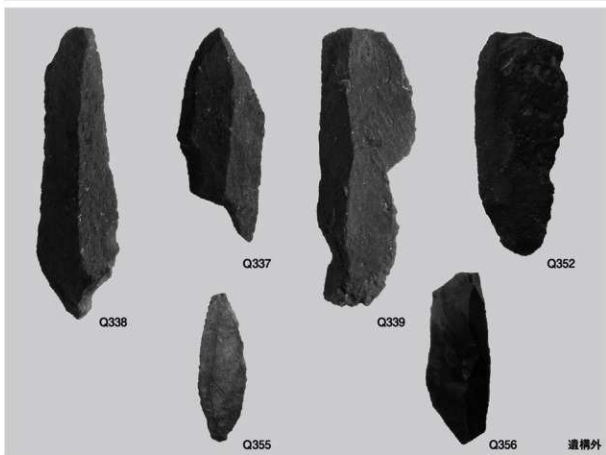
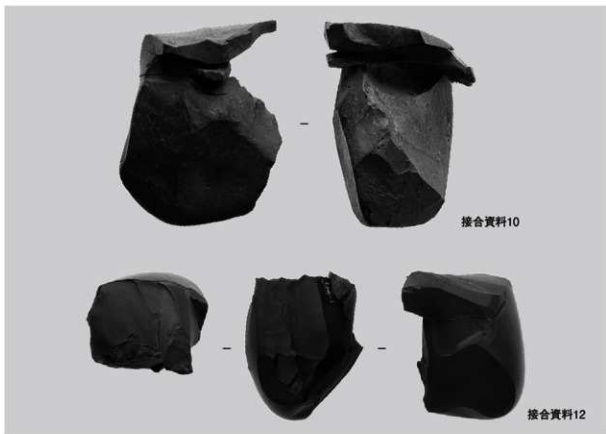




第2・3・4号石器集中地点出土石器







旧石器 接合資料, 遺構外出土石器

長原遺跡  
完掘全景



第1号陥し穴  
完掘状況



第2号陥し穴  
完掘状況



## 抄 録

ふりがな	ねこまついせき ながはらいせき								
書名	猫松遺跡 長原遺跡								
副書名	国道355号石岡岩間バイパス整備事業地内埋蔵文化財調査報告書								
巻次									
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告								
シリーズ番号	第348集								
著者名	大久保隆史								
編集機関	財団法人茨城県教育財団								
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587								
発行日	2011(平成23)年3月23日								
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因	
猫松遺跡	茨城県石岡市大字東成井字乙2826番地の14ほか	08205   463129	36度 16分 9秒	140度 17分 2秒	31 ~ 32m	20041101 ~ 20050131 20090501 ~ 20090630	4,807 m <sup>2</sup>  2,628 m <sup>2</sup>	国道355号石岡岩間バイパス整備事業に伴う事前調査	
長原遺跡	茨城県石岡市大字東成井字乙2833番地の4ほか	08205   463130	36度 15分 58秒	140度 16分 55秒	32m	20041101 ~ 20050131	1,738 m <sup>2</sup>		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
猫松遺跡	包蔵地	旧石器	石器集中地点	4か所	石器(尖頭器・ナイフ形石器・截頂石刃・石錐・削器・彫刻刀形石器・鋸歯縁石器・挟入石器・二次加工剥片・使用痕剥片・石核・石刃・剥片)		4か所の石器集中地点をはじめとして、出土した旧石器時代の遺物は、総数約3,000点である。これらの石器群には、小形化したナイフ形石器と石刃、小形の石刃が共存している。		
	集落跡	縄文	竪穴住居跡	1軒	縄文土器(深鉢)、石器(削器・石鏃・研磨石器)				
		古墳	竪穴住居跡	3軒	土師器(坏・碗・鉢・高坏・埴・器台・壺・甕・甌)、土製品(土玉・匙形土製品)、石器(敲石・砥石)、鉄製品				
	狩猟場	縄文	陥し穴	16基		縄文土器(深鉢・浅鉢)、石器(石鏃)			
		その他	縄文	土坑	1基	縄文土器(深鉢)			
			古墳	炉穴跡	1基				土師器(碗・高坏)
土坑				2基		土師器(坏)			
平安	土坑	2基		土師器(坏)					
時期不明	井戸跡	土坑	4基		縄文土器(深鉢)、土製品(土器片鏃)石器(石鏃・砥石)				
			92基						
長原遺跡	狩猟場	縄文	陥し穴	2基					
	その他	時期不明	土坑	7基		土師器(坏)、石器(敲石)			
要約	猫松遺跡は、旧石器時代・縄文時代・古墳時代・平安時代の複合遺跡である。旧石器時代の石器集中地点は、石器製作の跡である。縄文時代および古墳時代の竪穴住居跡は、いずれも集落の外縁部と推定される。長原遺跡は、陥し穴の存在から縄文時代の狩猟場であったものと想定される。								

### 印刷仕様

編集	OS	Microsoft Windows XP Professional Version2002.ServicePack3
編集		Adobe Indesign CS4
図版作成		Adobe Illustrator CS4
写真調整		Adobe Photoshop CS4
Scanning		6×7 film Nikon SUPER COOLSCAN9000 図面類 EPSON GT-X750
使用Font	OpenType	リュウミンPro・L
写真	線数	モノクロ175線以上 カラー210線以上
印刷		印刷所へは、Adobe Indesign CS4でレイアウトして入稿

茨城県教育財団文化財調査報告第348集

## 猫松遺跡 長原遺跡

国道355号石岡岩間バイパス整備事業  
地内埋蔵文化財調査報告書

平成23(2011)年 3月17日 印刷

平成23(2011)年 3月23日 発行

発行 財団法人茨城県教育財団

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2

茨城県水戸生涯学習センター分館内

TEL 029-225-6587

H P <http://www.ibaraki-maibun.org>

印刷 山三印刷株式会社

〒311-4153 水戸市河和田町4433の33

TEL 029-252-8481